

京都府遺跡調査概報

第114冊

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡
(平成15年度)

- (1)河原尻遺跡
- (2)馬路遺跡第3次
- (3)三日市遺跡第3次

2005

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成15年度に実施した発掘調査のうち、近畿農政局の依頼を受けて行った、国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された近畿農政局をはじめ、亀岡市教育委員会などの関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

- (1)河原尻遺跡
 - (2)馬路遺跡第3次
 - (3)三日市遺跡第3次
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
	国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡			近畿農政局	
(1)	河原尻遺跡	亀岡市河原林町河原尻井尻・高町	平15.7.3～平16.1.29		竹原一彦 森島康雄
(2)	馬路遺跡第3次	亀岡市馬路町壁木・梅原	平15.10.29～平16.2.20		村田和弘
(3)	三日市遺跡第3次	京都府亀岡市馬路町諸山	平15.11.10～平16.2.20		石崎善久

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。
4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15年度発掘調査概要

はじめに	1
位置と環境	2
(1)河原尻遺跡	4
(2)馬路遺跡第3次	65
(3)三日市遺跡第3次	100

付表目次

(1)河原尻遺跡

付表1	第2トレンチピット出土遺物一覧表	16
付表2	第3トレンチピット出土遺物一覧表	35
付表3	第6トレンチピット出土遺物一覧表	50

挿図目次

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡

第1図	調査地周辺遺跡分布図	1
(1)河原尻遺跡		
第2図	河原尻遺跡トレンチ配置図	4
第3図	第1～3トレンチ遺構配置図	5
第4図	第1トレンチ竪穴式住居跡SH2実測図、SH2竈実測図	6
第5図	2トレンチ竪穴式住居跡SH1実測図	7
第6図	竪穴式住居跡SH40・49・147・157実測図	8
第7図	竪穴式住居跡SH166・179・192実測図	9

第8図	掘立柱建物跡S B 1・2実測図-----	10
第9図	掘立柱建物跡S B 8・16実測図-----	11
第10図	掘立柱建物跡S B 18・134・186・708実測図-----	13
第11図	第1トレンチ竪穴式住居跡S H 2出土遺物実測図-----	16
第12図	第2トレンチピット出土遺物実測図-----	17
第13図	第2トレンチ竪穴式住居跡S H 1・40・46・49・147出土遺物実測図-----	18
第14図	第2トレンチ竪穴式住居跡S H 157・179、溝S D 9・27・167出土遺物実測図-----	19
第15図	竪穴式住居跡S H 205・207・208実測図、S H 207竈実測図-----	22
第16図	竪穴式住居跡S H 209・210・211実測図、S H 211竈実測図-----	24
第17図	竪穴式住居跡S H 212・213実測図-----	25
第18図	竪穴式住居跡S H 215・216実測図-----	26
第19図	竪穴式住居跡S H 218・219・508・626、S H 219竈実測図-----	27
第20図	竪穴式住居跡S H 218内土坑S K 582実測図-----	28
第21図	掘立柱建物跡S B 472・499・536実測図-----	29
第22図	掘立柱建物跡S B 551・606実測図-----	30
第23図	掘立柱建物跡S B 573・615・709・710実測図-----	31
第24図	土坑S K 214・630707実測図-----	32
第25図	土坑S K 526実測図-----	32
第26図	土坑S K 566～568実測図-----	33
第27図	第3トレンチピット出土遺物実測図-----	36
第28図	第3トレンチ竪穴式住居跡S H 205・207～212出土遺物実測図-----	37
第29図	第3トレンチ竪穴式住居跡S H 215・218・626出土遺物実測図-----	38
第30図	第3トレンチ土坑S K 214・217・557・630707、竪穴式住居跡S H 508出土遺物 実測図-----	39
第31図	第3トレンチ土坑S K 526・566・568、溝S D 604出土遺物実測図-----	40
第32図	第3トレンチピット出土瓦実測図-----	41
第33図	第6トレンチ遺構配置図-----	42
第34図	竪穴式住居跡S H 194・196実測図-----	43
第35図	竪穴式住居跡S H 197・671実測図-----	44
第36図	竪穴式住居跡S H 198・200実測図-----	45
第37図	竪穴式住居跡S H 220・222・223実測図-----	46
第38図	竪穴式住居跡S H 224・393実測図-----	47
第39図	竪穴式住居跡S H 394・628・403・630実測図-----	48
第40図	竪穴式住居跡S H 703・704・663・705実測図-----	49
第41図	第6トレンチピット出土遺物-----	51

第42図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H193・194出土遺物実測図-----	52
第43図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H196出土遺物実測図-----	53
第44図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H197出土遺物実測図-----	54
第45図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H197～200・220・221、第3トレンチS H207出土遺物 実測図-----	55
第46図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H222・224出土遺物実測図-----	57
第47図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H223・247出土遺物実測図-----	58
第48図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H281・283・284・302・350・352出土遺物実測図---	60
第49図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H353・359・376・393・394・402・443・625出土遺物 実測図-----	61
第50図	第6トレンチ竪穴式住居跡S H628～630・663・671・703、第3トレンチ 土坑S K630707出土遺物実測図-----	62
第51図	第6トレンチ土坑S K637出土遺物実測図-----	63
第52図	包含層出土遺物実測図-----	63
第53図	鉄製品実測図-----	64
(2)馬路遺跡第3次		
第54図	調査地位置図-----	66
第55図	A地区遺構配置図-----	67
第56図	竪穴式住居跡S H508(上図)、竪穴式住居跡S H518・519(下図)実測図-----	68
第57図	竪穴式住居跡S H509・510(上図)、竪穴式住居跡S H511・焼土S X517(下図) 実測図-----	70
第58図	掘立柱建物跡S B512・513実測図-----	72
第59図	掘立柱建物跡S B520・521実測図-----	73
第60図	溝S D501・502・505・506堆積状況図-----	74
第61図	B地区遺構配置図-----	75
第62図	B地区遺構配置図および方形周溝墓実測図-----	76
第63図	土坑S K04・05実測図-----	77
第64図	土坑S K06・07実測図-----	78
第65図	C地区遺構配置図-----	79
第66図	竪穴式住居跡S H03(上図)、竪穴式住居跡S H05(下図)実測図-----	80
第67図	溝S D01・02・04堆積状況図-----	81
第68図	掘立柱建物跡S B19実測図-----	81
第69図	D地区遺構配置図-----	82
第70図	溝S D01・02・12・22堆積状況図-----	83
第71図	竪穴式住居跡S H03・24・25実測図-----	84

第72図	焼土坑 S X06実測図	85
第73図	焼土坑 S X07・09実測図	86
第74図	焼土坑 S X11実測図	87
第75図	不明土坑 S X05・08・15・16・23実測図	88
第76図	出土遺物実測図(1)	90
第77図	出土遺物実測図(2)	91
第78図	出土遺物実測図(3)	93
第79図	出土遺物実測図(4)	94
第80図	出土遺物実測図(5)	95
第81図	出土遺物実測図(6)	97
第82図	出土遺物実測図(7)	99

(3) 三日市遺跡第3次

第83図	調査地位置図	102
第84図	グリッド図	103
第85図	調査区平面図	104
第86図	土層断面図(1)	105
第87図	土層断面図(2)	106
第88図	流路内遺物出土状況平面図(1)	107
第89図	流路内遺物出土状況平面図(2)	108
第90図	流路内遺物出土状況平面図(3)	109
第91図	S X01平面図	111
第92図	S X01出土瓦実測図(1)	113
第93図	S X01出土瓦実測図(2)	114
第94図	S X01出土瓦実測図(3)	115
第95図	S X01出土瓦実測図(4)	116
第96図	S X01出土瓦実測図(5)	117
第97図	S X01出土瓦実測図(6)	118
第98図	S X01出土瓦実測図(7)	119
第99図	S X01出土瓦実測図(8)	120
第100図	流路出土瓦実測図(1)	121
第101図	流路出土瓦実測図(2)	122
第102図	流路出土瓦実測図(3)	123
第103図	流路出土瓦実測図(4)	124
第104図	流路出土瓦実測図(5)	125
第105図	流路出土瓦実測図(6)	126

第106図	流路出土瓦実測図(7)-----	127
第107図	流路出土瓦実測図(8)-----	128
第108図	出土土器実測図(1)-----	129
第109図	出土土器実測図(2)-----	129
第110図	出土土器実測図(3)-----	130
第111図	出土土器実測図(4)-----	131
第112図	石製品・鉄製品・銭貨実測図-----	131

図 版 目 次

(1)河原尻遺跡

図版第 1	(1)調査地全景(南から)	(2)第 1 トレンチ全景(上が西)
図版第 2	(1)第 1・2 トレンチ南部(上が西)	(2)第 2 トレンチ南部(上が西)
図版第 3	(1)第 2 トレンチ中部(上が西)	(2)第 2 トレンチ北東部(上が西)
	(3)第 2 トレンチ北西部(上が西)	
図版第 4	(1)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 1 検出状況(南から)	
	(2)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 1・40 全景(上が南)	
	(3)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 1 小ピット列と断面(南から)	
図版第 5	(1)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 1 全景(南から)	
	(2)第 1 トレンチ竪穴式住居跡 S H 2 竈全景(南東から)	
	(3)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 40 竈全景(北から)	
図版第 6	(1)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 49 全景(南から)	
	(2)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 157 断面(西から)	
	(3)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 179 全景(南から)	
図版第 7	(1)第 2 トレンチ竪穴式住居跡 S H 192 全景(南から)	
	(2)第 2 トレンチ掘立柱建物跡 S B 1 全景(西南西から)	
	(3)第 2 トレンチ掘立柱建物跡 S B 1 柱穴断ち割り断面(南から)	
図版第 8	(1)第 3 トレンチ南部(上が北)	
	(2)第 4 トレンチ北部(上が北)	
	(3)第 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 205・207(上が北)	
図版第 9	(1)第 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 205 全景(南東から)	
	(2)第 3 トレンチ竪穴式住居跡 S H 207 竈全景(南西から)	

- (3) 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H208 全景(南西から)
- 図版第10 (1) 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H212・213 全景(南西から)
 (2) 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H215 全景(西から)
 (3) 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H216 全景(南西から)
- 図版第11 (1) 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H218 全景(南から)
 (2) 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H218 内土坑 S K582 全景(東から)
 (3) 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H219 全景(南東から)
- 図版第12 (1) 第3 トレンチ 掘立柱建物跡 S B551 全景(東から)
 (2) 第3 トレンチ 掘立柱建物跡 S B615 全景(西から)
 (3) 第3 トレンチ 掘立柱建物跡 S B708 全景(東から)
- 図版第13 (1) 第3 トレンチ 土坑 S K214・630・707 全景(南東から)
 (2) 第3 トレンチ 土坑 S K526 全景(東から)
 (3) 第3 トレンチ 土坑 S K566・567・568(南西から)
- 図版第14 (1) 第3 トレンチ 土坑 S K566 全景(東から)
 (2) 第3 トレンチ 土坑 S K568 全景(南西から)
 (3) 第4 トレンチ 近景(南から)
- 図版第15 (1) 第6 トレンチ 全景(上が北) (2) 第6 トレンチ 北西部(上が北)
 (3) 第6 トレンチ 中西部(上が北)
- 図版第16 (1) 第6 トレンチ 南西部(上が西) (2) 第6 トレンチ 北東部(上が北)
 (3) 第6 トレンチ 中東部1(上が北)
- 図版第17 (1) 第6 トレンチ 中東部2(上が北) (2) 第6 トレンチ 南東部(上が北)
 (3) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H194・195 全景(南東から)
- 図版第18 (1) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H194 竈(南東から)
 (2) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H196 竈(南西から)
 (3) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H197・671 全景(南東から)
- 図版第19 (1) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H197 竈(南東から)
 (2) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H198 ほか(西南西から)
 (3) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H222 竈(南東から)
- 図版第20 (1) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H224 全景(南南東から)
 (2) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H224 竈(南東から)
 (3) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H224 遺物出土状況(南西から)
- 図版第21 (1) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H630 全景(北東から)
 (2) 第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H630 遺物出土状況(北西から)
 (3) 第6 トレンチ 土坑 S K637 全景(西から)
- 図版第22 (1) 第7 トレンチ 全景(東から) (2) 第8 トレンチ 全景(南から)

- (3)第9トレンチ全景(東から)
- 図版第23 (1)第1トレンチ竪穴式住居跡SH2出土遺物(1)
(2)第1トレンチ竪穴式住居跡SH2出土遺物(2)、第2トレンチピット
出土遺物(1)
- 図版第24 (1)第2トレンチピット出土遺物(2)
(2)第2トレンチ竪穴式住居跡SH1・4・46・49・147出土遺物(2)
- 図版第25 (1)第2トレンチ竪穴式住居跡SH157・179、溝SD9・27・167出土遺物
(2)第3トレンチピット出土遺物(1)
- 図版第26 (1)第3トレンチピット出土遺物(2)
(2)第3トレンチ竪穴式住居跡SH205・207～212出土遺物
- 図版第27 (1)第3トレンチ竪穴式住居跡SH215・218・626出土遺物
(2)第3トレンチ土坑SK214・217・508・557・707出土遺物
- 図版第28 (1)第3トレンチSX526・SX566出土遺物
(2)第3トレンチSX568・溝SD604出土遺物
- 図版第29 (1)第6トレンチピット出土遺物(1)
(2)第6トレンチピット出土遺物(2)
- 図版第30 (1)第6トレンチ竪穴式住居跡SH193～195出土遺物
(2)第6トレンチ竪穴式住居跡SH196出土遺物
- 図版第31 (1)第6トレンチ竪穴式住居跡SH197出土遺物(1)
(2)第6トレンチ竪穴式住居跡SH197出土遺物(2)
- 図版第32 (1)第6トレンチ竪穴式住居跡SH198～200・220・221出土遺物
(2)第6トレンチ竪穴式住居跡SH222・224出土遺物
- 図版第33 (1)第6トレンチ竪穴式住居跡SH223・247・281出土遺物
(2)第6トレンチ竪穴式住居跡SH281・283・284・302・310・350・352出土遺物
- 図版第34 (1)第6トレンチ竪穴式住居跡SH353・359・376・393・394・402・443・625出土
遺物
(2)第6トレンチ竪穴式住居跡SH628～630・663・671・703、第3トレンチ土坑
SK630707出土遺物
- 図版第35 (1)第1～3・5・6トレンチ包含層出土遺物
(2)第2トレンチピット・竪穴式住居跡SH1出土遺物
- 図版第36 第2トレンチ竪穴式住居跡SH49・147・157・溝SD9・167、第3トレンチ
ピット出土遺物
- 図版第37 第3トレンチピット・竪穴式住居跡SH207・209・210出土遺物
- 図版第38 第3トレンチ竪穴式住居跡SH626・土坑SK508・707・SX526出土遺物
- 図版第39 第3トレンチピット、第6トレンチピット・竪穴式住居跡SH193・194出土遺物

- 図版第40 第6 トレンチ竪穴式住居跡 S H194・196・197出土遺物
- 図版第41 第6 トレンチ竪穴式住居跡 S H197・200・207・222・224出土遺物
- 図版第42 第6 トレンチ竪穴式住居跡 S H224・223・247・302出土遺物
- 図版第43 第6 トレンチ竪穴式住居跡 S H302・350・352・393・394・625・628出土遺物
- 図版第44 第6 トレンチ竪穴式住居跡 S H629・630・土坑 S K637、第3 トレンチ土坑 S K630707、包含層出土遺物

(2)馬路遺跡第3次

- 図版第45 (1) A・B地区全景(北西から) (2) A・B地区全景(右が北)
- 図版第46 (1) C地区全景(下が北) (2) C・D地区全景(西から)
- 図版第47 (1) A地区竪穴式住居跡 S H508近景(北東から)
(2) A地区竪穴式住居跡 S H508近景(南から)
(3) A地区竪穴式住居跡 S H518・519近景(南から)
- 図版第48 (1) A地区竪穴式住居跡 S H508・509近景(南から)
(2) A地区竪穴式住居跡 S H509・510近景(南から)
(3) A地区竪穴式住居跡 S H511近景(南から)
- 図版第49 (1) A地区竪穴式住居跡 S H509近景(北東から)
(2) A地区竪穴式住居跡 S H518竈近景(北西から)
(3) A地区 S X517近景(北西から)
- 図版第50 (1) A地区溝 S D501・502近景(南から)
(2) A地区溝 S D501・502堆積状況(南から)
(3) A地区溝 S D502堆積状況(南から)
- 図版第51 (1) A地区竪穴式住居跡 S H519遺物出土状況(北西から)
(2) A地区掘立柱建物跡柱穴近景(北西から)
(3) A地区柱穴 P73近景(南西から)
- 図版第52 (1) A地区全景(南から)
(2) A地区掘立柱建物跡 S B512・513・520全景(左が北)
(3) A地区掘立柱建物跡 S B512・513・520近景(南から)
- 図版第53 (1) A地区掘立柱建物跡 S B512・513近景(南から)
(2) A地区全景(南東から) (3) A地区作業風景(南西から)
- 図版第54 (1) B地区遺構検出状況(上が北) (2) B地区遺構検出状況(西から)
(3) B地区拡張区溝 S D02・03検出状況(西から)
- 図版第55 (1) B地区溝 S D02堆積状況(南から) (2) B地区溝 S D03堆積状況(西から)
(3) B地区溝 S D03内遺物出土状況(西から)
- 図版第56 (1) B地区溝 S D03内遺物出土状況(北から)
(2) B地区土坑 S K04遺物出土状況(南から)

- (3) B地区土坑S K05検出状況(南から)
- 図版第57 (1) B地区土坑S K05遺物出土状況(南から)
(2) B地区土坑S K06検出状況(南から)
(3) B地区土坑S K07近景(北から)
- 図版第58 (1) C地区溝S D01・02・04近景(北から)
(2) C地区竪穴式住居跡S H03検出状況(北西から)
(3) C地区竪穴式住居跡S H03全景(右下が北)
- 図版第59 (1) C地区竪穴式住居跡S H03竈近景(北東から)
(2) C地区竪穴式住居跡S H03竈近景(東から)
(3) C地区竪穴式住居跡S H05検出状況(北西から)
- 図版第60 (1) C地区竪穴式住居跡S H05全景(左下が西)
(2) C地区竪穴式住居跡S H05支柱穴近景(東から)
(3) C地区掘立柱建物跡S B19近景(南から)
- 図版第61 (1) C地区溝S D01堆積状況(F-F´)(北西から)
(2) C地区溝S D01堆積状況(H-H´)(南東から)
(3) C地区溝S D01堆積状況(J-J´)(北西から)
- 図版第62 (1) C地区溝S D02・04堆積状況(A-A´)(東南から)
(2) C地区溝S D02遺物出土状況
(3) C地区溝S D04遺物出土状況
- 図版第63 (1) D地区竪穴式住居跡S H03検出状況(南から)
(2) D地区竪穴式住居跡S H03遺物出土状況(西から)
(3) D地区竪穴式住居跡S H24・25近景(南から)
- 図版第64 (1) D地区竪穴式住居跡S H24近景(北東から)
(2) D地区竪穴式住居跡S H24竈近景(南から)
(3) D地区竪穴式住居跡S H25近景(西から)
- 図版第65 (1) D地区竪穴式住居跡S H25竈近景(南から)
(2) D地区焼土坑S X06検出状況(東から)
(3) D地区焼土坑S X06近景(南から)
- 図版第66 (1) D地区焼土坑S X07検出状況(西から)
(2) D地区焼土坑S X07近景(西から)
(3) D地区焼土坑S X09検出状況(西から)
- 図版第67 (1) D地区焼土坑S X09近景(西から)
(2) D地区焼土坑S X11検出状況(西から)
(3) D地区焼土坑S X11近景(東から)
- 図版第68 (1) D地区不明土坑S X15遺物出土状況(西から)

- (2) D地区不明土坑 S X16近景(西から)
- (3) D地区不明土坑 S X23掘削状況(南から)
- 図版第69 (1) D地区溝 S D01・02検出状況(北から)
- (2) D地区溝 S D01堆積状況(南から)
- (3) D地区溝 S D01遺物出土状況(北から)
- 図版第70 出土遺物(1)
- 図版第71 出土遺物(2)
- 図版第72 出土遺物(3)

(3) 三日市遺跡第3次

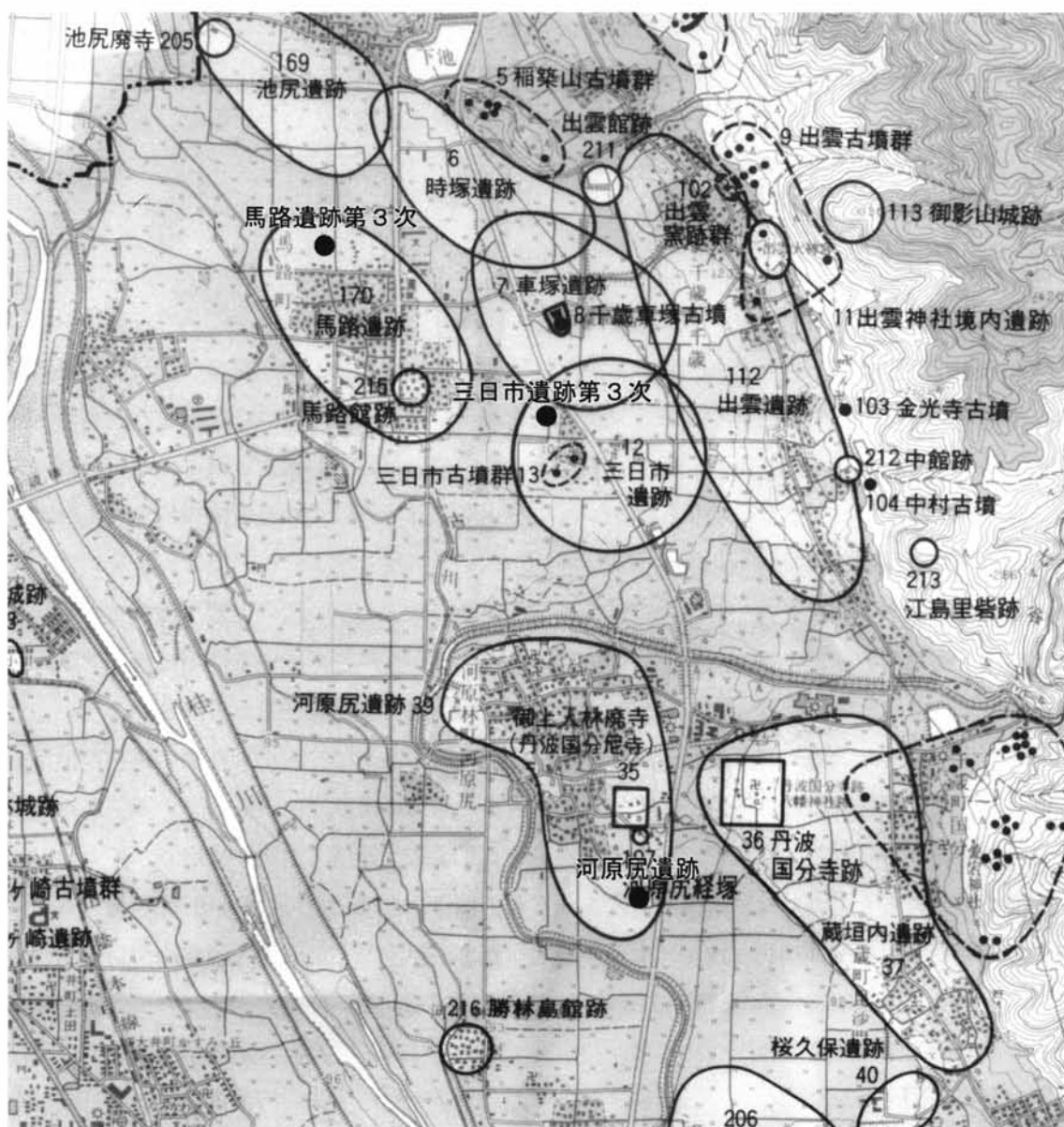
- 図版第73 (1) 調査地全景(西上空から) (2) 調査前近景(北西から)
- 図版第74 (1) 調査地全景(上が東) (2) 調査地全景(北から)
- 図版第75 (1) 流路全景(北西から) (2) 流路全景(北から)
- 図版第76 (1) C・D8・D9区瓦検出状況(南から)
- (2) C・D6区瓦検出状況(南東から)
- 図版第77 (1) C・D12・D13区瓦検出状況(北東から)
- (2) C8～11区瓦検出状況(北から)
- 図版第78 (1) C・D8～11区瓦検出状況(南西から)
- (2) C14～16区瓦検出状況(南東から)
- 図版第79 (1) C6区軒平瓦検出状況(西から) (2) D3区軒平瓦検出状況(西から)
- 図版第80 (1) C8区軒丸瓦検出状況(南東から) (2) C11区軒丸瓦検出状況(東から)
- 図版第81 (1) C16区須恵器検出状況(西から) (2) E2区須恵器検出状況(東から)
- 図版第82 (1) S X01全景(東から) (2) S X01全景(上が南)
- 図版第83 (1) S X01近景(東から) (2) S X01近景(西から)
- 図版第84 (1) S X01西端部(西から) (2) S X01西端部(北東から)
- 図版第85 出土遺物(1)
- 図版第86 出土遺物(2)
- 図版第87 出土遺物(3)
- 図版第88 出土遺物(4)
- 図版第89 出土遺物(5)
- 図版第90 (1) 出土遺物(6-1) (2) 出土遺物(6-2)
- 図版第91 (1) 出土遺物(7-1) (2) 出土遺物(7-2)
- 図版第92 (1) 出土遺物(8) (2) 作業風景(南から)

国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡 平成15年度発掘調査概要

はじめに

この調査は、近畿農政局が実施している国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、近畿農政局の依頼を受けて当調査研究センターが行った。

調査範囲は、京都府教育委員会と亀岡市教育委員会による試掘調査の結果をもとに、近畿農政局をはじめとする開発部局と調整を行って決定した。



第1図 調査地周辺遺跡分布図(S=1/25,000)

今年度は、河原尻遺跡、馬路遺跡第3次調査、三日市遺跡第3・4次調査、時塚遺跡第6次調査である。現地調査は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長奥村清一郎、調査第1係主任調査員竹原一彦・小池寛・森島康雄・細川康晴、同専門調査員岡崎研一、同調査員石崎善久・村田和弘が担当した。

河原尻遺跡は、平成15年7月3日～平成16年1月29日まで調査面積約7,000m²を、馬路遺跡第3次調査は、平成15年10月29日～平成16年2月20日まで調査面積約4,400m²を、三日市遺跡第3次調査は、平成15年11月10日～平成16年2月20日まで調査面積約3,150m²を、三日市遺跡第4次調査は、平成16年2月5日～平成16年2月20日まで調査面積約150m²を、時塚遺跡第6次調査は平成16年1月26日～平成16年2月20日まで調査面積約2,600m²を調査した。

河原尻遺跡は平成15年11月13日、馬路遺跡第3次調査と三日市遺跡第3次調査は、平成16年2月13日に現地説明会を行った。三日市遺跡第4次調査と時塚遺跡第6次調査は、平成16年度に改めて調査を行ったため、来年度に報告する。

現地作業においては、京都府教育委員会・亀岡市教育委員会をはじめとする関係機関の協力を得、また、地元自治会、地権者、地元住民の方々のご理解とご協力をいただいた。記して感謝したい。^(注1)なお、発掘調査に係る経費は、全額、近畿農政局が負担した。

位置と環境

今回報告する遺跡の所在する亀岡市は、旧国名で言う丹波国の地域にある。この丹波地域は山が多く京都府内の分水嶺にあたる。丹波山地では鮮新・更新世の後半から褶曲や段層運動が起こり、盆地地形が随所に認められる。遺跡はその盆地の1つである亀岡盆地に位置する。亀岡盆地は、京都市の所在する京都盆地に隣接する盆地で、その中央部分を北西から南東に桂川が貫いて流れる。盆地周辺の山地からは桂川に向かって小河川が流れ込み、それらの河川によって浸食された段丘地形が形成されている。

調査対象地のある、桂川の左岸地域では、案察使遺跡の縄文時代早期の土器が最も古い遺跡である亀岡市馬路町の三日市遺跡で縄文時代中期末の土器片が採集されている。発掘調査では、大淵遺跡において縄文時代晩期の突帯文土器を2個体用いた甕棺墓が検出されている。

弥生時代に入ると大淵遺跡・池尻遺跡・河原尻遺跡・蔵垣内遺跡において前期の遺物が出土している。中期には亀岡市の時塚遺跡、里遺跡で住居跡や方形周溝墓が検出されている。左岸では弥生時代後期のものとして案察使遺跡、蔵垣内遺跡、里遺跡で遺構・遺物が検出されている。

古墳時代に入ると亀岡盆地にも古墳が営まれるが、保津山古墳(案察使2号墳)は埴輪をもつ中期末の円墳で、主体部は箱式石棺で乳文鏡や管玉、鉄器が出土している。古墳群の中で唯一の前方後円墳である保津車塚古墳(案察使1号墳)は当調査研究センターで発掘調査され、2重の周溝をもつ前方後円墳であることがわかった。坊主塚、榊塚に代表されるように古墳時代中期の大型墳には方墳が採用される地域においては、貴重な存在である。同じ左岸の千歳車塚古墳(国史跡)は全長82mの規模を持ち、盾形周濠を備えた前方後円墳である。墳丘は三段築成で、葺石と埴輪

を伴う。埴輪から6世紀前半の古墳と考えられる。この時期の古墳としては丹波最大であることはもちろん全国的に見ても大規模なものと位置づけられる。この古墳の東には丹波一宮である出雲神社が鎮座している。

律令期に入ると全国に国府が置かれ、亀岡市域が含まれる丹波国にも設置された。丹波国は和銅6(713)年に丹後国と分国されたが、旧来の丹波の中心は丹波郡のある丹後国側とされている。したがって、分国以前の国府の所在は定かではない。国分寺・国分尼寺・一宮が亀岡市内に存在することから奈良時代から亀岡市内に国府があったものと想定される。10世紀の「和名類聚抄」には亀岡市のある桑田郡に所在することが記されているが、国府の位置については、諸説があり決着を見ていない。

天平13(741)年の詔によって造られた国分寺・国分尼寺も前述したように桂川左岸にあり、近年の三日市遺跡の調査では、創建時の瓦窯の灰原が調査されている。

現在はJR山陰線、国道9号線、近世の城下町がある桂川右岸が開けているが、古代においては、亀岡盆地の中心地が左岸地域にあったことが上記のような状況から窺い知ることができる。

(森島康雄)

(1) 河原尻遺跡

1. 第1・2トレンチの遺構と遺物

第1トレンチは調査対象地の東端に位置し、東西約15m、南北約62mの三角形を呈するトレンチである。地表下約0.5m付近で検出した遺構面は、北から南方向に緩やかに下っている。遺構面の地山は、調査地北部は川原石による礫層が広がり、南部は礫混じり土への変化が認められる。検出した遺構の分布は希薄で、わずかに竪穴式住居跡・柱穴・溝が点在している。

第2トレンチは、第1トレンチの西に隣接して設けた東西約22m、南北約57mのトレンチである。第1トレンチと同様に、遺構面は南に下る傾斜をもつ。北端と南端の比高差は、およそ0.6mを測る。遺構面の地山は、粘性のある砂質土が広がっている。遺構の分布密度は極めて高く、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・溝・土坑など、多種・多数の遺構を検出した。

(1) 検出遺構

1) 竪穴式住居跡

第1トレンチから1基、第2トレンチから8基の竪穴式住居跡を検出している。住居跡は、調査地の北部に7基、南部に2基と分かれる分布状況にある。

竪穴式住居跡SH1 第2トレンチ北西で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、一辺6.3m前後、深さ0.1mの規模を測る。SH40と重複関係にあり、SH1が切り勝つ。住居跡の主軸はN15°Wである。検出した多くの住居跡は地山と同系色の埋土であることから検出



第2図 河原尻遺跡トレンチ配置図(S=1/1,000)

に時間を要したが、このSH1は埋土に焼土や炭化物を多量に含んだことから、比較的早い段階で輪郭を明瞭に検出できた。住居跡内部の調査を進めた結果、黄赤褐色に焼け締まった焼土と炭化物は、床面の四周、壁面からおよそ1mの範囲に集中していた。焼土の厚みは壁付近ほど厚く、壁際での焼土の厚みは0.1mを測る。焼土は、床面中央部に近づくにつれて厚みを減じ、住居中央部ではほとんど検出されない。焼土は小ブロックの集合体であり、焼けた屋根被覆土が崩落し



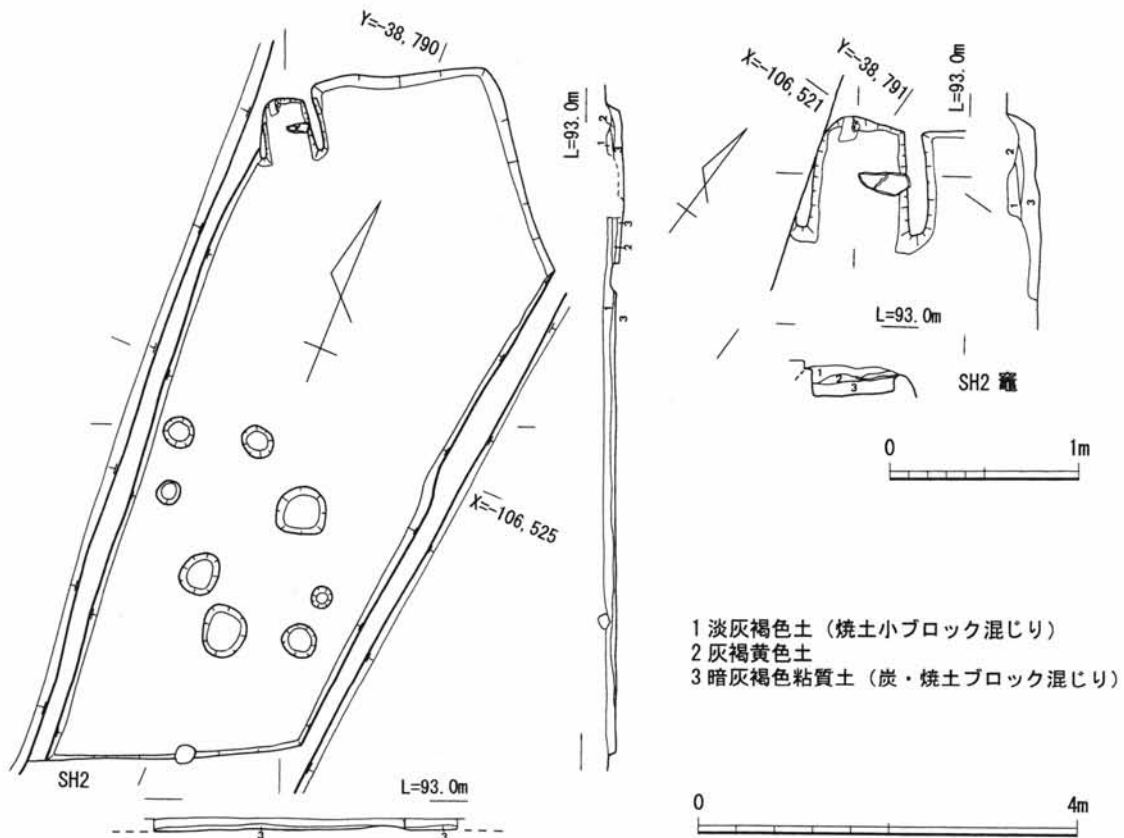
第3図 第1～3トレンチ遺構配置図(S=1/500)

て堆積したと考えられる。

住居跡周壁付近に堆積した焼土上面での精査の結果、列状に点在する小穴(列1～列8)を焼土面から検出した。小穴は直径0.1～0.15mで円形を呈し、埋土は炭・灰混じりの暗茶褐色土である。小穴列は住居壁から0.3～0.5m内側を沿い、小穴は0.5～0.6m前後の間隔を測る。小穴列は各壁面に対し、4面とも中央部で一旦途切れる状況にある。北壁面では、列1と列2の間は1.6mの間隔が開き、その間に竈が存在している。東壁側の列3と列4間は1.3m、南壁側の列5と列6間は1.3m、西壁側の列7と列8間は0.9mの間隔が開き、その間には小穴やほかの遺構は認められない。また、同一壁面側にある左右の小穴列(列1・列2など)の軸線は同一直線上に乗らず、それぞれ分かれて存在していた可能性が高い。この状況は、他の3面においても同様である。各小穴列の長さは2m前後であり、特段の変化はみられない。住居の四隅における小穴列の位置関係を見ると、直角(L字)に折れてのびる列構成も読みとれる。列2と列3、列4と列5、列6と列7、列8と列1がそれぞれ結合していた可能性もあるが、現段階では不明な点が多い。

この小穴列は杭跡と考えられることから、住居の内側に板壁もしくは棚状施設が存在した可能性が高い。住居壁と小穴列の間は、床面まで崩落焼土が堆積することから、もともと空間であったと判断される。断面観察にみる小穴は、床面に穴が残るもの、床面に達しないものなど、深さは一定ではない。

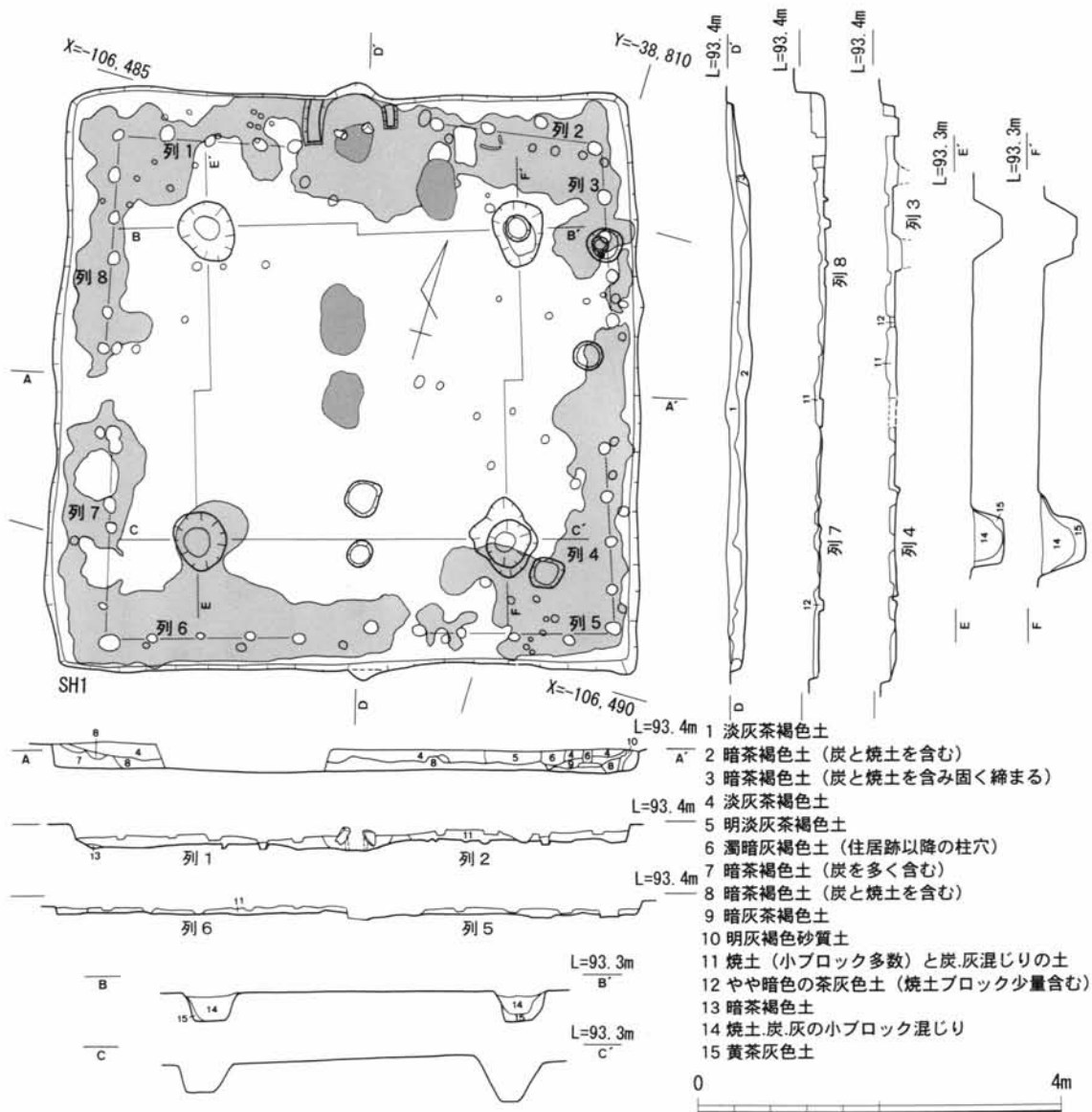
住居内に堆積した崩落焼土を総て除去し、床面全体を検出したところ、先述の小穴列以外にも



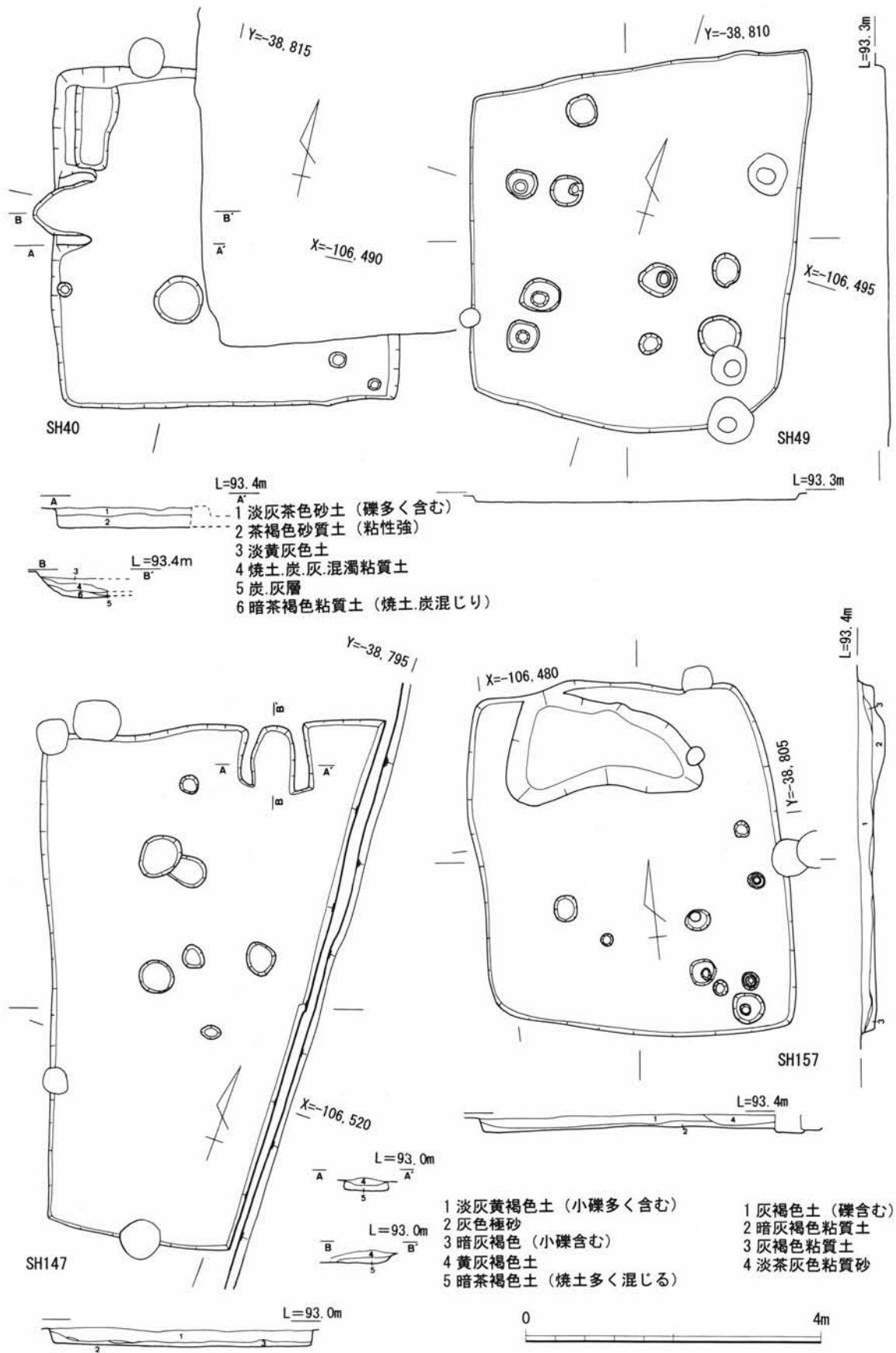
第4図 第1トレンチ縦穴式住居跡SH2実測図(S=1/80)、SH2竈実測図(S=1/40)

同様な小穴がさらに分布する状況が確認された。この新たな小穴は、小穴列の住居内側に分布する傾向にあり、住居壁から1m前後内側の範囲内に納まる。この小穴は、列構成が認められた小穴と特段の変化は認められず、不規則な分布を示している。深さは2cm程度であり、底面は尖り気味に丸く終わる。住居内をさらに仕切る杭(板壁)が存在した可能性もある。

住居の北壁中央部から造り付けの竈を検出した。竈は馬蹄形を呈する壁体下部が残り、上部は失われている。竈は、全長約0.5m、幅約0.6m、壁体高0.15mを測り、住居跡規模に比べると殊更に小さな竈の感が否めない。竈前面の焚き口に相当する部分に、川原石を利用した立石が認められる。立石は焚き口の左右に配置される。立石の間隔は上端で0.17m、下端では0.4mを測り、裾広がりにより据えられる。底面から立石上端までの高さは0.23mを測る。石の下端は床面に深く埋められる状況にはなく、1cm程度の浅い埋め込みで終わっている。この立石に関しては、美観を兼ね備えた焚き口の保護材と推測される。



第5図 第2トレンチ竪穴式住居跡SH1実測図(S=1/80)



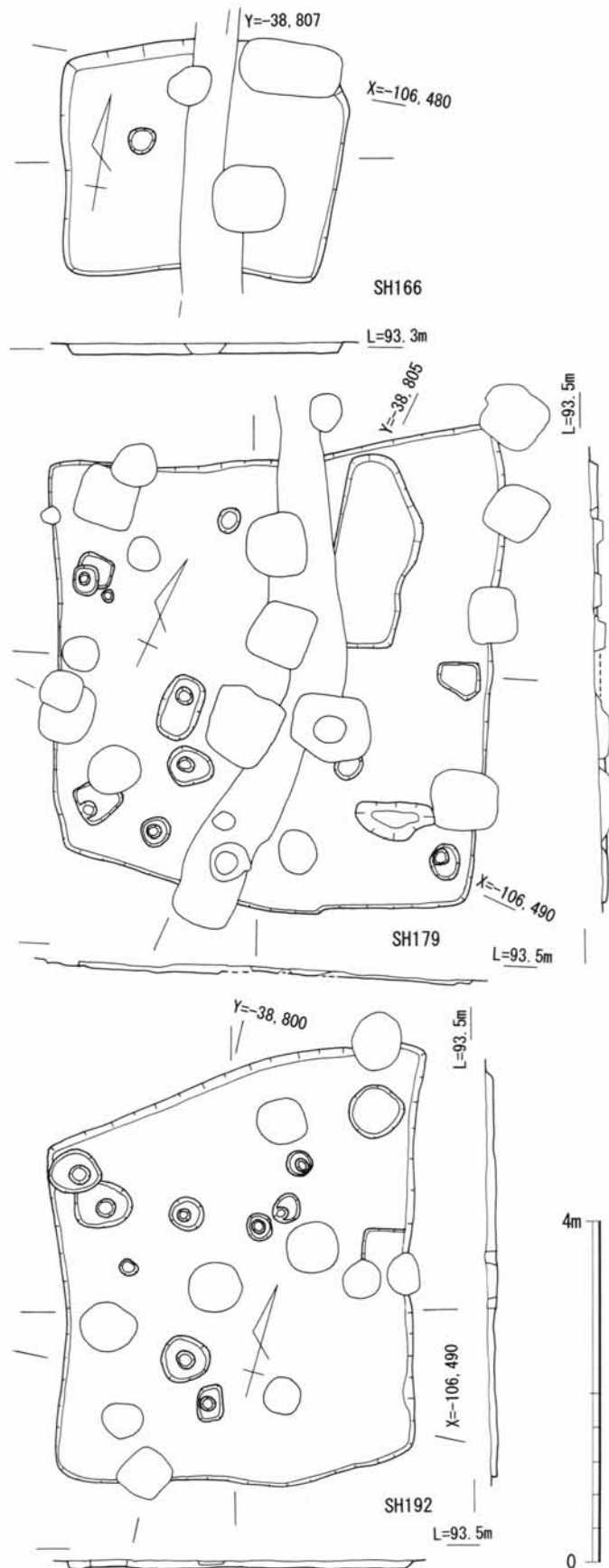
第6図 竪穴式住居跡 S H40・49・147・157実測図 (S=1/80)

住居床面はほぼ水平で、3基の炉跡(炉1～3)を検出した。竈の南東0.8m付近に位置する炉1は、南北0.5m×東西0.35mの範囲が被熱赤変し、特に南端付近は良く焼けた状況にあり、燃烧部と判断される。燃烧部は橙褐色で硬質化している。炉跡2・3は床面中央にあって、南北に分かれて近接している。共に0.5m前後で南北に長い被熱赤変部分があり、それぞれ被熱部の南部に燃烧部が存在する。炉跡2と炉跡3の燃烧部は0.8mの間隔を測る。

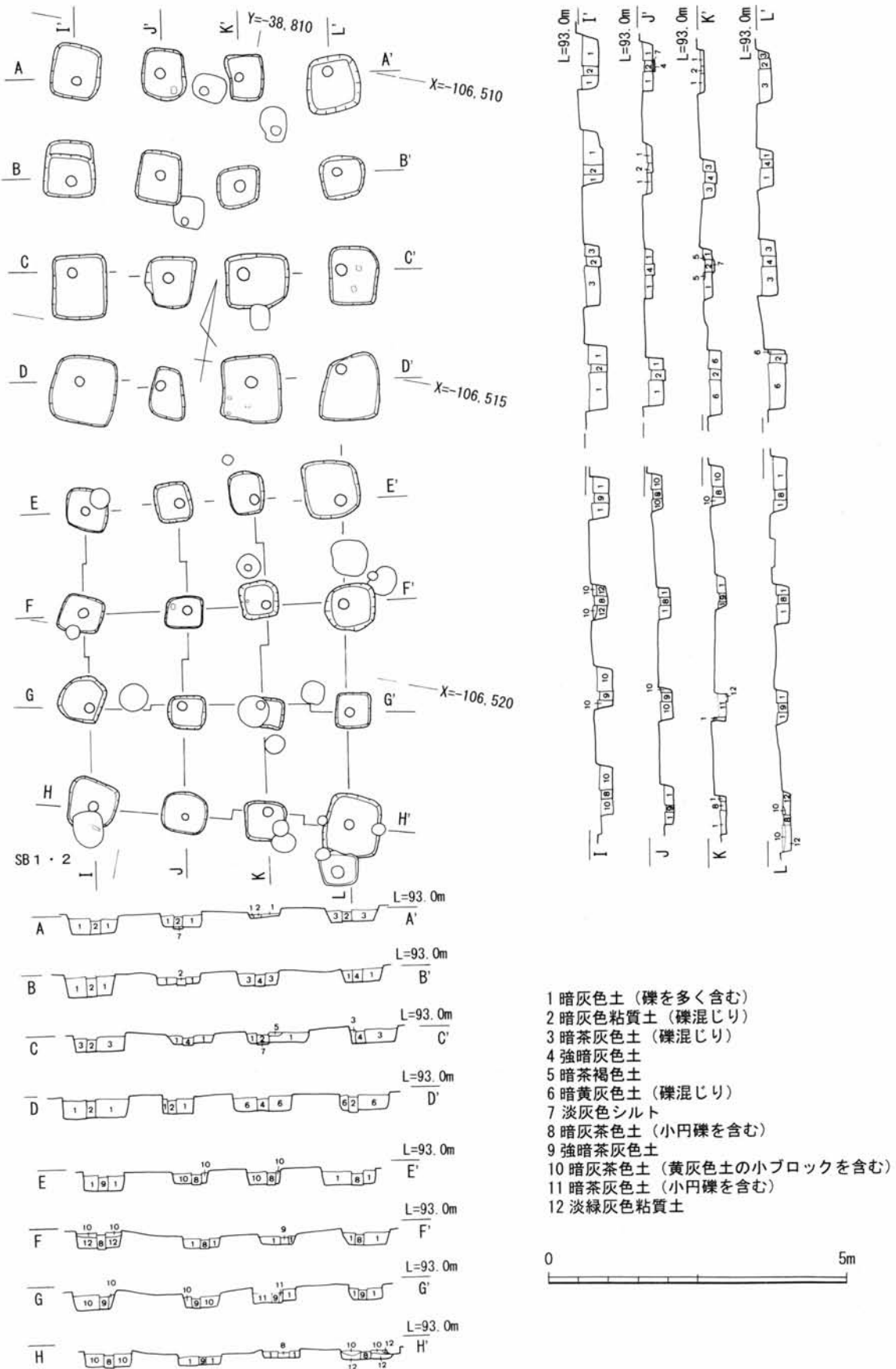
主柱穴は4基からなる。柱穴は直径約0.6m、深さ約0.3mを測る。各主柱穴の上部床面付近は大きく掘り広げられ、柱は4基とも抜き取られた状況にある。柱抜き取り跡には、炭化物や灰を多量に含む土砂が堆積している。住居は廃棄後に解体され、主要な構造材や日用品が持ち去られた後、さほど時間が経過しない時点で焼失したと考えられる。

遺物では、少量の土器片と鉄鏃・ヤリガンナ状の鉄製品が出土している。ヤリガンナ状の鉄製品は、竈の東側床面上から出土した。鉄鏃は南端床面から出土した。古墳時代後期～飛鳥時代の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH2 第1トレンチ南端部で検出した方形の住居跡である。調査範囲の関係から、住居跡の東西は調査地外に位置する。住居の北西壁と南東壁を検出し、両壁間は6.8mの規模を測る。住居跡の西部

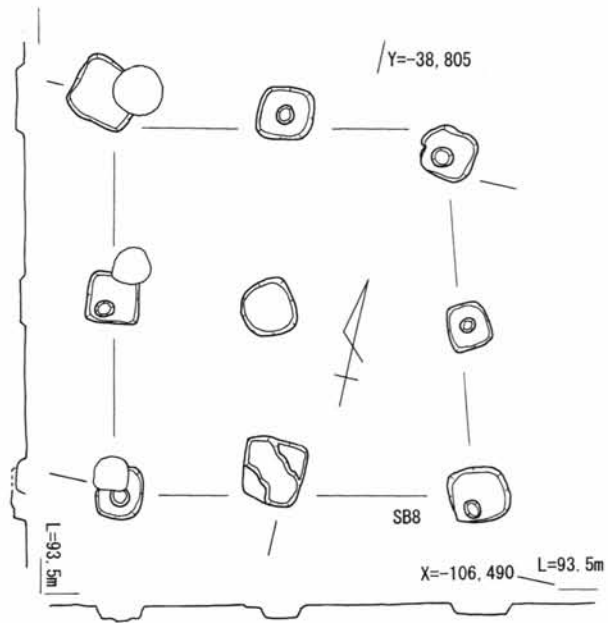


第7図 竪穴式住居跡SH166・179・192実測図(S=1/80)

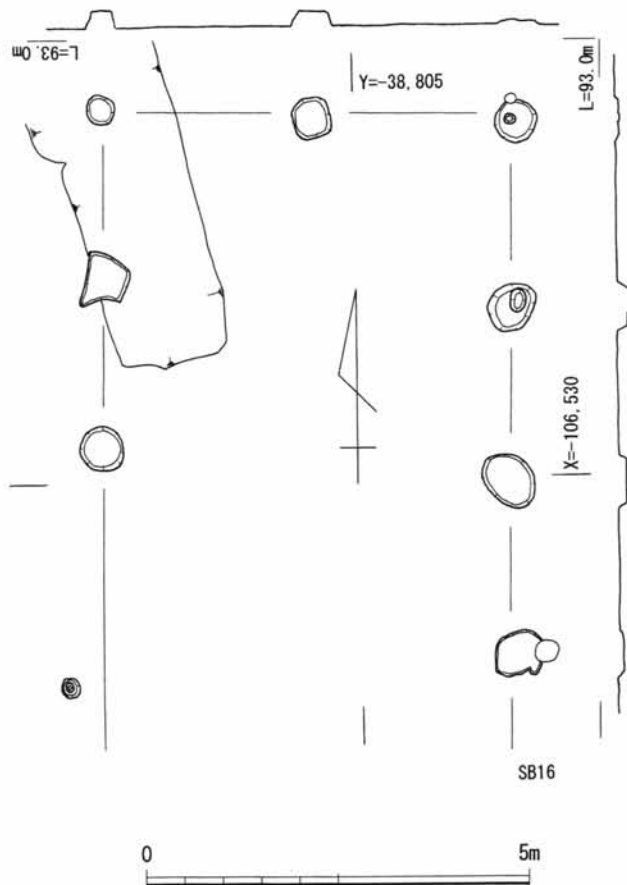


第8図 掘立柱建物跡SB 1・2実測図(S=1/100)

は第2トレンチで検出できないことから、東西幅はおよそ5.9m程度と推測される。住居壁の立ち上がりは0.2mを測る。住居跡の主軸はN30°Wである。北壁の東側コーナーから西2.2m付近に、造り付け竈が存在する。竈は中央からやや東に片寄る。馬蹄形を呈する基部は、長さ0.7m、幅約0.7mの規模を測る。床面はほぼ水平であるが、礫層に達していることから荒れた状況にある。支柱穴は4基からなると判断する。住居跡の堆積土から多くの土器片の出土をみており、住居跡の北部、竈から住居北隅付近にかけて集中する傾向が強い。古墳時代後期の住居跡と考えられる。



竪穴式住居跡SH40 第2トレンチの北部で検出した竪穴式住居跡である。住居跡の平面形は方形であり、一辺4.6mを測る。住居跡の東半部はSH1と重複し、壊されている。住居跡の西壁中央に造り付け竈が存在する。竈の奥壁部分は、住居跡西壁から外部側に0.3m程弧状に張り出す。竈の北側、壁面に接して長方形を呈する貯蔵穴が存在する。貯蔵穴は長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.25mを測る。埋土中から土師器の破片が出土している。支柱穴は4基からなるとみられる。住居跡の主軸はN15°Wである。古墳時代後期の住居跡と考えられる。



竪穴式住居跡SH49 SH1の南側で検出した竪穴式住居跡である。住居跡の平面形は、やや歪な方形を呈する。住居の北壁(4.5m)と東壁(4.5m)がほ

第9図 掘立柱建物跡SB8・16実測図(S=1/100)

かの2壁(4m)に対して長く、北東コーナーは約75°と狭角を示す。また、南壁は外方に弧状に膨らむ。同形態のプランをもつ住居跡は、ほかに2例(SH179・192)が存在する。住居跡の深さは0.1mを測る。住居跡の主軸はN15°Wである。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

住居の北東隅に竈の痕跡を確認した。竈の壁体は既に無く、焼土が1m前後の範囲に堆積する状況にあった。焼土上面で川原石の一部が顔を出し、周囲の焼土を除去した結果、2石からなる竈焚き口の立石を検出した。竈本体は、住居壁と立石の位置関係から、住居北東コーナーから南西方向に斜めに造り付けられていたようである。支柱穴は4基からなる。床面は水平である。

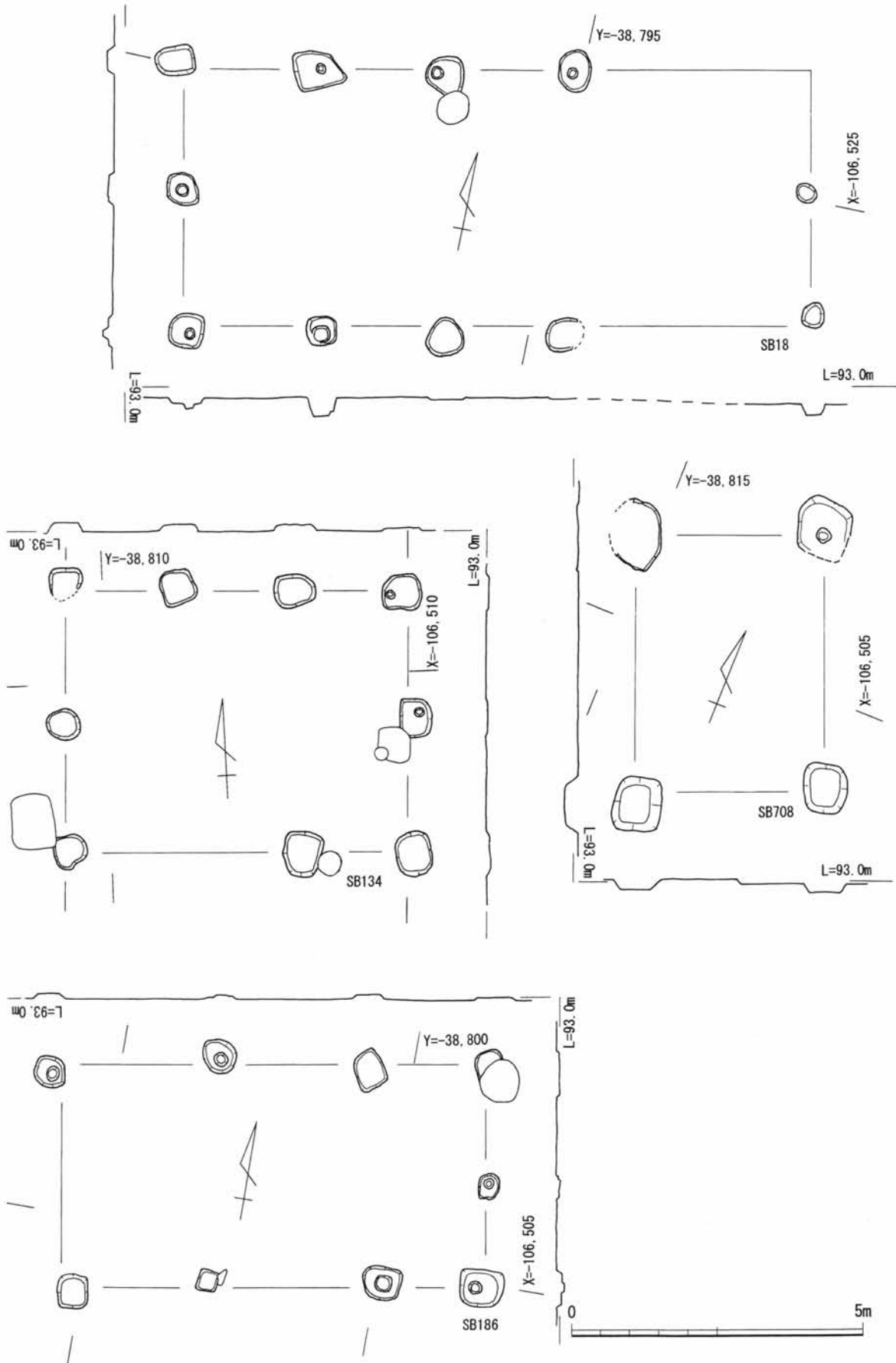
竪穴式住居跡SH147 第2トレンチの南東部で検出した竪穴式住居跡で、平面形は方形である。住居跡の東部はトレンチ間の畦畔内にある。SH2の北に近接して存在し、SH2とは約1mの間隔を測る。西壁の長さは6.5m、北壁は4.7m以上、深さは約0.2mの規模を測る。北壁に造り付け竈が存在し、西壁とのコーナーから竈の中心までは3.2mを測る。住居跡の主軸はN20°Wである。支柱穴は4基からなる。床面は水平である。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH157 第2トレンチの北部で検出した竪穴式住居跡である。住居跡の平面形は方形で、長辺5m×短辺4.2m、深さ0.25mの規模を測る。床面は水平である。住居跡の主軸はN2°Eである。住居跡北部の床面は東西2.6m、幅1.2~1.6mの範囲で、住居中央に向かってやや内湾ぎみの落ち込みがみられる。落ち込みは東西方向の両端部が緩やかな斜面となり、最も深い中央付近は約0.15mの深さを測る。支柱穴は4基からなるとみられるが、北西側支柱穴は落ち込みと重複し、検出できなかった。住居跡中央部の埋土中から、須恵質甕の体部下半が出土した。甕の下半部は完存し、内部に上半部分の破片が落ち込んでいた。また、甕の底面は住居跡床面から遊離していたことから、住居廃絶後、土砂の堆積が進んだ段階で甕が据えられたとみられる。甕の周囲の調査では、設置に伴う掘形は認められない。住居廃絶後の祭祀に伴う遺物と判断される。飛鳥~奈良時代前期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH166 第2トレンチの北部、SH157の東側から検出した竪穴式住居跡であり、SH157とはわずか0.1mの間隔を測る。住居跡の平面形は方形である。長辺3.3m×短辺2.6m、深さはわずかに0.1mを測る。支柱穴は確認できない。住居跡の主軸はN2°Wである。

竪穴式住居跡SH179 第2トレンチの北部、SH49とSH157間で検出した竪穴式住居跡である。住居跡の平面形はSH49と酷似し、やや歪な方形を呈する。住居跡規模は、住居跡中央ラインで長軸が5.1m、短軸が4.9m、深さは0.05mを測る。支柱穴は4基とみられるが、北東側支柱穴は確認できない。住居の北東部に浅い落ち込みが認められる。埋土には少量の炭化物と土器破片を含んでいる。

竪穴式住居跡SH192 第2トレンチの北部、SH166の東側で検出した竪穴式住居跡である。住居跡の平面形はSH49・SH179と酷似し、やや歪な方形を呈する。住居跡規模は、住居跡中央ラインで長軸が4.7m、短軸が4.2m、深さは0.05mを測る。住居の南東部、南壁に沿って溝状の浅い落ち込みが認められる。住居跡床面には基盤層の礫層が広がり、後世の柱穴も多数存在することから、確実な支柱穴が確認できない。ほかの住居跡の状況から、支柱穴は4基からなると



第10図 掘立柱建物跡S B 18・134・186・708実測図(S=1/100)

考えられる。

2) 掘立柱建物跡

第2トレンチを中心に多数の柱穴跡を検出した。分布密度も高く、時代幅や供伴土器の少なから、復原建物跡の抽出は柱穴数に比べわずかである。

掘立柱建物跡 S B 1 第2トレンチ中央西部から検出した南北に連なる2棟の掘立柱建物跡のうち、北側に位置する建物跡である。東西3間(4.5m)×南北3間(5.1m)の規模を測る総柱建物である。建物の方位はN12°Wである。柱間寸法は、東西が約1.5mのほぼ等間隔であるが、南北は1.5~1.8mと不等間隔である。南北方向の柱列はほぼ柱筋を揃えて建てられている。東西方向の柱列は、中央2ヶ所の柱痕が、両端の柱穴柱当たりを結ぶ筋から外れるものが多い。柱穴掘形は角の丸みが強い方形であり、一辺が1mと0.7mと大小のサイズが混在する。特に大型掘形をもつ柱穴は、建物外周に認められる傾向が強い。柱穴掘形内の精査で検出した柱痕は掘形規模の割に小さく、直径は0.2mを測る。柱痕は掘形埋土とあまり変化がみられないが、やや粒子が細かく粘質が強い傾向にあった。また、それぞれの掘形底面では、柱痕部底面に還元作用による淡緑灰色化した柱当たりが確認された。時期は奈良時代後期と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 2 S B 1の南にあって、両建物間は心々間で約2.1mを測る。東西3間(4.2m)×南北3間(4.9~5.6m)の規模を測る掘立柱の総柱建物である。建物の方位はN12°Wである。柱穴掘形はS B 1より小形傾向にあり、一辺0.6m規模が多くを占め、柱痕は直径0.2mを測る。柱間間隔はS B 1に比べて誤差が大きい。S B 1とほぼ柱筋を揃えて建てられていることから、同時期の建物と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 8 第2トレンチ北部で検出した掘立柱の建物跡である。S H 179と重複し、多くの柱穴は住居跡埋土を切っている。東西2間(4.2m)×南北2間(4.8m)の規模を測る総柱建物である。建物の方位はN14°Wである。柱間間隔は東西2.1m、南北2.4mのほぼ等間隔であるが、西端柱筋の北側1間はやや間隔が開く。方形を呈する柱穴掘形は、一辺が0.7mを測る。奈良時代後期の建物跡と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 16 第2トレンチ南部で検出した掘立柱の建物跡である。建物は南北棟で東西2間(5.4m)×南北3間(7.2m)以上の規模を測り、建物の南部は調査地外にのびる状況にある。柱間間隔は、東西が2.7m等間、南北は2.4m等間である。主軸方位はN1°Eである。柱穴掘形は円形に近く、直径0.6m前後の規模を測る。柱穴の切り合いから、S D 41より新しい時期の建物跡である。平安時代の建物跡と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 18 第1・2トレンチの南部で検出した掘立柱建物跡である。東西棟の建物で、東西5間(10.8m)×南北2間(4.5m)の規模を測る。柱間間隔は、東西の桁行がほぼ2.1m等間、南北の梁間は2.1~2.4mである。建物の方位はN12°Wである。柱穴掘形は形の崩れた方形が主体を成し、一部に円形と思しきものが混在する。掘形は、0.6m前後の規模を測る。柱穴の切り合いから、S D 41より新しい時期の建物跡である。奈良時代後期の建物跡と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 134 第2トレンチの中央部、建物1と重複して検出した掘立柱の建物跡で

ある。東西棟の建物であり、掘形心々間で東西3間(5.9m)×南北2間(4.5m)の規模を測る。柱間間隔は、東西の桁行が2m等間、南北の梁間は2.25m等間である。柱穴掘形は丸みの強い方形であり、一辺は約0.6mを測るものが多い。建物の方位は、SB16と同じくN1°Eである。また、建物西端の梁間筋は、SB16の建物中心線に合致している。両建物間は、およそ12mを測る。

掘立柱建物跡SB186 第2トレンチ中央から検出した掘立柱の建物跡である。東西棟の建物であり、東西3間(7.5m)×南北2間(3.9m)の規模を測る。建物の西端梁間筋は中央の柱穴が確認できず、東西の桁行はさらに西にのびる可能性も残る。柱間間隔は、東西の桁行は不等間隔を示すが、南北の梁間は1.8mと2.1mである。建物の方位はN11°Wである。柱穴掘形は形の崩れた方形が主体を成し、一部に円形と思しきものが混在する。掘形は0.6m前後の規模を測る。

掘立柱建物跡SB708 第2トレンチ中央部、SH1の北で検出した、1間四方の掘立柱建物跡である。建物の柱間は東西方向に対し南北に長く、柱穴掘形心々間は東西3m、南北4.5mを測る。柱穴の掘形は方形で、一辺0.9mとやや大型である。奈良時代後期の建物跡と考えられる。

3)土坑

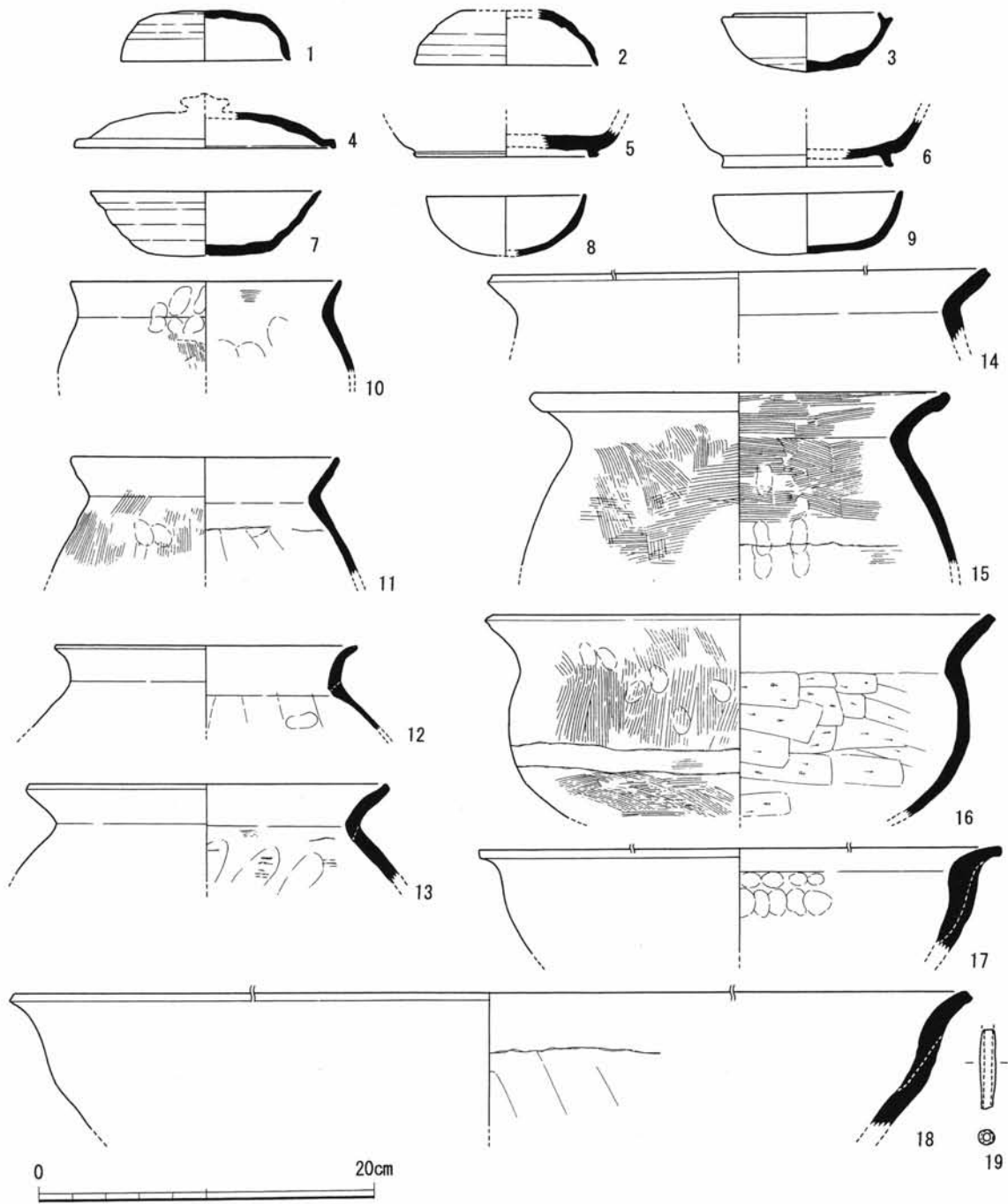
第2トレンチ南西部に2基(SK58・226)の浅い土坑が存在した。両土坑は、円形・方形とも言い難い不定形であり、長さ2m、幅1.5m前後の規模を測る。土坑底は、土坑周縁部から中央にかけて緩やかに下り、浅い落ち込みとも言うべきものである。深さは、SK58で0.05m、SK226で約0.25mである。

4)溝

溝SD41 第2トレンチ南端で検出した、幅0.9m、深さ0.2mの素掘り溝である。溝は地形の緩斜面に沿う状況にあり、方位はN60°Eである。第2トレンチでは17m分を検出した。溝底には傾斜がほとんど認められず水平に近い。溝は第1トレンチからのびてくる状況にあるが、第1トレンチでは溝の続きを確認できない。溝は第1トレンチでは、後世の削平で消滅したものとみられる。

溝SD42 SD41の南にあって、併走する方向性をもつ素掘り溝である。両溝間は心々で3.5m前後を測る。溝幅0.5～0.7m、深さ0.05mで、約6m分を検出した。溝底は北東から南西にやや傾斜している。

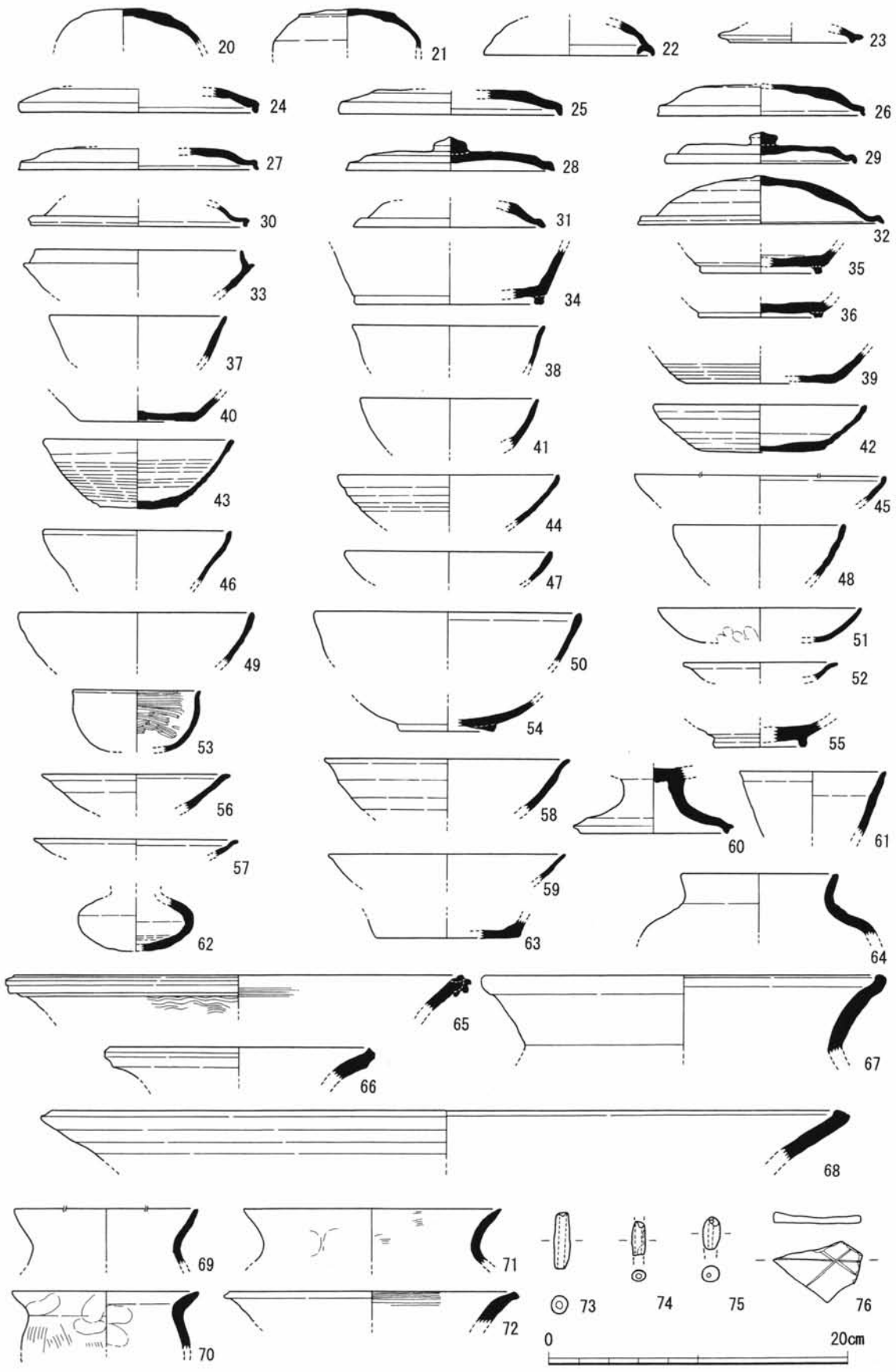
溝SD167 本来は第1～3トレンチに跨る素掘り溝とみられるが、第1トレンチではSD41と同様、延長が確認できない。溝はSD41・SD42とほぼ同じ方向性をもつ。検出した溝は53mを測り、溝幅は0.7m、深さは最大0.25mである。検出分のみ見る溝の東端と西端における溝底部比高差は0.1mで、弱いながらも東から西に下る傾斜が認められる。溝は、第3トレンチ南端中央付近で南側に小さく湾曲した後、やや西に振り戻した直後に終わる。溝の西端から西側は地山面が一段高いことから、溝がさらに西方へのびることは無いようである。また、西端部から南に折れて南流する状況も確認できない。溝の西端部は単純に終わっており、ことさらの変異点は認められない。ただ、溝の終点手前で溝が湾曲する状況が目立つが、周辺部に注意を引く遺構は確認できない。



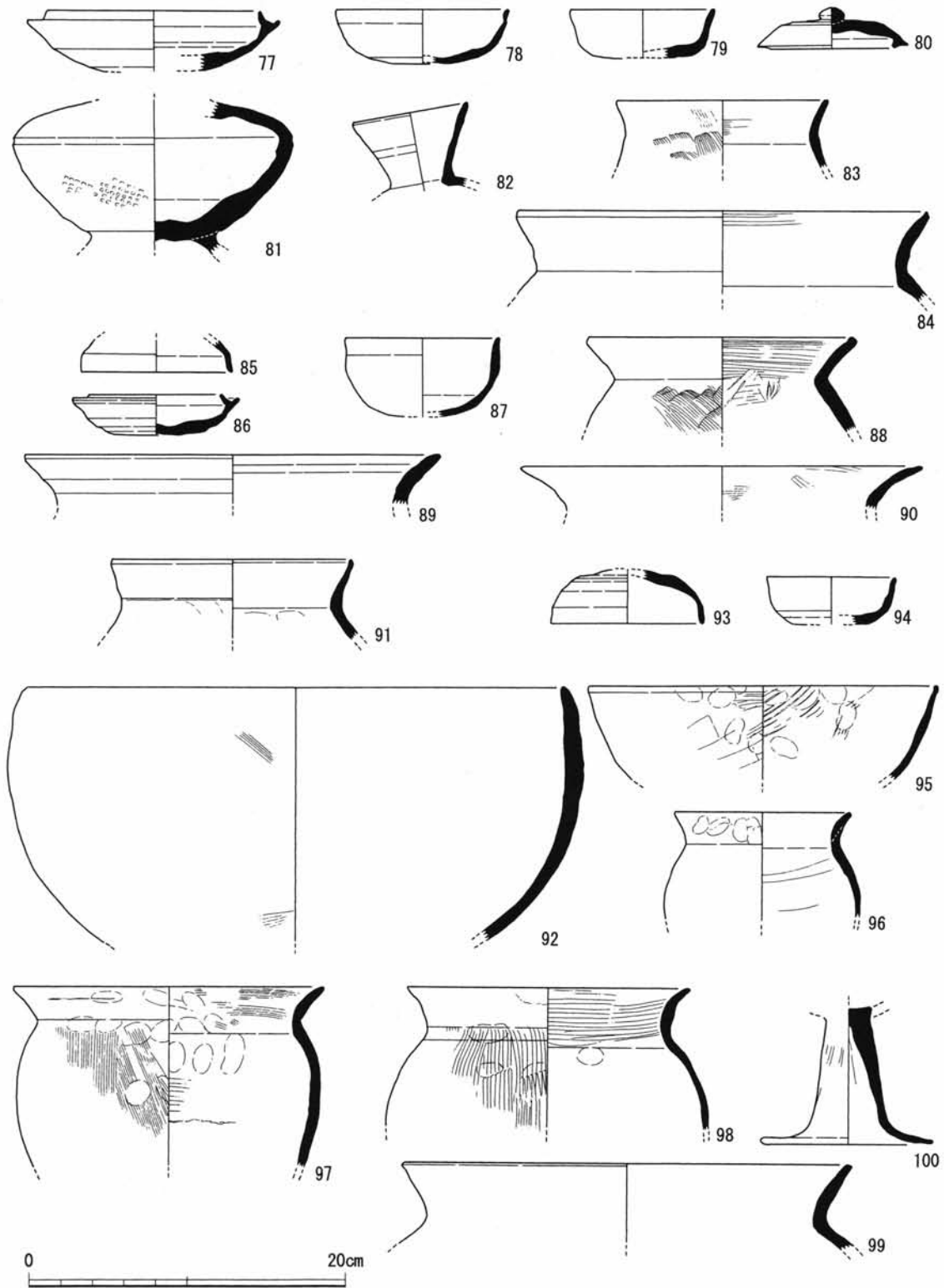
第11図 第1トレンチ縦穴式住居跡SH2出土遺物実測図

付表1 第2トレンチピット出土遺物一覧表

No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考
20	SP237		30	SP168		40	SP31	SB18	50	SP14		60	SP80		70	SP140	SB134
21	SP241		31	SP51	SB16	41	SP168		51	SP14		61	SP13		71	SP227	
22	SP227		32	SP30	SB18	42	SP22		52	SP16	SB16	62	SP12	SB8	72	SP109	SB1
23	SP233		33	SP165	SB1	43	SP103		53	SP16	SB16	63	SP174		73	SP29	
24	SP174		34	SP57		44	SP14		54	SP164		64	SP227		74	SP10	
25	SP19		35	SP231		45	SP75		55	SP174		65	SP156		75	SP427	
26	SP18	SB18	36	SP75		46	SP74		56	SP249		66	SP140	SB134	76	SP68	SB18
27	SP172		37	SP20		47	SP17		57	SP225		67	SP51				
28	SP163		38	SP19		48	SP174		58	SP30	SB18	68	SP164				
29	SP432		39	SP75		49	SP31	SB18	59	SP14		69	SP34				



第12図 第2トレンチピット出土遺物実測図



第13図 第2トレンチ竪穴式住居跡SH1・40・46・49・147出土遺物実測図

その他の東西溝 第1トレンチと第2トレンチの中央付近から、先のSD167などと異なる方向性の2条の素掘り溝(SD206・235)の一部を検出した。いずれも方位はおよそN80°Eである。溝幅0.6m前後、深さ0.1mを測る。

溝SD9 第2トレンチ北端中央から検出した素掘りの南北溝である。溝幅0.6m前後、深さ

は0.1mである。溝底の比高差から、南流する溝である。溝は竪穴式住居跡SH166・179を切るが、掘立柱建物跡SB8などの柱穴には切られる関係にある。

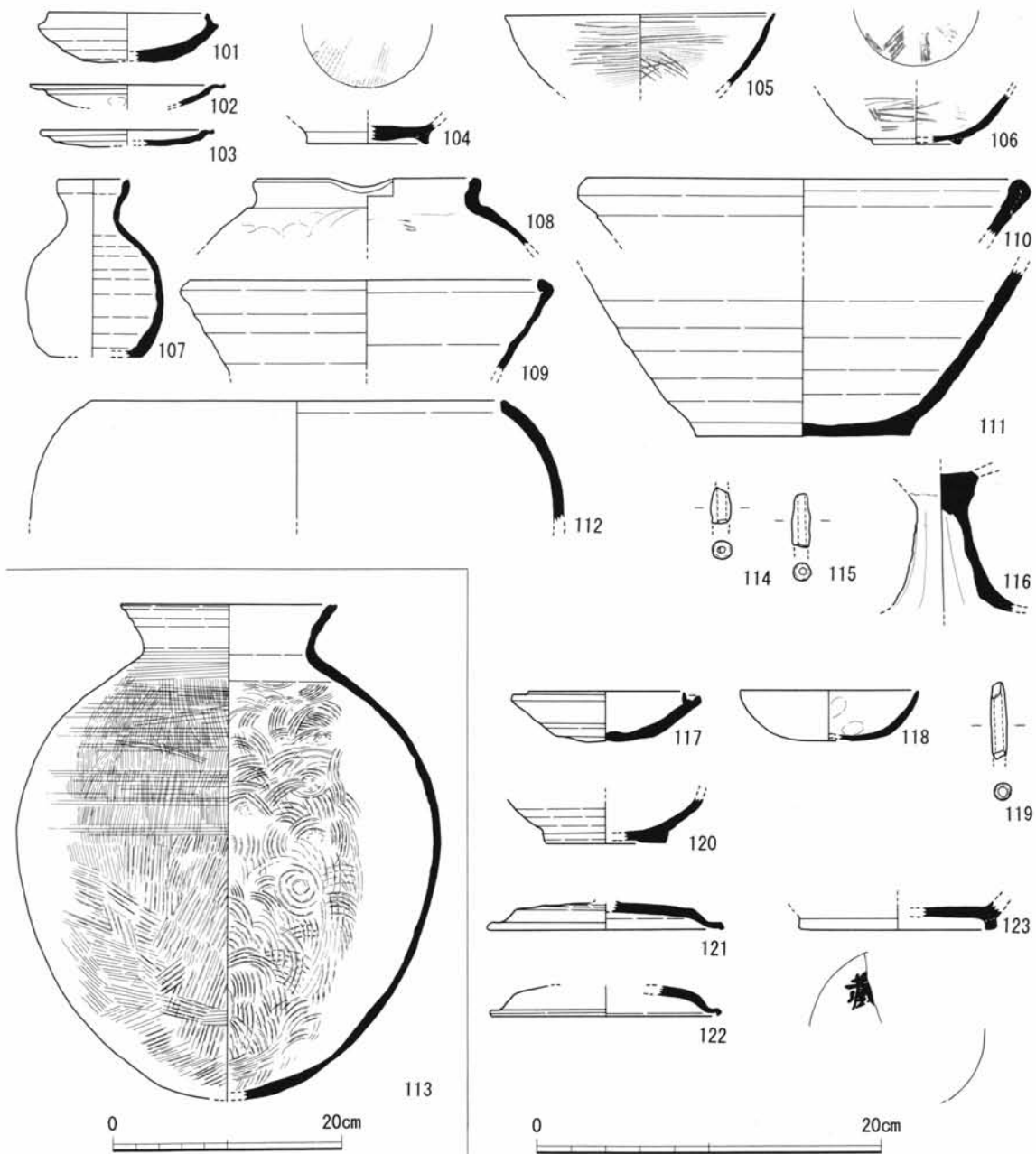
その他の南北溝 南北方向に主軸を向ける幅0.3m、深さ0.1m程度の素掘り溝を、第2トレンチの北と南で数か所検出した。方形区画を意識した溝も認められるが、その性格などは不明である。柱穴が溝を切る例が多く、中世以前の溝とみられる。

(竹原一彦)

(2)出土遺物

1)第1トレンチ

SH2出土遺物(1~19) 1~3・9・10・12・15~18は炭混じりの2層上面から出土し、ほ



第14図 第2トレンチ竪穴式住居跡SH157・179、溝SD9・27・167出土遺物実測図

かはこれらより上位で出土した。1・2・4は須恵器杯蓋、3・5・6は須恵器杯である。飛鳥時代のものと奈良時代のものがある。7～19は土師器である。7は底部ヘラ切りの回転台土師器杯である。灰白色を呈するが、口縁部のみ重ね焼きにより灰黒色を呈する。SH2よりも新しいピットSP146の範囲内から出土しているため、本来この住居跡に伴う遺物ではないと考えられる。8は土師器椀、9は土師器杯である。8・9ともにわずかに砂粒を含む橙色系の胎土である。調整は器面が磨滅しているため不明である。10～15は土師器甕である。10・11は茶褐色系、12・14・15は橙色系、13は茶灰色の色調である。16～18は土師器鍋である。17・18は径5mmの角礫を多く含む灰色系の胎土が共通するが、口縁部の形態と内面の調整が異なることから、別個体と思われる。19は土錘である。

2)第2トレンチ

ピット(20～76) 20～32は須恵器杯蓋、33～42は須恵器杯である。39～41は焼成が甘く、灰白色系の色調を呈する。41は口縁部付近のみ灰黒色を呈する。39・40は底部ヘラ切りである。43～50は須恵器椀である。51・52は土師器皿である。53は黒色土器鉢である。内面は密なヘラミガキが施される。54・55・56は緑釉陶器皿、55は緑釉陶器椀である。54は軟質の胎土で、釉葉がほとんど剥落している。58は灰釉陶器椀、59は灰釉陶器段皿である。60は須恵器高杯である。61～64は須恵器壺である。63は底部に糸切りの痕跡が残る。65～67は須恵器甕である。66は内外面の全面に灰釉が掛かる。68は陶器甕である。69～72は土師器甕である。73～75は土錘である。76は須恵器杯の底部で、外面に焼成前のヘラ描きが認められる。

SH1(77～84) 77～79は須恵器杯、80は須恵器杯蓋である。いずれも自然釉が掛かり、79・80には釉着した痕跡がある。81は須恵器壺である。器壁は厚く、体部下半にタタキ痕跡が認められる。82は須恵器平瓶である。81・82は土師器甕である。81は乳橙色、82は淡茶褐色を呈する。82の口縁端部はわずかに上方に摘み上げられている。このほか、鉄鏝(529・530)、ヤリガンナ状の鉄製品(535)が出土している。

SH40(85～89) 85は須恵器杯蓋、86・87は須恵器杯である。87は軟質で、淡黄灰色を呈する。88・89は土師器甕である。89は口縁部内面に段状のナデを施すもので、京都府北部に多くみられるものである。

SH46(90) 90は土師器甕である。口縁端部は尖り気味に丸く収める。

SH49(91・92) 91は土師器甕である。砂粒を多く含む胎土で茶褐色を呈し、端部はやや上方に摘み上げる。92は土師器鉢である。砂粒を多く含む胎土で乳橙色を呈し、外面下半は灰黒色を呈する。

SH147(93～100) 93は須恵器杯蓋、94は須恵器杯である。93はやや焼成が甘く、天井部の断面は橙色味を帯びている。94は淡灰色を呈し、外面には自然釉がかかる。95は土師器杯である。外面はヘラケズリを施し、口縁部付近には横方向のヘラミガキが観察できる。内面は上位に暗文が施されているが、下位は磨滅しており観察できない。胎土はクサリ礫などを少量含むものの精良で、色調は茶橙色～茶褐色を呈する。96～99は土師器甕である。96は体部内面に横方向の大き

な単位のヘラケズリが施される。胎土には細かな砂粒を多量に含み、茶褐色を呈する。97は内外面とも凹凸が激しい。白色の細粒を含む良質の胎土で、橙色～乳橙色を呈する。98は口縁部内面と体部外面に粗く深いハケメを施す。色調は茶褐色を呈する。99は乳白色～乳橙色を呈する。器面はやや磨滅しているが、ハケメなどは施されていないものとみられる。100は乳橙色の良質な胎土をもつ土師器高杯である。このほか、鉄鏃(528)が出土している。

S H157(101～115) 101は須恵器杯である。102・103は土師器皿である。「て」字状口縁をもつ。104は黒色土器A類碗である。見込みには平行する密なヘラミガキが施される。105・106は黒色土器B類碗である。105は、内外面ともに密なヘラミガキが施される。内面は圏線状の密なヘラミガキを施した後、斜行する粗いヘラミガキが施されている。107は須恵器壺である。瓦質焼成に近く、外面は灰黒色を呈する。108は土師器甕である。「く」字に折れる短い口縁部をもつ。口縁部の一部が変形している。109～111は須恵器鉢である。110と111は同一個体の可能性がある。112は土師器鉢である。茶橙色の精良な胎土をもつ。113は須恵器壺である。焼成は瓦質に近く、灰白色を呈する。114・115は土錘である。

S H179(116) 116は土師器高杯である。内面は面取りを施した痕跡が明瞭に残る。

S D 9 (117～119) 117は須恵器杯である。118は土師器杯である。磨滅が著しく、調整は観察できない。119は土錘である。

S D27(120) 無釉陶器碗である。内外面に回転によるヘラミガキが施される。篠窯産と思われる。

S D167(121～123) 121・122は須恵器杯蓋である。121の頂部には摘みが付いていたことがわかる。121と122は同一個体の可能性がある。123は須恵器杯である。高台貼付け部からすぐに屈曲して口縁部が立ち上がると思われる。底部外面に「蔵」の墨書が認められる。

(森島康雄)

2. 第3トレンチの遺構と遺物

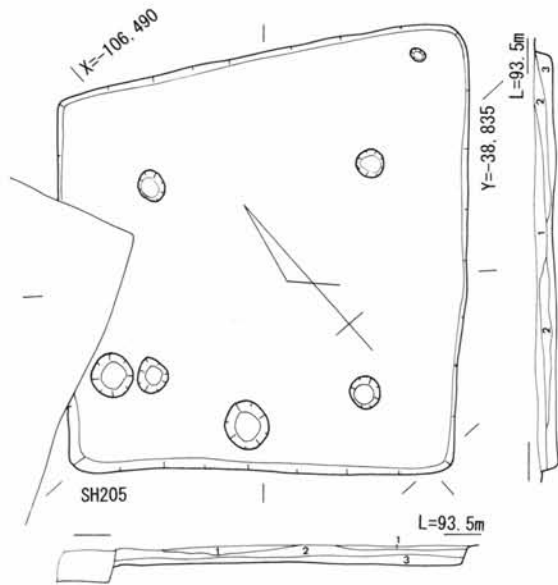
第3トレンチは、東西約40m、南北約60mのトレンチである。調査以前は畑地であり、中央付近で東西2筆に分かれた耕作地は段差を伴い、東半部が西側に対し0.5m程度低位となる。地表下0.5m付近で検出した遺構面は、北から南方向に緩やかに下っている。地山は、トレンチ中央付近から北西側にかけて川原石を多く含む状況にある。対する南東部は、粘性のある砂質土が広がる。この地山面で精査を繰り返したところ、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・柱穴・溝など、多種・多数の遺構を検出した。

(1) 検出遺構

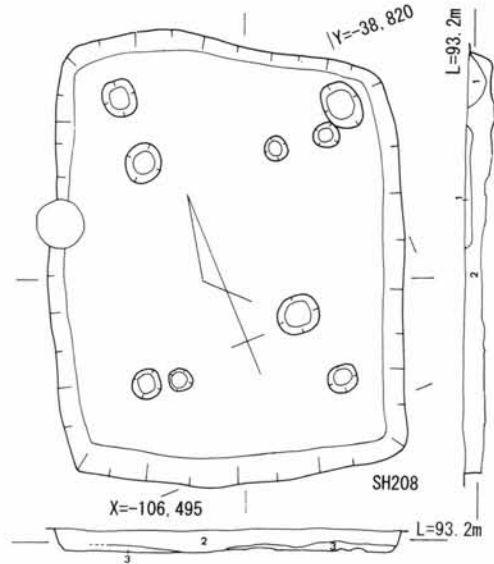
1) 竪穴式住居跡

第3トレンチでは、14基の竪穴式住居跡を検出した。住居跡は、特に調査地中央部を中心に、南西から北東方向に帯状に分布する状況にある。

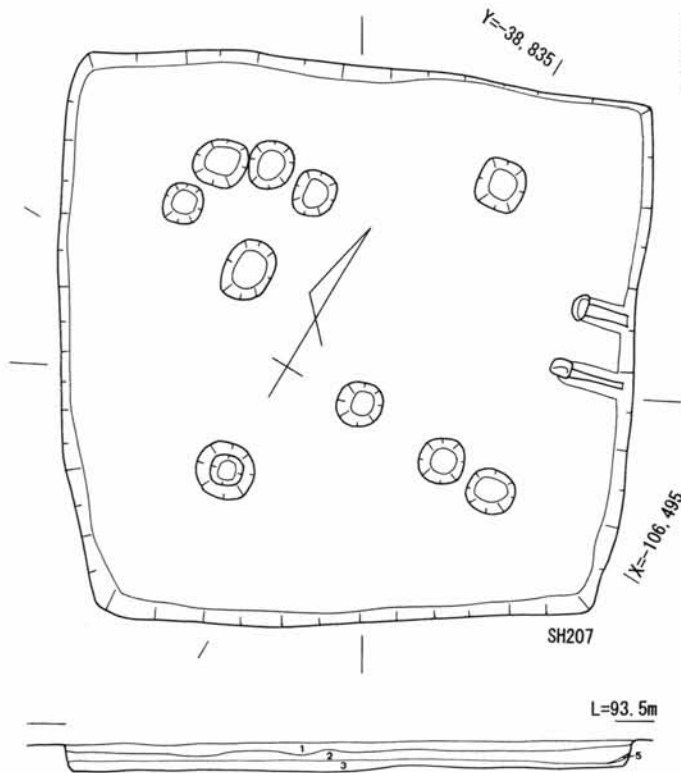
竪穴式住居跡 S H205 調査地北東部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、



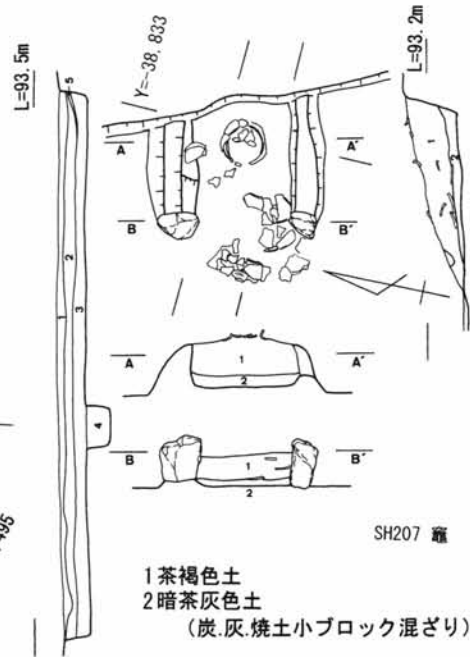
- 1 暗茶灰色土 (礫混じり)
- 2 黄茶灰色土
- 3 暗黄茶褐色粘質土 (礫混じり)



- 1 暗茶灰色土混じり砂礫
- 2 暗灰色系砂礫
- 3 淡茶灰色粗砂



- 1 暗茶灰色土 (礫混じり)
- 2 暗灰褐色砂質土
- 3 黄灰褐色土 (礫混じり)
- 4 暗黄茶褐色土 (礫混じり)
- 5 炭・灰混じりと焼土ブロック含む



- 1 茶褐色土
- 2 暗茶灰色土
(炭・灰・焼土小ブロック混ざり)



第15図 竪穴式住居跡 S H 205・207・208実測図 (S = 1/80)、S H 207竈実測図 (S = 1/40)

長辺4.5m×短辺3.8m、深さ0.2mの規模を測る。SH207と重複関係にあり、住居南西部の一部を失っている。住居跡の主軸はN41°Wである。主柱穴は4基からなる。床面は水平である。

住居の北東壁北端部で重複する遺構を検出している。方形コーナーが認められることから、土坑もしくは小型の竪穴式住居跡と推測されるが、部分検出であり、その性格については不明である。時期は飛鳥～奈良時代前半と考えられる。

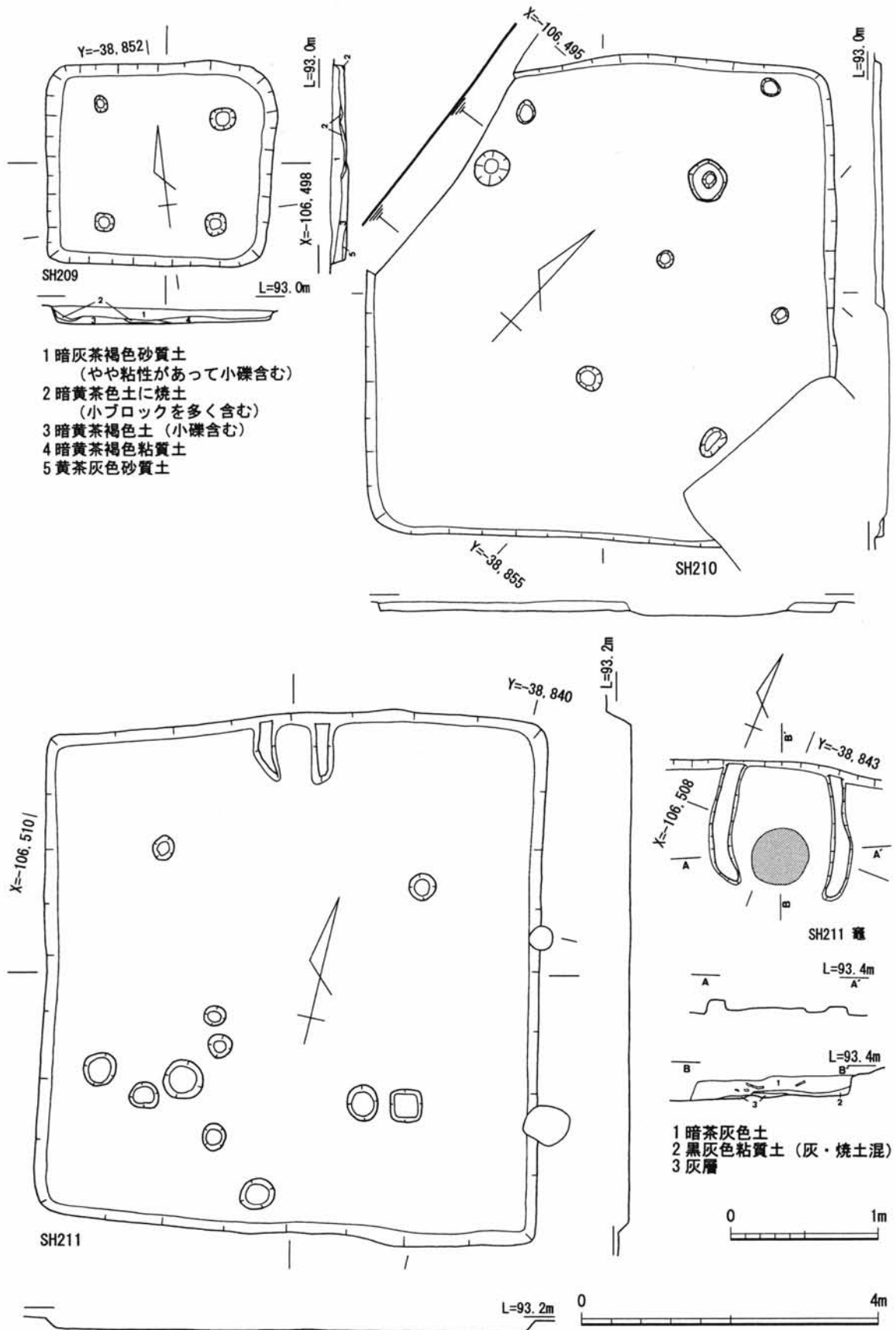
竪穴式住居跡SH207 調査地北東部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、長辺6.1m×短辺5.7m、深さ0.2mの規模を測る。住居の北東コーナーは、SH205と重複する。住居跡の主軸はN28°Wである。主柱穴は4基からなる。北東壁の中央付近に造り付けの甕が存在する。煙道は検出されない。竈の規模は、長さ0.8m、幅0.9m、壁体残存高0.28mを測る。竈の壁体は住居北東壁に対してやや斜行して取り付く状況にある。外部施設として、竈焚き口の両サイドに、川原石による立石が認められる。竈焚き口の立石は、石材(川原石)を縦方向に使用し、床面に埋まる基部は1～2cmと浅く、焚き口に貼り付けた程度の状況である。竈の壁体内側は暗赤褐色に被熱赤変している。焚き口に近い焼成部の底面は、直径0.3mの範囲が特に良く焼けしまった状況にある。竈内埋土は、底面付近に灰混じりの粘質土が堆積し、その上部には竈上部壁体とみる焼土塊が多数混じっている。さらに、この焼土塊層の上部から焚き口前面にかけて、破碎された土師質甕の破片が散らばる状況にあった。また、一部の破片は焼土塊層中にも含まれていた。竈焼成部と住居床面はほぼ水平である。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH208 調査地北東部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、長辺4.7m×短辺3.8m、深さ0.2mの規模を測る。住居跡の主軸はN19°Eである。主柱穴は4基からなる。床面は平坦であるが、北から南方向にやや傾斜が認められる。また、住居跡床面はやや粘質の細砂が地山である。SH208の埋土は、ほかの多くの竪穴式住居跡埋土と異なり、5・程度の円礫を多く含む砂礫が充満していた。これらの砂礫は、河川の氾濫に伴って短時間で堆積したとみられる。弥生時代後期に属する土器の出土をみている。

竪穴式住居跡SH209 調査地北西部で検出した竪穴式住居跡である。今回調査で検出した竪穴式住居跡中で、最も小規模な住居跡である。住居の平面形は方形で、長辺3.0m×短辺2.7m、深さ0.2mの規模を測る。重複関係にあるSH207東部を大きく削り込む。住居跡の主軸はN8°Eである。主柱穴は4基からなる。床面は平坦で、ほぼ水平である。北壁面と西壁面では、わずかな範囲ではあるが、焼土(被熱赤変程度)と薄い炭化物層が点在していた。わずかな痕跡ではあるが、住居が火を受けた可能性が高い。奈良時代前半の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH210 調査地北西部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、長辺6.7m×短辺6.4m、深さ0.2mの規模を測る。住居跡の東コーナーは重複するSH209で失い、中央部は南北に貫く旧試掘トレンチで既に壊されている。また、西側コーナーは調査範囲外にのびている。住居跡の主軸はN41°Eである。主柱穴は4基からなると判断される。床面は平坦で、ほぼ水平である。住居跡の北西側壁面付近から土師器が出土している。

竪穴式住居跡SH211 調査地中央で検出した竪穴式住居跡である。この住居跡の南東側に、



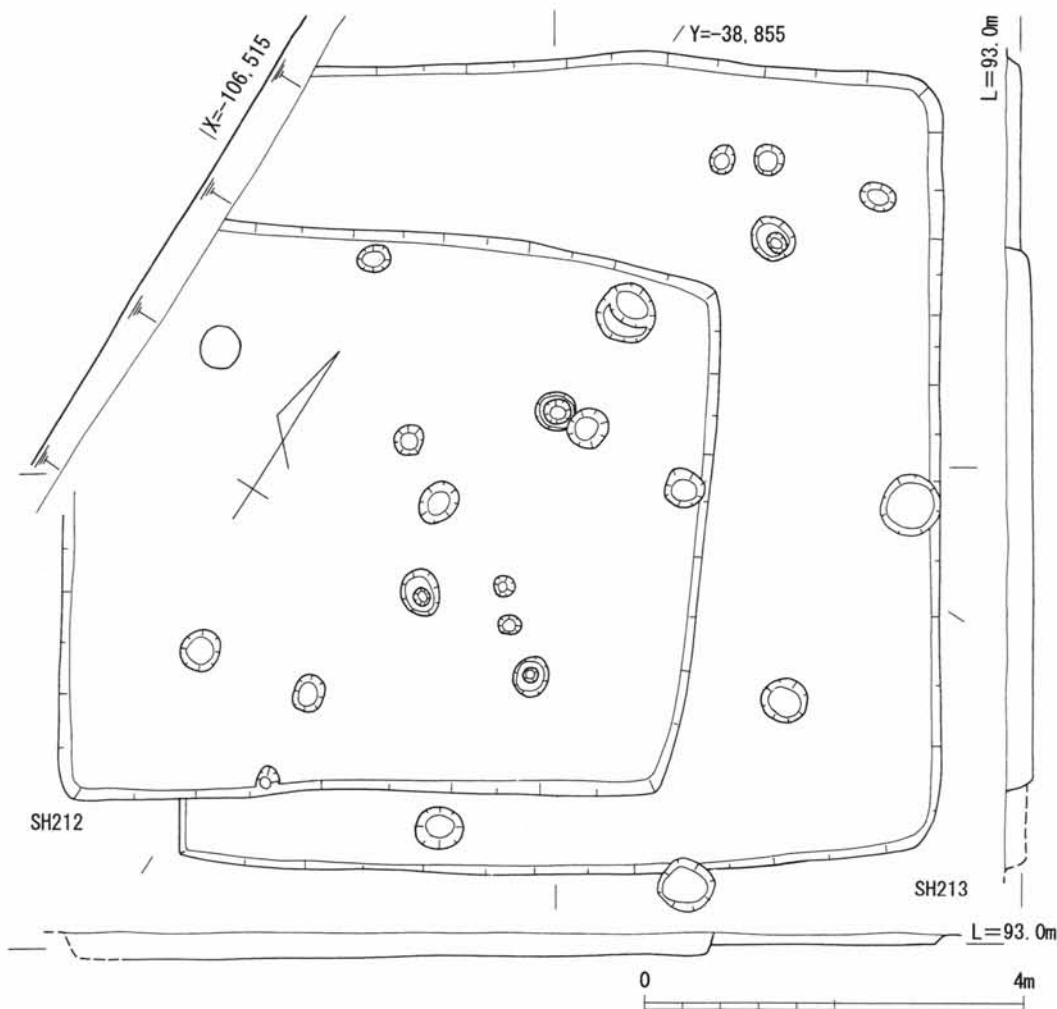
第16図 竪穴式住居跡SH209・210・211実測図(S=1/80)、SH211竈実測図(S=1/40)

同一主軸をもつ2基の住居跡(SH219・SH218)が連続する。

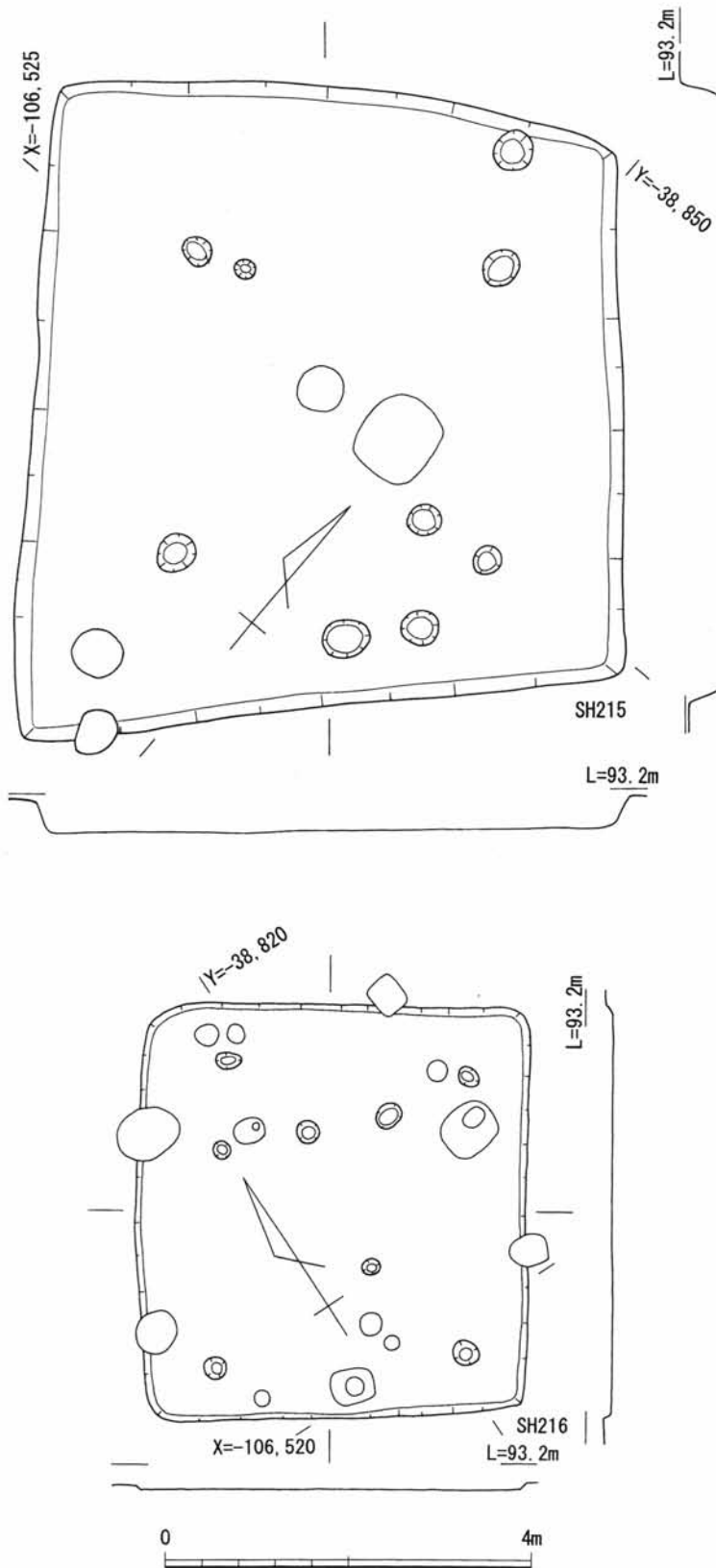
住居跡の東半分は後世の耕作に伴う地形改変の影響で、床面直上まで削平を受けている。住居の平面形は方形で、長辺7.1m×短辺6.7mの規模を測る。住居壁の最も良く残る北壁側では、深さ0.25mを測る。住居跡の主軸はN12°Eである。支柱穴は4基からなる。住居跡床面は平坦に近いが、多量の礫が混じる粘質土に達していることから、やや荒れた状況にある。

北壁部分の中央部に造り付けの竈が存在する。竈は、馬蹄形の平面形をもつ基底部分を検出した。竈の規模は、長さ0.9m、幅0.8m、壁体残存高0.2mの規模を測る。竈内部の焚き口付近は底面が良く焼け締まっている。SH207の竈にみられた焚き口の立石は、この竈では伴っていない。竈奥は住居壁と同一面で立ち上がり、煙道は検出範囲では確認できない。竈内堆積土の上部や周辺から、土師器破片の出土が目立つ。古墳時代中期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH212 調査地中央西端部で検出した竪穴式住居跡である。旧試掘トレンチが住居跡中央を南北に貫いていたが、床面までは調査が及んでいなかった。住居の平面形は方形で、長辺6.7m×短辺5.9m、深さ0.35mの規模を測る。一回り規模の大きなSH213と住居の大部分が重複し、SH212が切り勝つ関係にある。SH213と同一主軸であるが、住居自体は南西側にず



第17図 竪穴式住居跡SH212・213実測図(S=1/80)

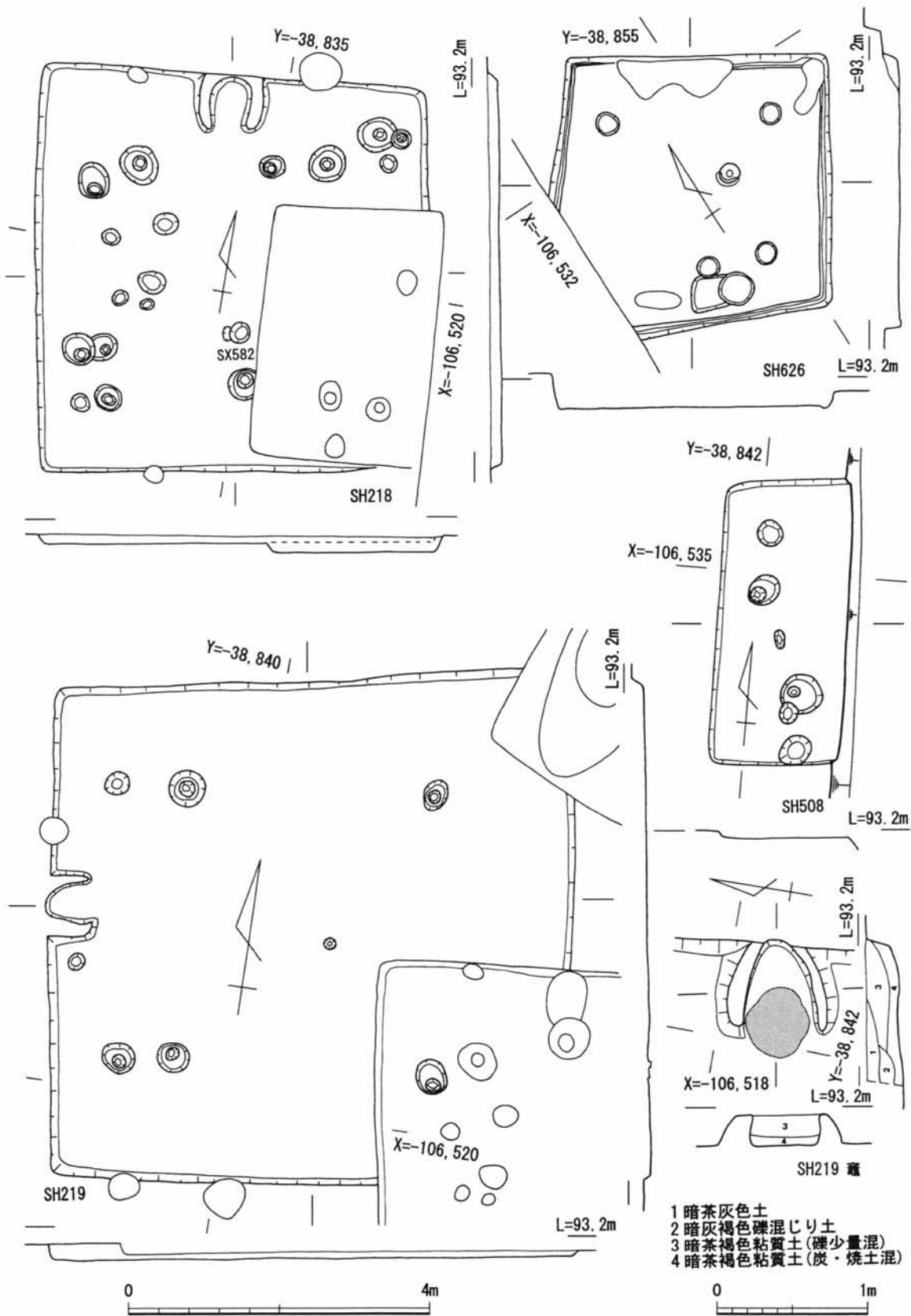


第18図 竪穴式住居跡S H215・216実測図(S=1/80)

れて存在する。住居跡の主軸はN32°Wである。支柱穴は4基からなる。埋土は暗茶褐色系粘質土であるが、礫を多く含んでいる。また、床面に近づくほど、拳大を越える大型の円礫が含まれる傾向が強い。床面はほぼ平坦である。

竪穴式住居跡S H213 調査地中央西端部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形である。今回調査で検出した住居跡の中で最大の住居跡であり、長辺8.5m×短辺8m、深さ0.2mの規模を測る。住居の中央部から西側にかけてS H212と重複している。床面の高さはS H212とほぼ同一である。住居跡の主軸はN32°Wである。支柱穴は4基からなる。

竪穴式住居跡S H215 調査地南西部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形はややいびつな方形を呈し、長辺5.8~7.2m×短辺6.0~6.4m、深さ0.4mの規模を測る。南西側の住居壁に対して、北東側住居壁が短い。住居跡の主軸はN32°Wで、近接するS H212・213と同一主軸をもつ。最も近いS H213とは、南東



第19図 竪穴式住居跡 S H218・219・508・626 (S=1/80)、S H219竈実測図 (S=1/40)

方向に1.4mの間隔を開ける。主柱穴は4基からなる。古墳時代中期の住居跡と考えられる。

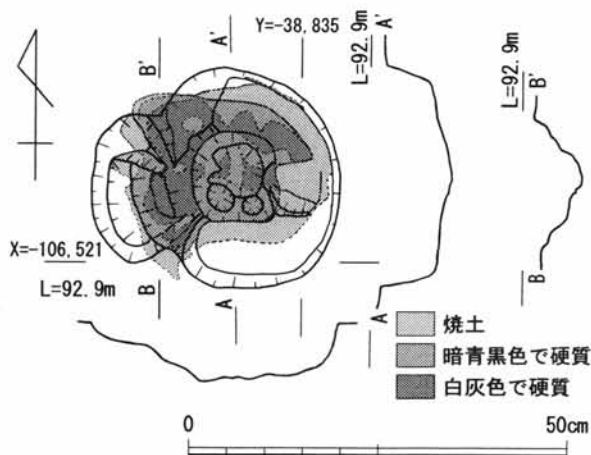
竪穴式住居跡 S H 216 調査地中央東端付近で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、長辺4.5m×短辺4.3mの規模を測る。床面直上まで削平を受けていることから、住居壁の立ち上がりは0.05mを測る。住居跡の主軸はN32°Eである。主柱穴は4基からなる。床面は平坦である。

竪穴式住居跡 S H 218 調査地中央部で検出した竪穴式住居跡である。住居跡の北西部がS H 219と重複し、S H 218が切り勝つ。住居跡の南東部は、試掘調査によって一部が失われている。住居跡の平面形は方形で、長辺5.0～5.4m×短辺5.2m、深さ約0.2mの規模を測る。住居跡の主軸はN8°Wである。主柱穴は4基からなる。北壁中央部から、造り付け竈を検出した。煙道は検出していない。竈の規模は、長さ0.8m、幅0.9mを測る。竈の壁体内側は暗赤褐色に被熱赤変している。焚き口に近い焼成部の底面は、直径0.3mの範囲で特に良く焼けしまっている。竈内埋土は、底面付近に灰混じりの粘質土が堆積している。竈焼成部と住居床面はほぼ水平である。

住居の床面は粘性の強い砂質土であり、平坦である。住居は、特に中央付近が硬く踏み締まり、硬床となっている。この硬床部直上の埋土は、掘削に伴って良く肌分かれし、明瞭に床面が検出できた。硬床範囲は、およそ1.2m前後の範囲である。この硬床部分はやや黄色味が強いが、周辺床面の土と特段の変化がみられず、貼り床が行われた状況は確認できない。

住居の中央から南にやや偏って、直径約0.25m、深さ約0.1mの、小さな達磨様を呈する炉状の遺構(S X 582)を検出した。検出位置は硬床範囲の南端部にあたる。遺構検出時点では、住居跡床面で検出したほかの柱穴と規模・埋土に変化が認められず、当初は柱穴と判断して調査を行ったが、埋土の掘削過程で焼土を検出したことから、柱穴とは異なる遺構であることが判明した。掘り鉢状を呈する土坑の内側は、底部を中心に粘土を貼り付けており、周壁部は被熱赤変している。被熱赤変範囲は、検出面に至ってはいない。土坑底部の中央から西壁面にかけては白灰色・淡灰色で硬化し、特に良く焼けしまった状況にある。土坑の内壁面から底部は平滑ではなく、小規模な凹凸面となっている。

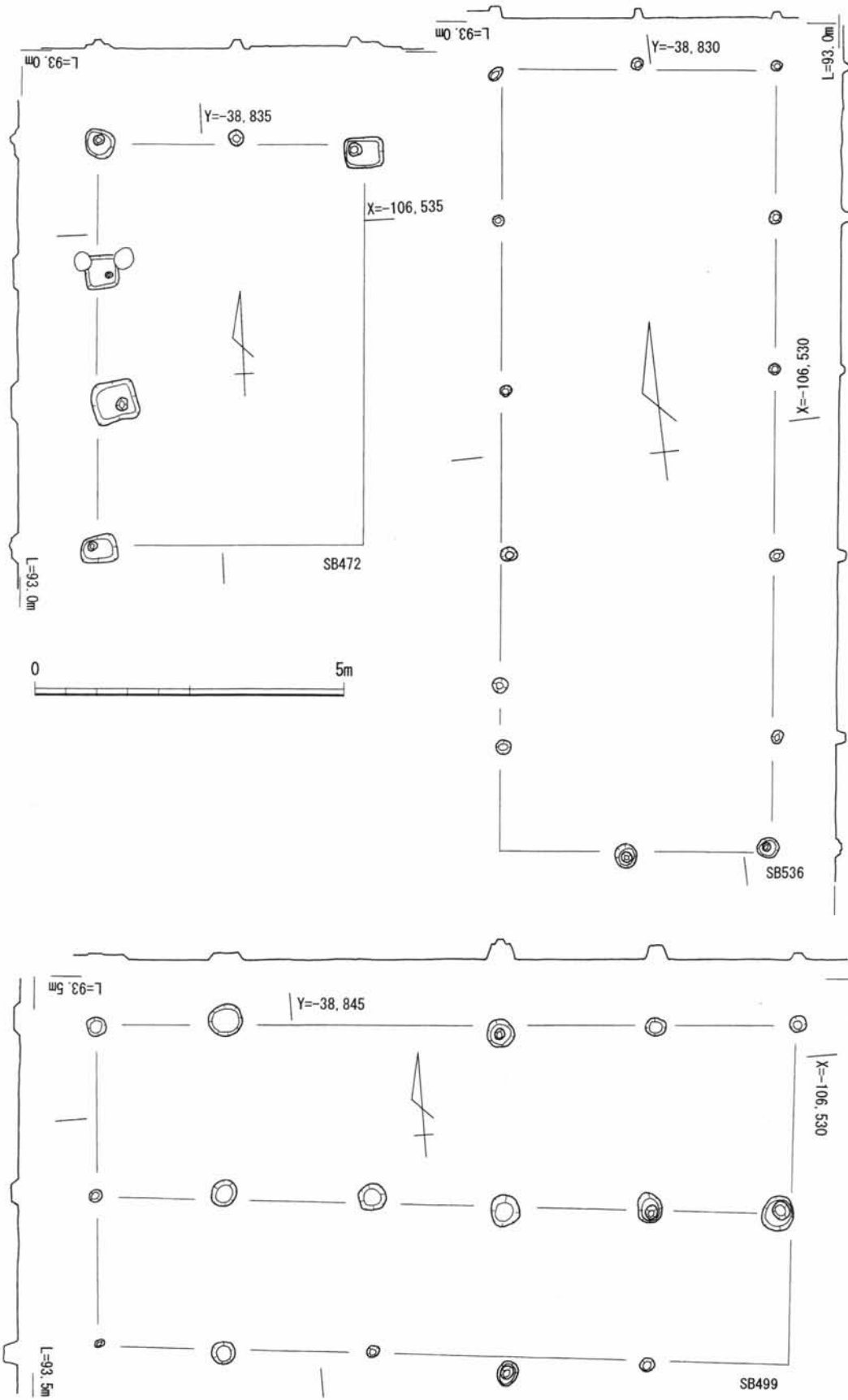
この土坑は、住居跡硬床部の一隅となる位置関係や炉の状況から、鍛冶関連遺構と推測される



第20図 竪穴式住居跡 S H 218内土坑 S X 582実測図

遺構である。調査過程で土坑内の埋土や周辺床面での土壌の採取を実施しておらず、微細な鍛造剥片など関連遺物の存在が確認できていない。また、住居跡内から鍛冶滓や鍛冶具の出土はみられない。遺構の形状から鍛冶炉の炉底部の可能性が高いが、関連遺物の出土がないことから確証は得られない。飛鳥～奈良時代前半の住居跡とみられる。

竪穴式住居跡 S H 219 調査地中央部で検



第21図 掘立柱建物跡 S B 472・499・536実測図 (S = 1/100)

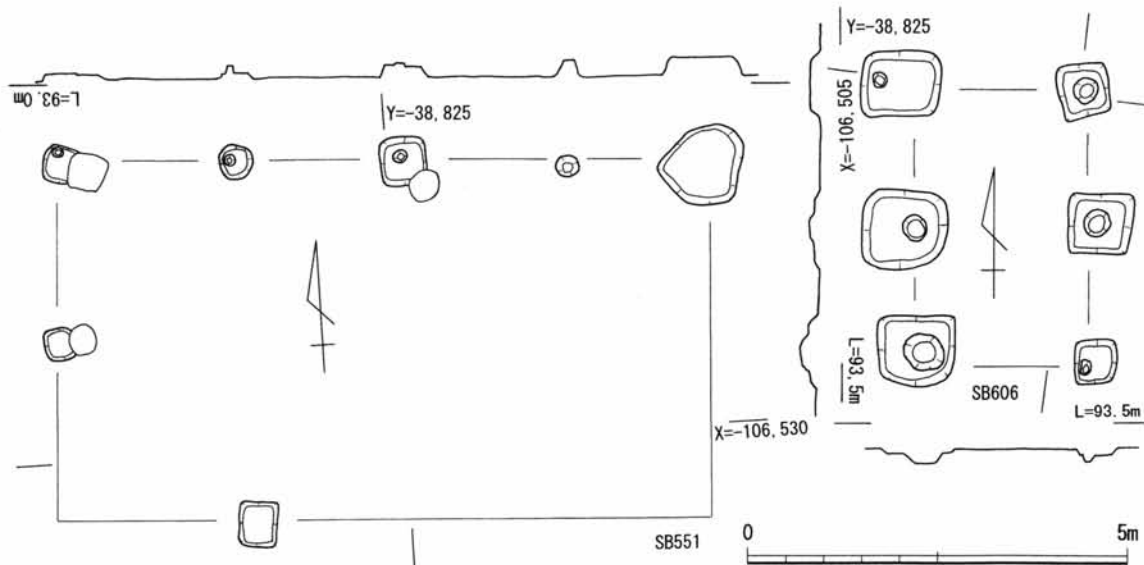
出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、長辺6.9m×短辺6.6m、深さ0.25mの規模を測る。住居の南東コーナーを重複するSH218により失っている。また、北東コーナーは土坑SK214で壊されている。住居跡の北西側に近接してSH211が存在する。両住居跡の壁間隔は、約0.2mと近接している。住居跡の主軸はN8°Eである。主柱穴は4基からなる。

住居の西壁側、中央からやや北に偏って、造り付け竈が1基存在する。竈は、馬蹄形の平面形をもつ基底部分を検出した。竈の規模は、長さ0.6m、幅0.9m、壁体残存高0.25mの規模を測る。焚き口は東にあって、立石など外部施設は認められない。壁体内面は暗赤褐色に被熱赤変している。住居跡検出範囲内で煙道は認められない。

竪穴式住居跡SH508 調査地南部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形である。住居の東半分は後世の地形改変で失われ、西半部分のみ検出できた。住居跡は、南北3.3m、西壁部でみる深さは0.15mを測る。東西方向の住居壁は1.7m分を検出した。住居跡の主軸はN1°Wである。主柱穴は4基からなるとみている。

竪穴式住居跡SH626 調査地南西部で検出した竪穴式住居跡である。住居の平面形は方形で、長辺3.6m×短辺3.3m、深さ0.4mの規模を測る。住居跡の西側コーナーは調査範囲外にのびる。床面は平坦で、壁面に接する周辺部に浅い周壁溝が存在する。住居床面中央から東にやや偏って、直径約0.2m、深さ約0.03mの小さな浅い窪みが存在する。内面の一部が被熱赤変し、わずかながら炭化物も伴う状況から、炉跡と判断している。住居跡の南西部床面、壁面に接して貯蔵穴が存在する。住居跡の主軸はN31°Eである。主柱穴は4基からなる。埋土中から比較的多くの土師器が出土している。

住居跡北部側の壁面付近から点在する状況で焼土や少量の炭化物を検出した。また、北東壁中央付近では、壁面が弱いながらも被熱赤変する状況が確認されたことから、火を受けた可能性がある住居跡とみている。

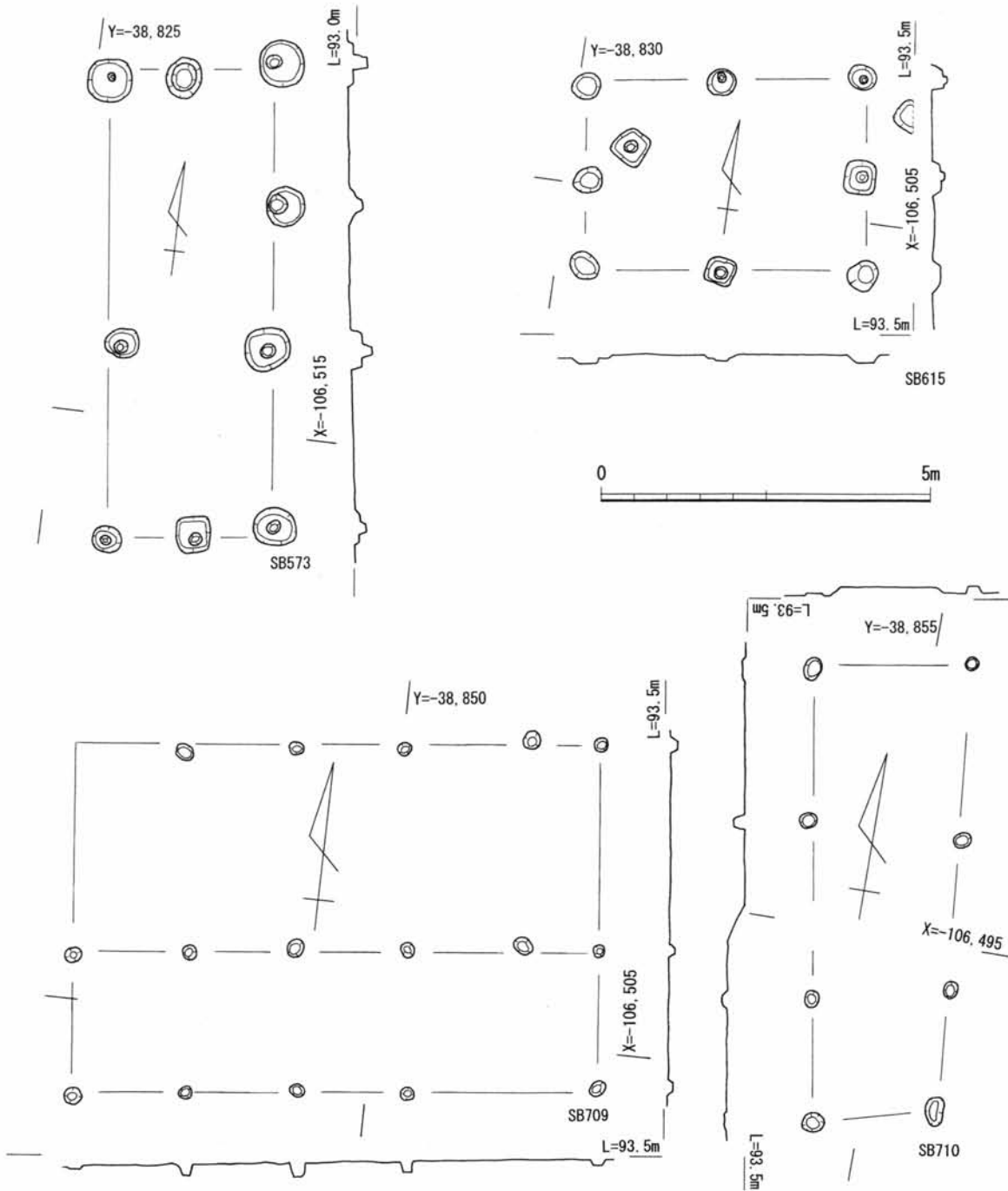


第22図 堀立柱建物跡SB551・606実測図(S=1/100)

2) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡 S B 472 調査地南端部から検出した掘立柱の建物跡である。南北棟の建物であり、東西2間(4.2m)×南北3間(6.5m)以上の規模を測る。柱穴掘形心々間は東西約2.1m、南北2.1mの等間隔を測る。柱穴掘形は方形で、一辺0.6m前後を測る。掘形内に残る柱痕は、直径0.2mを測る。建物の方位はN3°Eである。掘立柱建物跡 S B 536と建物北東部が重複する。

掘立柱建物跡 S B 499 調査地南西部から検出した掘立柱の建物跡である。東西棟の総柱建物跡であり、東西5間(11.1m)×南北2間(4.8m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は、東西が約2.1m等間、南北は北から2.7mと2.1mを測る。柱穴掘形は円形で、一辺0.5m前後を測る。掘形内

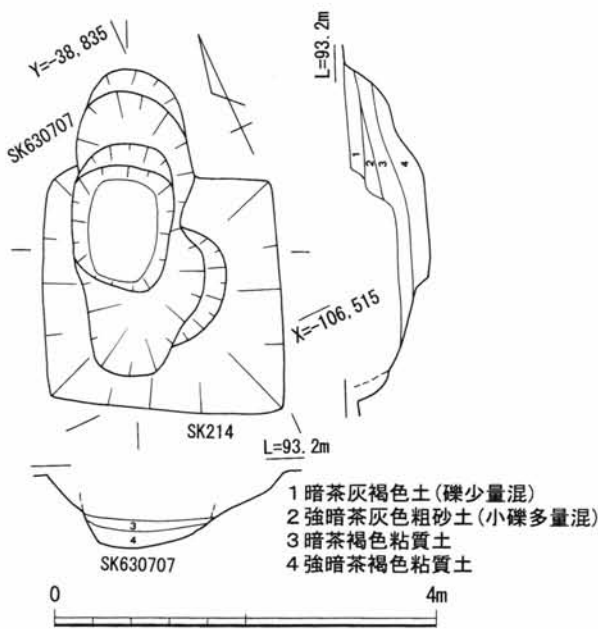


第23図 掘立柱建物跡 S B 573・615・709・710実測図 (S=1/100)

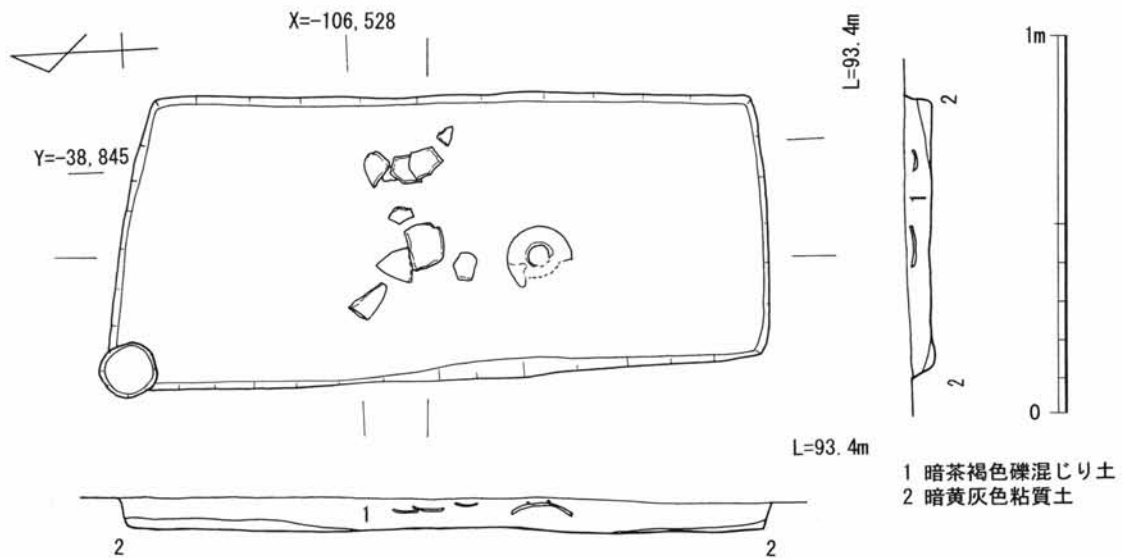
に残る柱痕は、直径0.2mを測る。建物の方位はN 7° Eである。竪穴式住居跡 S H 215・S H 626と重複するが、建物柱穴掘形が住居跡の埋土を切っている。柱穴から、青磁碗・鉄製品・瓦などが出土している。平安時代前期の建物跡と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 536 調査地南部から検出した掘立柱の建物跡である。南北棟の建物であり、東西2間(4.5m)×南北5間(12.6m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は東西約2.25m。南北は北側2間が2.4m、中央の2間が3.0m、南側1間は1.8mである。柱穴掘形は円形で、直径0.4m前後を測る。掘形内に残る柱痕は、直径0.2mを測る。建物の方位はN 5° Eである。掘立柱建物跡 S B 472と S B 551に重複する。平安時代の建物跡と考えられる。

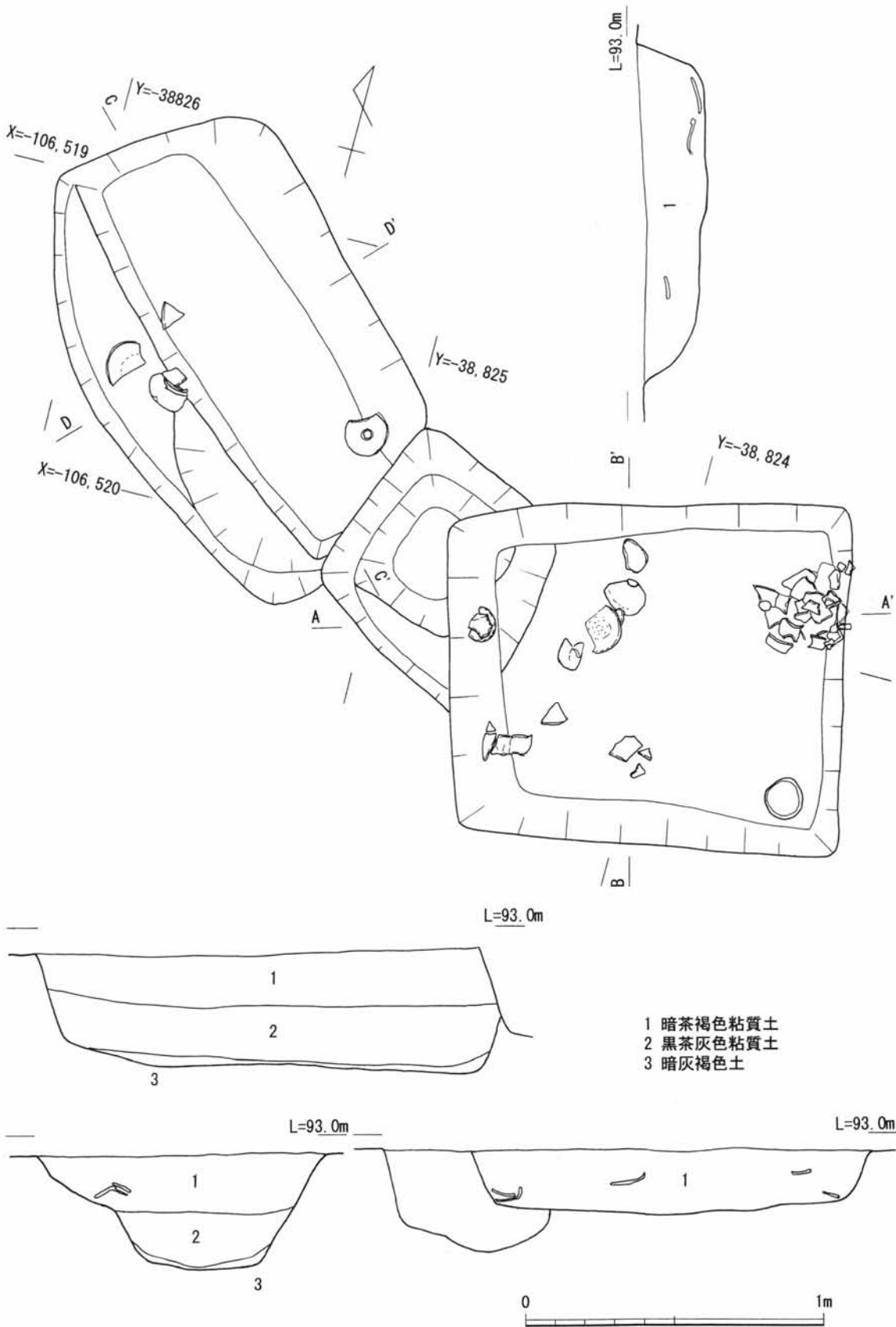
掘立柱建物跡 S B 551 調査地南西部から検出した掘立柱の建物跡である。東西棟の建物跡であり、東西4間(8.4m)×南北2間(4.8m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は東西が約2.1m等間、南北は北から2.4m前後を測る。掘形内に残る柱痕は、直径0.2mを測る。建物北東隅の柱穴は不定型で、長さ約1m、深さ0.4mの規模をもつ。建物に伴う他の柱穴とは規模・形状で大きく異なり、また、破片ながらも多くの土器が出土している。この建物跡に関しては、北東隅の柱は最終的に抜き取られたとみられる。建物の方位はN 3° Eである。掘立柱建物跡 S B 536と建物跡の西部が重複する。平安時代の建物跡と考えられる。



第24図 土坑 S K 214・630707実測図(S=1/80)



第25図 土坑 S K 526実測図(S=1/20)



第26図 土坑S K566~568実測図(S=1/20)

掘立柱建物跡 S B 573 調査中央東部から検出した掘立柱の建物跡である。南北棟の建物であり、東西2間(2.4m)×南北間(6.9m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は東西が約1.2m等間、南北は北側2間が2.1m、南側1間はやや広く2.7mを測る。柱穴掘形は円形で、直径0.6m前後を測る。掘形内に残る柱痕は、直径0.2mを測る。建物の方位はN 8°Wである。

掘立柱建物跡 S B 606 調査中央東部から検出した掘立柱の建物跡である。南北棟の建物であり、東西1間(2.1m)×南北2間(3.6m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は、南北が1.8m等間を測る。柱穴掘形は方形で、西側柱列が東側に対して規模が大きい。西側の柱穴掘形は直径1m前後であるのに対し、東側では0.7m前後の規模を測る。掘形内に残る柱痕は、直径0.2~0.3mを測る。建物の方位はN 7°Wである。竪穴式住居跡 S H 216と重複するが、建物柱穴掘形が住居跡の埋土を切っている。

掘立柱建物跡 S B 615 調査中央部から検出した掘立柱の建物跡である。東西棟の総柱建物であり、東西2間(4.2m)×南北2間(3.6m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は、東西2.1m、南北が1.5m等間を測る。柱穴掘形は大多数が円形で、直径約0.5mの規模を測る。掘形内に残る柱痕は、直径0.2~0.3mを測る。建物の方位はN 7°Wである。

掘立柱建物跡 S B 709 調査地北西部から検出した掘立柱の建物跡である。東西棟の建物跡であり、東西5間(8.1m)×南北2間(5.1m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は、東西の桁行のうち東端1間分が約0.9mと短いが、ほかはほぼ1.8m等間である。南北の梁間は北側1間が3m、南側1間が2.1mを測る。柱穴掘形は円形小さく、直径0.2mを測る。深さは0.1m未満である。掘形埋土は暗緑灰色土である。建物の方位はN 6°Wである。中世の建物跡と考えられる。

掘立柱建物跡 S B 710 調査地北西部から検出した掘立柱の建物跡である。南北棟の建物跡であり、東西1間(1.2m)×南北3間(3.5m)の規模を測る。柱穴掘形心々間は、南北桁行が1.1~1.4mの間でばらつきがみられ、一定しない。柱穴掘形は円形で小さく、直径0.2mを測る。深さは0.1m未満である。掘形埋土は暗緑灰色土である。建物の方位はN 6°Wである。S B 709と同時期と考えられる。

3)土坑

土坑 S K 214 調査地中央部から検出した方形の土坑である。一辺2.2~2.5m、深さ0.5mの規模を測る。土坑は四辺から掘り鉢状に掘り下げられ、狭まった土坑底はほぼ平らである。底面と斜面部から須恵器蓋などが出土している。方位はN 6°Eである。土坑はS H 219の北東隅部を切るが、土坑の中央から北東はS K 630707と重複し、大規模に壊されている。

土坑 S K 217 調査地中央西部、S B 709と重複して検出した方形土坑である。一辺約1.8m、深さ0.1mの浅い土坑である。埋土は暗緑灰色土である。埋土・遺物・検出位置などから、S B 709に伴う土坑とみられる。

土坑 S K 526 調査地南西部で検出した土坑である。S B 499と重複するが、建物柱穴と切り合い関係にはない。土坑は長方形で、長さ1.7m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は暗灰褐色土であり、完形の黒色土器碗数点を含む遺物が出土している。主軸方位はN 1°Eである。木棺痕

跡は確認できないが、墓の可能性が高い。

土坑 S K 566 調査地中央東部で検出した土坑であり、S H 216の西側に位置する。土坑 S K 567と重複し、切り勝っている。土坑は整った方形を呈し、一辺約1.3m、深さ0.2mの規模を測る。土坑の底面は水平ではなく、周囲から中央にかけてやや窪む。埋土中からは、奈良時代の須恵器・土師器が出土した。須恵器は完形品ではないが、蓋・杯Bの大型破片が含まれている。

土坑 S K 567 S K 566には東壁側を壊され、S K 568には切り勝つ関係にある土坑である。土坑は方形で、一辺は0.6×0.8mを測る。深さは約0.5mと比較的深い。この土坑も比較的多くの遺物が出土している。

土坑 S K 568 楕円に近い方形土坑であり、南東壁の一部がS K 567によって壊されている。長さ1.6m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。主軸はN43°Wである。土坑は南西壁側が2段に掘り下がるのに対し、ほかの3面は単純に掘り下げられている。

土坑 S K 630707 調査地中央部にあってS K 214と大きく重複し、切り勝つ土坑である。平面形は長楕円形で、長さ3.1m、幅1.4mを測る。土坑底は2段に掘り下げられ、1段目は舟底状に壁面が緩やかに立ち上がる。1段目土坑底の中央部分は、長さ1.4m、幅0.9mで楕円形に再度掘り下げられている。1段目土坑底まで0.5m、2段目の底面まではさらに0.3m近く下る。2段目の底面はほぼ水平に近い。埋土中には多くの土器破片が含まれており、特に下部壁面付近から大型の須恵器破片が出土している。切り合い関係にあるS K 214と、主軸方位はN6°Eで同一である。2段に下る形状や、共にほぼ中心部が重複する位置関係から、S K 214と何らかの関連性があるとみられる。S K 214に柱が存在したと仮定した場合、S K 630707は柱抜き取り穴とも考えられ、両土坑の断面観察を行ったがS K 214を柱穴とする確証は得られていない。

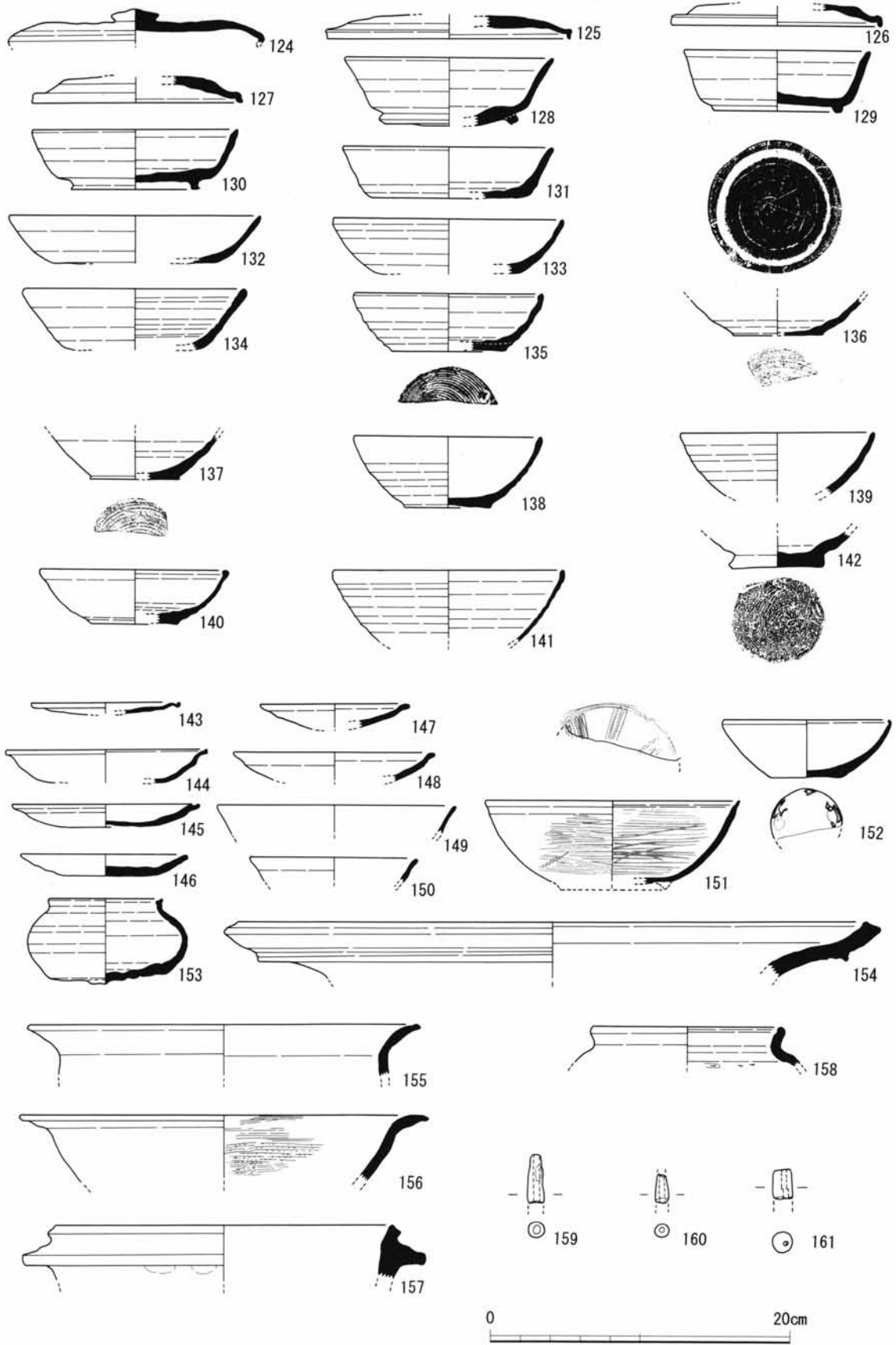
この遺構には、調査時に遺構番号が重複して付けられていたために、概報作成の最終段階まで、この土坑の出土遺物と第6トレンチS H 630出土遺物が混じっていることに気付かなかった。そのため、この土坑の出土遺物の一部を第6トレンチの遺物とともに提示するような混乱が生じた。今後の混乱を避けるため、今回の報告では、重複した遺構番号を続けたS K 630707を遺構番号とした。

その他の土坑 調査地中央と南端付近からいくつかの土坑(484・494・496)を検出している。平面形は、0.7～1m規模の方形もしくは楕円形の土坑である。多くの土坑が0.1mと浅いものであるが、S K 494は0.6mと深い。ほとんど遺物の出土が無いことから、時期・性格などは不明である。

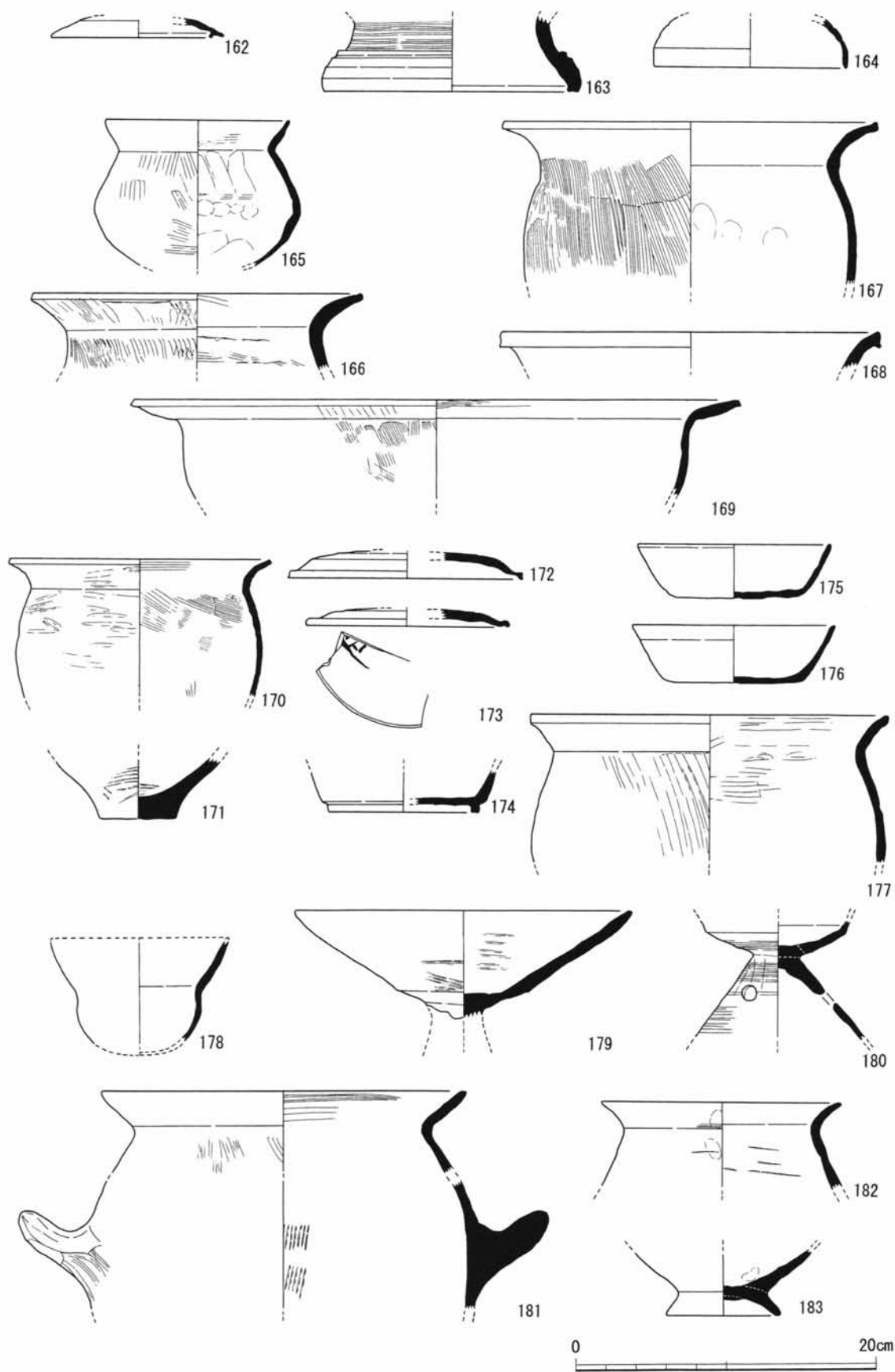
(竹原一彦)

付表2 第3トレンチピット出土遺物一覧表

No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考
124	SP506		131	SP619		138	SP487		145	SP596		152	SP522	SB499	159	SP594	
125	SP619		132	SP562		139	SP497	SB499	146	SP505		153	SP594		160	SP484	
126	SP527		133	SP482		140	SP636		147	SP636		154	SP624		161	SP492	
127	SP483	SB472	134	SP554		141	SP621		148	SP552		155	SP583		238	SP551	
128	SP584		135	SP552		142	SP570		149	SP497	SB499	156	SP・a		239	SP521	SB499
129	SP506		136	SP497	SB499	143	SP497	SB499	150	SP515		157	SP501		240	SP521	SB499
130	SP509		137	SP497	SB499	144	SP・c		151	SP527		158	SP515				



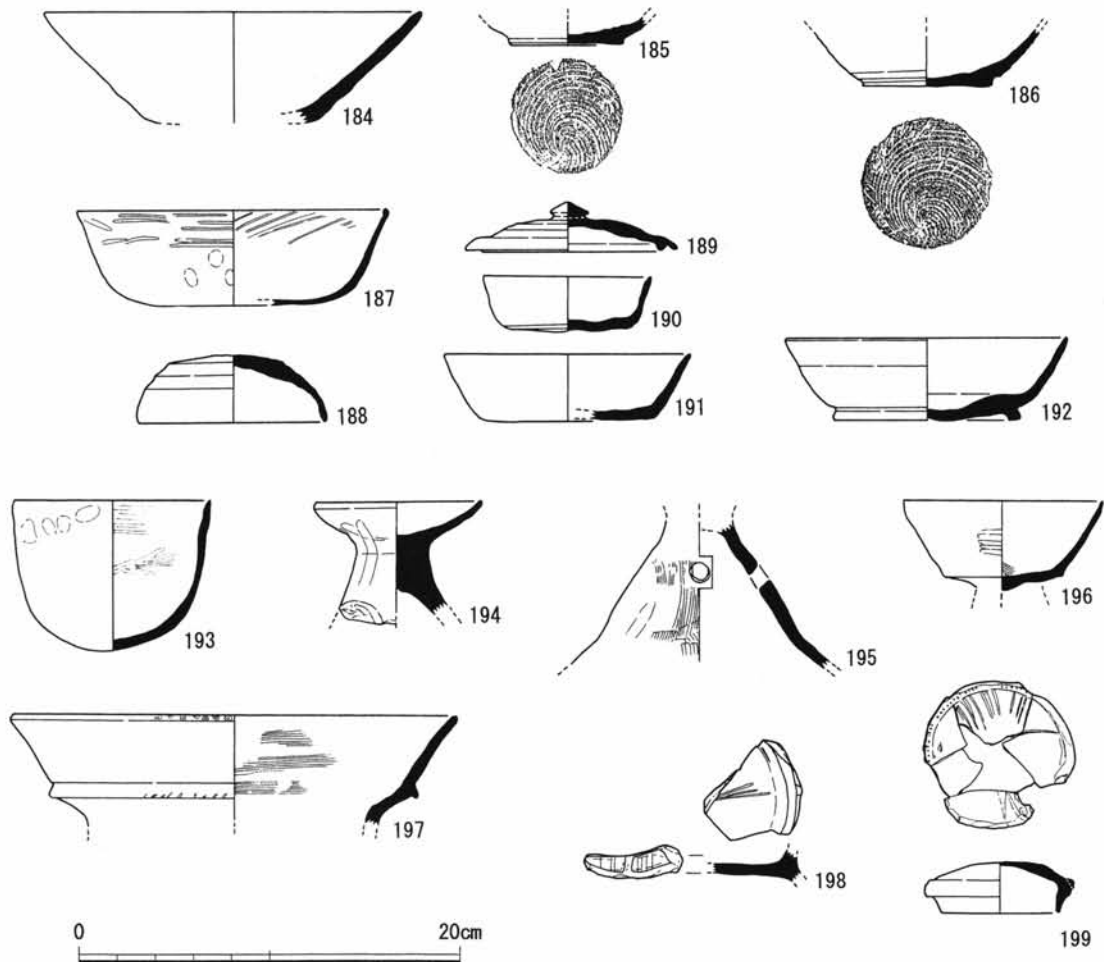
第27図 第3トレンチピット出土遺物実測図



第28図 第3 トレンチ 竪穴式住居跡 S H 205・207～212出土遺物実測図

(2) 出土遺物

ピット(124~161) 124~127は須恵器杯蓋、128~130は須恵器杯である。127は焼成がやや甘く、灰白色を呈する。131~135は須恵器杯である。135の底部は糸切り、ほかはヘラ切りである。132・133・135は焼成がやや甘い。136~141は須恵器碗である。底部が残っているものでは、136・137が糸切りで、138・140がヘラ切りである。142は回転台土師器碗である。橙色系の色調で、底部は回転糸切りである。143~145は土師器皿である。いずれも「て」字状口縁をもつ。146は回転台土師器小皿である。底部はヘラ切りである。147・148は緑釉陶器皿、149・150は緑釉陶器碗である。やや軟質の胎土で淡黄緑色の釉が掛かる。148は硬質の胎土で淡緑色の釉が掛かる。149は軟質の胎土に濃緑色の釉が掛かるが、内面の釉薬はほとんど剥離している。150は硬質の胎土に暗緑色の釉が掛かる。149以外は篠窯産であろう。151は黒色土器B類碗である。内外面とも密なヘラミガキが施され、見込みには密なジグザク状暗文を3方向に施す。152は越州窯系青磁碗である。口縁端部は内湾し、丸く収める。平高台で全面に施釉され、底部外縁に重ね焼きの目跡が残るほか、体部外面にも砂が付着する。153は須恵器壺である。直立する短い口縁部をもつ。底部はヘラ切りで特に調整を施さない。154は須恵器甕の口縁部と思われる。外面に断面三角形の突帯を作り出している。155は土師器甕である。胎土に赤茶色のクサリ礫を多く含む。



第29図 第3トレンチ竪穴式住居跡S H215・218・626出土遺物実測図

156は土師器鍋である。多量の礫を含む胎土で、灰白色系の色調を呈する。157は土師器羽釜である。厚い鏝と短い口縁部をもつ。158は土師器壺である。短く立ち上がる口縁部の内端部はやや内側に丸く終わる。159・160は土錘である。胎土は精良である。161は碧玉製管玉である。

S H 205(162) 須恵器杯蓋である。薄手でよく焼締っている。このほか、ソケット状の鉄製品(531)が出土している。

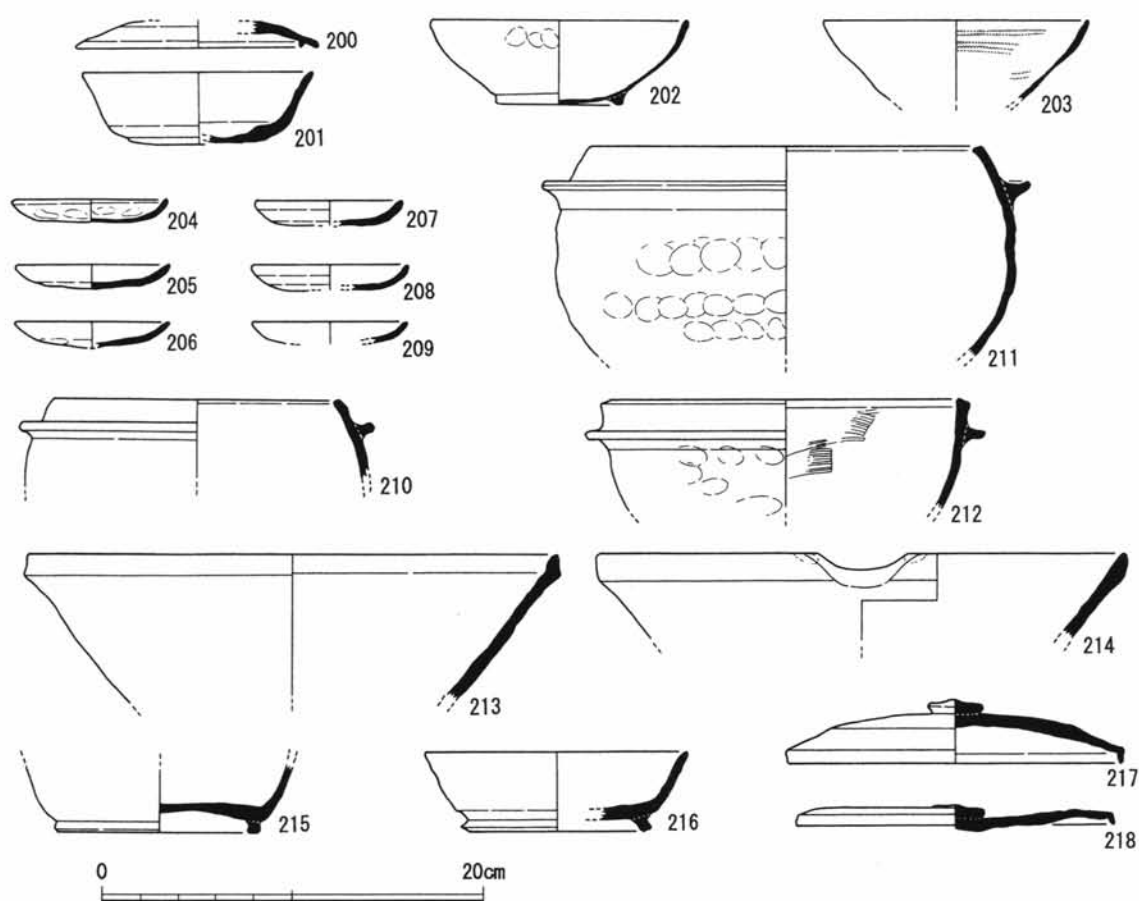
S H 207(163~169) 163は須恵器の器台の脚部である。164は須恵器杯蓋である。焼成が甘く、灰白色を呈する。165~167・377は土師器甕である。165の外面上半にはタタキ痕跡が残る。377は外面に縦方向のハケメが強く施される。168は須恵器甕である。焼成が甘く、器面は灰白色、断面の中央部は橙色を呈する。169は土師器鍋である。

S H 208(170・171) 170・171は弥生土器甕である。同一個体の可能性が高い。

S H 209(172~177) 172・173は須恵器杯蓋である。173の内面には墨書があるが判読できない。174~176は須恵器杯である。177は土師器甕である。5mm程度の角礫が多く含まれる。

S H 210(178~180) 178は小型丸底鉢である。磨滅が著しく、調整は観察できない。179は土師器高杯である。外面にはタタキの痕跡が認められる。180は小型器台である。外面はていねいなヘラミガキが施される。

S H 211(181) 土師器甕である。口縁部の破片と把手をもつ体部の破片があり、接点はないが、



第30図 第3トレンチ土坑S K 214・217・557・630707、竪穴式住居跡S H 508出土遺物実測図

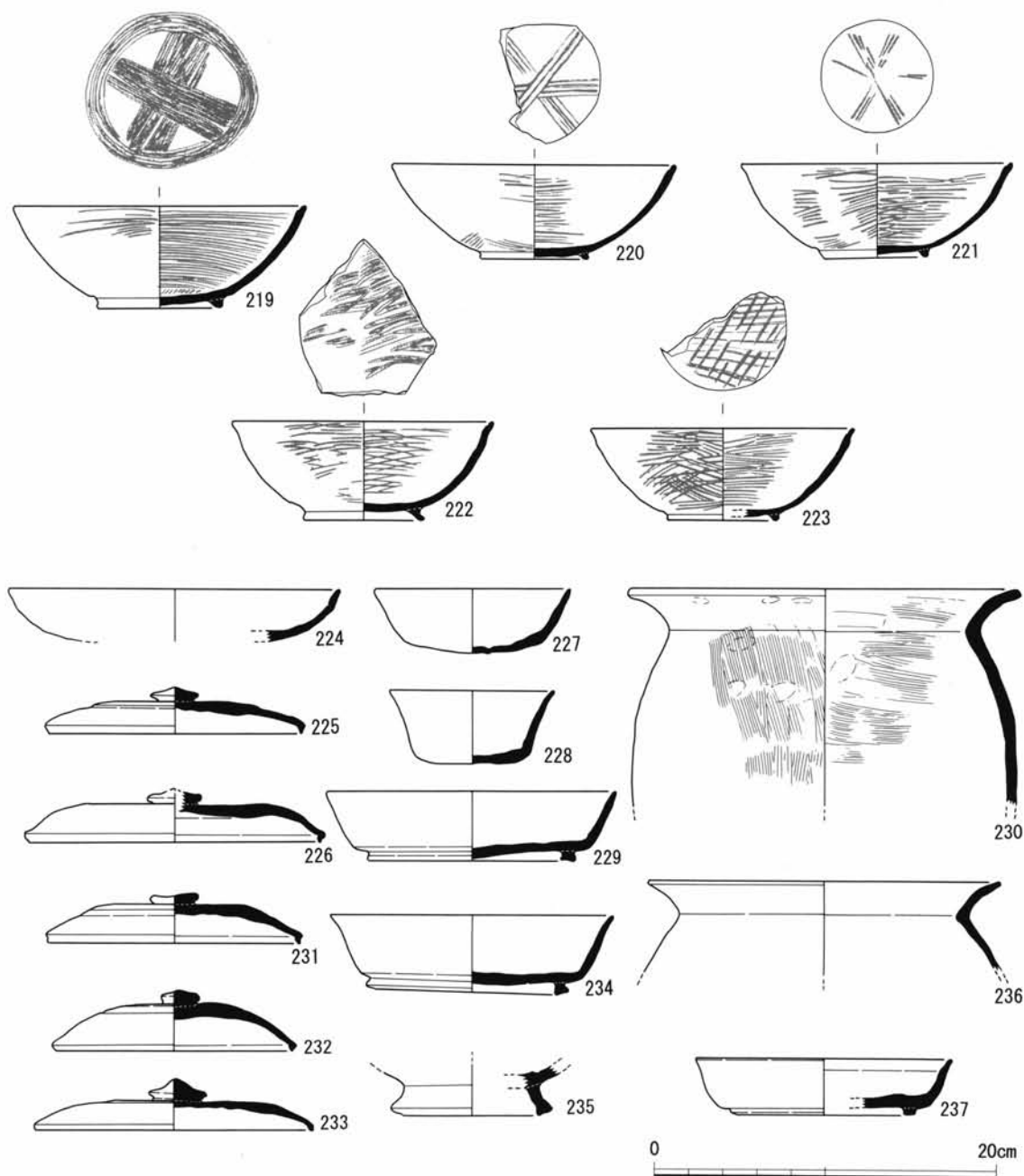
胎土や焼成共通することから、同一個体と思われる。

S H212(182・183) 182は土師器甕である。内面はケズリ調整が施される。183は土師器鉢である。

S H215(184~186) 184は土師器高杯である。表面は磨滅が著しい。185・186は須恵器椀である。精良な胎土で、色調は淡灰色を呈する。

S H218(187~192) 187は土師器杯である。内面には暗文、外面にはヘラミガキが施される。188・189は須恵器杯蓋である。190・192は須恵器杯である。192は底部が高台よりも突出する。

S H626(193~199) 193は土師器鉢である。土師器小型器台である。195・196は土師器高杯である。



第31図 第3トレンチ土坑S K 526・566・568、溝S D604出土遺物実測図

ある。196は外面の全面に横方向のヘラミガキが施される。197は二重口縁壺口縁部である。口縁端面には円形の刺突文、外面に刻み目が施される。198は土師器器台である。外面には棒状浮文が貼られ、縦方向のヘラミガキが施される。199は土師器蓋である。天井部の中心から放射状にヘラミガキが施され、外縁には刺突文がめぐらされる。198・199は共通する精良な胎土で、赤茶色を呈する。

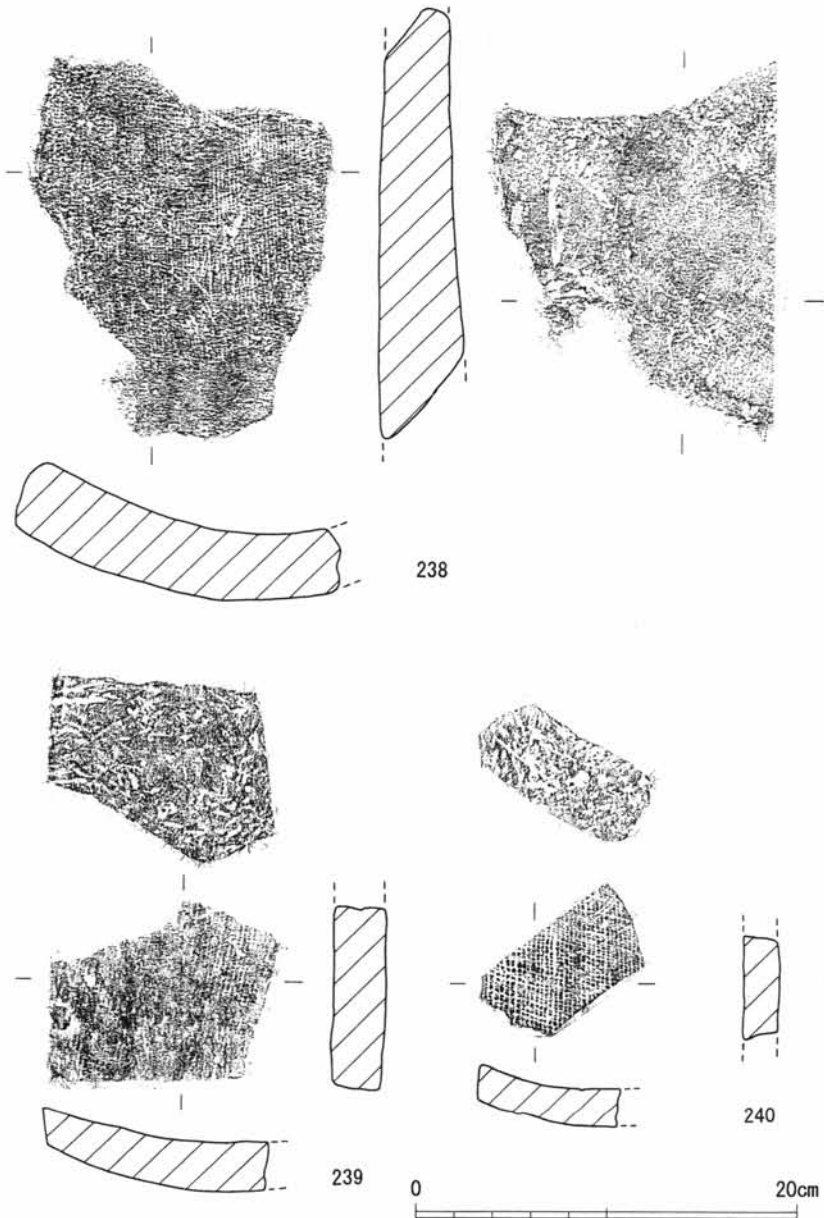
S K 214(200・201) 200は須恵器杯蓋、201は須恵器杯である。

S K 217(202～214) 202・203は瓦器碗である。202は磨滅が著しくヘラミガキは観察できない。203は内面に粗いヘラミガキが施される。204～209は土師器小皿である。口縁端部に面取りがみられるものと面取りの退化したのがみられる。210～212は瓦質土器羽釜である。210は炭素が吸着しておらず、淡灰色を呈する。口縁が内湾する器形の210・211は、砂粒を多量に含んだ粗い胎土をもち、口縁が直立する212は精良な胎土をもつ。212は鏝の破断面にも煤が付着している。213・214は東播系須恵器鉢である。213は焼成がやや甘く、灰白色を呈する。このほか、緑釉陶器片が出土している。

S H 508(215) 須恵器杯である。外面に他の破片が釉着している。

S K 557(216) 須恵器杯である。底部外面にヘラケズリを施す。

S K 630707(217・218・496～498・502) 217・218は須恵器杯蓋である。496は須恵器杯蓋である。外面の全面に自然釉が付着する。497・498は須恵器杯である。497は焼成が甘い。このほか、須恵器高杯片が



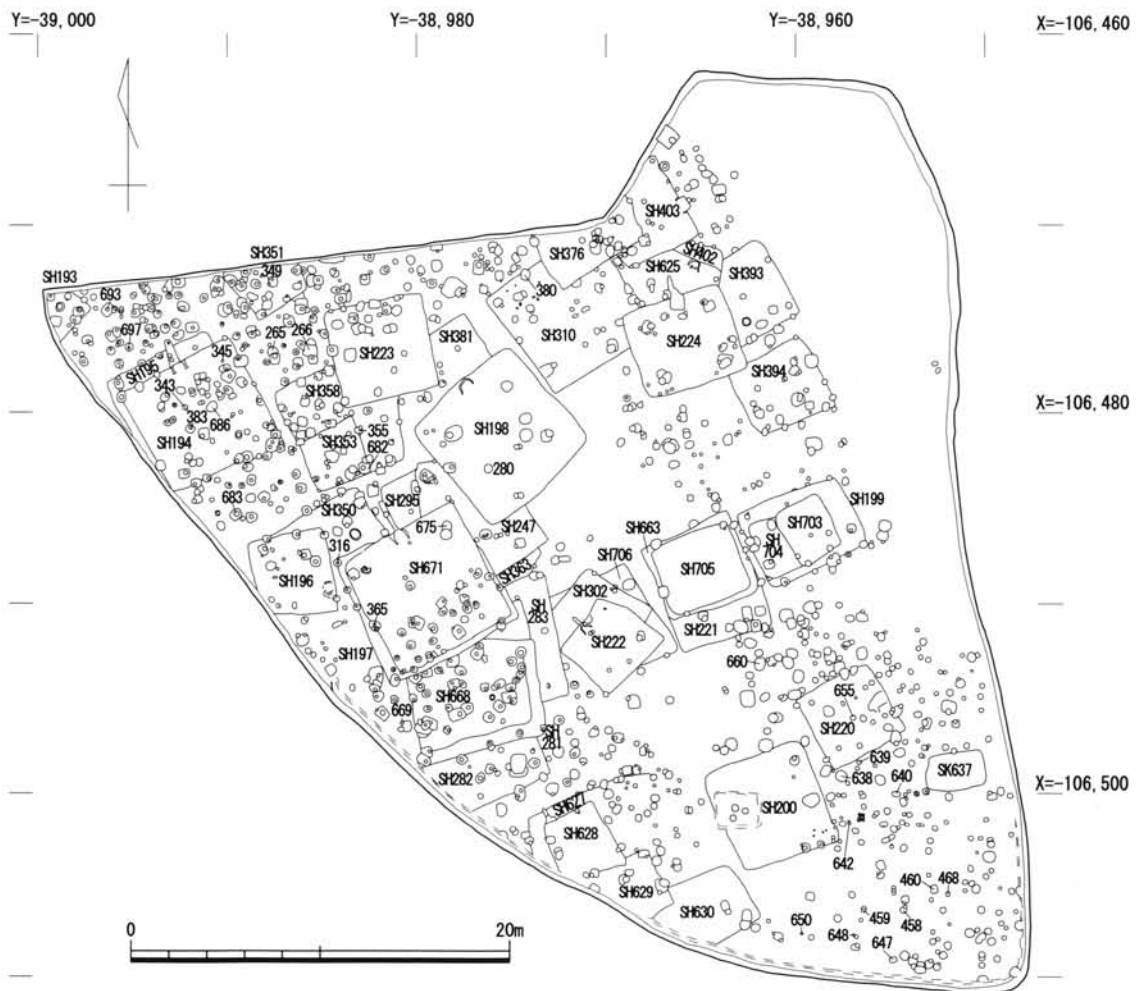
第32図 第3トレンチピット出土瓦実測図

出土している。502は土師器高杯である。脚台部は11面に面取りが施される。赤橙色を呈する。

S X 526(219~223) 218~223は黒色土器B類碗である。内面はほとんど隙間のない密なヘラミガキが施され、外面は分割ヘラミガキが高台付近まで密に施される。見込みは平行に密なヘラミガキを施すもの、ジグザク状のヘラミガキを2または3方向に施すもの、やや隙間の開いたジグザク状のヘラミガキを2方向に重ねて格子状の暗文とするものがある。

S X 566(224~230) 224は須恵器皿である。瓦質焼成に近く、重ね焼きのため、外面は口縁部付近を除いて灰白色を呈する。225・226は須恵器杯蓋である。225の外面の約半分には自然釉が付着し、重ね焼きされた別個体の一部が釉着している。226には整形後に穴が開いたために粘土で補修した痕跡がある。227~229は須恵器杯である。227はやや焼成が甘く灰白色を呈するが、228は堅緻に焼け締まっている。230は土師器甕である。

S X 568(231~236) 231~233は須恵器杯蓋である。231は黒色細粒を多く含む特徴的な胎土で、外面の全面に自然釉が掛かる。234は須恵器杯である。外側に向かって張る幅広の高台が付けられている。235は須恵器壺である。脚部外面と内底面に自然釉が掛かる。236は土師器甕である。器面はかなり磨滅しているが、外面は縦方向のハケメが施されている。



第33図 第6トレンチ遺構配置図(S=1/400)

S D 604(237) 須
恵器杯である。焼成
は非常に堅緻である。

第3トレンチピッ
ト(238~240) いず
れも平瓦である。

3. 第6トレンチ の遺構と遺物

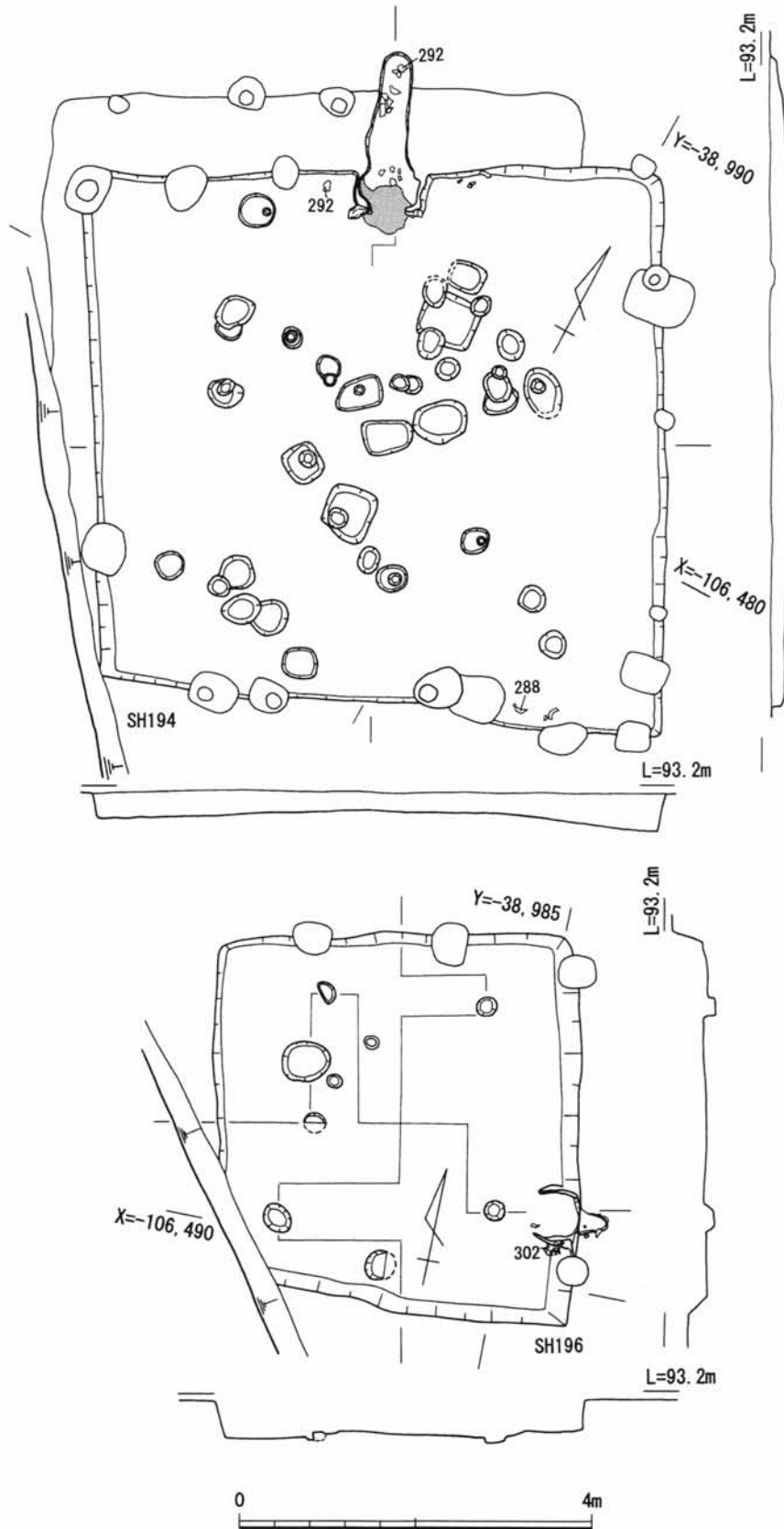
(1) 検出遺構

第6トレンチは調
査対象地の西端に位
置し、東西、南北と
もに約50mの扇形を
した調査区である。
第6トレンチでは調
査区の北東部を除い
て多数の遺構を検出
した。特に、竪穴式
住居跡は重複して多
数検出した。

1) 竪穴式住居跡

竪穴式住居跡は合
計43基検出した。そ
の大半は北からやや
東に軸をもつもの
で、調査区北東部の
遺構の分布する範囲
と分布しない範囲の
境界線の方向に平行
して分布している。

竪穴式住居跡 S H
194 調査区北西部で
検出した。S H195と
重複し、その大半を



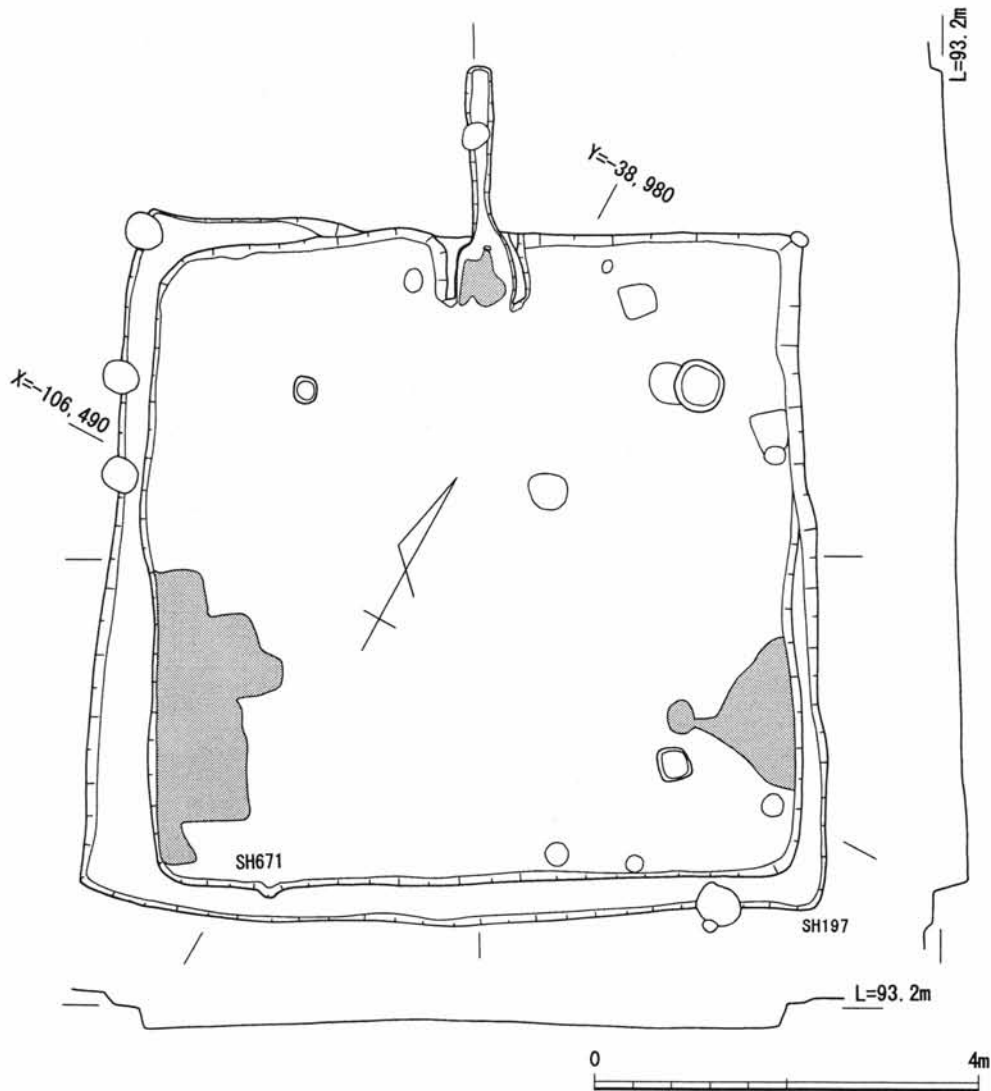
第34図 竪穴式住居跡 S H 194・196実測図(S=1/80)

壊している。長辺6.5m、短辺6.1m、深さ0.3mを測る。北辺中央部に竈が築かれる。竈の前面には立石が置かれている。竈とその周辺や住居跡南東部から土師器甕などが出土した。出土遺物は奈良時代後半のものと飛鳥時代以前のもので混在する。SH194によって壊されたSH195の遺物が混じっている可能性がある。

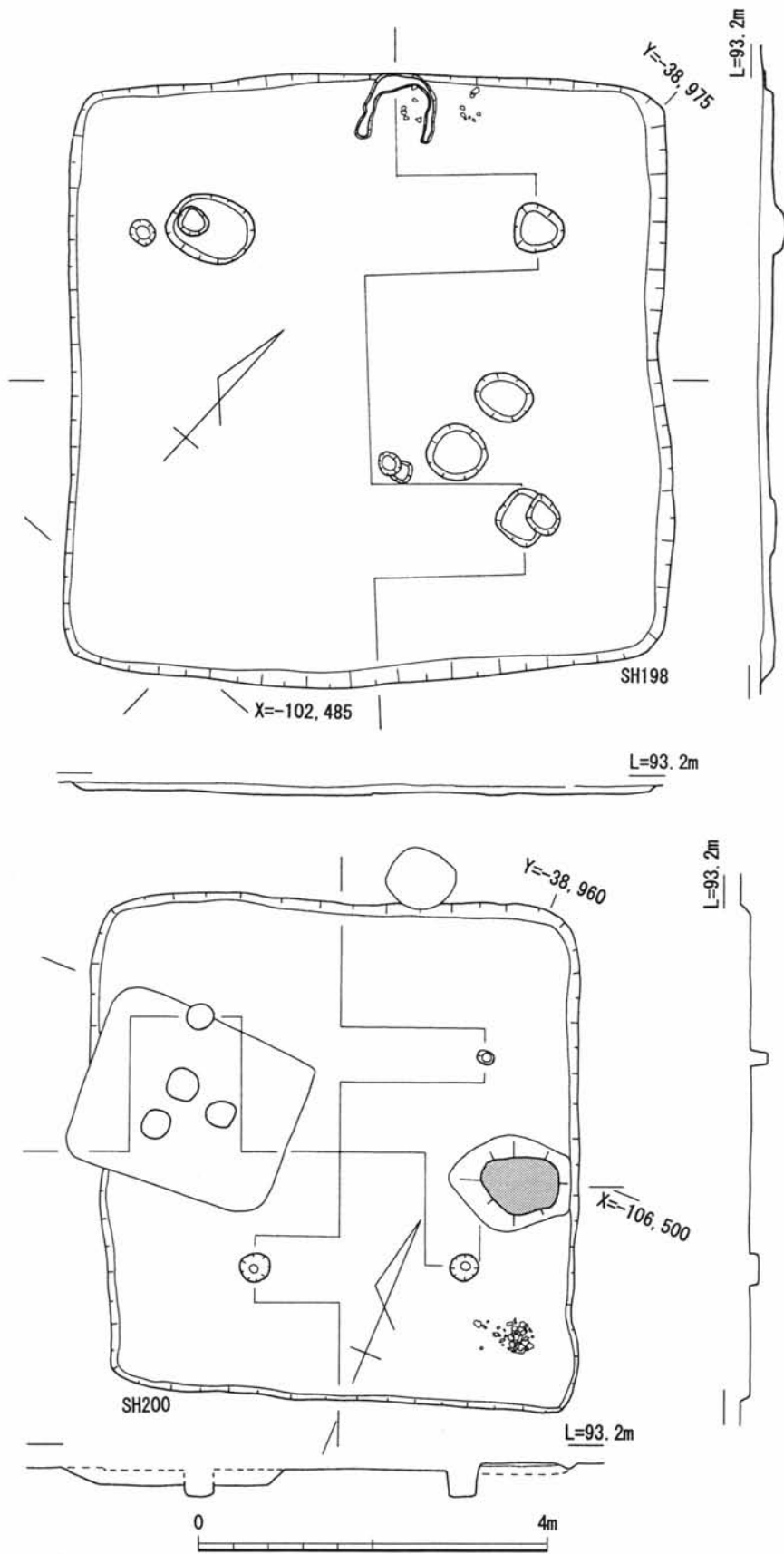
竪穴式住居跡SH196 調査区北西部で検出した。長辺4.4m、短辺4.1m、深さ0.4mを測る。南西隅は調査区外に及ぶ。支柱穴は4基からなる。東辺の南寄りで竈を検出し、竈付近で奈良時代前半の須恵器杯蓋などが出土した。

竪穴式住居跡SH197 調査区西部で検出した。一辺6.9m、深さ0.3mを測る。北辺の中央に長い煙道をもつ竈が造られている。床面の大半がSH671の埋土であり、支柱穴などは認定できなかった。出土遺物から、飛鳥時代から奈良時代前半の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡SH198 調査区北西部で検出した。長辺7.1m、短辺6.8m、深さ0.1mを測る。北辺中央に竈をもつ。支柱穴は3基を検出した。配置から、南西部にもう1基あったことが想定



第35図 竪穴式住居跡SH197・671実測図(S=1/80)



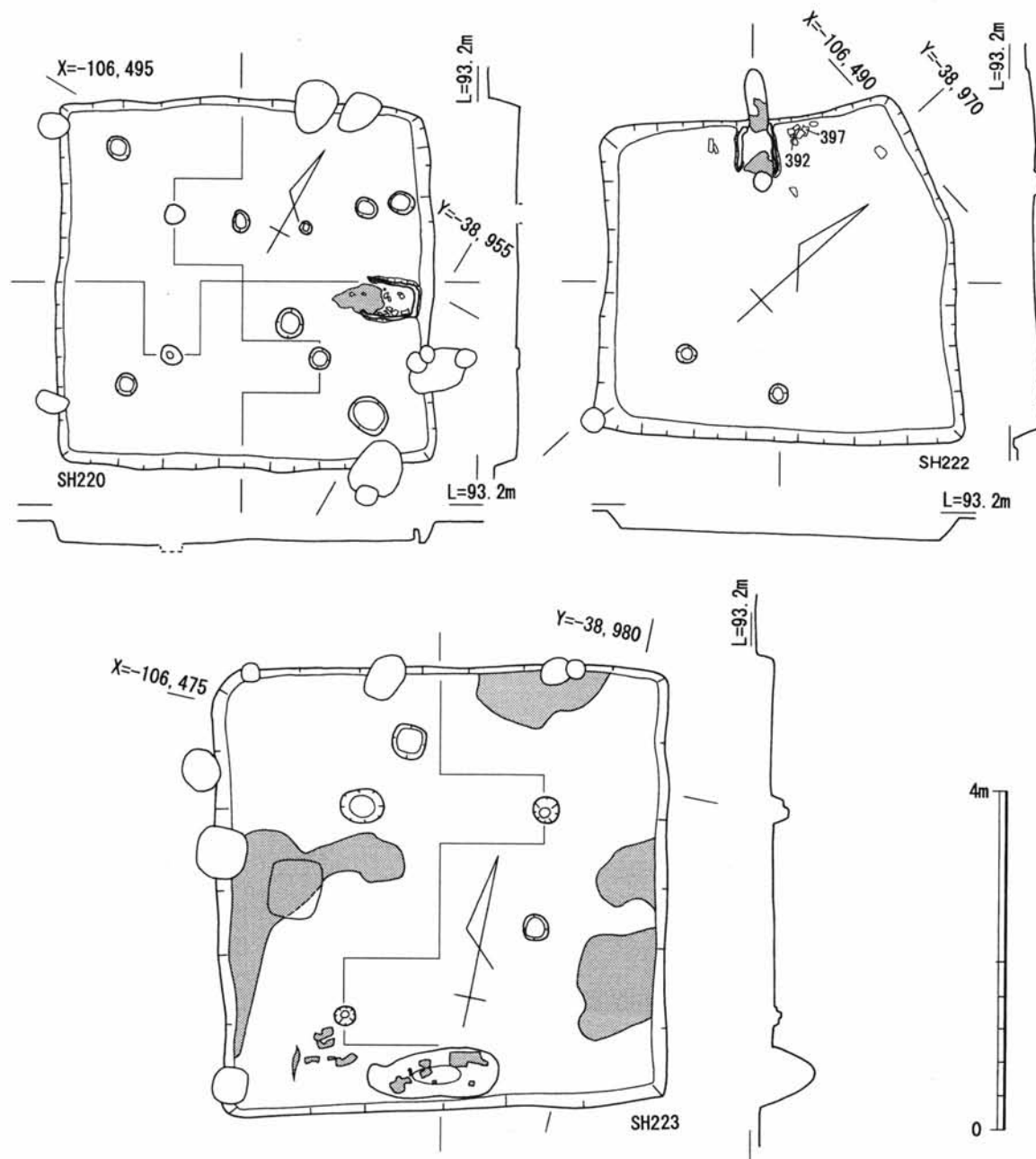
第36図 竪穴式住居跡 S H 198・200実測図 (S = 1/80)

されるが、検出できなかった。竈付近から土器が出土した。出土遺物は少ないが、古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 200 調査区南東部で検出した。長辺5.8m、短辺5.5m、深さ0.1mを測る。東辺中央部付近の床面が赤く焼け、周囲よりやや盛り上がっていた。支柱穴は4基からなる。古墳時代中期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 220 調査区南東部で検出した。一辺4.4m、深さ0.3mを測る。東辺の中央部に竈をもつ。竈焚口部付近の床面は焼けている。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 222 調査区中央部で検出した。平面形は台形を呈し、一辺3.5~4.2mを測り、深さは0.2mを測る。北西辺中央部に煙道をもつ竈が造られる。焚口と煙道の床面が焼けて



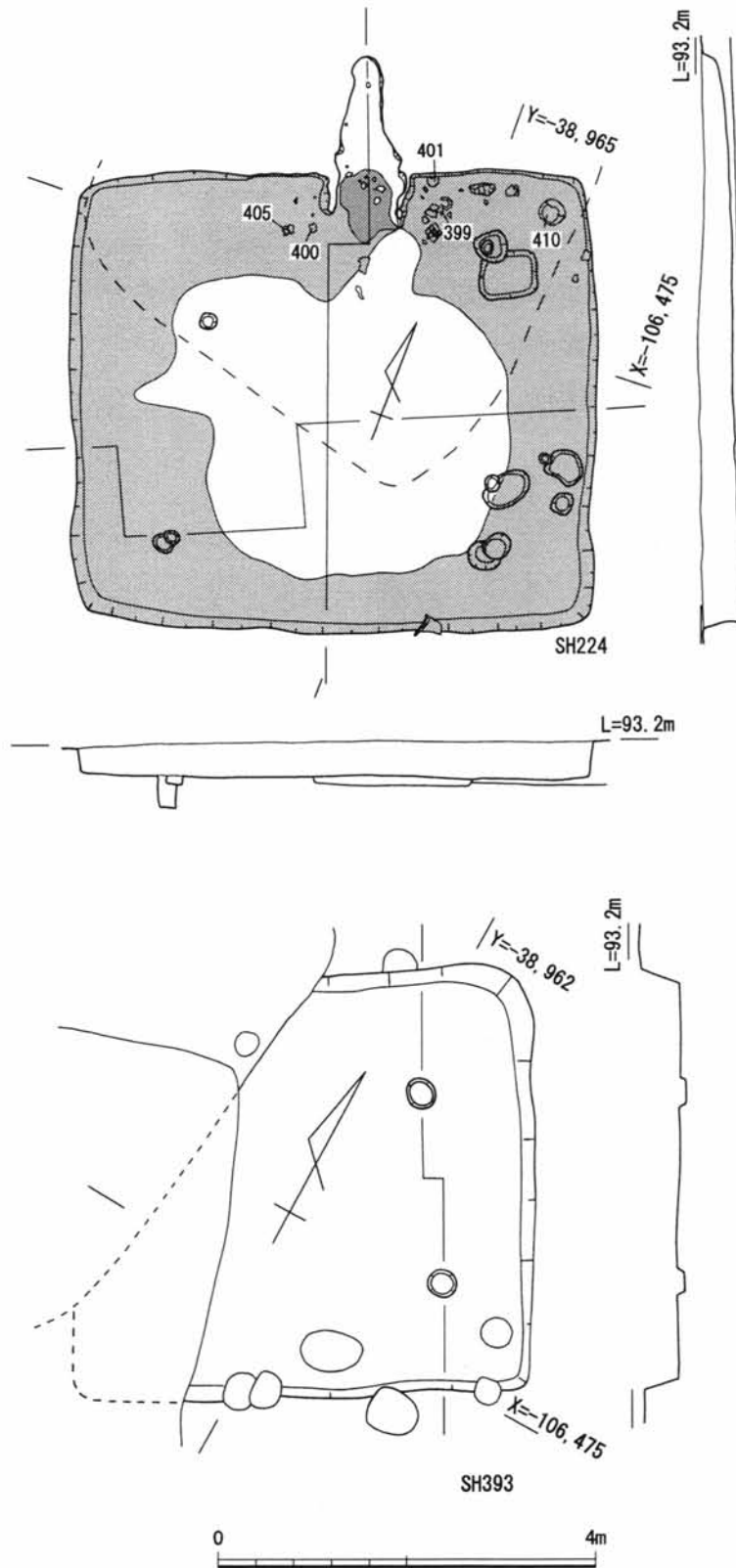
第37図 竪穴式住居跡 S H 220・222・223実測図(S=1/80)

いる。竈付近から古墳時代後期の遺物が出土した。主柱穴は明確に検出できなかった。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 223
調査区北西部で検出した。長辺5.3m、短辺5.1mのほぼ正方形で、深さは0.2mを測る。住居跡各辺の壁際に焼土が広がり、南辺では焼土の下から楕円形の土坑を検出した。奈良時代前半の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 224
調査区北東部で検出した。長辺5.5m、短辺5.0m、深さ0.3mを測る。北辺の中央部で煙道をもつ竈を検出した。焚口付近が赤く焼けている。この住居は焼失したらしく、各辺の壁際から1～2mの範囲で焼土が堆積していた。竈付近から飛鳥時代の土器が多数出土した。住居跡北半部の床面で、S H 402を検出した。

竪穴式住居跡 S H 393
調査区北東部で検出した。南北4.5mを測る。東西長は、西辺をS H 224で壊されているため、不明である。深さは、0.4mを測る。主柱穴は2基を検出した。古墳時代後期の住居跡と考え



第38図 竪穴式住居跡 S H 224・393実測図 (S = 1/80)

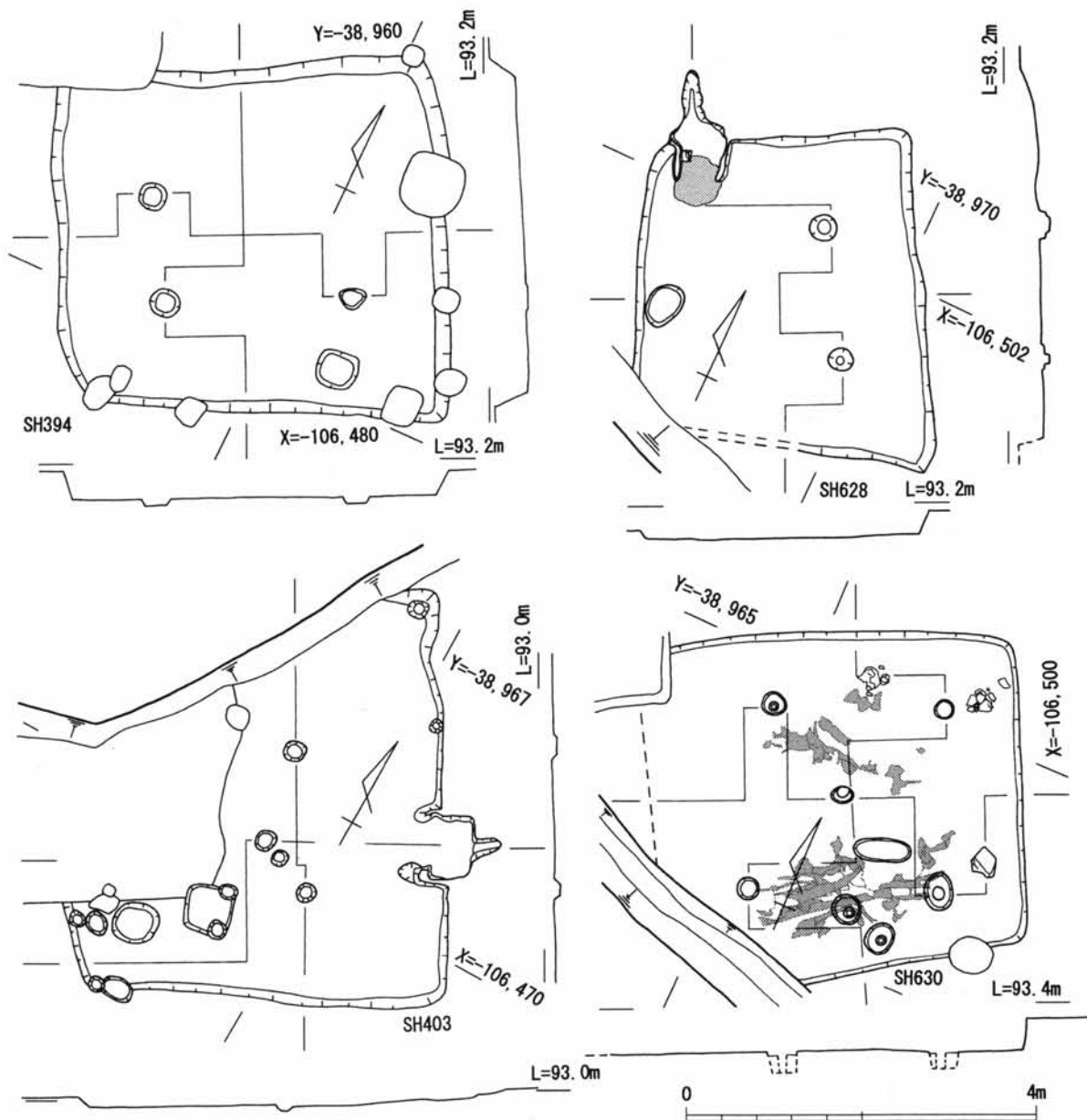
られる。

竪穴式住居跡 S H 394 調査区北東部で検出した。長辺4.5m、短辺4.1m、深さ0.4mを測る。北西隅を S H 224で壊されている。支柱穴は3基を検出した。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 403 調査区北東部で検出した。長辺4.9m、短辺4.4m、深さ0.1mを測る。住居跡の北西部は S H 376で壊されている。東辺中央部で煙道をもつ竈を検出した。図化できる遺物はないが、須恵器甕の把手が出土している。

竪穴式住居跡 S H 628 調査区南西部で検出した。長辺3.9m、短辺3.3m、深さ0.1mを測る。北辺の西端で煙道をもつ竈を検出した。焚口付近は焼けている。支柱穴は2基を検出した。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 630 調査区南西部で検出した。一辺は3.9mを測るが、西部が調査区外にの



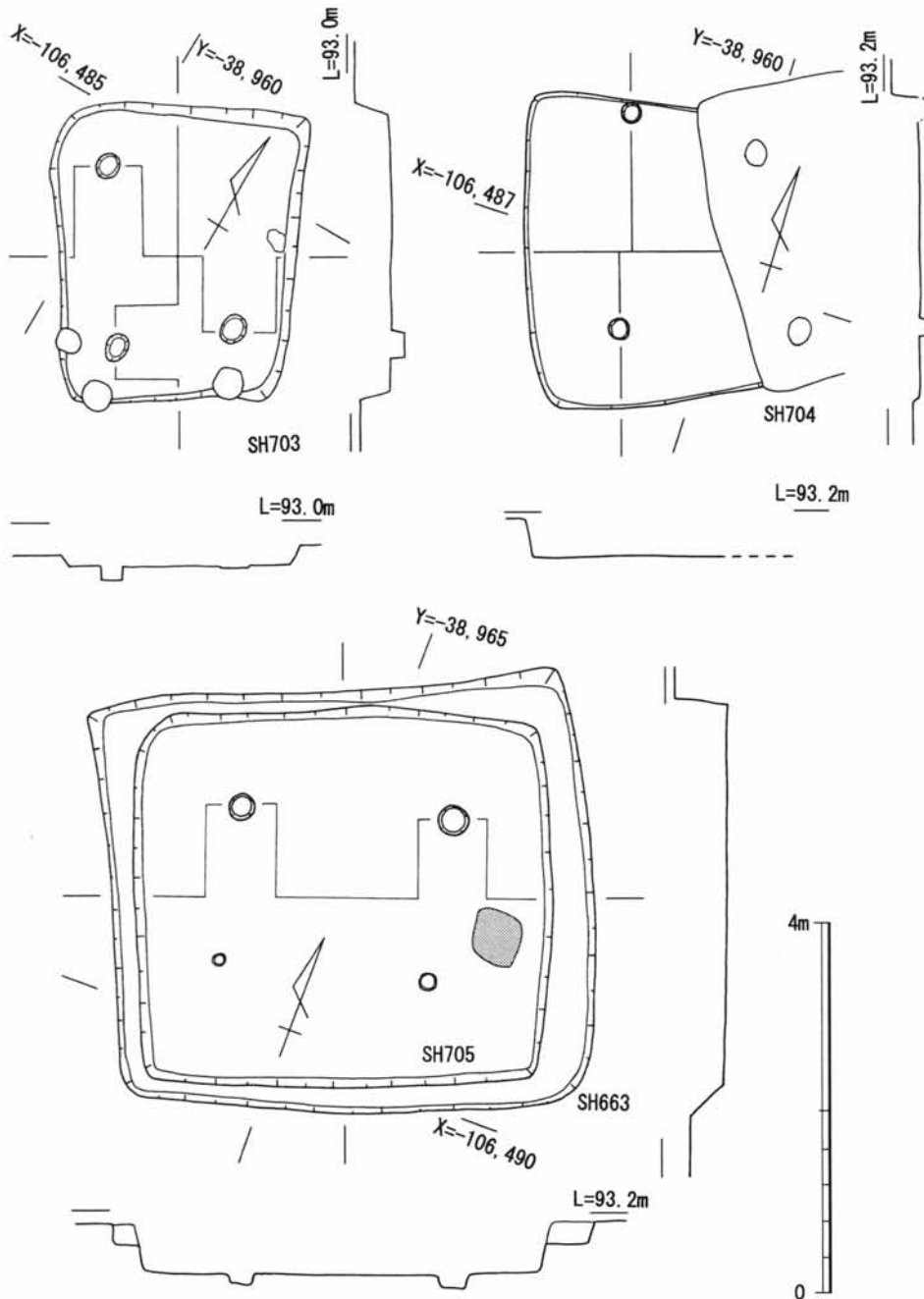
第39図 竪穴式住居跡 S H 394・628・403・630実測図 (S=1/80)

びるため、もう一辺の長さは不明である。深さは0.4mを測る。住居跡の南部と中央部に炭化物が堆積していた。焼失住居と思われる。主柱穴は4基からなる。古墳時代中期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H663 調査区中央部、S H221の床面で検出した。主柱穴などは不明である。古墳時代後期の住居跡と考えられる。

竪穴式住居跡 S H671 調査区西部のS H197の床面で検出した。一辺7.4m、深さ0.2mを測る。主柱穴は3基を検出した。配置から、南西部にもう1基あったことが想定されるが、検出できなかった。東西両辺の南寄りには焼土が広がっていた。出土遺物は少ない。

竪穴式住居跡 S H703 調査区東部、S H199の床面で検出した。長辺3.2m、短辺2.7mの小規



第40図 竪穴式住居跡 S H703・704・663・705実測図 (S=1/80)

模な住居跡で、深さは0.1mを測る。主柱穴は3基を検出した。出土遺物は少ない。

竪穴式住居跡 S H 704 調査区東部、S H 199の床面で検出した。一辺は3.4mを測るが、もう一辺はS H 703に壊されているため、不明である。深さは0.4mを測る。出土遺物はない。

竪穴式住居跡 S H 705 調査区中央部、S H 663の床面で検出した。長辺4.5m、短辺4.1m、深さ0.4mを測る。東辺中央部の床面で焼土を検出した。主柱穴は4基からなる。出土遺物はない。

(2) 出土遺物

ピット(241~278) 241~245は須恵器杯蓋である。242の外面には重ね焼きされた別個体の破片が付着している。246~249は須恵器杯である。248は白色粒を多く含むやや粗い胎土をもつ。250は須恵器高杯である。251は須恵器壺と思われる。脚部の外面に自然釉が付着する。252は須恵器壺である。焼成が甘く、瓦質焼成となっており、器面は暗灰色、断面は灰白色を呈する。253は須恵器甕である。外面の口縁部付近にタタキの痕跡が残る。254は須恵器甕の把手である。内面に青海波が認められる。

255~257は土師器皿である。255の口縁部は「て」字状口縁の退化したものである。258は土師器椀である。焼成が悪く、器面は乳橙色を呈するが、断面は暗灰色を呈する。259・260は回転台土師器椀である。259は底部を糸切りした後に、高台を貼り付けている。胎土には径5mm以上の角礫を少量含む。260は磨滅が著しいが、底部ヘラ切りと思われる。261~264は瓦器椀である。いずれも器面が磨滅し、ヘラミガキなどが一部に認められるのみである。265~268は土師器甕である。268は砂粒をあまり含まない胎土で、赤橙色を呈する。269は土師器の把手である。砂粒を多量に含む粗い胎土である。270は灰釉陶器の底部である。外面と内底面の一部に灰釉が掛かる。271は白磁皿である。272~278は土錘である。

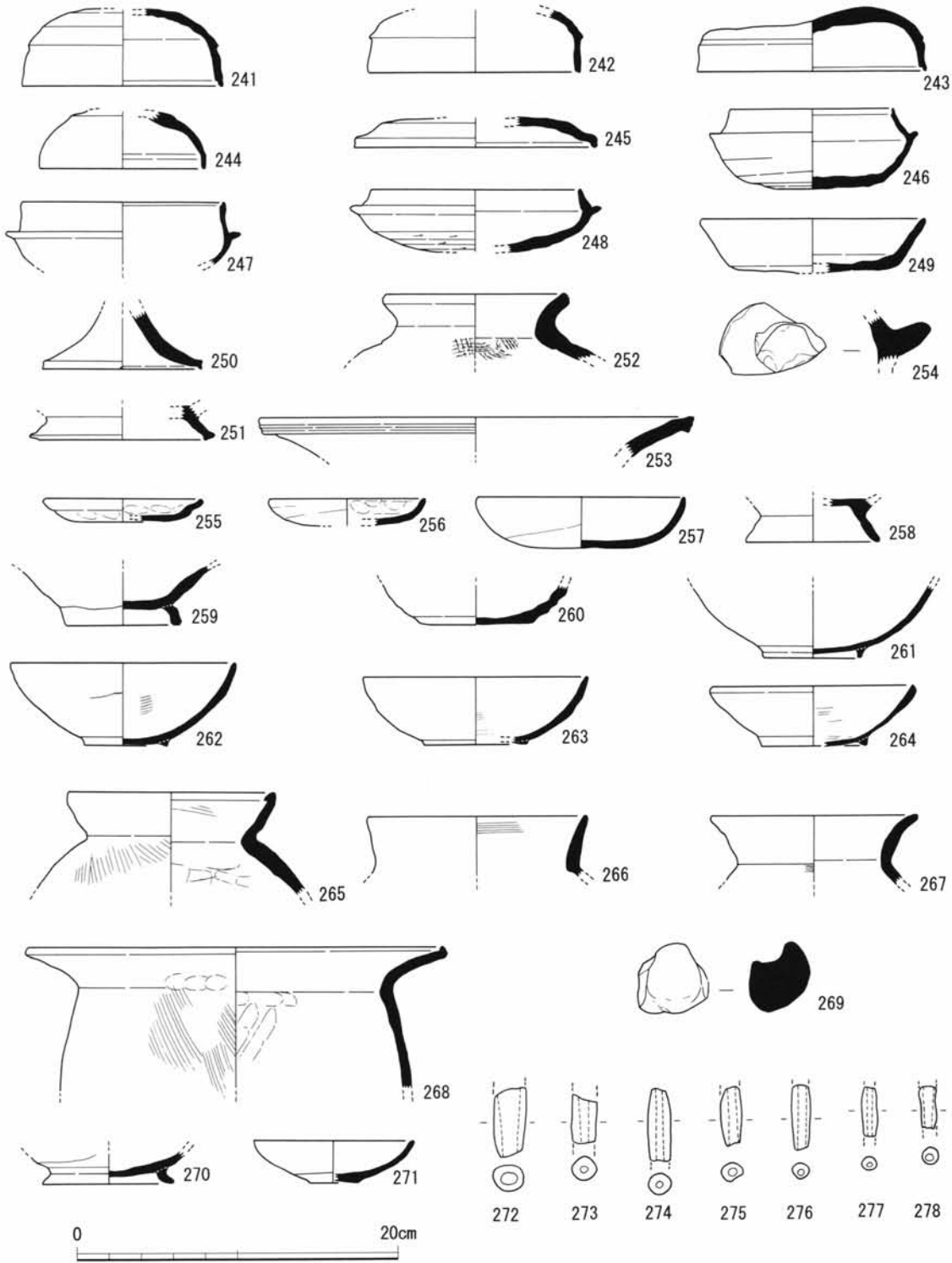
S H 193(279・280) 279は土師器甕である。280は土師器高杯である。胎土に砂粒を多く含み、赤茶色を呈する。このほか、土錘が出土している。

S H 194(281~297・299)、S H 195(298) 281~283は須恵器杯蓋である。281は精良な胎土をもち、淡灰色を呈する。284は砂粒を含むやや粗い胎土である。285~287は須恵器杯である。285は、やや砂っぽい胎土である。288~292は土師器甕である。293・294は土師器鍋である。289~292は砂粒を含むものの比較的細かな胎土で、289~291は灰茶色、292黄灰色を呈する。293・294は径3mm程度までの砂礫を多量に含む胎土で、黄橙色を呈する。295は土師器高杯である。内面にはハケメの後放射状の暗文が施され、外面はヘラミガキが施される。296~298は土錘である。296は胎土に砂粒をほとんど含まない。S H 194からは、このほか、須恵器甕、製塩土器片などが出土している。

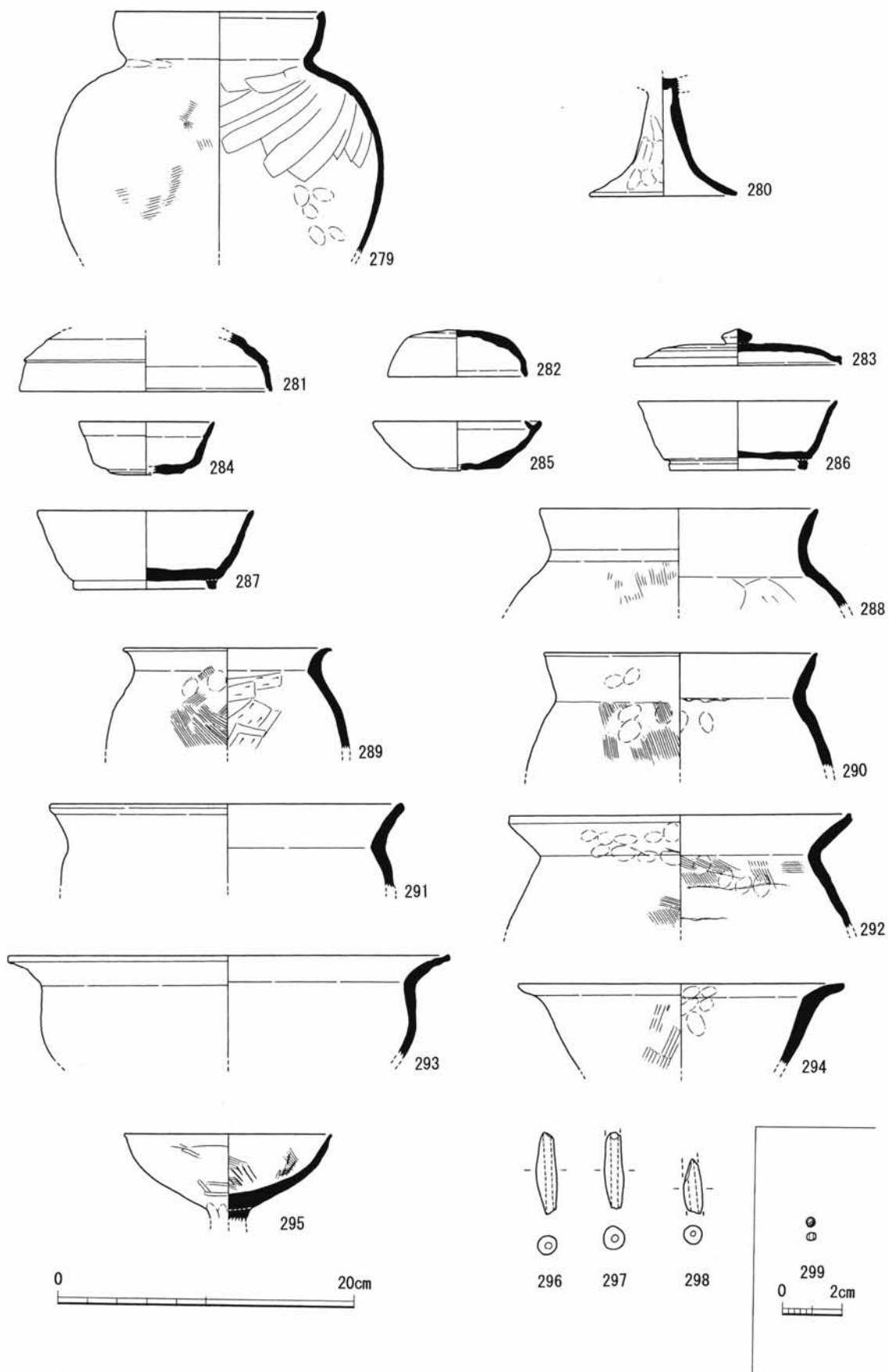
付表3 第6トレンチピット出土遺物一覧表

No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考	No.	遺構番号	備考
241	SP655		248	SP683		255	SP693		262	SP638		269	SP458		276	SP648	
242	SP280		249	SP631		256	SP468		263	SP638		270	SP459		277	SP343	
243	SP682		250	SP669		257	SP675		264	SP640		271	SP441		278	SP316	
244	SP686		251	SP459		258	SP458		265	SP349		272	SP265		279	SP193	
245	SP355		252	SP365		259	SP650		266	SP697		273	SP682		280	SP193	
246	SP642		253	SP647		260	SP460		267	SP380		274	SP682				
247	SP383		254	SP266		261	SP639		268	SP660		275	SP345				

S H196(300~317) 300~302は須恵器杯蓋である。301は焼成が甘く、灰白色を呈する。302は竈の外側に貼り付くように出土している。303~306は須恵器杯である。306には火櫓状の痕跡が認められる。307は須恵器壺である。底部外面は広い範囲にわたって回転ヘラケズリが施される。308は須恵器高杯、309は須恵器把手である。312~316は土師器甕である。いずれもクサリ礫などを含み乳灰色の色調を呈するが、310・313は煮炊により、外面上半部を中心に茶褐色を呈す



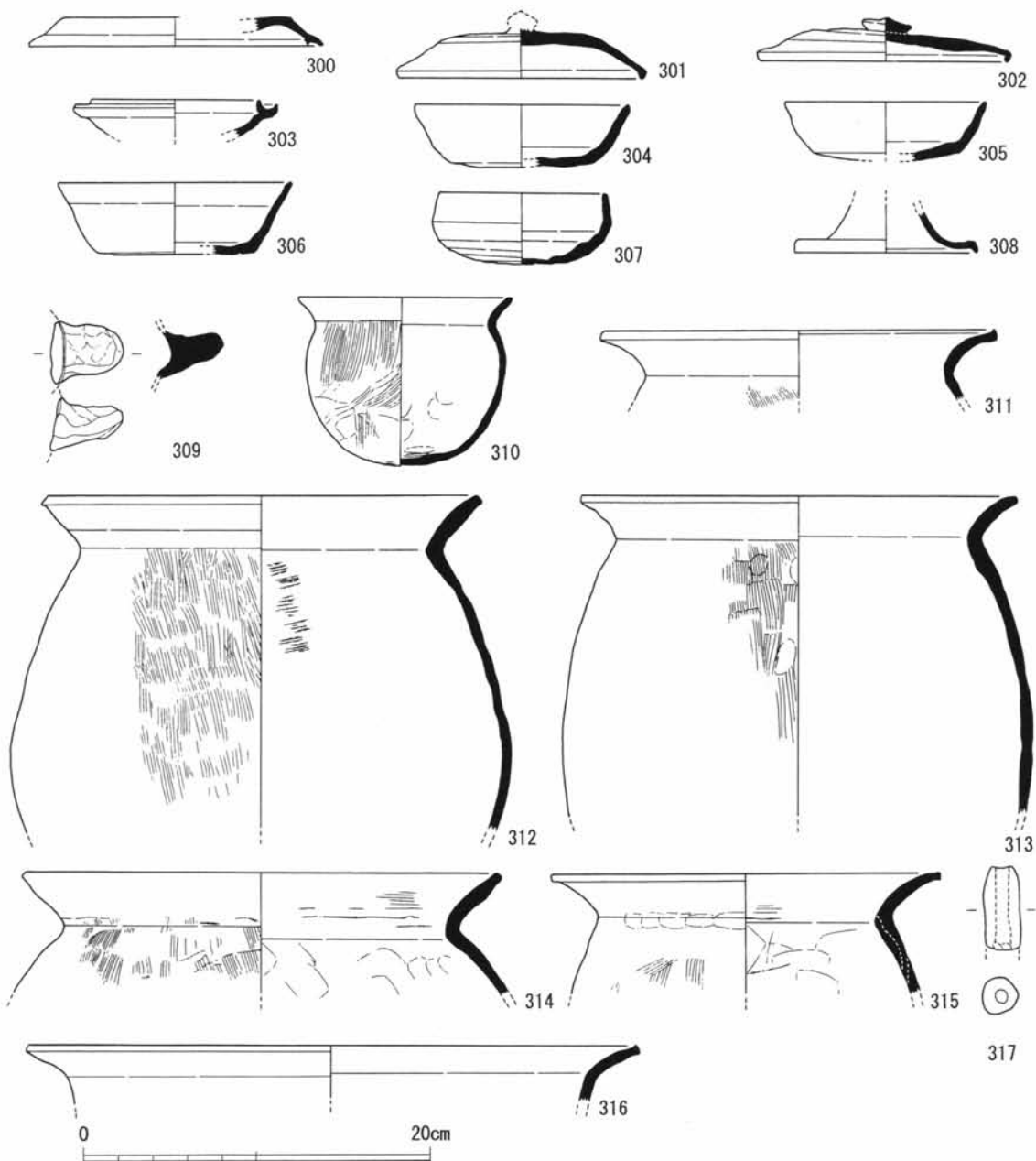
第41図 第6トレンチピット出土遺物



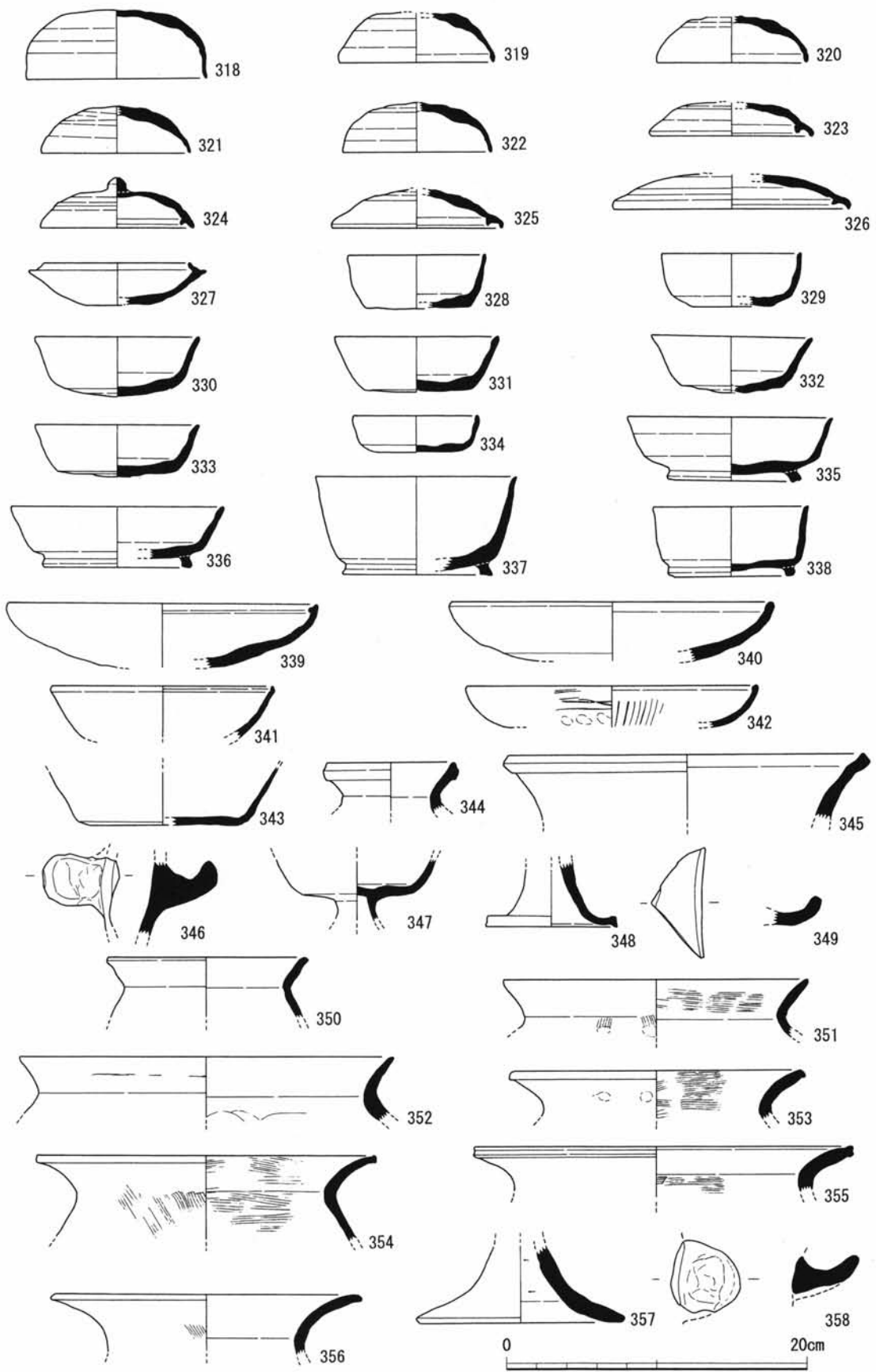
第42図 第6トレンチ竪穴式住居跡S H193・194出土遺物実測図

る。316は器表面に赤橙色の土をスリップ状に塗布した痕跡がみられる。317は土錘である。橙色～黄橙色を呈する。

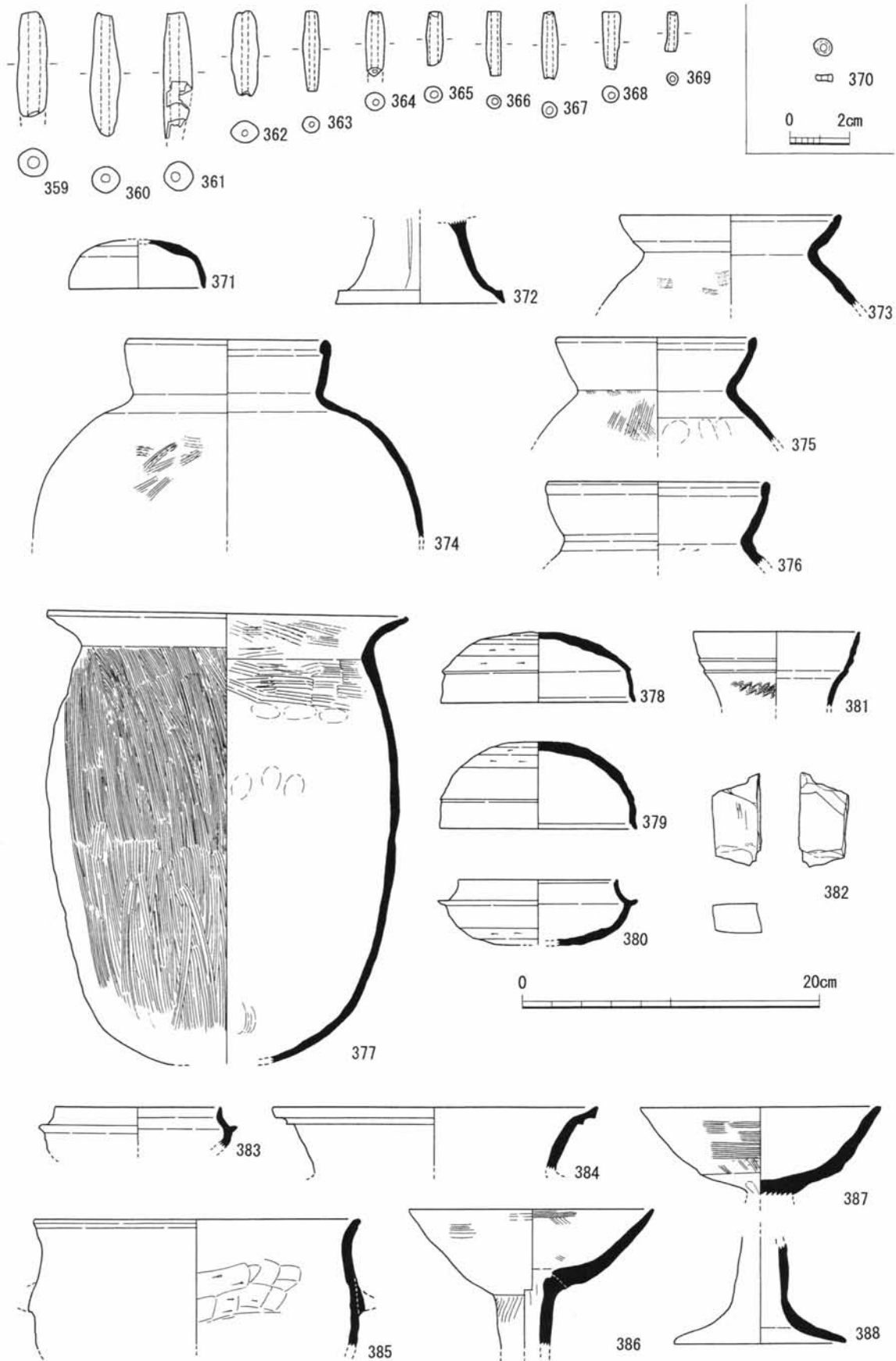
S H197(318～370) 318～326は須恵器杯蓋、327～338は須恵器杯である。325・327は黒色粒を多く含む胎土で外面の全面に自然釉が掛かる。330・333は焼成が甘く、灰白色を呈し、330の外面には火樗状の痕跡が残る。337は、火ぶくれが生じ、外面の一部に自然釉が掛かっている。339・340は須恵器皿である。340は瓦質焼成に近く、灰黒色を呈するが、外面の下半は重ね焼きにより灰白色を呈する。341は須恵器椀である。口縁内端部付近に沈線がめぐる。平安時代のもので、本来この住居跡に伴うものとは考えられない。342は土師器皿である。内面に放射状暗文、外面には横方向のヘラミガキが施される。343は回転台土師器杯としたが、焼成不良の須恵器か



第43図 第6トレンチ縦穴式住居跡S H196出土遺物実測図



第44図 第6トレンチ堅穴式住居跡SH197出土遺物実測図



第45図 第6トレンチ竪穴式住居跡SH197~200・220・221、第3トレンチSH207出土遺物実測図

もしれない。底部はヘラ切りである。344は須恵器壺、345は須恵器甕である。345は口縁部内面の回転ナデの後、斜め上方にナデ上げた痕跡が残る。346は須恵器把手である。内面には青海波タタキの痕跡がみられる。347・348は須恵器高杯である。347は黒色細粒を多量に含む胎土で堅緻な焼成であり、杯部に自然釉が掛かる。348は焼成が甘く、灰白色を呈する。349は須恵器風字硯である。350～356は土師器甕である。350・351は砂粒を多く含むやや粗い胎土であるが、他は良好な胎土である。357は土師器高杯である。358は土師器把手である。器面は乳灰色であるが、断面は漆黒色を呈する。359～369は土錘である。砂粒が目立つやや粗い胎土のもの(359・360・369)と、砂粒をあまり含まないものがある。370は滑石製白玉である。

S H198(371・372) 371は須恵器杯蓋、372は須恵器高杯である。

S H199(373) 土師器甕である。砂粒を多く含む粗い胎土をもつ。

S H200(374～376) いずれも土師器甕である。

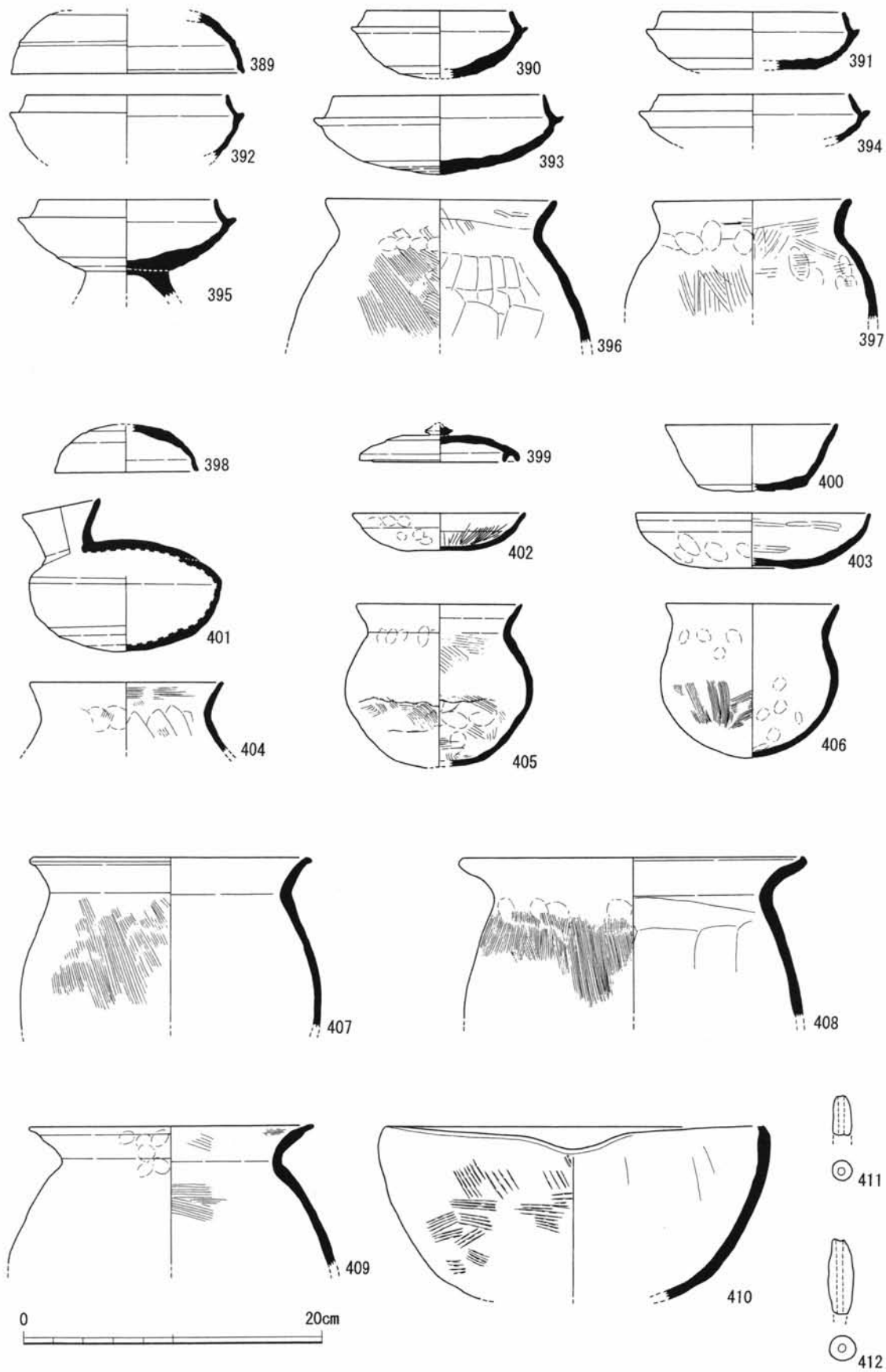
S H220(378～382) 378・379は須恵器杯蓋である。378はほぼ完形である。380は須恵器杯身である381は須恵器礎である。内面に自然釉が厚く掛かる。382は灰白色の凝灰岩製砥石である。2面を砥石面として使用している。このほか、土師器把手が出土している。

S H221(383～388) 383は須恵器杯である。284は須恵器甕である。断面三角形の突帯をもつ。385は土師器甕である。把手が剥離した痕跡がある。接合しない同一個体の破片が出土している。386～388は土師器高杯である。杯部には回転ナデが施される。

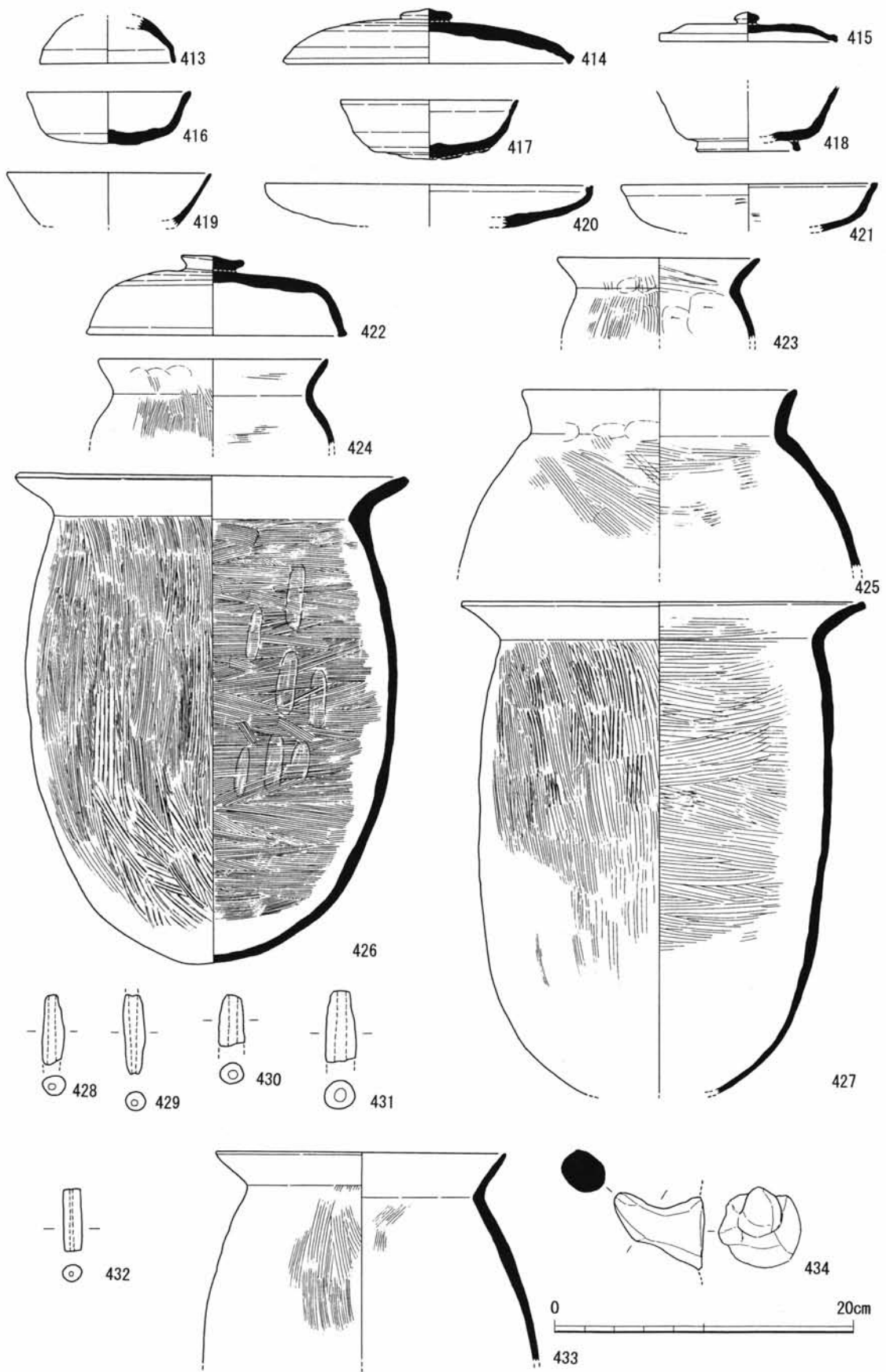
S H222(389～397) 389は須恵器杯蓋、390～394は須恵器杯身、395は須恵器高杯である。体部の中位まで回転ヘラケズリが施される。396・397は土師器甕である。397は胎土に雲母片が目立つ。

S H224(398～412) 398・399は須恵器杯蓋である。399は外面からかえりの接合部付近まで自然釉が厚く掛かる。400は須恵器杯身である。硬質に焼成され、器面がアバタ状に剥離している。401は須恵器平瓶である。402・403は土師器杯である。402の内面は中央部に連結輪状暗文が施され、その周囲に放射状暗文が施される。403の内面は横方向のヘラミガキが認められる。ともに、赤橙色を呈する。404～409は土師器甕である。405・406の外面には煤が付着する。410は土師器鉢である。外面にタタキ痕がみられる。411・412は土錘である。このほか、棒状鉄製品(532)が出土している。

S H223(413～432) 413～415は須恵器杯蓋である。414・415は完形である。414は灰白色、415は淡青灰色を呈する。416～419須恵器杯である。416は底部をヘラ切りの後、軽くナデているが、417はヘラ切り後の調整を行わず、凹凸が著しい。419は軟質の焼成で、灰白色を呈する。緑釉陶器片とともに出土していることから、この住居跡に伴う遺物でないかもしれない。420は須恵器皿、421は土師器杯である。421は器面が磨滅しているが、内外面ともにわずかにヘラミガキが認められる。422は須恵器蓋である。口縁部外面に自然釉が付着し、天井部外縁には別個体が釉着した痕跡がみられる。423～427は土師器甕である。423・424は口縁部の屈曲の度合いが異なるので別個体としたが、胎土・調整・色調は共通するので、同一個体の可能性もある。425は胎



第46図 第6トレンチ竪穴式住居跡SH222・224出土遺物実測図



第47図 第6 トレンチ縦穴式住居跡 S H 223・247出土遺物実測図

土に雲母片が目立つ。426は底部外面に円形に剝離している部分が数か所みられる。428～431は土錘である。428・429は乳白色、430・431は淡茶橙色を呈する。432は碧玉製管玉である。

S H247(433・434) 433は土師器甕である。434は土師器把手で、外面は面取りされている。

S H281(435～438) 435・436は須恵器杯蓋である。436の外面は全面に自然釉が付着する。437は土師器皿である。薄手で、「て」字状口縁をもつ。438は土師器把手である。先端はわずかに欠損している。このほか、図化できないが、須恵器甕や土錘が出土している。

S H283(439～442) 439・440は須恵器杯、441・442は須恵器甕である。440・442は硬質の焼成である。

S H284(443～447) 443・444は須恵器杯である。443の底面には自然釉が掛かる。445は須恵器甕である。軟質の焼成で灰白色を呈する。446は土師器甕である。口縁端部を摘み上げるようにヨコナデを施す。447は土錘である。

S H302(448～451) 448は須恵器高杯である。3方向に透かし孔をもつ。449・450は須恵器甕である。同一個体の可能性がある。451は土師器甕である。外面には煤が付着している。

S H310(452～454) 須恵器杯蓋と杯である。このほか、図化できないが、製塩土器片が出土している。

S H350(455～458) 455は須恵器杯蓋である。口縁部が焼け歪んでいる。456・457は須恵器杯である。457は焼成が甘く灰白色を呈する。458は土師器甕である。把手の周縁は工具による面取りを施している。

S H352(459～461) 459～461は土師器甕である。460は胎土に雲母片を多く含み、暗茶褐色を呈する。461はクサリ礫などを多く含み、乳橙色～黄橙色を呈する。

S H353(462) 土師器高杯である。器面の磨滅が著しく調整は観察できない。脚台部の接合する粘土が一部残っている。

S H359(463) 土師器甕である。外面の頸部から5cm前後より下部に、焼土が付着している。

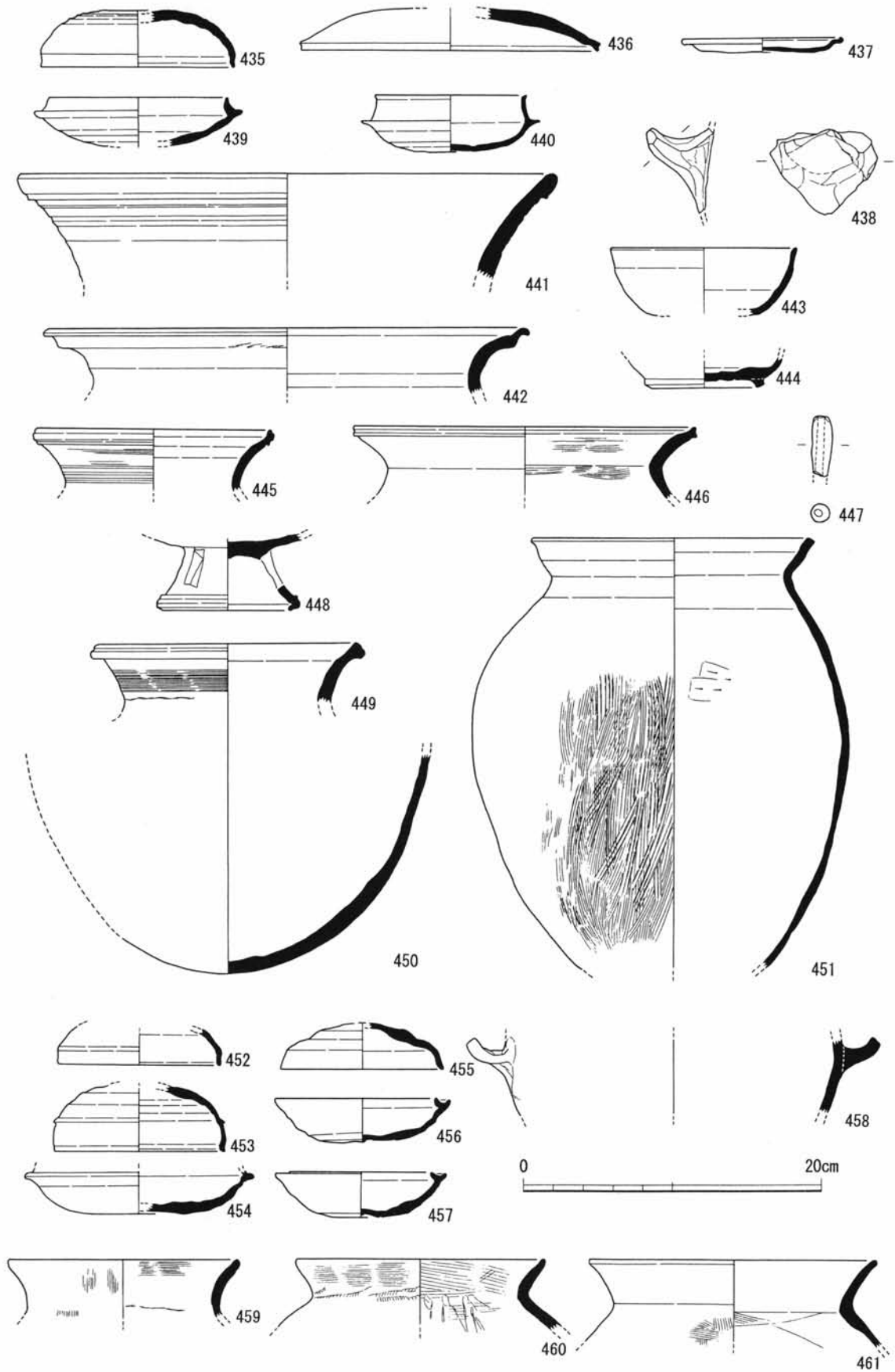
S H376(464・465) 464は土師器甕の把手である。把手の下部には指でナデ付けた痕跡が明瞭にみられる。465は土師器甕である。

S H393(466～468) 466・467は須恵器杯である。466の天井部は扁平で、広い範囲に回転ヘラケズリが施される。468は土師器甕である。体部内面のヘラケズリは不明瞭で、縦方向に押さえた凸凹がみられる。

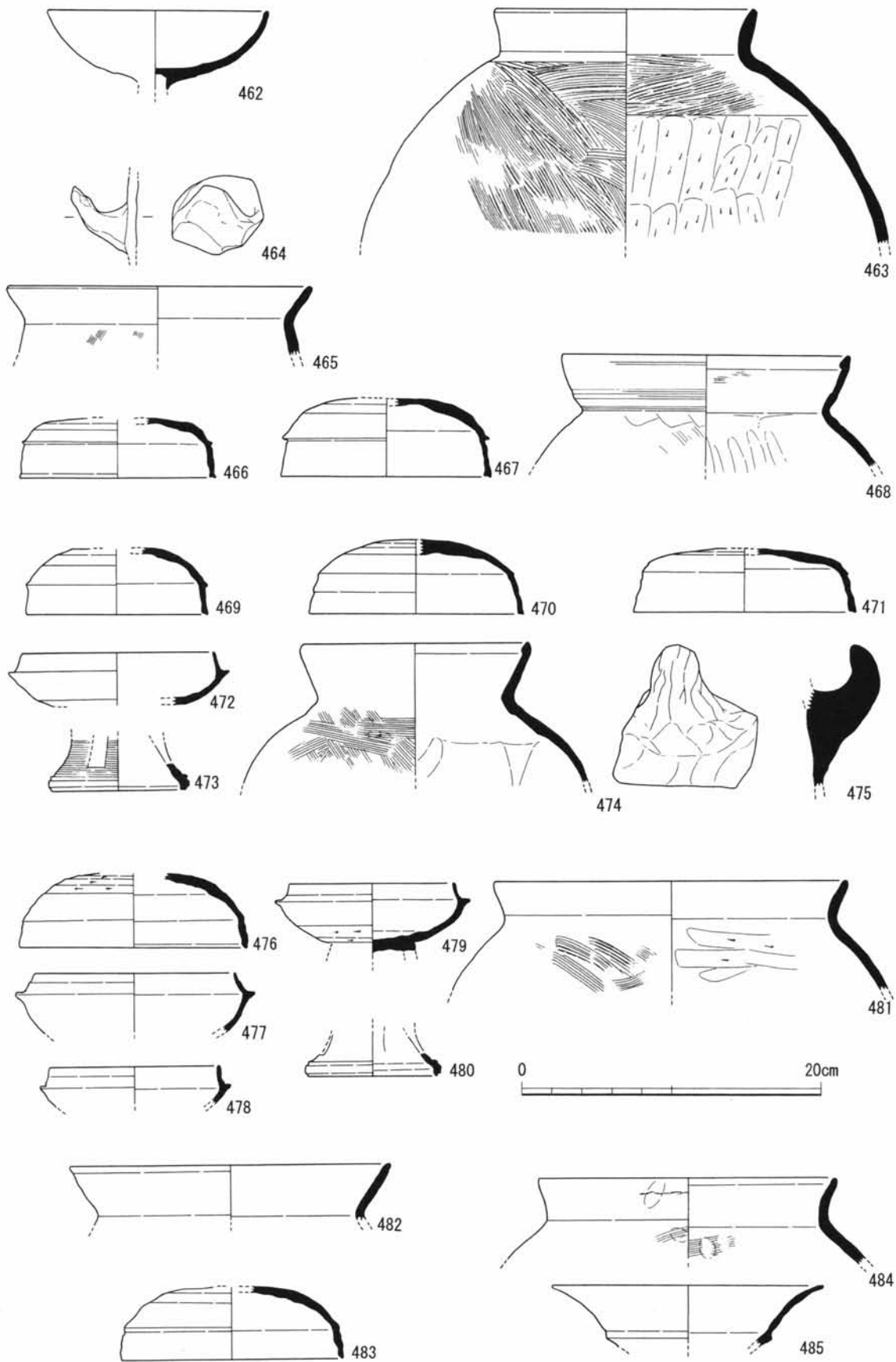
S H394(469～475) 469～471は須恵器杯蓋である。470・471は稜線が不明瞭で口縁部と天井部の境に凹線がめぐるのがみられるのみである。472は須恵器杯である。473は須恵器高杯である。3方向に透かし孔をもつものと思われる。474は土師器甕である。

S H402(476～481) 476は須恵器杯蓋、477・478は須恵器杯、479・480は須恵器高杯である。478は479と胎土・調整などが酷似するので、同一個体の可能性がある。481は土師器甕である。内面のヘラケズリは非常に弱い。

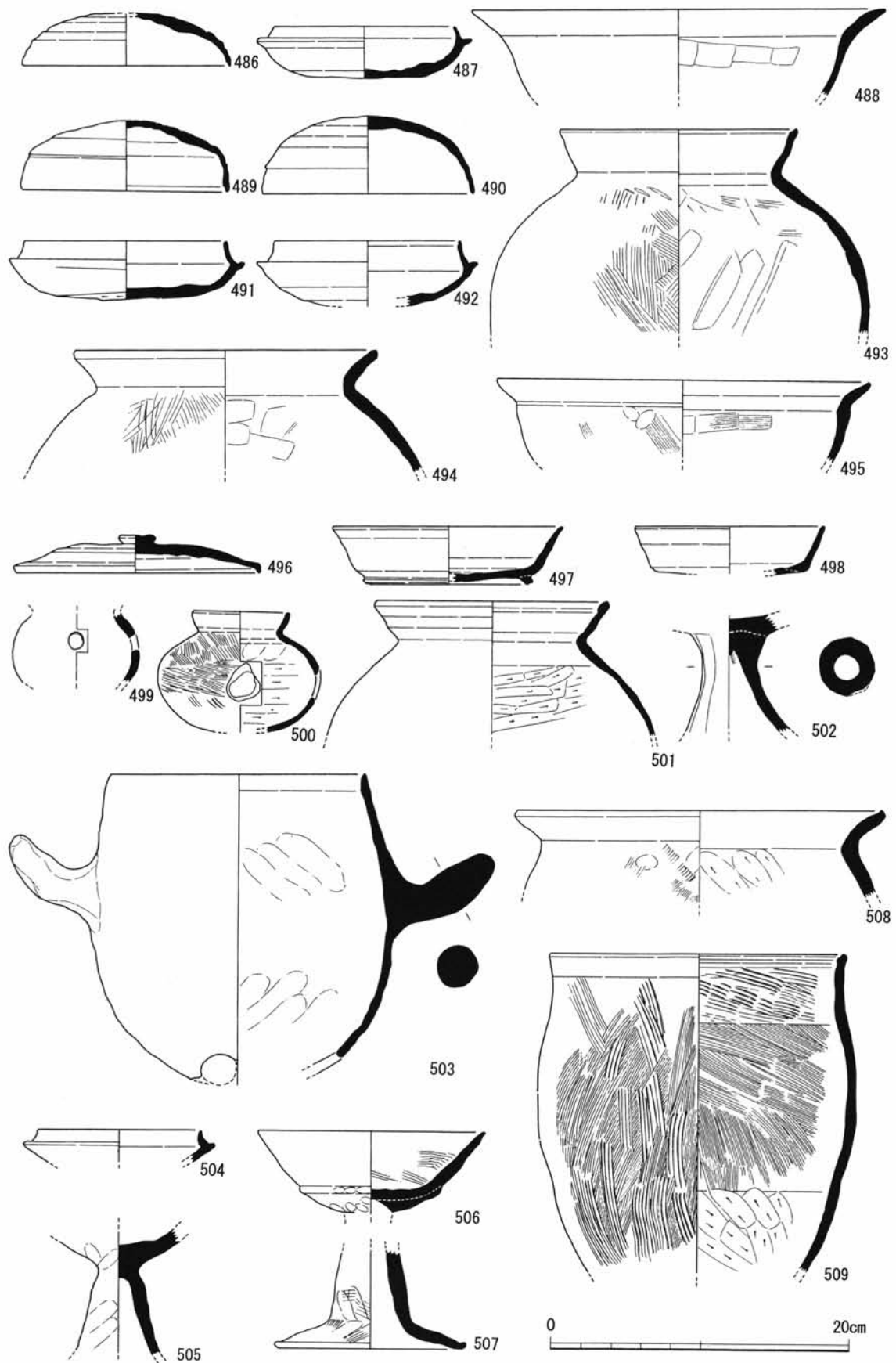
S H443(482) 土師器甕である。口縁部はわずかに内湾し、上端部に丸みを帯びた面をもつ。



第48図 第6トレンチ堅穴式住居跡S H281・283・284・302・350・352出土遺物実測図



第49図 第6トレンチ竪穴式住居跡S H353・359・376・393・394・402・443・625出土遺物実測図



第50図 第6 トレンチ竪穴式住居跡 S H 628～630・663・671・703、
第3 トレンチ土坑 S K 630707出土遺物実測図

S H 625(483~485) 483は須恵器杯蓋である。484は土師器甕で、口縁内端部がヨコナデによってわずかにくぼむ。485は土師器高杯である。器面は磨滅が著しい。色調は赤茶色を呈する。

S H 628(486~488) 486は須恵器杯蓋、487は須恵器杯身である。486は口縁部が外に向かって開く器形で、天井部と口縁部の境が不明瞭である。488は土師器鍋である。

S H 629(489~495) 489・490は須恵器杯蓋、491・492は須恵器杯身である。489は焼け歪みが著しい。490は焼成が甘く、器面の剥離が著しい。493・494は土師器甕である。493の内面は縦方向に大きく深いヘラケズリが施される。494の外面は口縁部まで煤が付着し、黒色を呈する。629は土師器鍋である。

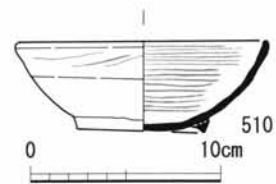
S H 630(499~501・503) 499・500は土師器甕である。501は土師器甕である。503は土師器甕である。底部外周に5つの孔が開いていたことがわかる。

S H 663(504~507) 504は須恵器杯である。505~507は土師器高杯である。505は黄橙色、506・507は乳灰色を呈する。

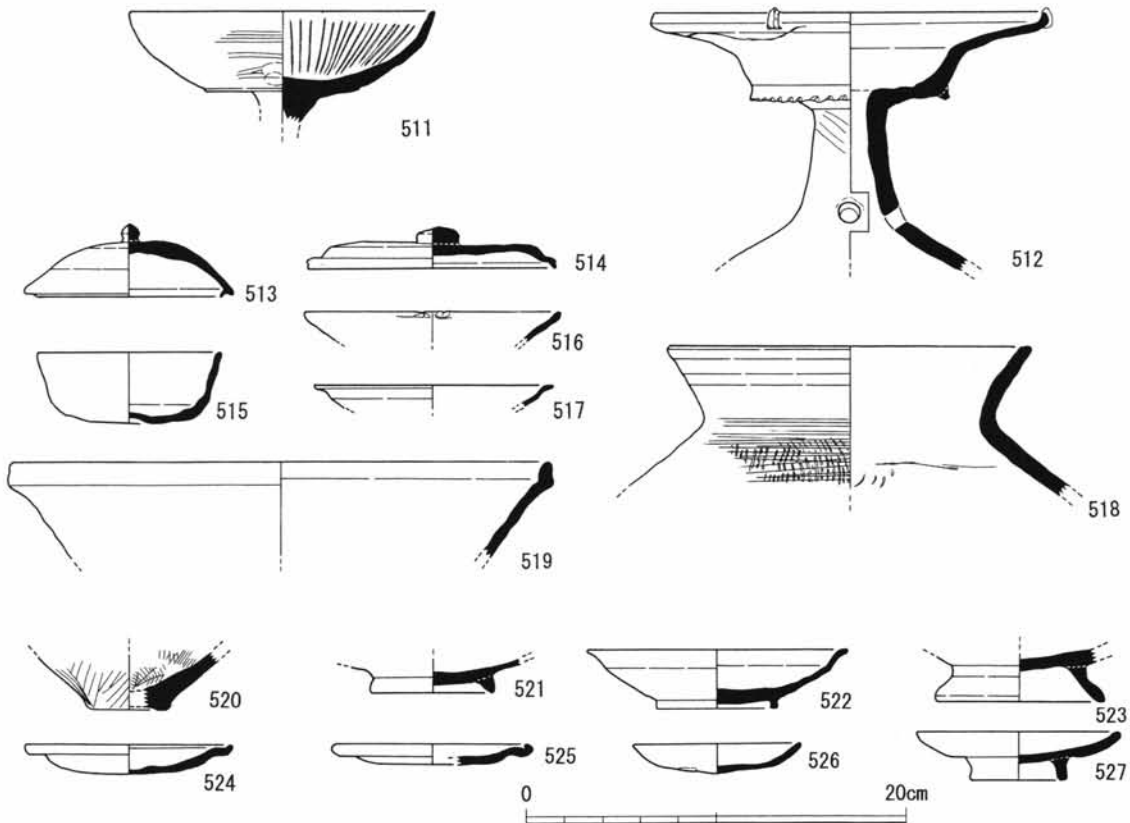
S H 671(508) 土師器甕である。口縁端部をわずかに摘み上げるようにヨコナデが施される。乳灰色を呈する。

S H 703(509) 土師器甕である。把手がはずれた孔が開いている。暗茶灰色を呈する。

S K 637(510) 瓦器椀である。内面は比較的密な圏線ヘラミガキと



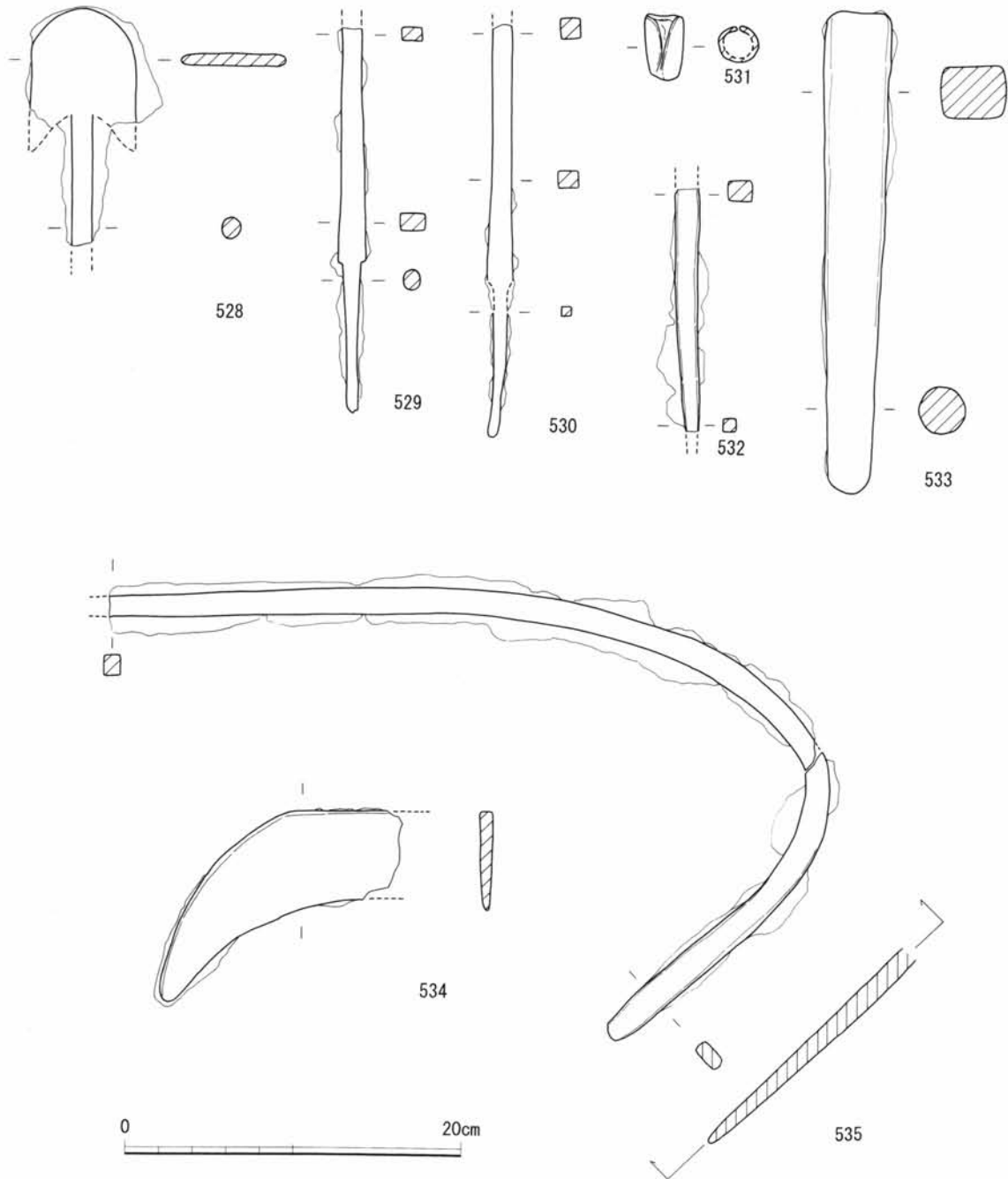
第51図 第6トレンチ
土坑S K 637
出土遺物実測図



第52図 包含層出土遺物実測図

鋸歯状暗文が施される。外面にもヘラミガキが施される。

包含層の遺物(511～527) 511は土師器高杯である。杯部内面に放射状暗文が施され、外面はヘラミガキが施される。512は土師器高杯である。511・512は第1トレンチ北部で出土した。口縁部外端部に棒状浮文を貼り付けている。513・514は須恵器杯蓋である。513は細かい砂粒を多量に含む胎土で、外面全体に自然釉が付着する。515は須恵器杯である。516・517は緑釉陶器皿である。516は輪花皿で、淡緑色の釉調を呈する。517は濃緑色の釉調である。518は須恵器甕、519は東播系須恵器鉢である。519は瓦質焼成に近く、灰白色を呈し、口縁部のみが灰黒色を呈す



第53図 鉄製品実測図

る。513～519は第2トレンチで出土した。520は弥生土器甕である。第5トレンチから出土した。521は灰釉陶器椀である。内面の全面に灰釉が掛かる。522は須恵器皿である。輪高台をシャープに削り出している。篠窯産である。523～527は土師器皿である。523・526は台付皿、524・525は「て」字状口縁をもつ皿である。521～527は第6トレンチで出土した。

鉄製品(528～535) 528～530は鉄鎌である。528は第2トレンチSH147から、529と530は第2トレンチSH1から銹着して出土した。531はソケット状の鉄製品である。鉄板を丸めて一方の口を塞いでいる。第3トレンチSH205から出土している。532・533は棒状の鉄製品である。532は鉄釘状で、両端を折損している。533は基部が断面面方形で先端部は断面円形になる。第3トレンチピットSP623から出土した。535はヤリガンナ状の鉄製品である。基部は断面方形で、先端部は扁平になる。刃は作り出されていない。第2トレンチSH1から出土した。534は鉄鎌である。第3トレンチピットSP499から出土した。

(森島康雄)

(2) 馬路遺跡第3次

1. 調査概要

調査地である馬路遺跡は、亀岡市馬路町壁木・梅原ほかに所在する。同町は、桂川に沿って形成された低位段丘上に位置している。馬路町付近の低位段丘は三俣川や七谷川によって分断され、七谷川の南側にひろがっている段丘上には、丹波国分寺や国分尼寺が所在する。七谷川の北岸から三俣川までの段丘上には、千歳車塚古墳や当遺跡・馬路城が所在する。

今回の調査地は、前方後円墳である千歳車塚古墳(6世紀前半)の西方約850m、天正3(1576)年頃に存在した馬路城から北北西約500mに位置する田畑部で、低位段丘面の端部付近に立地している。馬路遺跡は、東西約700m、南北約800mの範囲に広がる。当遺跡内での調査事例としては、亀岡市教育委員会が試掘調査(第1次)を行い、京都府教育委員会が、当遺跡のほぼ全域で試掘調査(第2次)を実施した。^(注3) その試掘結果を受けて、当調査研究センターが第3次調査として発掘調査を実施した。

調査地は、馬路遺跡の北部にあたる。調査地については、京都府教育委員会が実施した試掘調査(第2次)の成果をもとに、4か所設定した。地区名は、東からA・B・C・D地区とした。D地区は低位段丘端にあたる(第54図)。調査面積は、A地区が1,300m²、B地区が500m²、C地区が1,850m²、D地区が780m²の計4,430m²である。調査期間は平成15年10月29日から平成16年2月20日まで実施した。調査は、岡崎・村田が担当し、当報告の執筆についても分担して行った。

遺構面までの基本層位は、B・C・D地区が耕土・床土直下が黄褐色土の地山となり、この面

を掘り込む形で遺構が認められた。D地区付近の地山には、礫が多く混じる。A地区は、暗茶褐色粘質土や黒色粘質土の包含層が、約0.3mの厚さで堆積していた。遺構はこの包含層下層から掘り込まれていたが、遺構内埋土の土色と似ていたため、地山面直上まで掘り下げ、遺構検出に努めた。標高は、A地区からD地区まで約100mを測り、ほぼ平坦である。

2. 検出遺構

(1) A地区(第55図、図版第45)

調査の結果、西側において4条の南北方向の溝(S D501・502・503・506)を、北半部から竪穴式住居跡6基(S H508・509・510・511・518・519)と東西方向の溝2条(S D505・516)を、南東部で掘立柱建物跡4棟(S B512・513・520・521)などを検出した。

①弥生時代

溝S D516(第55図) 調査地北端部で検出した東西方向の溝である。溝は、西流し、西側ほど

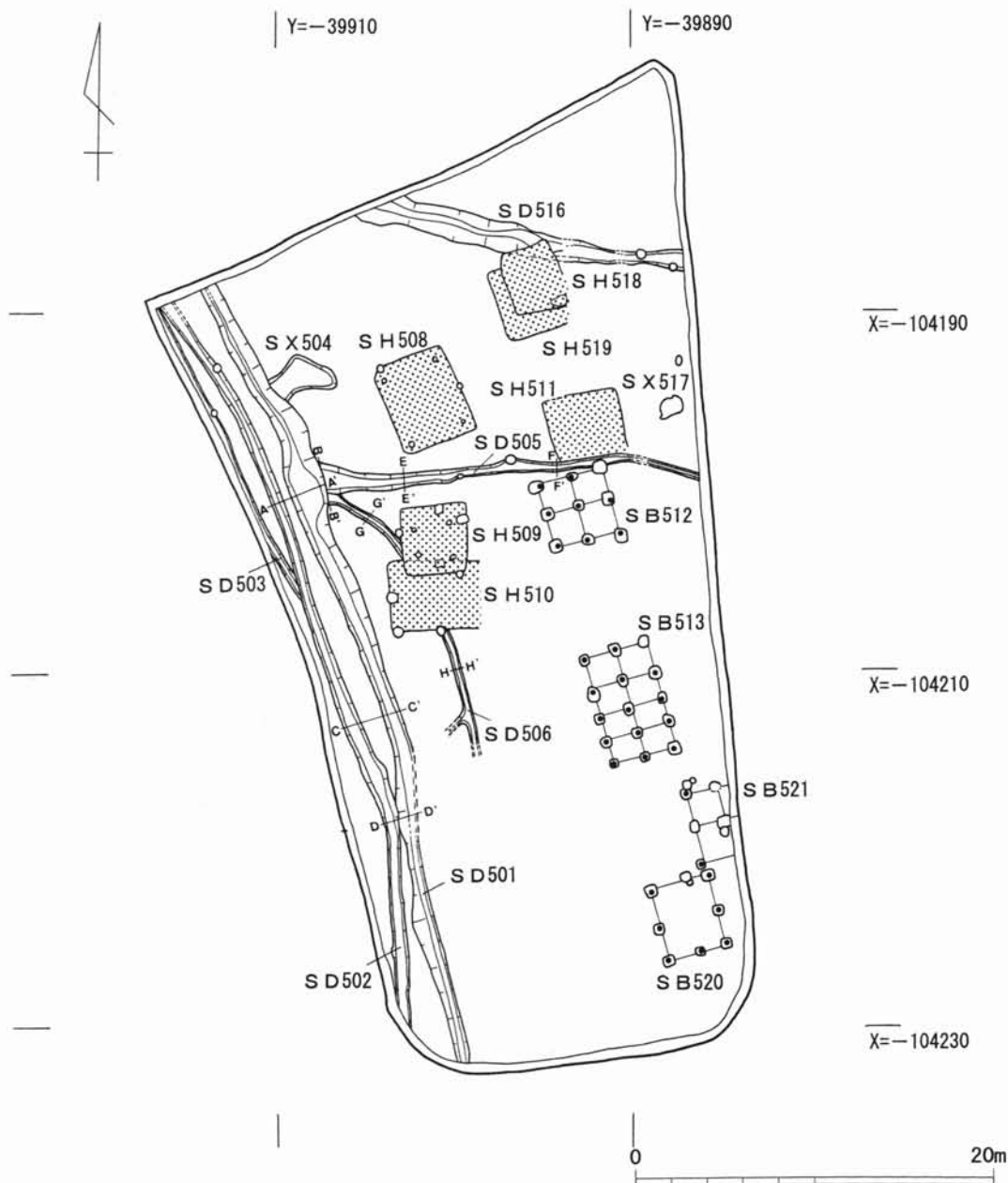


第54図 調査地位置図(亀岡市馬路町ほ場整備事業平面図に加筆)

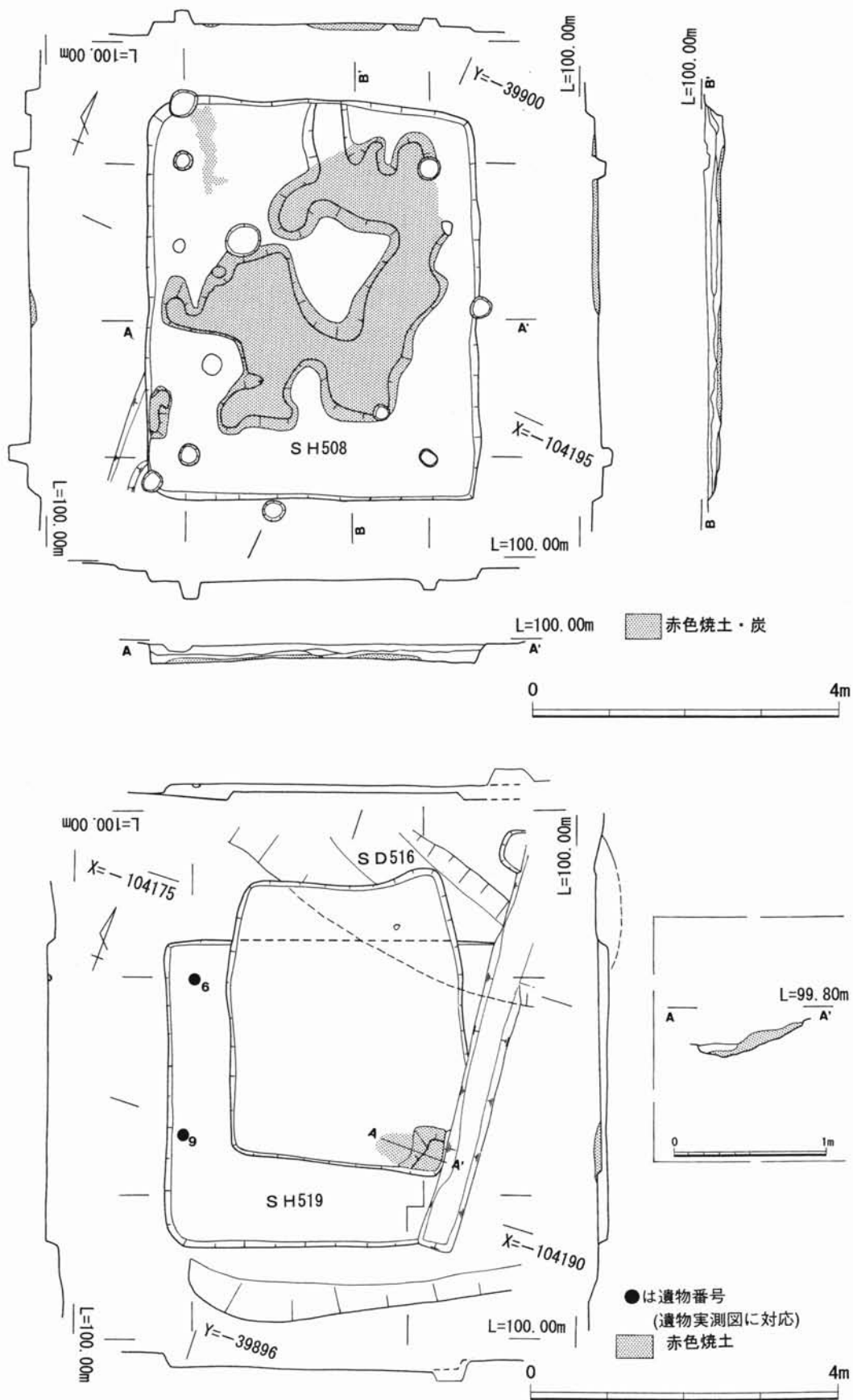
規模は大きい。西側では幅約1.7m、深さ約0.3mを、東側では幅約0.7m、深さ約0.5mを測る。溝内の堆積状況は、上層の茶褐色土と下層の暗茶褐色土・暗茶灰色土が堆積しており、出土遺物の大半は下層から出土した。遺物から弥生時代中期の遺構と考える。

②飛鳥時代

竪穴式住居跡 S H 508 (第56図、図版第47・48) 調査地北半中央部で検出した。わずかに南北に長く、その規模は、約4.4×5.1m、深さ約0.15m、主軸方向はN24°Wを測る。主柱穴は、径約0.3m、深さ約0.2mで、住居の隅寄りから4か所で検出した。主柱穴内側には、炭混じりの赤色焼土が広がる。炭混じりの焼土は、住居中心部の約0.8×1.2mの範囲にはなく、この範囲を囲む形で広がっていた。その厚さは約0.1mに及ぶところもある。これは、柱などが燃えて倒壊し



第55図 A地区遺構配置図



第56図 竪穴式住居跡 S H508(上図)、竪穴式住居跡 S H518・519(下図)実測図

たという状況でなく焼失家屋とするには炭化材が少ないことから、住居内で何らかの作業を行っていたと考える方が妥当と思われる。そのためか、主柱穴が隅寄りに設けられていたと考えられる。また、焼土上面から鉄器ヤリガンナ(第76図1)が出土した。住居の床面は、焼土と地山の境がほぼ水平であることから、焼土下をもって床面と考えられる。

竪穴式住居跡 S H 518(第56図、図版第47・49) S H 508から北東約8mの所で検出した。S H 519を切る形で検出した南北方向に長い住居である。住居北側は、弥生時代中期後半のS D 516とも重複しており、S D 516埋没後にこの住居が建てられ、S D 516→S H 519→S H 518の順である。規模は、約3.1×4.0m、深さ約0.08m、主軸方向はN18°Wを測る。主柱穴は認められなかった。床面直上付近から須恵器杯身・高杯・甕(第76図3～5)などが出土し、飛鳥時代の遺構と考えられる。住居南東隅付近には、赤色焼土とその裾部にわずかな炭の堆積が認められ、竈であると思われる。焼土は、0.7×0.5mの範囲で広がり、厚さは約0.2mであった。焼土裾部西側には0.3×0.3mの範囲に炭が認められ厚さ約0.1mであった。

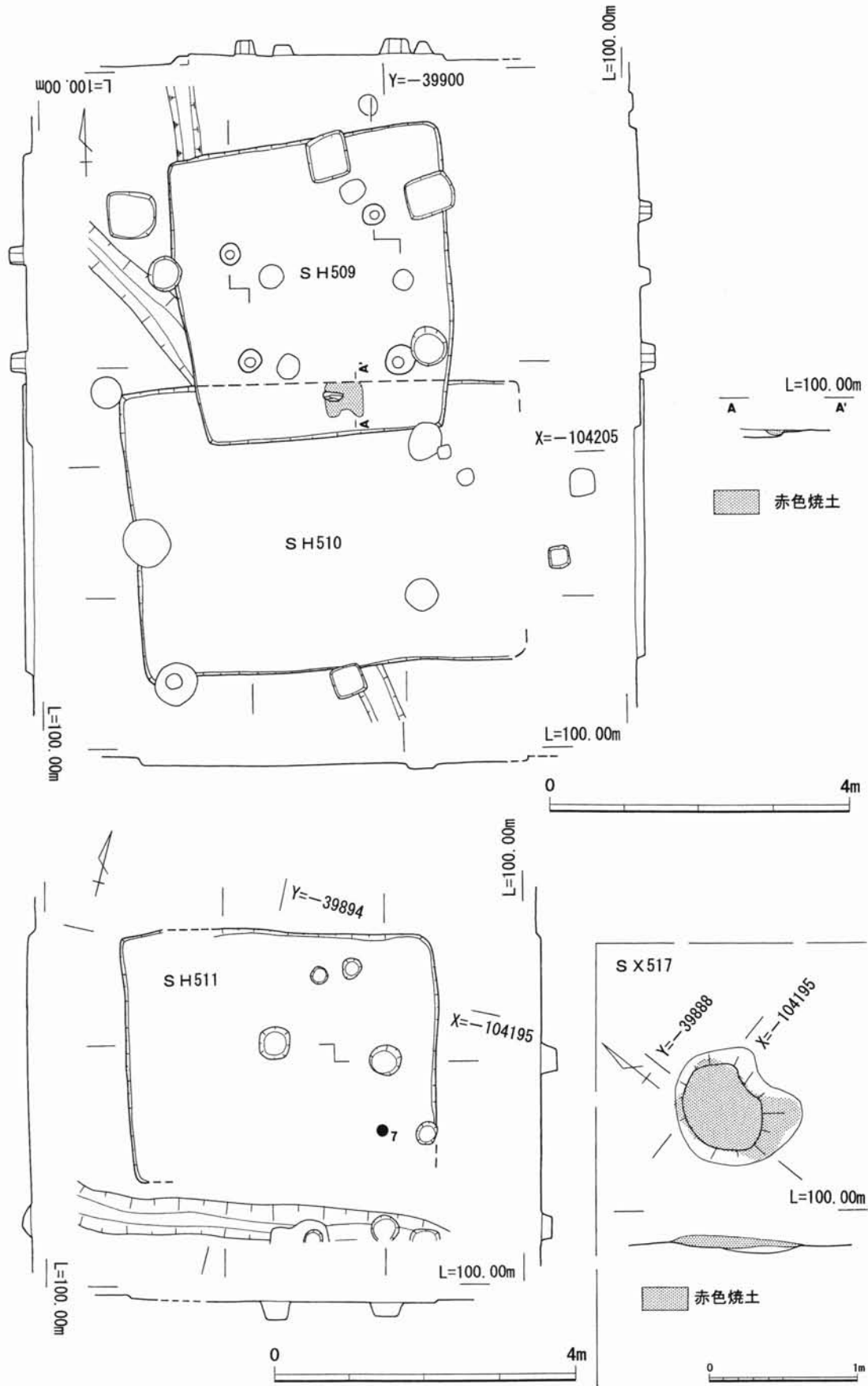
竪穴式住居跡 S H 519(第56図、図版第47・51) S H 518に切られた状況で検出した。住居の東辺は試掘トレンチにかかり認められなかった。住居の規模は、推定4.4×4.0m、深さ約0.2m、主軸方向はN18°Wを測る。主柱穴・竈は認められなかった。西辺近くの床面から須恵器杯身(第76図6・9)が出土し、飛鳥時代の遺構である。

竪穴式住居跡 S H 509(第57図、図版第48・49) 調査地中央部で検出した。S H 510を切る形の住居で、規模は3.7×4.0m、深さ約0.18m、主軸方向はN2°Wを測る。主柱穴は4か所で認められ、径0.3～0.4m、深さ約0.2mを測る。住居南西部では、S D 506とも重複しており、S D 506→S H 510→S H 509の順に築かれていた。この住居跡からの出土遺物はないが、埋土の土色からS H 518・519と同時期と考える。

竪穴式住居跡 S H 510(第57図、図版第48) S H 509の南側で一部重複する形で検出した、東西方向に長い住居である。住居跡の東辺は、近代の暗渠排水によって切られており不明である。規模は、推定5.2×3.8m、深さ約0.1m、主軸方向N5°Wを測る。主柱穴は確認できなかった。出土遺物も少なく時期については不明であるが、埋土の土色からS H 518・519と同時期と考える。ほかの竪穴式住居より東に振る住居である。

竪穴式住居跡 S H 511(第57図、図版第48) 調査地中央部東寄りで検出した。非常に残りが悪く、住居の北半部のみを検出であった。規模は、4.1×(確認長)3.3m、深さ約0.08m、主軸方向はN16°Wを測る。竈は認められなかった。また、東辺付近の床面から須恵器杯身(第76図7)が出土し、飛鳥時代の住居であると考えられる。

溝 S D 501(第55・60図、図版第50) 調査地西側をわずかに弓なりに北流する溝である。溝は、A地区からB地区にまで及び、確認長は約64mであった。北側では幅約1.9m、深さ約0.6mに対し、南側では幅約0.9m、深さ約0.4mと細くなる。この溝の西隣をほぼ同方向にS D 502・503が流れる。S D 501・503は、S D 502によって切られており、この2条の溝がほぼ平行にあることから、同時期の可能性がある。出土遺物が少なく時期については不明であるが、竪穴式住居に先



第57図 竪穴式住居跡 S H509・510(上図)、竪穴式住居跡 S H511・焼土 S X517(下図)実測図

行する S D 505・506が S D 501に合流していることから、竪穴式住居以前の流路と考えられる。また、この溝を検出した場所からおよそ60m西方には、現在の水路がある。この水路は調査地付近を南流し馬路集落に至っており、検出した溝とは流れる方向が異なっていた。

溝 S D 503(第55図) 調査地西端を S D 501と平行して北流する溝である。S D 501との距離は約2.5mを測る。S D 502に切られていた。流路南側は S D 502の西側を通るが、作業の都合上、掘削はできなかった。幅約0.4m、深さ約0.2mを測る。S D 501と同時期である。

溝 S D 505(第55図) 調査地中央部を西流する溝である。幅0.5~0.7m、深さ0.12~0.24mである。S D 501に合流する付近では、幅2.2m、深さ約0.45mと急激に深くなる。時期については、溝の検出状況から、S D 501と同じ飛鳥時代あるいはそれ以前の遺構と考える。

溝 S D 506(第55図) 調査地中央部で検出した弓状の溝で、一部 S H 509・510によって切られていた。また、S H 510南側約7m付近で後世の削平によって消滅していた。規模は、幅約0.4m、深さ0.15~0.2mを測る。溝の北端部は S D 501に通じており、溝底の標高からみるとわずかに南側ほど下がることから、南流していたと思われる。しかし、幹線水路と思われる S D 501に比べて S D 506の溝底は0.3m高いことから、この溝は常に水が流れていたものでないとする。

焼土 S X 517(第57図、図版第49) S H 511から東側約4mの所で検出した焼土である。その範囲は、東西約0.5m、南北約0.75m、厚さ約0.1mである。焼土上面、周辺部から須恵器片や土師器片が比較的多く出土した。これら遺物は、周囲の竪穴式住居跡出土のものと同時期の飛鳥時代であることから、焼土付近にも住居跡があったと思われる。しかし、明確な土色の変化が認められなかったため、竪穴式住居の一角に設けられた竈の可能性はある。

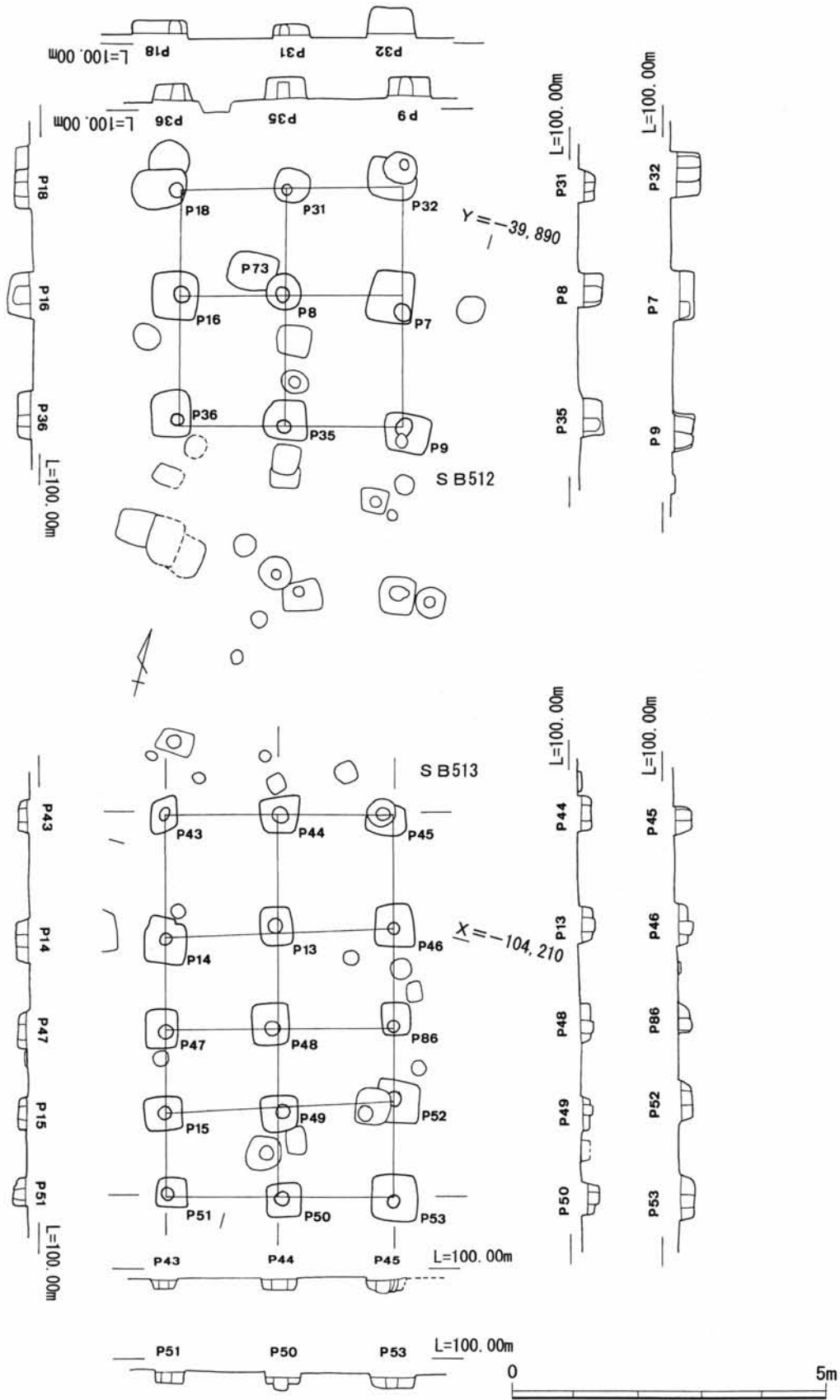
不明遺構 S X 504(第55図) 床が緩やかに傾斜して、S D 501に続く遺構である。S D 501で作業をするための昇降と思われる。幅1.2~2.0m、長さ約4mを測る。

③平安時代以降

掘立柱建物跡 S B 512(第55・58図、図版第52・53) 調査地中央付近で検出した2間(3.7m)×2間(3.7m)の総柱建物跡で、床面積は13.69m²である。柱掘形の規模は、一辺あるいは径が0.7~1.0m、深さ0.25~0.4mで、柱穴は径0.2~0.25mを測る。主軸方向は、N15°Wである。柱穴8は、黒色土器が出土した柱穴73を切って設けられていた(第59図)ことや、わずかな柱穴内出土遺物などから11世紀前半以降の建物と考える。

掘立柱建物跡 S B 513(第55・58図、図版第52・53) S B 512の南南東6.2mのところ検出した総柱建物である。規模は、2間(3.6m)×4間(6.1m)の床面積21.96m²、主軸方向はN15°Wを測り、S B 512と同方向であった。建物北端の1間が1.8m前後と残り3間の1.4m前後に比べると長い。柱掘形はすべて方形で、一辺0.4~0.6m、深さ0.15~0.25mで、柱穴は径0.2~0.25mを測る。柱穴内出土の土器片やS B 512と同方向の建物であることから、11世紀前半以降の建物と考える。

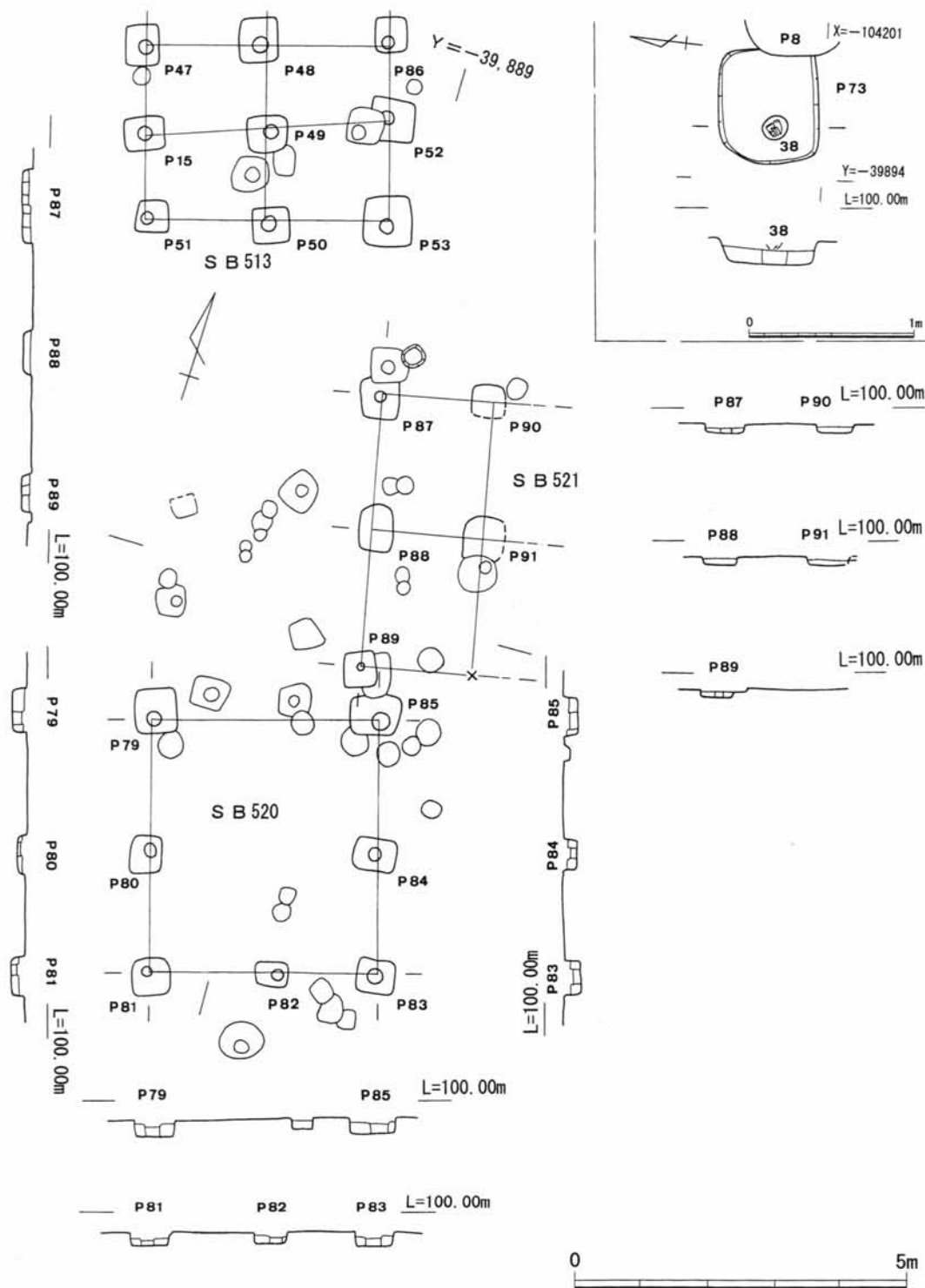
掘立柱建物跡 S B 520(第55・59図、図版第52・53) S B 512・513と同方向を向く建物で、S B 513の南南東7.6mのところ検出した。規模は、2間(3.4m)×2間(3.9m)の床面積13.26m²、



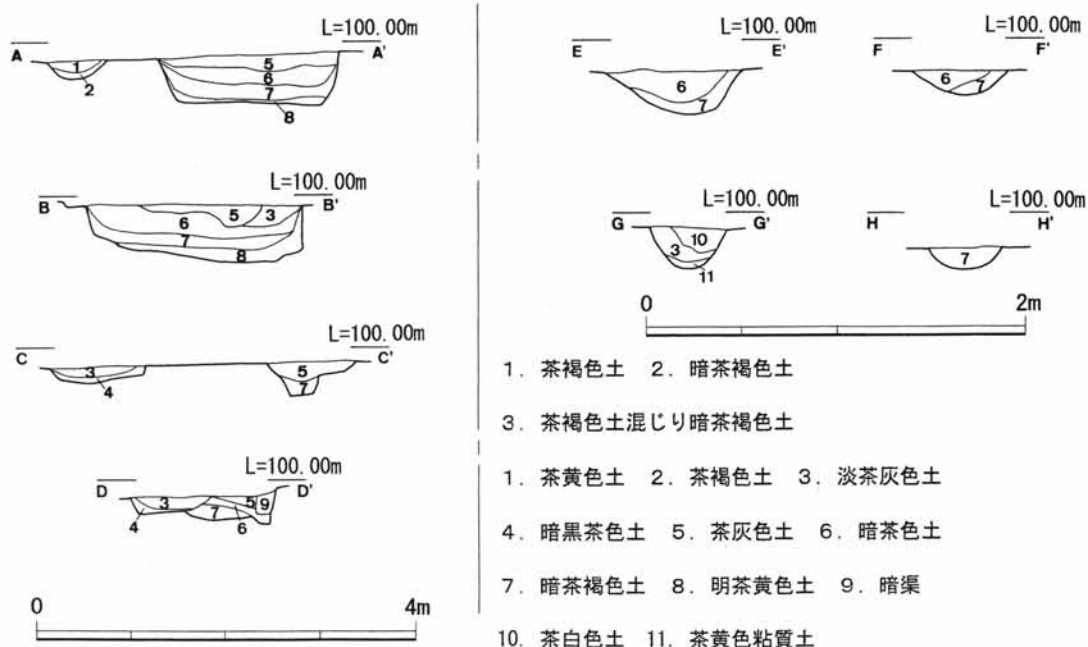
第58図 掘立柱建物跡 S B 512・513実測図

主軸方向はN15°Wを測る。建物北辺の中央の柱穴は検出できなかった。柱掘形はすべて方形で、一辺0.5~0.7m、深さ0.25mで、柱穴は径0.2~0.25mを測る。S B 512・513と同方向であることから、同時期の建物と考える。

上記3棟の建物は、同一方向を向き南北に一列に並ぶ形で検出した。微高地上に整然と規格性を持って配され、東方に微高地が続くことから、調査地東側にも同方向あるいは直行する建物が



第59図 掘立柱建物跡 S B 520・521実測図



第60図 溝 S D 501・502・505・506堆積状況図

存在する可能性が高い。また、検出した3棟の建物は、基本的に2間幅である。このことから調査地東側に想定する建物群も2間幅である可能性が高く、平安時代後期にはこのA地区を中心に建物が整然と配されていたと思われる。

掘立柱建物跡 S B 521(第55・59図) S B 513と S B 520間で検出した東西棟の建物である。調査地東側にさらにのびることから、全容については不明である。確認した規模は、2間(4.1m)×2間(1.6m)以上である。主軸方向はN11°Wを測り、わずかに S B 512・513・520と異なった方向である。S B 521の南西隅の柱穴 P 89は、S B 520の北東隅の柱穴 P 85と間接的に切り合っており、その状況から S B 521は、S B 520以降の建物である。柱掘形は方形で、その規模は一辺0.5~0.7m、深さ約0.15m、柱穴は径約0.2mを測る。

溝 S D 502(第55図、図版第53) S D 501・503を切る形で検出した。規模は、幅0.6~1.0m、深さ約0.2mを測る。この溝は、B地区でも検出でき、確認長は約55mである。この溝には、8世紀後半~9世紀前半代の土器片が多量に出土し、9世紀前半の土器量が大半を占め、この溝の時期を示すと考える。

柱穴 P 73(第59図、図版第51) 2間×2間からなる S B 512の中央の柱穴 8に切られる形で検出した柱穴である。柱穴内埋土中から黒色土器(第76図38)が出土したことから、S B 512をはじめ同方向の S B 513・520の時期決定に繋がるものと考えた。黒色土器は11世紀前半であることから、掘立柱建物跡群は11世紀前半以降と考える。

(2) B地区(第61図、図版第54)

調査トレンチは、A地区の南側において設定し、逆三角形を呈する。B地区の掘削前の現地表面は、A地区の南側より約0.4m低く、遺構の検出面の高低差も約0.2mあった。検出した遺構は、A地区からのびる溝 S D 01を除いて、飛鳥時代や平安時代の遺構は検出できなかった。しかしな

がら、B地区北東側において弥生時代の遺構を確認することができた。

北側に設定したA地区と遺構の様相が異なることについては、おそらく後世に削平を受け、上層の遺構は、削り取られて消失したものと考えられる。また、削平は弥生時代の遺構にも及んでいる。

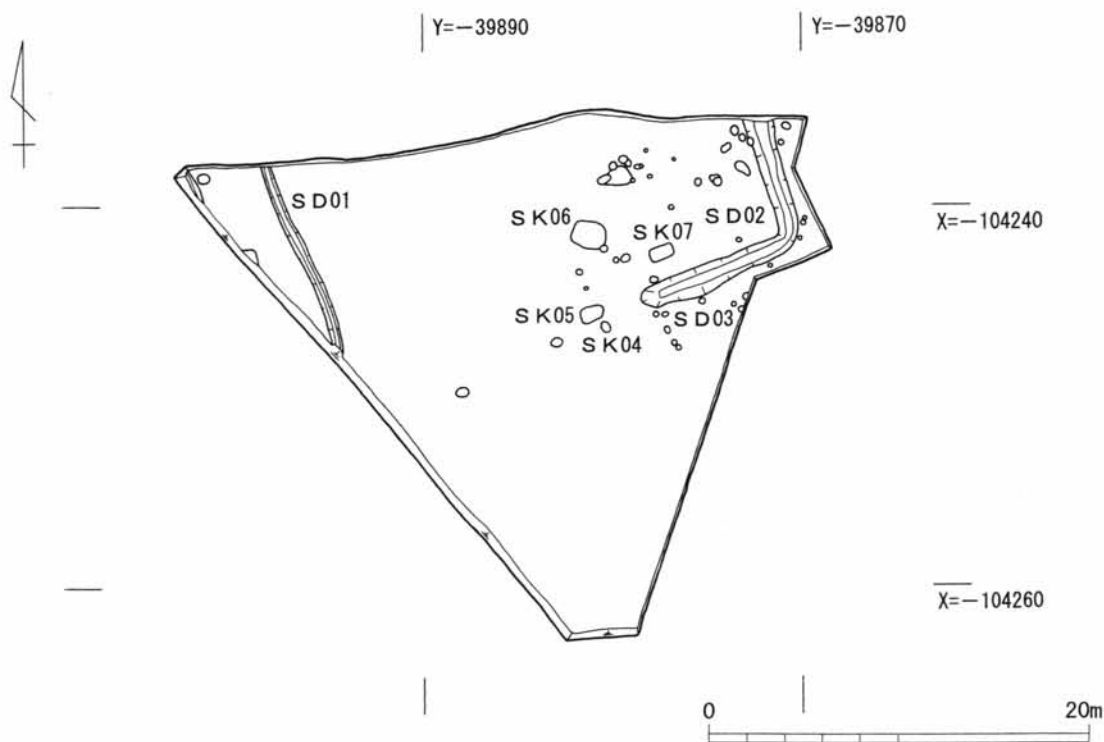
①弥生時代

溝SD02(第62図、図版第54・55) トレンチ北東で検出した南北方向の溝で、最大幅約1.5m、深さ約0.6mを測る。溝の断面は逆台形を呈する(第62図溝断面)。埋土からは、弥生時代中期の土器片が出土した。

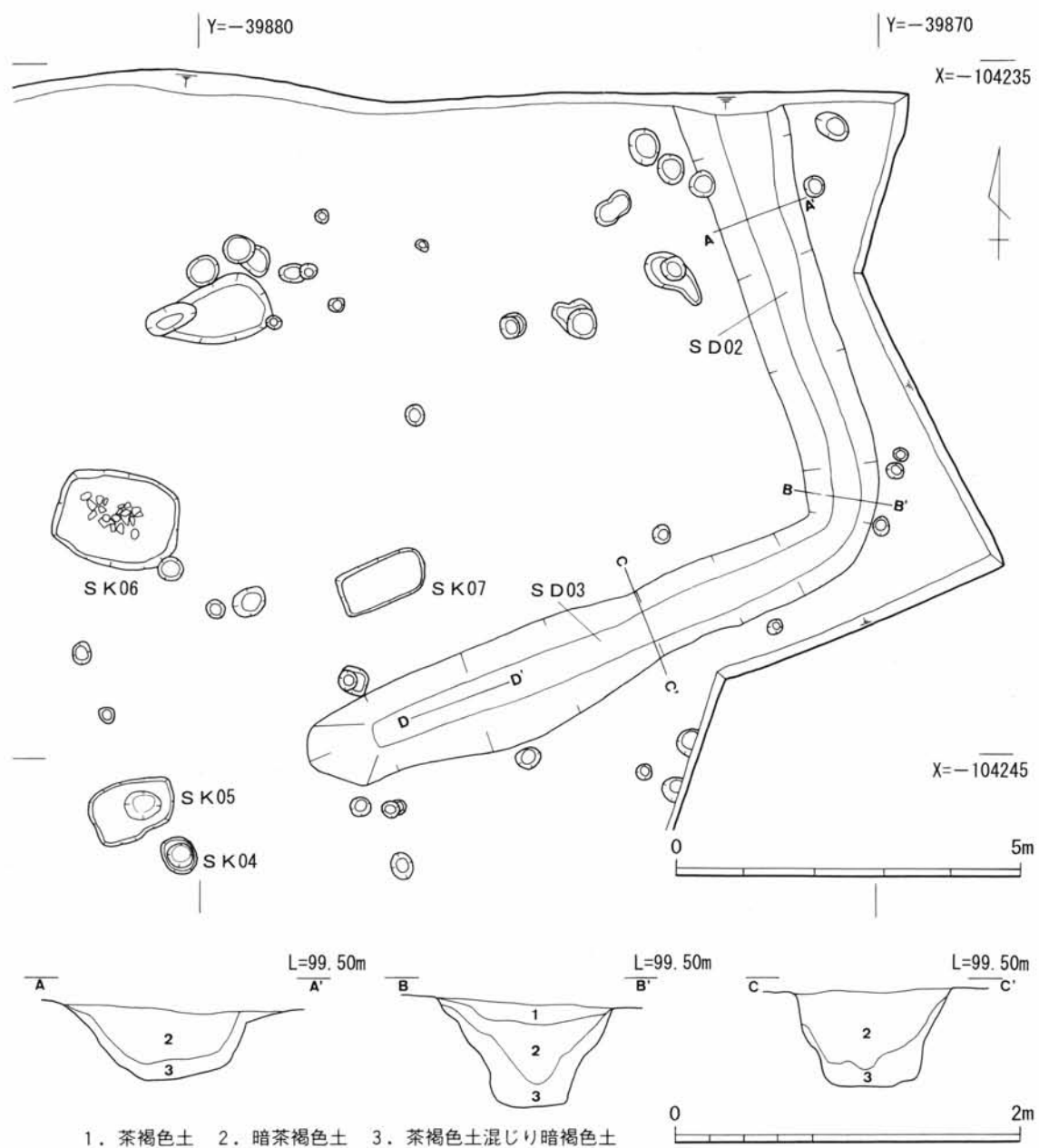
溝SD03(第62図、図版第54～56) 溝SD02の南側で検出した東西方向の溝で、最大幅約1.5m、深さ約0.55mを測る。溝の断面は逆台形を呈する。当初、溝SD02と溝SD03はそれぞれ単独の遺構として検出したが、2条の溝が繋がる可能性があったためトレンチ東側の一部を拡張して調査した。その結果、2条の溝は直角に繋がることが確認できた。このことから、方形周溝墓の周溝であると考えた。溝SD03の溝の底部からは、弥生時代中期の甕(第78図80)が出土した。ほぼ一個体分の破片が土圧によって押しつぶされた状況で出土しており、周溝内埋葬の可能性も考えられる。

土坑SK04(第63図、図版第56) 東西約0.6m、南北約0.45m、深さ約1.3mを測る楕円形を呈する土坑である。土坑内には、弥生時代中期の甕(第78図83)が横向きに据えられていた。しかし、後世の削平によって甕の上面部は消失していた。

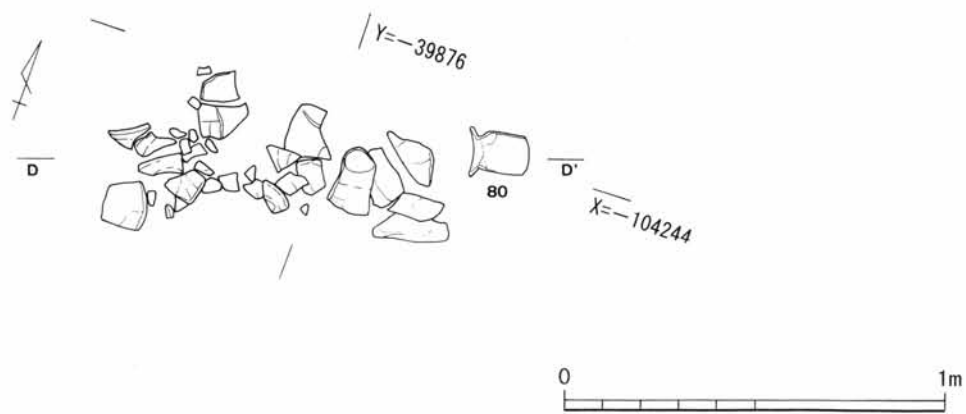
土坑SK05(第63図、図版第56) 東西約1.2m、南北約0.85m、深さ約0.28mを測る隅丸方形



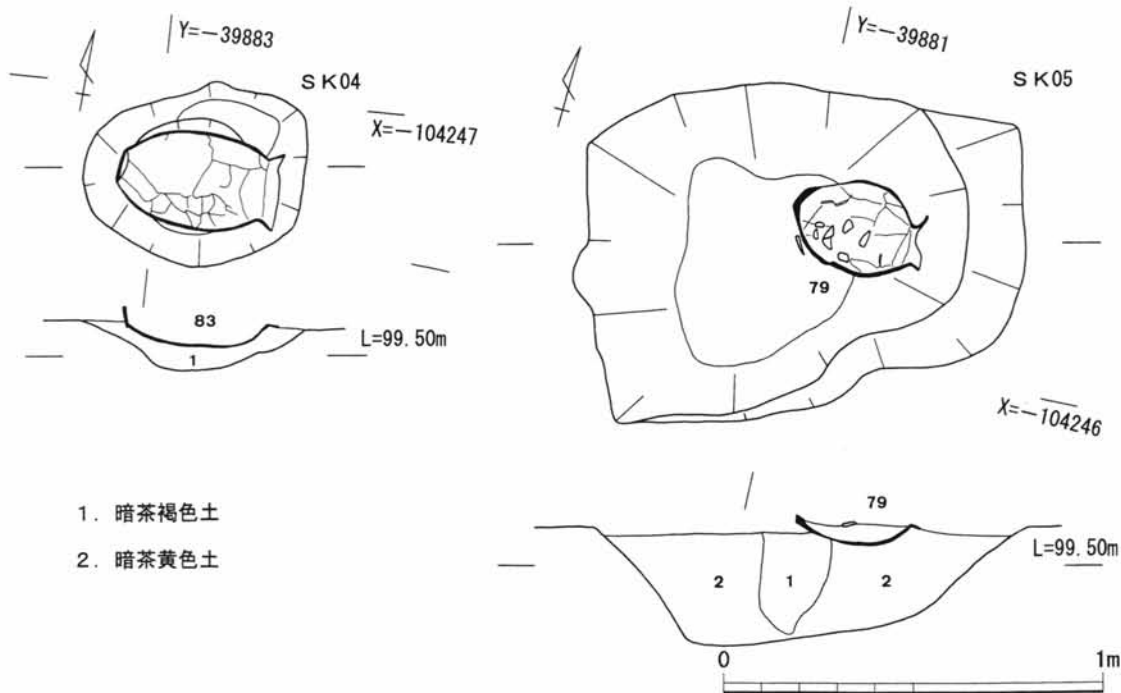
第61図 B地区遺構配置図



(SD03 内遺物出土状況)



第62図 B地区遺構配置図および方形周溝墓実測図



第63図 土坑S K04・05実測図

を呈する土坑である。土坑内には、弥生時代中期の甕(第78図79)が横向きに据えられていたが、土坑S K04と同様に甕の上面部は失われていた。

土坑S K06(第64図、図版第57) 東西約1.74m、南北約13.7m、深さ約1.3mを測る方形を呈する土坑である。埋土から弥生土器片(第78図81)が出土した。おそらく、土坑S K04や土坑S K05のような遺構であった可能性がある。

土坑S K07(第64図、図版第57) 東西約1.3m、南北約0.65m、深さ約1.7mを測る長方形を呈する土坑である。埋土から、弥生土器片が少量出土した。

②飛鳥時代以降

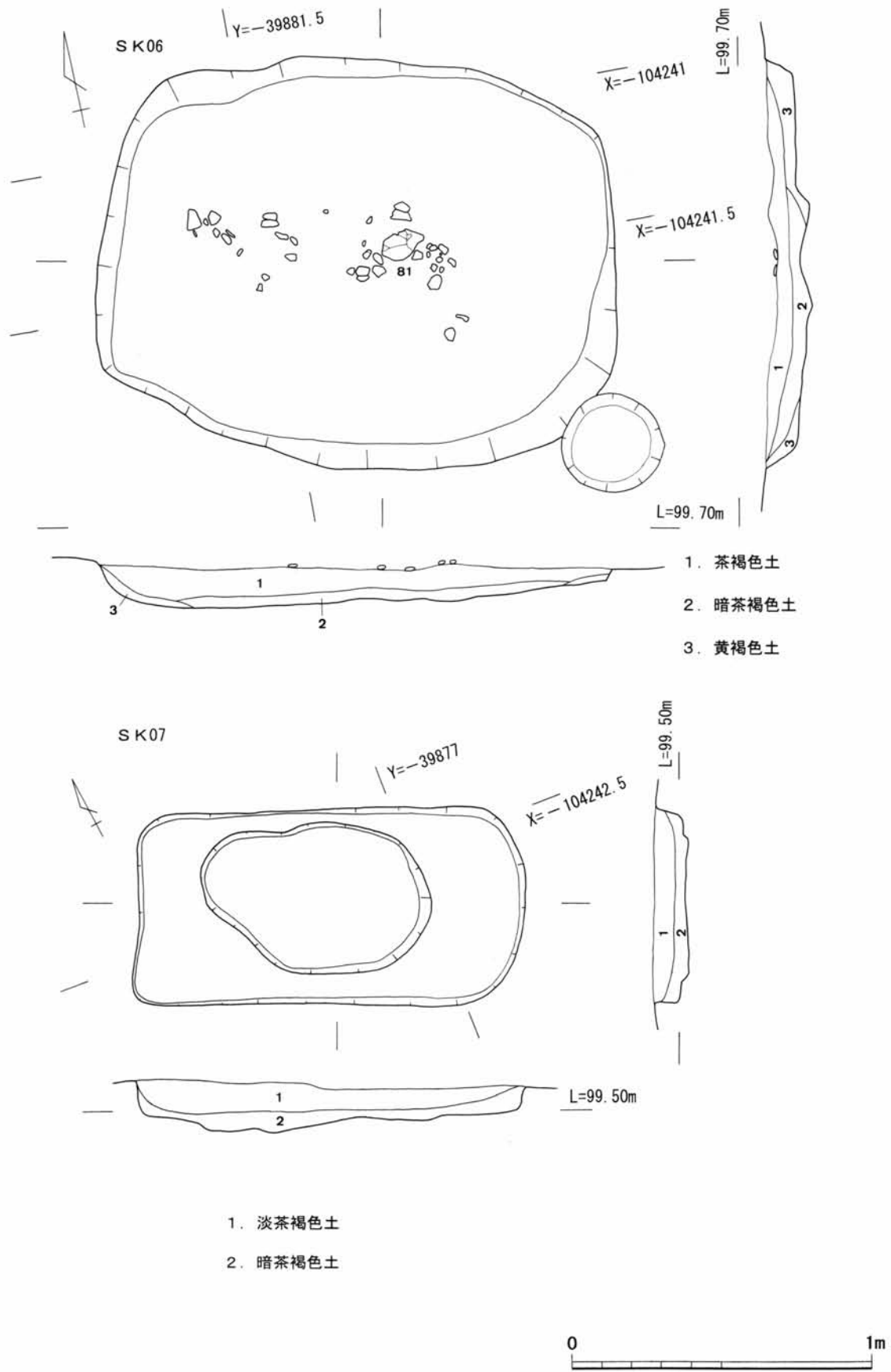
溝S D01(第61図、図版第45) トレンチ北西側で検出した南北方向の溝で、幅約0.6m、深さ約0.3mを測る。この溝はA地区からのびる溝S D501の延長の溝であると考えられる。

(3)C地区(第65図、図版第46)

掘削前は東西方向に長い田で、畦や暗渠排水は掘削できないことから、4か所の調査地からなる。便宜上北からC-1～C-4トレンチとした。また、C-4トレンチ南端から竪穴式住居跡の一角を確認したことから、規模確認のため一部拡張を行った。調査の結果、竪穴式住居跡2基(S H03・05)、掘立柱建物跡1棟(S B19)、溝4条(S D01・02・04・25)、柱穴群を検出した。

①飛鳥時代

竪穴式住居跡S H03(第66図、図版第58・59) C-1トレンチ東側で検出した。規模は、東西約5.7m×南北約5.9m、深さ約0.08m、主軸方向はN33°Wを測る。北辺中央に竈が認められた。周壁溝は、北辺から東・西辺半ばまで、「コ」字状にめぐる。周壁溝の規模は、幅約0.2m、深さ約0.05mである。主柱穴は4か所で確認できた。柱掘形は直径約0.4m、深さ約0.4mで、柱穴は



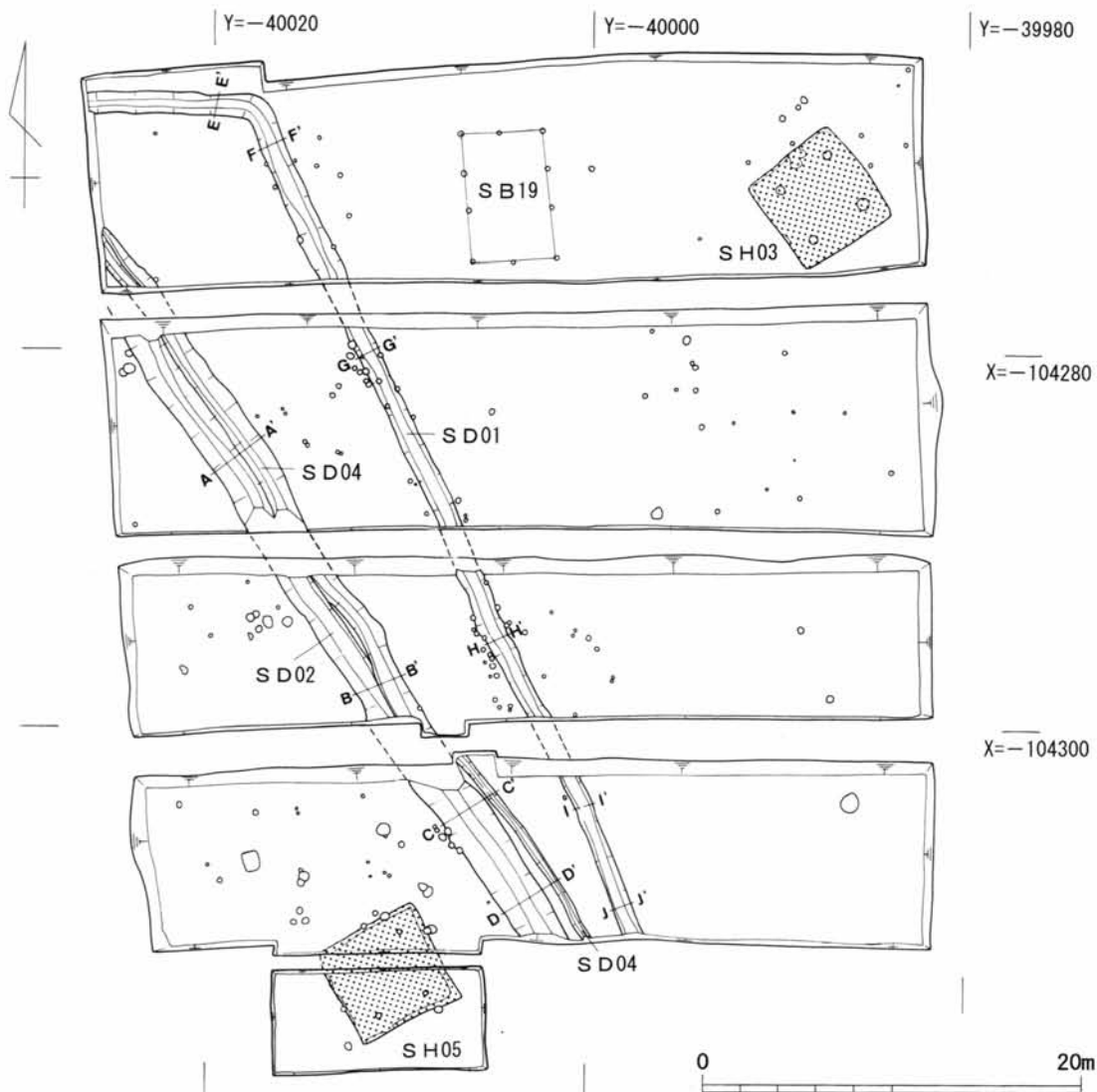
第64図 土坑SK06・07実測図

直径約0.2mであった。竈付近の周壁溝から土師器片(第79図84)が出土した。

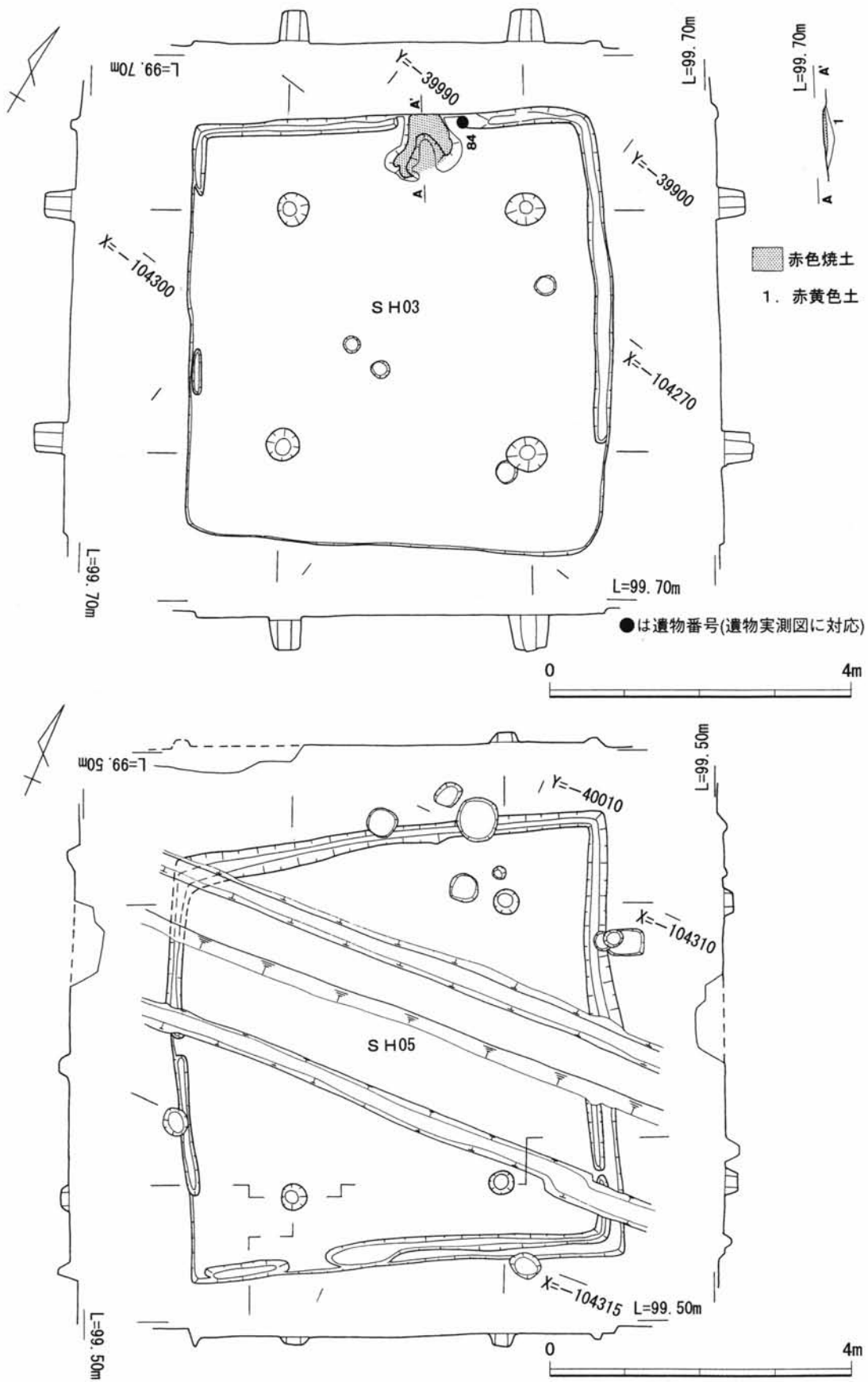
竪穴式住居跡SH05(第66図、図版第59・60) C-4トレンチ中央南端で検出した。当初、住居の北東部のみ検出であった、畦を挟んだ南側を一部拡張し全容を把握した。規模は、東西約5.8m×南北約5.9m、深さ約0.1m、主軸方向はN26°Wを測る。調査範囲内から、竈の検出には至らなかった。周壁溝は、部分的に途切れながらも全周する。南東付近では、壁のやや内側をめぐる。周壁溝の規模は、幅約0.2m、深さ約0.1mである。主柱穴は3か所で確認できた。柱掘形は直径0.3~0.4m、深さ0.1~0.2mで、柱穴は直径約0.18mであった。埋土内から須恵器片(第79図87)や土師器片(第79図86)が出土した。

②平安時代

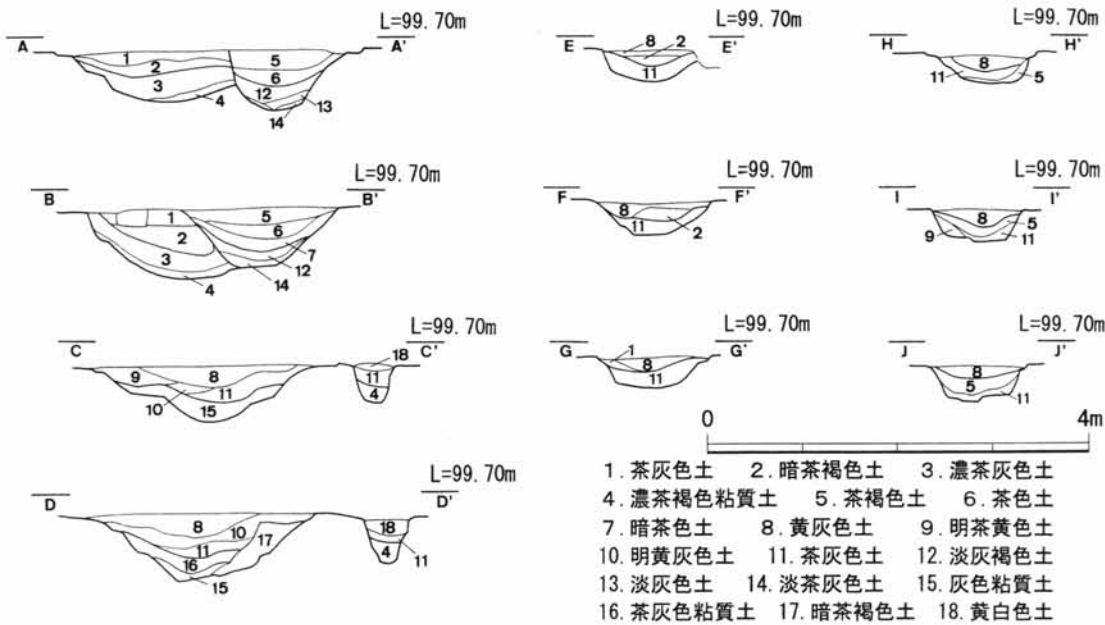
溝SD01(第65・67図、図版第58・61) C-4トレンチ南端から北流し、C-1トレンチで大きく「L」字に屈曲して西流する流路である。規模は、C-4トレンチ付近で幅約1.0m、深さ約0.3mの断面「U」字形を呈す。C-1トレンチ付近では、幅約1.2m、深さ約0.3mの断面「U」字形を呈す。主軸方向は、N26°Wで北流し、屈曲後N90°Wで西流する。埋土内から須恵



第65図 C地区遺構配置図



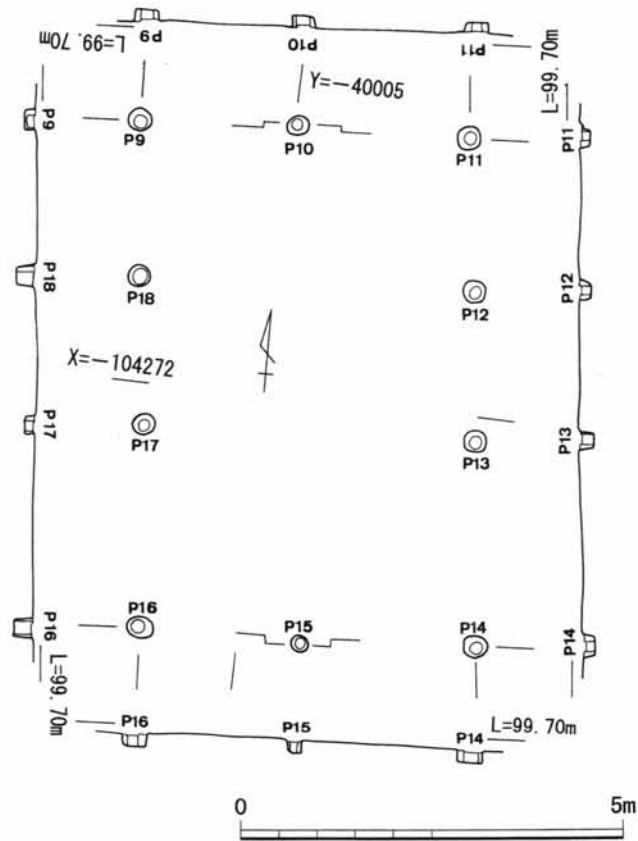
第66図 縦穴式住居跡SH03(上図)、縦穴式住居跡SH05(下図)実測図



第67図 溝S D01・02・04堆積状況図

器片(第19図89~98)や土師器片(第79図100~103)が出土した。また、C-1トレンチ西端部から緑釉陶器皿(第79図101)と須恵器椀の体部外面に「田中」と書かれた墨書土器(第79図103)が出土した。今回の調査地である馬路付近には「田中」という地名は存在しない。馬路中心部から南方約1.5kmの河原尻西部に田中という集落が存在するが、調査地からの距離は約2km離れる。これらのことから、墨書文字については不明である。

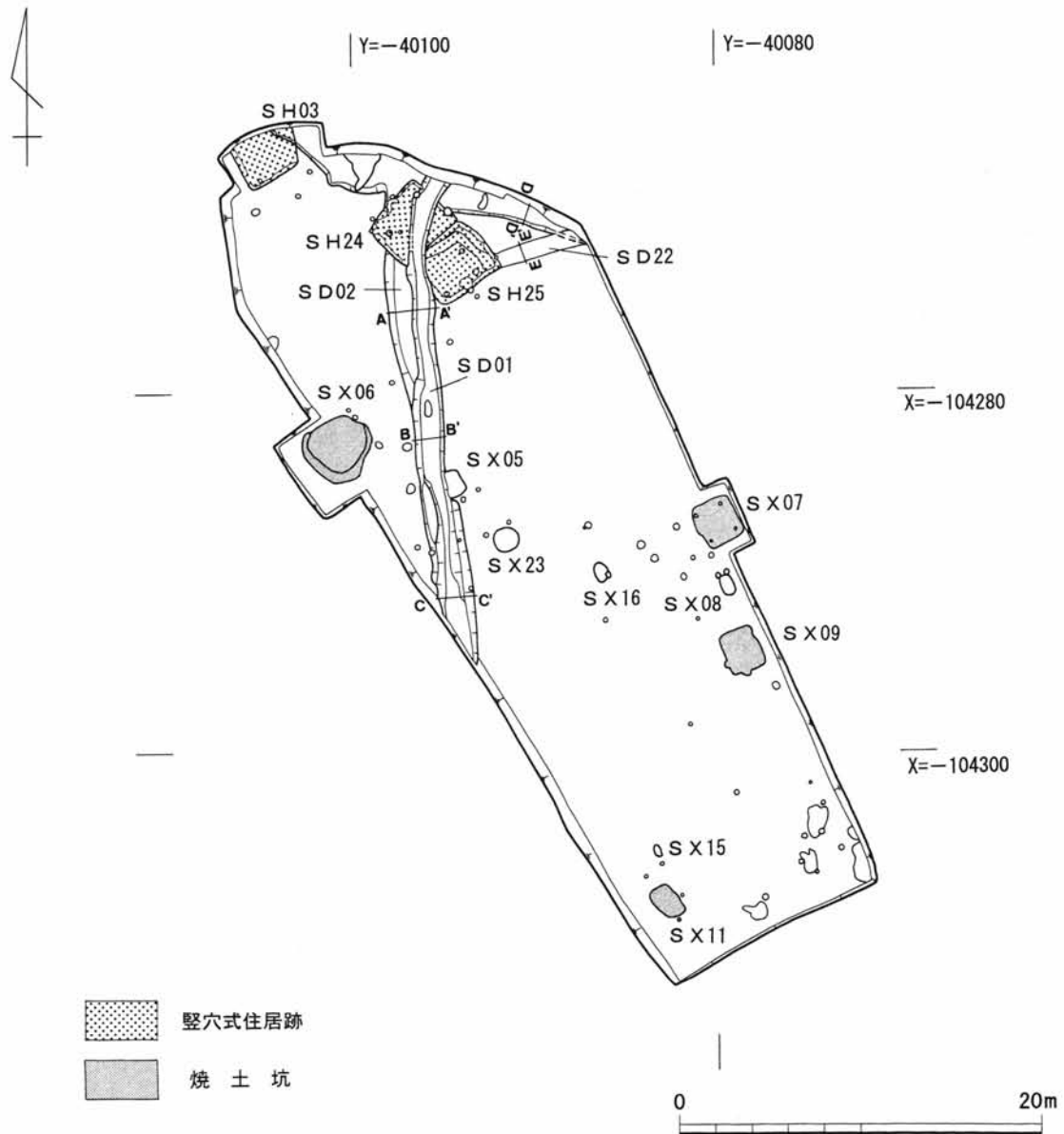
溝S D02・04(第65・67図、図版第62) 竪穴式住居跡S H05の東側から北西方向にまっすぐ流れる溝である。溝の北半はS D02を切る形でS D04があり、南端は規模の異なる溝がS D02へ合流する。検出状況から、当初は北流する溝S D02が設けられ、その後東側から幅の狭い溝がS D02と合流し、同時にS D02の改修が行われたことがわかった。このような状況から、合流する幅の狭い溝と改修された溝をS D04とした。S D02の規模は幅約2.4m、深さ約0.65m、主軸方向はN34°Wを測る。S D04は、S D02と平行する部分で幅約1.7m、深さ約0.6m、主



第68図 掘立柱建物跡S B19実測図

軸方向N34°Wを測る。合流地点以南のSD04は、幅0.4~0.5m、深さ約0.4m主軸方向N35°Wを測る。C地点出土遺物の大半は、これらの溝から出土した。SD02からは、弥生時代中期後半~奈良時代後半にかけての土器が出土し、主に奈良時代後半の土器が多量に含まれていた。SD02はこの時期の溝と考える。SD04からは、古墳時代後半~平安時代後半までの土器が出土した。主に奈良時代後半~平安時代前半にかけての土器が大半を占め、この時期の遺構と考える。このことから、この時期がSD02の改修時、SD04の併設時期と考えられ、平安時代後半まで存続したと思われる。

掘立柱建物跡SB19(第68図、図版第60) C-1トレンチ中央部で検出した。規模は、2間(4.3m)×3間(6.6m)の床面積28.38㎡で、主軸方向はN7°Wとほぼ真北を向く。柱掘形は直径0.2~0.35m、深さ0.15~0.25mで、柱穴は直径約0.2mであった。この建物は、非常に小規模な



第69図 D地区遺構配置図

柱穴からなり、柱穴間の距離も一定でないことから、小屋的な施設と思われる。柱穴内の出土遺物はなく、時期不明である。

(4) D地区(第69図、図版第46)

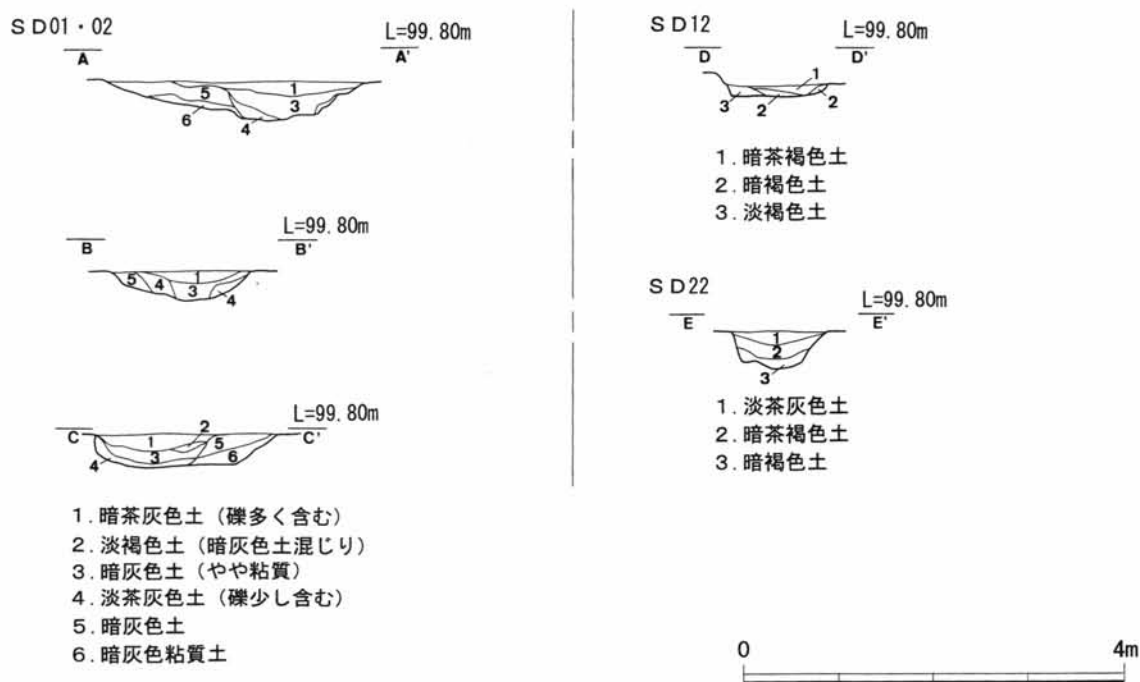
調査トレンチは、調査範囲内の西端部に位置する。この地点は、低段丘上の北西端部にあたり、北側と西側の水田面との比高差は約1.8mを測る。

各時期の遺構は、現地表面より約0.15mで検出した。主な遺構として竪穴式住居跡3基(SH03・24・25)、溝4条(SD01・02・12・22)、焼土坑4基(SX06・07・09・11)、不明土坑5基(SX05・08・15・16・23)、ピットを検出した。遺構の時期は、古墳時代・飛鳥時代・鎌倉時代以降の遺構に分けられる。また、北側に集中している遺構に関しては、遺構の切り合いの順序から、SD02・12・22→SH24→SH25→SD01という順に造られたと考えられる。

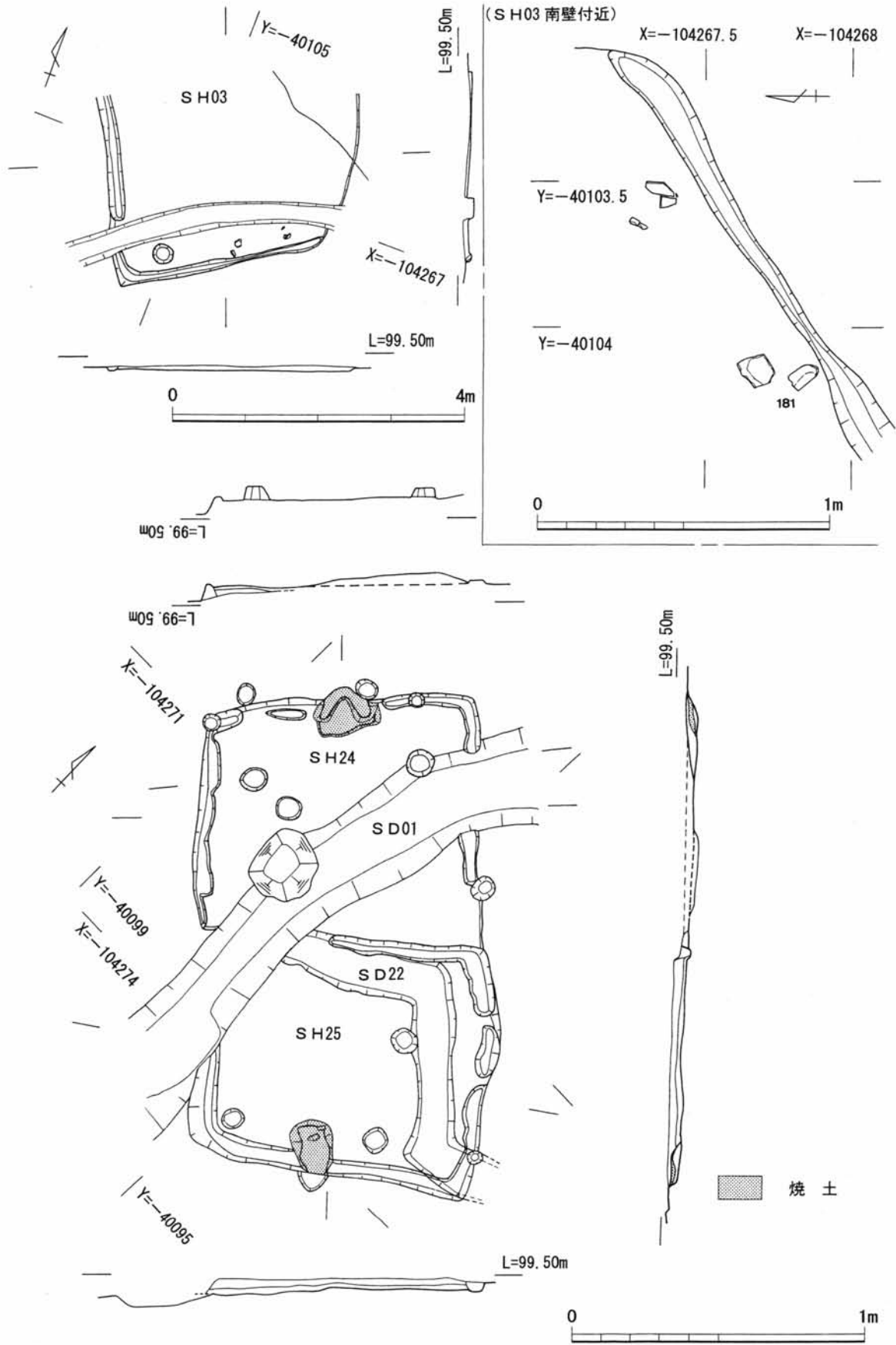
①古墳時代

溝SD02(第69・70図、図版第69) 溝SD01に切り込まれて検出された南北方向の溝である。SD01によって溝の幅は不明であるが、深さは約0.2mを測る。また、SD02は竪穴式住居跡SH24・25、土坑SX05にも切り込まれた状態で検出しているため、最も古い時期の遺構と考えられる。埋土からは、弥生時代後期の土器や石庖丁片(第82図189)なども混じるが、須恵器の小片や布留式土器(第82図175)などが出土している。

溝SD12(第69・70図) トレンチの北端で検出した東西方向の溝である。溝の北側は調査地外のため検出できなかったが、溝は南から北に向かって緩やかに傾斜しているため幅が広い溝か、もしくはトレンチの北側に急な段差もみられるため、地形の傾斜変換点である可能性も考えられる。また、西側の竪穴式住居跡SH03の床面より下層で溝の続きが検出できるため、SH03よりは古い段階の溝であることがわかった。遺構検出面から底までの深さは約0.1mを測る。溝の底



第70図 溝SD01・02・12・22堆積状況図



第71図 竪穴式住居跡SH03・24・25実測図

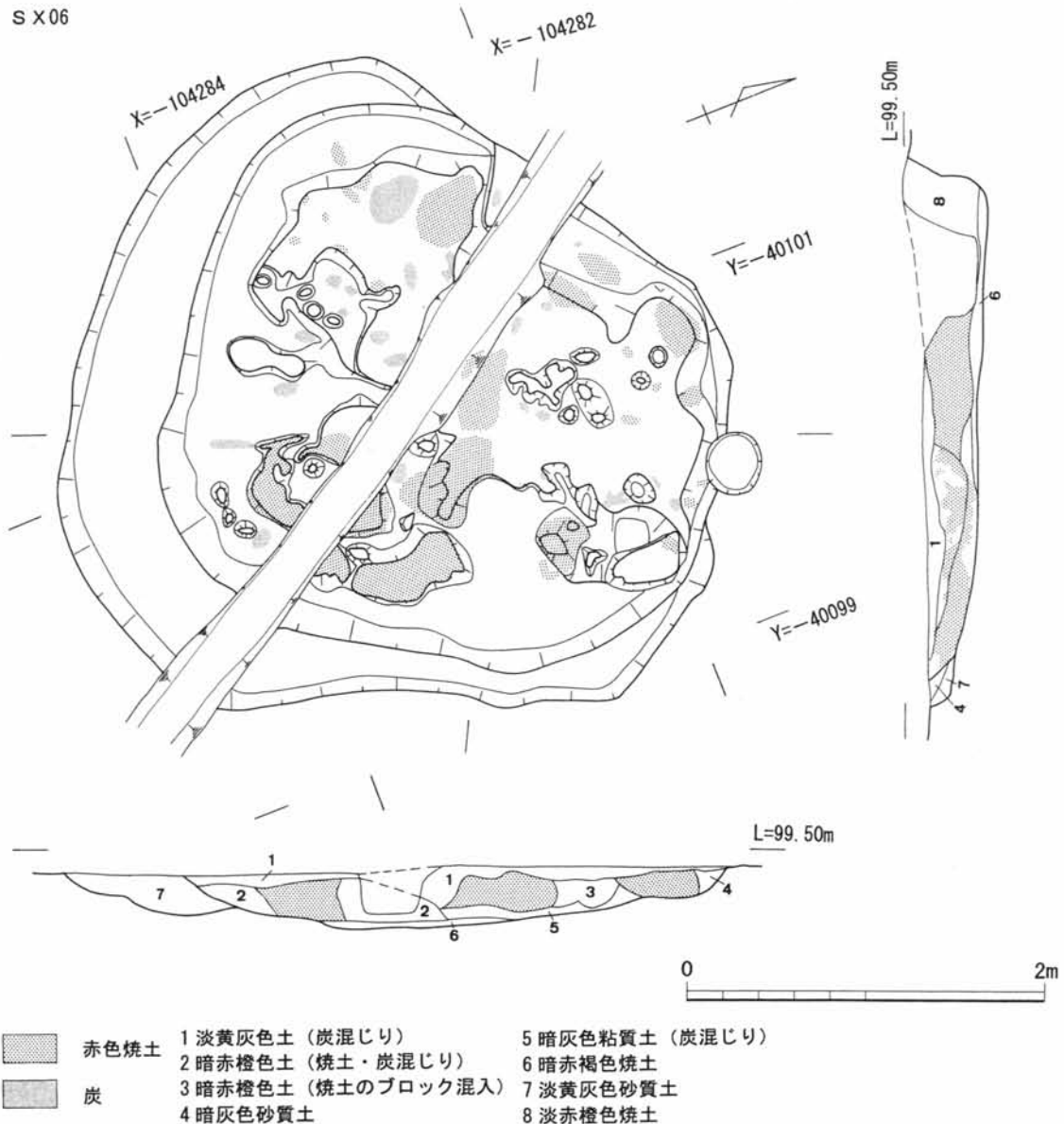
からは甕(第82図176)の破片が出土している。

溝S D22(第69・70図) トレンチの北側で検出した東西方向の溝で、最大幅は約1m、深さ約0.4mを測る。溝の断面形は、逆台形を呈する(第70図)。この溝は、竪穴式住居跡S H25の床面下層で検出されており、S H25より古い溝であることがわかった。この溝は、住居跡の下層部分で複雑に屈曲しているが、溝の性格は不明である。

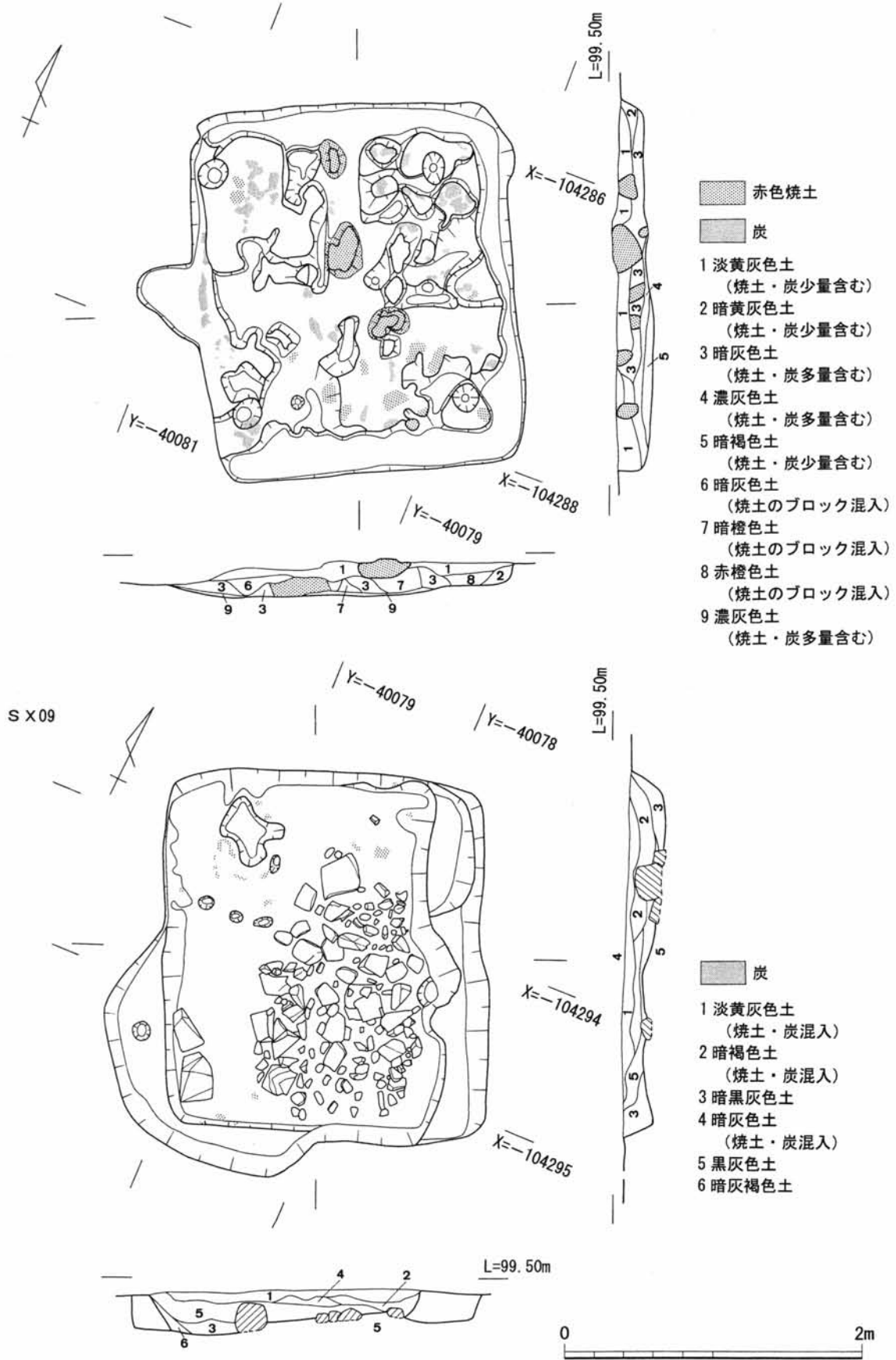
②飛鳥時代

竪穴式住居跡S H03(第71図、図版第63) トレンチ北端で検出した。規模は東西が約1.75m、南北は検出した長さが約1.3mを測るが、北側が調査地外にのびているため検出できなかった。周壁溝は、西辺と南辺で検出し、幅約0.1mを測る。主軸方位はN26°Wである。検出面から床面までは約0.2m、周壁溝も約0.25mの深さしか残っていなかった。おそらく後世に削平を受けたと思われる。南辺の中央に焼土がみられるが、削平が著しいため竈であったかは不明である。遺

S X06



第72図 焼土坑S X06実測図



第73図 焼土坑 S X 07・09実測図

物は、焼土の周辺で土師器片(第82図181)が出土した。

竪穴式住居跡 S H24(第71図、図版第63・64) トレンチ北側で、竪穴式住居跡 S H25と重なった状態で検出した。切り合い関係では、S H25に南辺が切られていることから S H24がより古い段階に造られたことがわかる。規模は東西が約1.95m、残っている南北の長さは約1.48mを測る。検出面から床面までは約0.05mを測る。周壁溝は北辺・西辺・東辺で検出し、幅約0.12m、深さ約0.09mを測る。主軸方向はN42°Wを向く。大部分は後世の遺構である溝 S D01・02によって破壊されているが、北半分には周壁溝と支柱穴が2基、北辺中央には竈が残っていた。

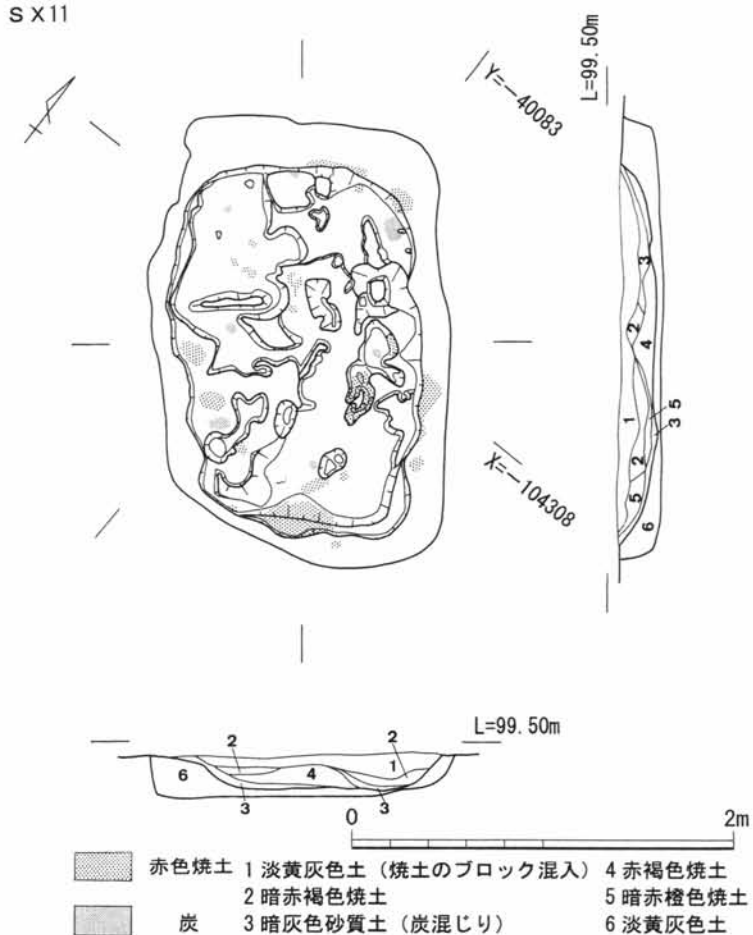
竪穴式住居跡 S H25(第71図、図版第64・65) 竪穴式住居跡 S H24の南辺に重なった状態で検出した。東西が約2m、南北が約1.65m、検出面から床面までは約0.09cmを測る。主軸方向はN36°Wを向く。また、南辺中央には竈と思われる焼土が残っていた。周壁溝は四辺で検出し、幅約0.14m、深さ約0.07mを測る。遺物は、焼土周辺で須恵器の杯身(第82図173)や鉄製の刀子(第82図187)などが出土した。

③鎌倉時代以降

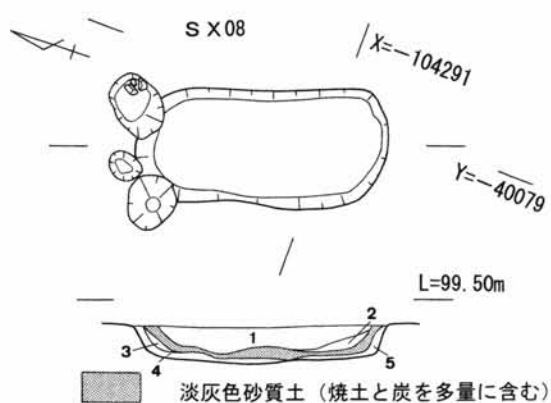
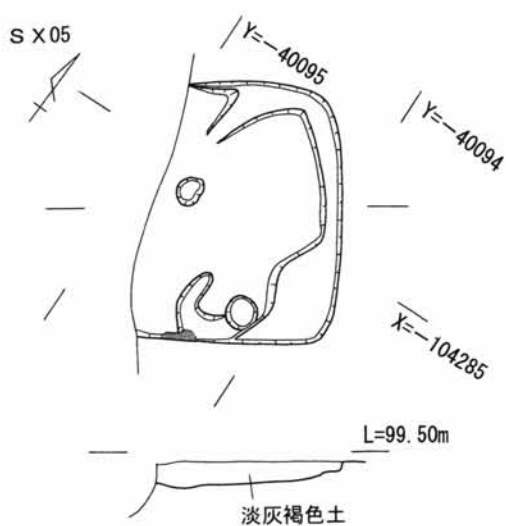
溝 S D01(第69・70図、図版第69) トレンチの北西側で検出した南北溝で、最大幅約2m、深さ約0.4mを測る。この溝は、溝 S D02や竪穴式住居跡 S H24・25、土坑 S X05などの遺構を切り込んで造られているため、**S X11** 最も新しい時期の遺構と考えられる。

焼土坑 S X06(第72図、図版第65) やや東西に長い楕円形を呈し、東西の長さ約3.6m、南北の長さ約3.45m、深さ約0.35mを測る。土坑の埋土は、赤く硬化した焼土が堆積し、床面には炭化層と焼けた硬化面を検出した。

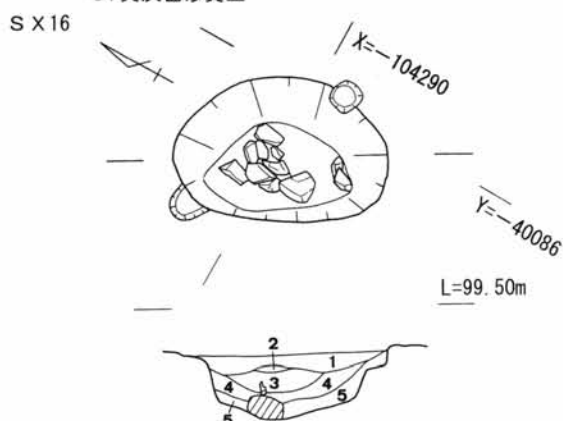
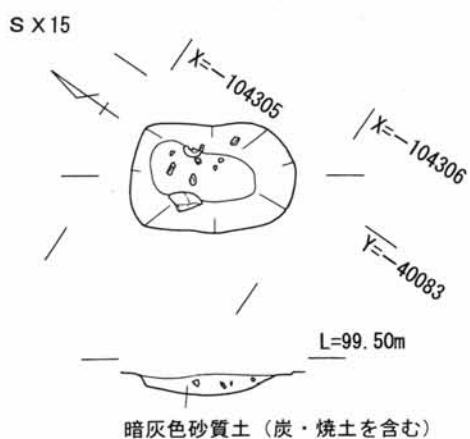
焼土坑 S X07(第73図、図版第66) 南北にやや長い方形を呈し、東西の長さ約2.15m、南北の長さ約2.45m、深さ約0.25mを測る。埋土には炭化物が混入する赤く焼け硬化した層が堆積していた。土坑内の各隅には直径約0.2mの円形の柱穴が存在する。焼土層か



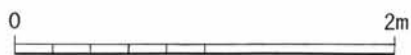
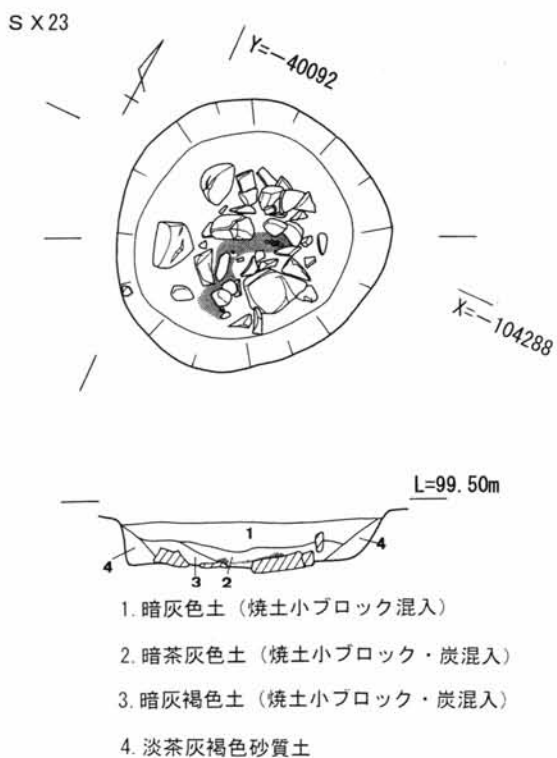
第74図 焼土坑 S X11 実測図



1. 淡黄灰色砂質土 (焼土と炭が少量混じる)
2. 淡茶灰色砂質土 (焼土と炭が少量混じる)
3. 淡黄灰色砂質土
4. 暗黄灰色砂質土
5. 黄灰色砂質土



1. 淡茶灰色土 (焼土・炭混入、やや砂質)
2. 暗茶灰色土 (焼土・炭混入、やや砂質)
3. 暗茶褐色土 (焼土・炭微量混入、やや砂質)
4. 暗褐色土 (焼土・炭微量混入、シルト)
5. 暗灰色土 (焼土・炭混入)



第75図 不明土坑 S X 05・08・15・16・23実測図

ら土師器の小皿(第82図179)が出土している。

焼土坑 S X 09(第73図、図版第66・67) 南北にやや長い長方形を呈する土坑で、東西の長さ約2.15m、南北の長さ約2.45m、深さ約0.28mを測る。埋土は赤く焼け硬化していた。また、土坑底部には拳大の石が多量に敷き詰められていた。

焼土坑 S X 11(第74図、図版第67) 南北に長い長方形を呈する土坑で、東西の長さ約1.55m、南北の長さ約2.35m、深さ約0.22mを測る。埋土は赤く焼け硬化していた。

不明土坑 S X 05(第75図) 南北の幅約1.4m、深さ約0.14mを測る土坑である。しかし、西側を溝 S D 01によって切り込まれているため、東西の規模は不明である。埋土は、赤く硬化した土はなかったが、底部に5mm程度の炭化物層が堆積していた。

不明土坑 S X 08(第75図) 南北にやや長い楕円形を呈する土坑で、東西の長さ約0.6m、南北の長さ約1.3m、深さ約0.2mを測る。埋土は、底部に1cm程度の炭化物層が堆積していた。埋土からは土師器の小皿(第82図178・180)が出土した。

不明土坑 S X 15(第75図、図版第68) 南北にやや長い隅丸方形を呈する土坑で、東西の長さ約0.55m、南北の長さ約0.85m、深さ約0.12mを測る。埋土には、炭が混入しており、底からは土師器の小皿(第82図183)や16世紀後半～17世紀初め頃に属すると思われる播鉢(第82図185)、鉄製の釘(第82図188)などが出土した。

不明土坑 S X 16(第75図、図版第68) 南北にやや長い楕円形を呈する土坑で、東西の長さ約0.75m、南北の長さ約1.13m、深さ約0.35mを測る。底部には、拳大の石があった。

不明土坑 S X 23(第75図、図版第68) 最大径が約1.45mの円形を呈する土坑で、深さ約0.25mを測る。底部には、拳大の石が無造作に敷き詰められており、埋土中には炭化した木材が混入していた。

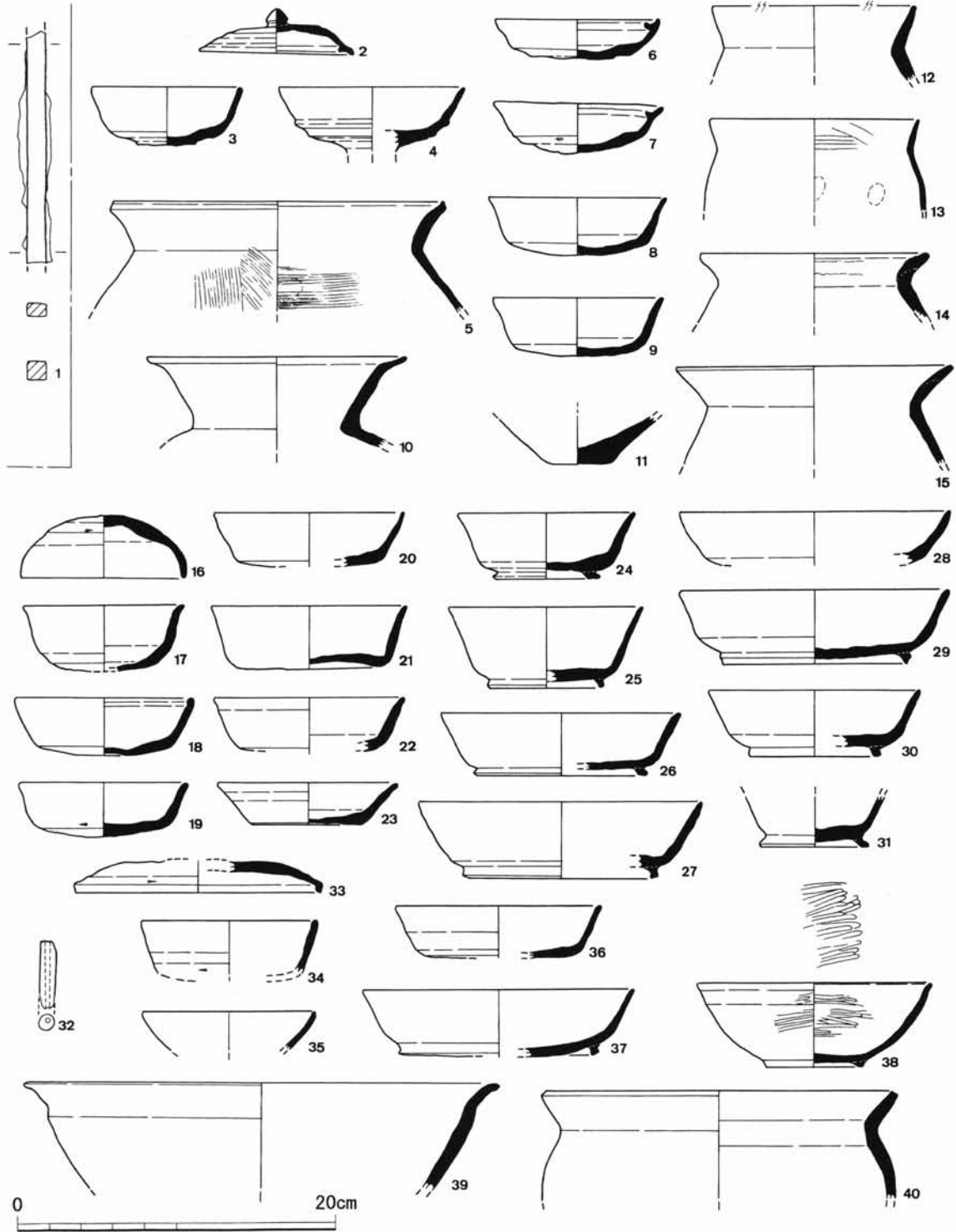
3. 出土遺物

1) A地区(第76・77図、図版第70～72)

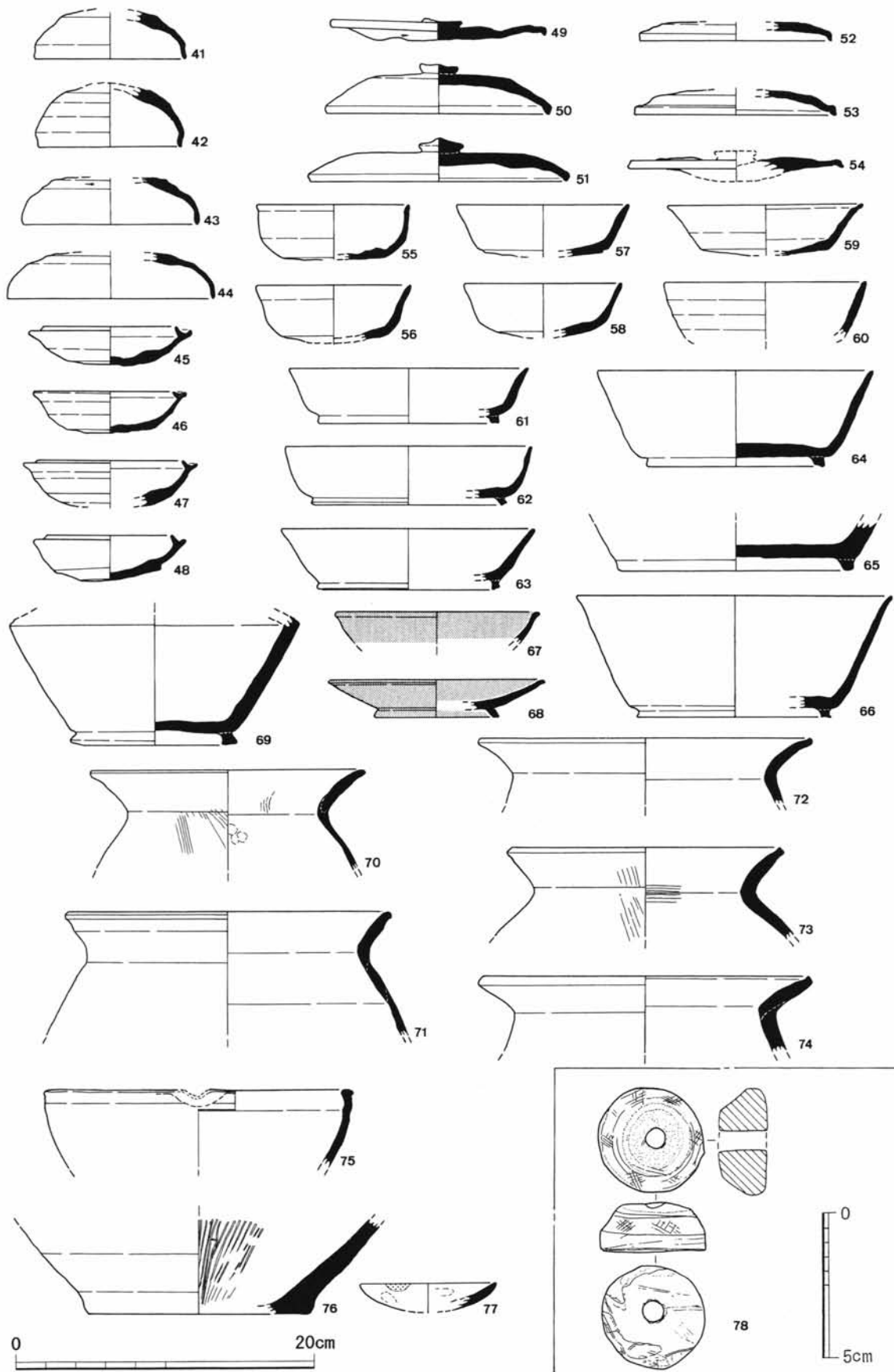
1は竪穴式住居跡 S H 508から、2は竪穴式住居跡 S H 509から、3～5は竪穴式住居跡 S H 518から、6・8・9は竪穴式住居跡 S H 519から、7は竪穴式住居跡 S H 511から出土した。12～15は焼土坑 S X 517から、10・11は溝 S D 501から、16～31は溝 S D 502から出土した。32～40は柱穴出土で、32～34は掘立柱建物跡 S B 512に、35は掘立柱建物跡 S B 513に伴う。41～78は、包含層出土遺物である。

1は、0.6cm四方の鉄製品である。上部が0.4×0.6cmと長方形になることから、ヤリガンナの一部と考える。2は、口縁部にかえりをもつ蓋である。天井部にわずかに歪みが見られるが、平坦な天井部中央につまみを貼り付ける。口縁部に重ね焼き痕がある。3は、わずかに丸みを帯びた底部と上方に立ち上がる体部からなる。底部外面はヘラ切り後簡単なナデ仕上げを、内面は一定方向のナデ仕上げを施す。4は高坏の杯部で、立ち上がり半ばに1条の弱い凹線がめぐる。2～4はT K 217並行期のもので、S H 509・518の時期を示す。5は土師器甕である。体部外面は

縦方向の、内面は横方向のハケ調整が施される。口縁端部は内上方に尖る。6・7は須恵器杯身である。ヘラ切り後雑なナデ仕上げした底部から外上方に立ち上がる。端部に低い受け部が付く。TK217並行期のものである。8・9はわずかに丸みを帯びた底部から外上方に立ち上がる。底部はヘラ切り後簡単なナデ仕上げを施す。TK217並行期のもので、SH511・519の時期を示す。10・11は弥生土器甕である。口縁部は「ハ」字状に広がり、端部でさらに外反する。底部は外上



第76図 出土遺物実測図(1) (1はS=1/1)



第77図 出土遺物実測図(2)

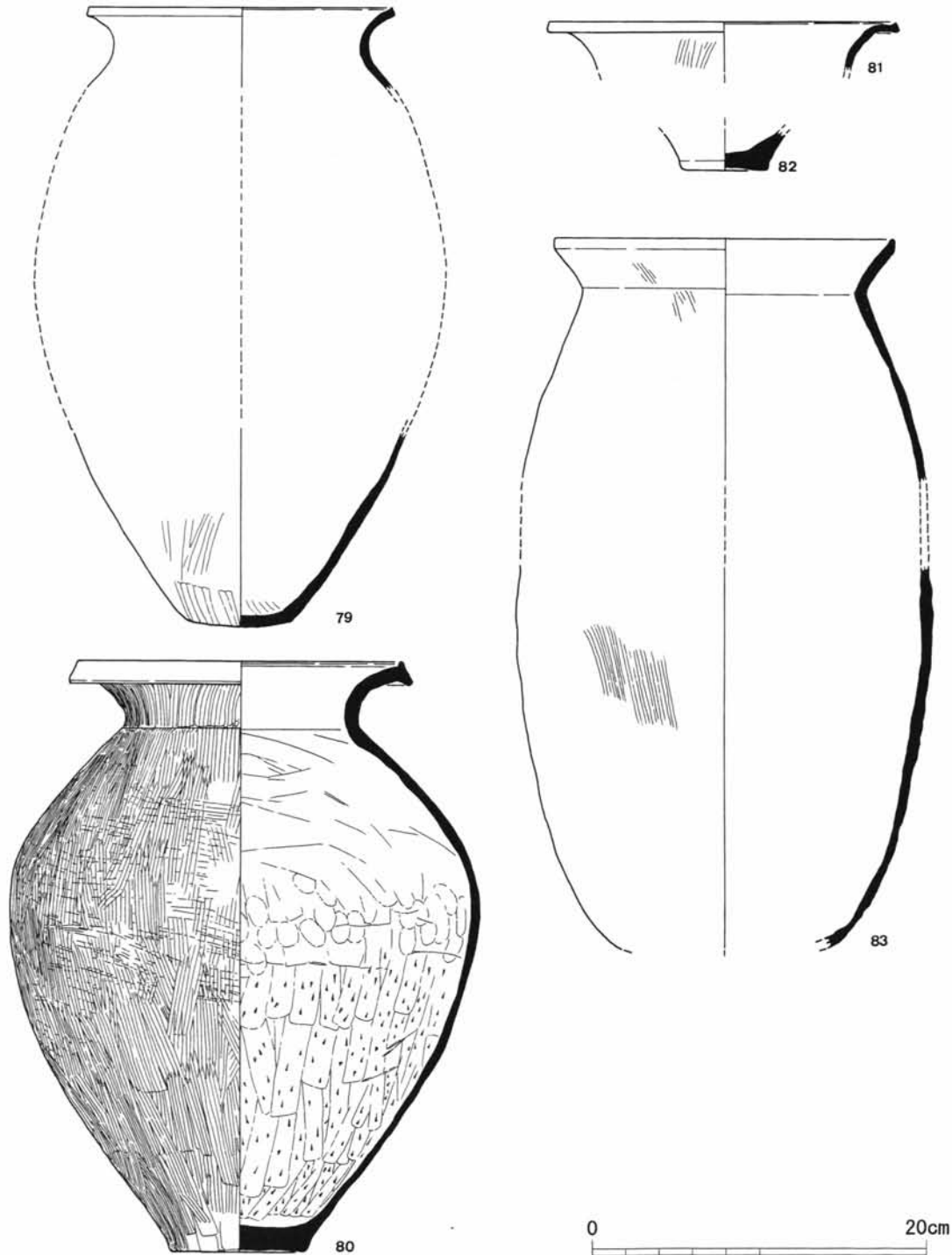
方にまっすぐ立ち上がる。その形態から畿内第Ⅳ様式並行期とする。12～15は土師器甕である。いずれも磨滅しており調整は不明であるが、体部外面には縦方向のハケ調整が、内面には指圧痕が部分的にみられた。口縁部が緩やかに屈曲するものと大きく「く」字状に屈曲するものがある。16は須恵器杯蓋である。天井部から口縁部まで丸みを帯びており、天井部外面は雑なヘラケズリ後ナデ仕上げしている。17～23は須恵器杯身である。いずれも平底で、丸みを帯びた底部から外上方に立ち上がるもの17～19と、平坦な底部から立ち上がる20～23がある。18は口縁端部内面に1条の凹線がめぐる。23は立ち上がりが大きく開く。平底の杯はTK217並行期～8世紀後半のものとする。24～30は輪状高台を貼り付けた杯である。口径の小さいもの24・25と、26・27と、体部下半で「く」字状に屈曲する28～30がある。底部はヘラ切り後ナデ仕上げ、体部はロクロナデする。8世紀後半とする。31は須恵器壺である。ヘラ切り後高台を貼り付ける。9世紀前半とする。32は土錘である。一部欠損する。径1cm、残存長4.2cm、孔径0.3cmを測る。33は須恵器蓋である。平坦な天井部と「S」字状に外下方降り、端部は下方に尖る。天井部中央は欠損しているがつまみが付く。34は須恵器杯である。高台の有無については不明である。33・34は9世紀前半とする。35は白磁である。わずかに内湾しながら立ち上がる。中国製で11世紀前半～12世紀代と考える。^(註4)36～40は掘立柱建物跡周辺の柱穴から出土したものである。36・37は須恵器杯である。平底のものと高台を貼り付けたものである。37は歪んでおり、底部中央が高台端より下がる。9世紀前半である。38は黒色土器碗である。SB512の柱穴P8によって切られた柱穴P73から出土したものである。底部内面と体部内外面にヘラミガキが密に施され、底部外面に「×」状にヘラ記号を施す。断面三角形の高台をめぐらす。口縁端部内側に1条の凹線がめぐる。11世紀前半である。39は土師器で、広口の鉢である。口縁部で大きく外反する。40は土師器甕である。器壁が磨滅しており調整不明である。41～44は須恵器蓋である。41・42は口縁端部が内向する。また、44は口径が他に比べて大きい。これらについては杯身の可能性が高いが、一律に蓋として記述した。45～48は須恵器杯身である。丸みを帯びた底部から外上方に立ち上がり、立ち上がりは短い。TK209～217並行期のものである。底部はヘラ切り後簡単なナデ仕上げを施す。49～54は須恵器蓋である。52・53については、つまみの有無は不明である。平坦な天井部からわずかに内湾しながら外下方に降りる。口縁端部は下方に尖る。9世紀前半のものである。56～60は、須恵器杯である。平坦な底部から外上方に立ち上がる。9世紀前半のものである。55は平坦な底部と上方に立ち上がる体部からなる。口縁端部がわずかに外反する。須恵器埴である。61～66は輪状高台を貼り付けた須恵器杯である。器高の低い杯や器高の高い杯がある。9世紀前半のものである。67は、緑釉陶器碗である。口縁端部は外反する。緑釉は淡緑色である。68は緑釉陶器皿である。平坦な底部から「ハ」字状に大きく開く。口縁端部は丸い。緑釉は緑色である。69は須恵器壺で、長頸壺の一部と思われる。ヘラ切り後ナデ仕上げする。底部縁に外下方に張る高台が付く。70～74土師器甕である。大半のものは器壁が磨滅しており調整不明であるが、わずかに体部外面は縦方向のハケ調整、内面は指圧痕が残っていた。75・76は陶器鉢と搗鉢である。75は口縁部が肥厚し端部は平坦である。注ぎ口をもつ。75は18世紀代、76は17世紀代である。77は土師器皿である。

口縁端部に煤が付着する。78は、紡錘車である。全体に磨滅する。側面に斜格子文を施す。径3.5cm、高1.6cm、孔径0.7cmである。

2) B地区(第78図、図版第70)

79~83はB地区から出土した遺物である。79は土坑S K05出土、80は溝S D03出土、81は土坑S K06から、82は遺構精査時に出土、83は土坑S K04から出土した遺物である。

79はS K05から出土した弥生土器で中期に属する甕である。出土した破片は口縁と底部と体部

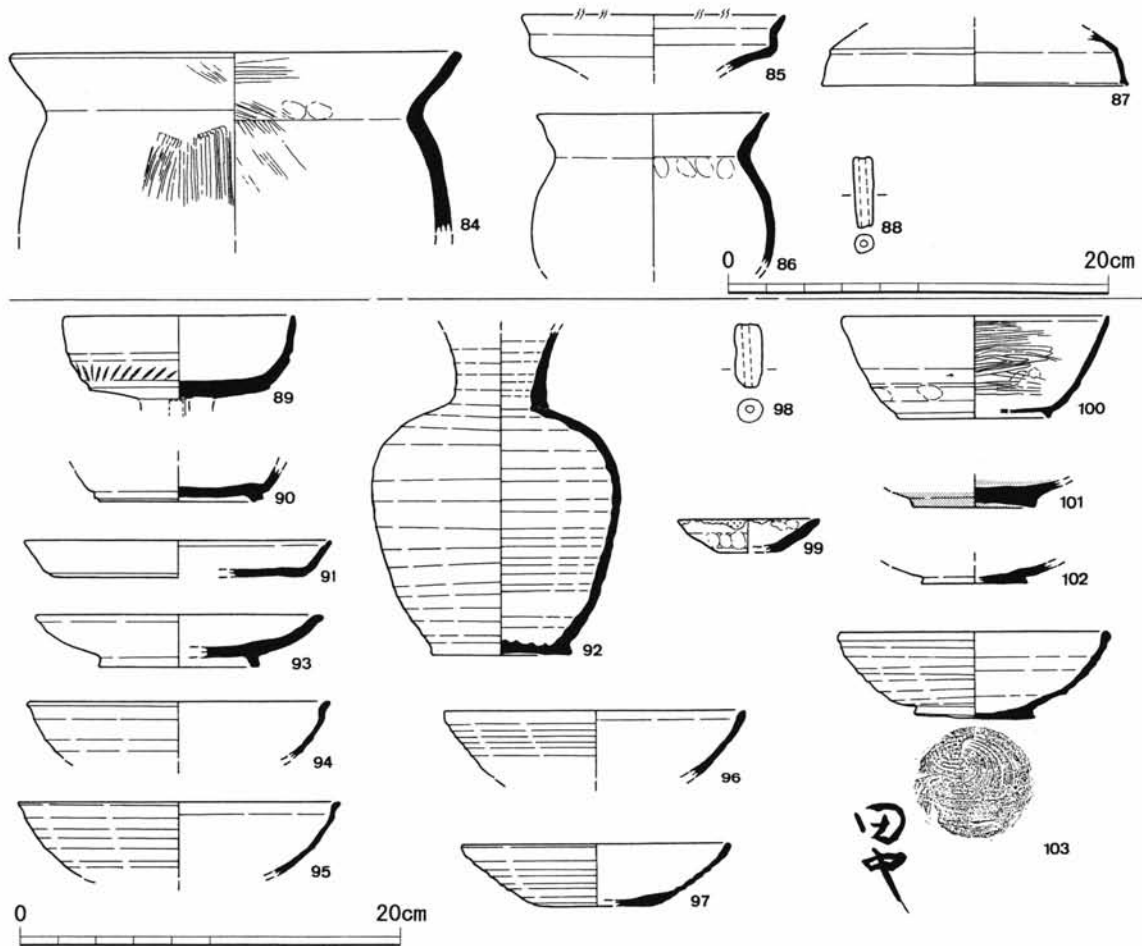


第78図 出土遺物実測図(3)

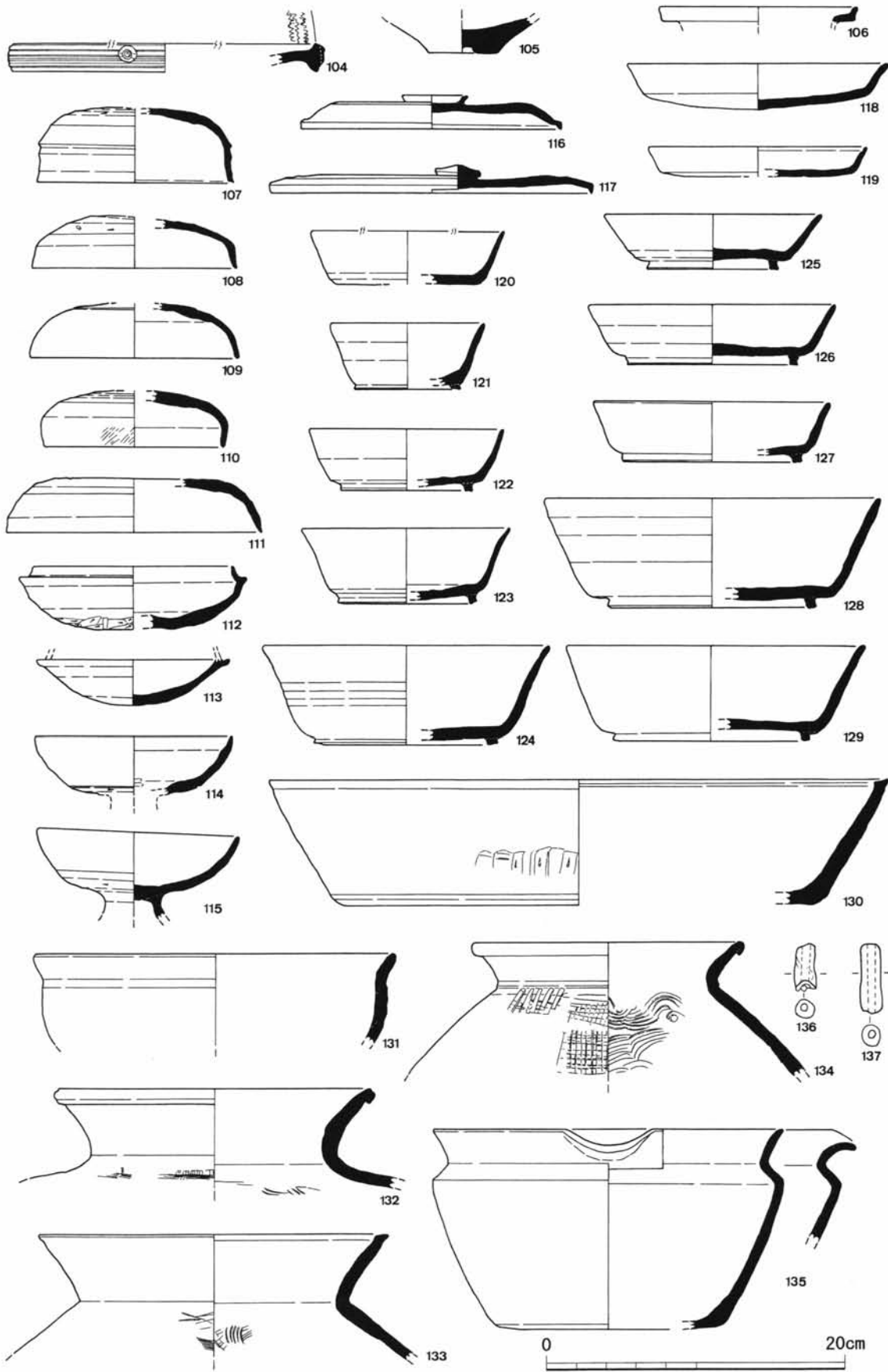
の破片であるが、体部の破片は細片になっており接合が困難であった。口縁の口径は18.2cmを測る。外面は磨耗が著しく底部のハケ目調整の一部分のみ残存している状態である。また、内面の調整においても同様の状態であった。80は、方形周溝墓の南辺の溝であるS D03から出土した弥生時代中期後半に属する甕である。出土状況は周溝の底部に割れて重なった状況で出土していた。接合するとほぼ完形に復原することができた。口縁部の口径は19.8cm、器高は36.6cmを測る。外面の調整はハケ目、内面はヘラケズリがみられる。周溝の底部から出土していることから、この方形周溝墓の築造時期を示す資料であると考えられる。81はS K06から出土した弥生土器の甕の口縁部である。口径は11cmを測る。82は遺構精査時に出土した弥生土器の甕の底部である。底部径は5.2cmを測る。83はS K04から出土した弥生土器の甕である。器形は長胴を呈する。内外面ともに磨耗が著しく調整は一部分しか残っていない状態である。口縁部の口径は20.2cm、器高は推定復原で43cmを測る。また、底部の形状については底部の破片が出土していないため不明である。

3) C地区(第78～81図、図版第70～72)

84は竪穴式住居跡S H03から、85～88は竪穴式住居跡S H05から出土した。89～103はS D01出土で、104～137は溝S D02出土で、138～149は溝S D04出土である。150～164は溝S D02・04検出時に出土した。165～171は精査時出土のものである。S D02出土遺物の大半は、流路の南半



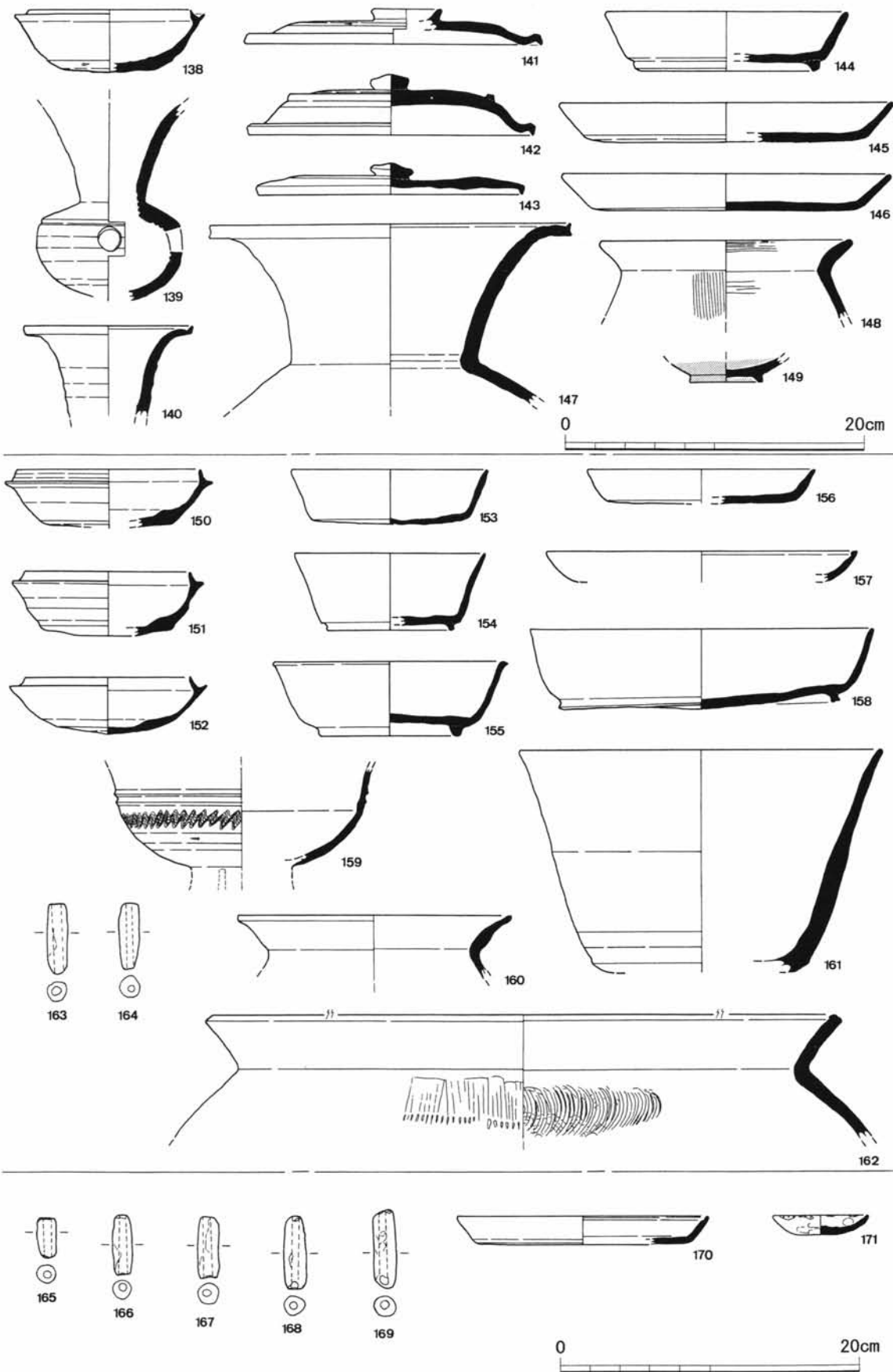
第79図 出土遺物実測図(4)



第80図 出土遺物実測図(5)

分から出土したものである。

84はS H03竈付近の周溝内から出土した土師器甕である。体部内外面は縦方向のハケ調整を、口縁部内面には横方向のハケ調整を施す。口縁端部は平坦である。85は弥生土器片である。86は土師器甕である。住居内埋土から出土した。器壁は磨滅しており調整は不明である。87は須恵器杯蓋である。TK10並行期のものである。88は土錘である。径0.9cm、長3.6cm、孔径0.3cmを測る。89は、須恵器高坏の杯部で、底部外面に長方形の透かしが2か所みられる。90は、須恵器杯である。底部縁に高台を貼り付ける。91は須恵器皿である。口縁端部内面に凹線がめぐる。9世紀前半のものである。92は須恵器平底の壺である。卵形の体部と外上方に立ち上がる口縁部からなる。底部切り離しは糸切りである。93は須恵器皿である。内湾しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに外反する。底部は削り出し高台。94～97は須恵器椀である。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部はわずかに肥厚する。主としてミズビキ整形である。97はミズビキ整形後外面のみ棒状工具でミズビキ整形の際にできる凹凸を強調させている。いずれも10世紀後半とする。98は土錘である。径1.3cm、長3.4cm、孔径0.3cmを測る。99は土師器皿である。口縁端部に煤が付着する。100は黒色土器椀である。体部内面にヘラミガキが密に施される。101は緑釉陶器である。高台中央部をわずかに削り出す。緑釉は明黄緑色で、部分的に残る。102は須恵器椀の底部である。平底高台で糸切り痕が残る。103は須恵器椀である。体部外面に「田中」の墨書がみられた。糸切りによる平底高台で、体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚する。形態から10世紀後半とする。104～106は弥生土器片で、混入遺物である。107～111は須恵器杯蓋である。口縁部がわずかに内向する110や口径の大きな111は杯身である可能性があるが、ここでは蓋として記述する。107は口縁部外面に1条の弱い凹線がめぐり、天井部を丁寧にヘラケズリする。TK10並行期のものとする。108～111はTK43～209並行期のものとする。112・113は須恵器杯身である。器高が低く、立ち上がりの低いものである。底部外面は、112が静止ヘラケズリを施し、113はヘラ切り後未調整である。TK217並行期である。114・115は須恵器高坏である。脚部は欠損しており杯部のみである。内湾しながら立ち上がる。116・117は須恵器蓋である。116は輪状のつまみを有し、口縁端部は下方を向く。117は天井部に擬宝珠つまみが付く。中央から外れた所に貼り付く。口縁端部は下方を向く。118・119は須恵器皿である。平坦な底部と短く外上方に立ち上がる口縁部からなる。119は口縁端部内側に弱い凹線がめぐる。9世紀前半とする。120は須恵器平底の杯である。ヘラ切り後静止ナデする。121～129は須恵器杯である。輪状高台を貼り付ける。口径や器高の小さいもの121～123や器高の低いもの125～127、大型のもの124・128・129などがある。器形から8世紀後半～9世紀前半にかけてのものと思われる。130は須恵器盤で、口径41.6cmと大型のものである。底部外面下半に縦方向のヘラケズリがみられた。131は須恵器鉢である。器壁は肉厚で、口縁部で「く」字状に屈曲する。132は須恵器甕である。口縁部は大きく外反する。133は土師器甕である。口縁部が「く」字状に屈曲し端部は平坦である。134は須恵器甕である。135は須恵器鉢である。平底の底部から外上方に立ち上がる。口縁部が「S」字状に屈曲し、注ぎ口が1か所付く。136・137は土錘である。136は一部欠損し、径



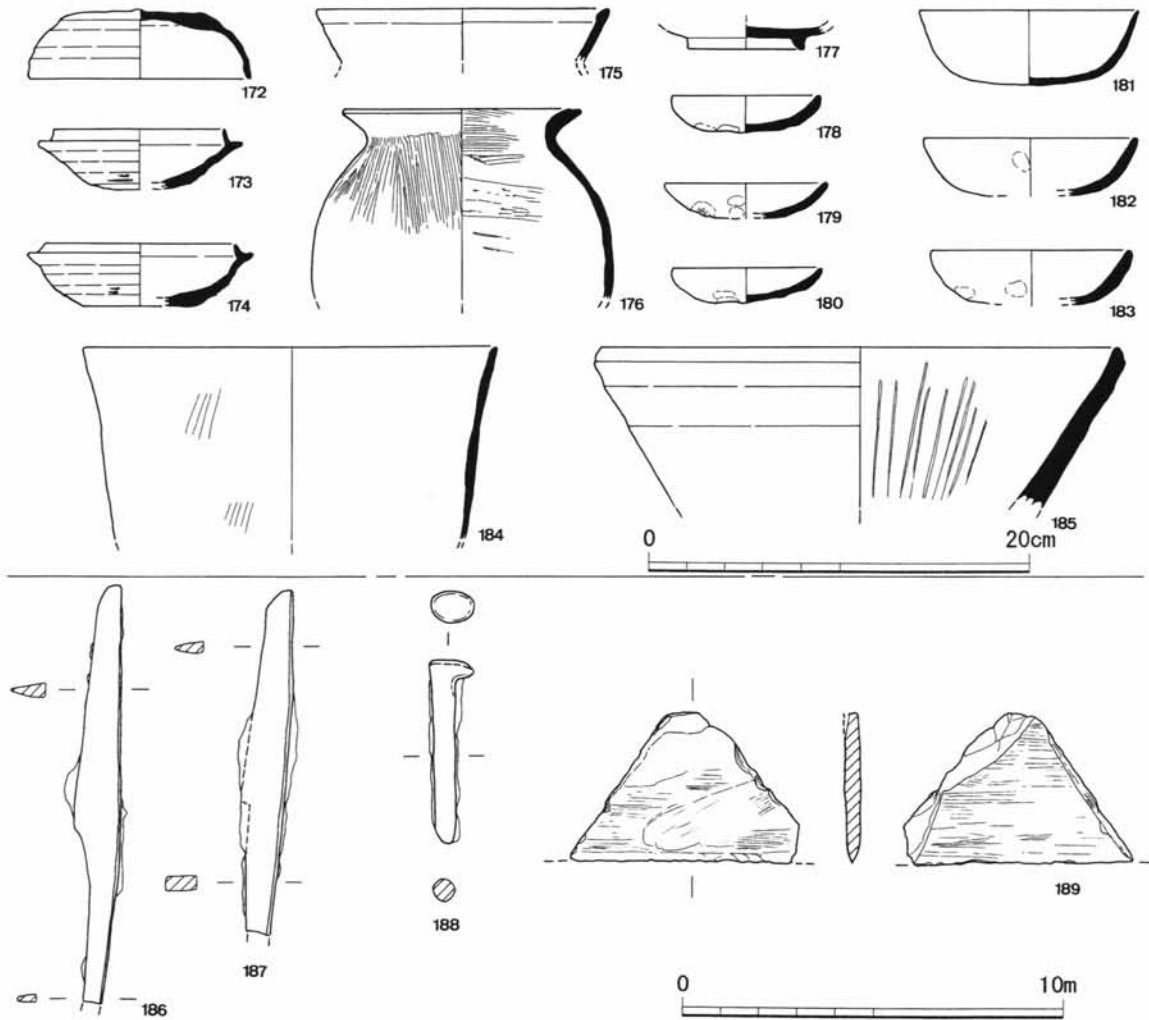
第81図 出土遺物実測図(6)

1.4cm、残存長3.2cm、孔径0.5cmを測る。137は、径1.3cm、長4.7cm、孔径0.5cmを測る。138は、須恵器杯身である。立ち上がりは短く立ち上がり、その形態からTK217並行期とする。139は、須恵器甕である。口縁部は欠損する。140は、須恵器壺の口縁部である。141は、輪状のつまみを貼り付けた蓋である。平坦な天井部と「S」字状に屈曲する口縁部からなる。端部は下方を向く。つまみは天井部中央から少しずれたところに付く。142・143は、擬宝珠つまみの付く蓋である。142は天井部縁に輪状の突帯が付く。8世紀後半から9世紀前半とする。144は、輪状高台の付く須恵器杯である。平坦な底部から外上方に短く立ち上がる体部からなる。145・146は須恵器平底の皿である。底部切り離しはヘラ切りで、その後簡単なナデ仕上げする。9世紀前半とする。147は、須恵器甕である。頸部径の小さなもので、口縁端部は上方に尖る。148は、土師器甕である。器壁は肉厚である。口縁部内面と体部外面に粗いハケ目がみられる。149は、緑釉陶器碗の底部である。内外面に緑色の緑釉を施す。150～152は、須恵器杯身である。立ち上がりは、短く内上方を向く。TK217並行期のものである。いずれも底部外面はヘラ切り後雑なナデ仕上げを施す。153は、須恵器平底の杯である。154・155・158は、輪状高台を貼り付けた杯である。8世紀末から9世紀前半とする。156・157は、平底の皿である。157は口縁端部が肥厚する。159は高坏の杯部で、口縁端部と脚部は欠損する。杯部上部に2条の突帯がめぐり、その下に波状文が施され、その下部からヘラケズりする。160は、土師器甕である。161は、須恵器鉢である。平坦な底部から外上方に真っ直ぐ立ち上がる。口縁端部は尖る。体部内外面はロクロナデ整形である。162は、須恵器甕である。口縁部は体部から「く」字状に屈曲し、短く立ち上がる。163は土錘である。径0.7cm、長2.4cm、孔径0.3cmを測る。164は土錘である。径0.7cm、長2.3cm、孔径0.25cmを測る。165は土錘で、一部欠損する。径0.7cm、残存長1.4cm、孔径0.3cmを測る。166は土錘である。径0.7cm、長2.0cm、孔径0.3cmを測る。167は土錘である。径0.7cm、長2.1cm、孔径0.3cmを測る。168は土錘である。径0.7cm、長2.5cm、孔径0.25cmを測る。169は土錘である。径0.8cm、長2.7cm、孔径0.3cmを測る。170は、須恵器皿である。口縁端部内側に1条の凹線がめぐる。171は、土師器皿である。口縁端部に煤が付着する。

4) D地区(第82図、図版第72)

172～189はD地区の出土遺物である。172・177は遺構精査時に出土、173は竪穴式住居跡SH25から、174は溝SD01から、175は溝SD02、176は溝SD01と溝SD12、178・180は土坑SX08から、179は焼土坑SX07から出土、181は竪穴式住居跡SH03から出土した遺物である。

172は、トレンチの南側精査時に出土した須恵器の杯蓋である。杯身の可能性もあるが、ここでは一律に蓋として記述した。9世紀前半に属するものと思われる。173はSH25から出土した須恵器の杯身である。174はSD01から出土した須恵器の杯身であるが、出土地がSH24・25と切り合う部分であるため住居に伴う遺物の可能性が考えられる。173・174はTK209～217並行期のものと思われる。175はSD02から出土した布留式土器の甕の口縁部と思われる。176は溝SD01と溝SD12から出土した土師器の甕である。口縁部の口径は12.4cmを測る。外面の調整はハケ目、内面にはヘラケズリの痕跡が残る。この土器の破片は、SD01とSD12から破片が出土して



第82図 出土遺物実測図(7)

いることから混入の可能性も考えられる。177はトレンチ北側での精査時に出土した遺物で、瓦器の高台部分である。暗文やミガキは磨耗が著しく不明である。178はS X 08から出土した土師器の小皿である。外面底部には指頭圧痕がみられる。179はS X 07から出土した土師器の小皿である。外面底部には指頭圧痕がみられる。180はS X 08から出土した土師器の皿である。外面底部には指頭圧痕がみられる。181はS H 03から出土した土師器の杯である。調整は内外面ともに磨耗が著しいため不明である。182はS X 23から出土した土師器の杯である。調整は内外面ともに磨耗が著しいため不明である。183はS X 15から出土した土師器の杯である。外面底部には指頭圧痕がみられる。184はS H 25から出土した土師器の鉢の口縁部と思われる。185はS X 15から出土した播鉢である。時期は16世紀後半～17世紀初め頃に属するものと思われる。186はS D 01から出土した鉄製の刀子である。これもまた出土地がS H 24・25と切り合う部分であるため、住居に伴う遺物の可能性が考えられる。187はS H 25から出土した鉄製の刀子である。188はS X 15から出土した鉄製品で釘と思われる。189はS D 02から出土した。石庖丁の破片と思われる。

4. ま と め

今回の馬路遺跡の調査では、弥生時代中期後半の方形周溝墓や土器を埋めた土坑や古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴式住居跡、平安時代前半の溝、平安時代後期の掘立柱建物跡、中世の焼土坑などの各時代の遺構を検出した。調査の結果、部分的ではあるが遺跡の様相が明確になった。

竪穴式住居跡は主にA・C・D地区に散見できた。いずれも残りが悪く、削平を受け消失した住居が更に存在したと思われる。A地区では平安時代後期の掘立柱建物跡群が竪穴住居を切る形で整然と並んでいた。これらの建物はS B 520を除いて総柱の建物であり、南北に整然と並んでいることから倉庫群と思われる。柱掘形は方形を呈し、その規模は比較的大きい。また、柱穴から11世紀前半の黒色土器(38)が出土した柱穴P 73を切って建物S B 512が存在する。また、中国製の白磁(35)が軸を同じくする建物S B 513から出土し、この白磁の時期が11世紀前半から12世紀代と考えられることから、この倉庫群の時期は11世紀前半以降である。

B地区においては、後世の削平によって遺構の残りが悪いものの弥生時代中期後半頃の遺構を検出した。方形周溝墓を検出したことによって、さらに東側において方形周溝墓を主体とする弥生時代の墓域が広がっている可能性が考えられる。

C地区のS D 01から出土した墨書土器の「田中」については、地名であるのか人名であるのかについては不明である。また、硯の出土もみられない。これらのことから、現段階では出土遺物から遺跡の性格について判断することは困難である。

D地区では、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴式住居跡や16世紀後半～17世紀初め頃に属する遺物が出土する焼土坑、炭化物や礫が混入する不明土坑、溝などを検出した。焼土坑は、埋土や底部は赤く焼け硬化し、埋土中から炭化材や炭層が検出されたことから、おそらく炭焼き窯であった可能性が考えられる。同じような状況の土坑がD地区に集中していることも興味深い。

以上のことから、微高地上には古墳時代後期～飛鳥時代にかけての竪穴式住居と、平安時代後期の総柱の建物である倉庫群が展開し、中世にはD地区付近に火を使用した何らかの工房跡が展開していたことが判明した。それぞれの時代の遺跡の規模・時期・性格については今後の周辺の調査に因るところである。

(村田和弘・岡崎研一)

(3) ^{みっかいち}三日市遺跡第3次

1. 調査経過

三日市遺跡は桂川東岸の低位段丘に立地する。今回の調査地は段丘西斜面に相当する。

三日市遺跡における現地調査は豆の収穫を待ち、11月10日より重機掘削作業を開始、11月18日

より人力による掘削作業を開始した。また、調査対象地からは瓦が随所から出土し、遺物取り上げに際しては小区画による取り上げ作業が必須と考えられたため、地区割杭設定作業を業者委託とし12月8日より地区割作業を開始した。この間、重機掘削段階で出土した瓦が丹波国分寺創建瓦であることが明らかとなり、保存を視野に入れた協議が実施された。以上の経過を経て京都府教育委員会の指導のもと面的な調査に先行して5本のサブトレンチを設定し調査を実施した。その結果、灰原と考えられる瓦の集積状況、不良品を廃棄したと思われる大型破片を主体とする瓦の集積状況を確認した。この成果から当調査地は瓦窯および瓦製作工房に近接する地点であると判断され、12月24日、協議が開催された。この協議結果をうけ、設計変更により現状で埋め戻し保存がなされることとなった。

以降の調査は京都府教育委員会と協議を重ね、必要最低限遺跡の性格を把握するだけの調査に留め、流路内約600㎡を掘削し、2月10日ラジコンヘリコプターにより空中写真撮影を実施した。2月13日には現地説明会を開催し多数の参加者を得ることができた。2月17日より真砂土による出土瓦保護のための人力埋め戻し作業を開始し、2月20日には調査機材の撤収、埋め戻し作業を完了し、平成15年度の調査を終了した。

平成16年度には真砂土の上を掘削した排土で埋め戻し、養生する作業を実施し、遺構・遺物保護のための埋め戻し作業を完了した。

2. 調査・整理の方法

調査に際しては、一定量の瓦が出土することが充分予想されたため、調査地内を世界測地系座標に基づくグリッドを設定し、各グリッドごとに層位的に瓦を取り上げることとした。グリッドは4m四方を単位とし、第84図に示すように地区割を行った。

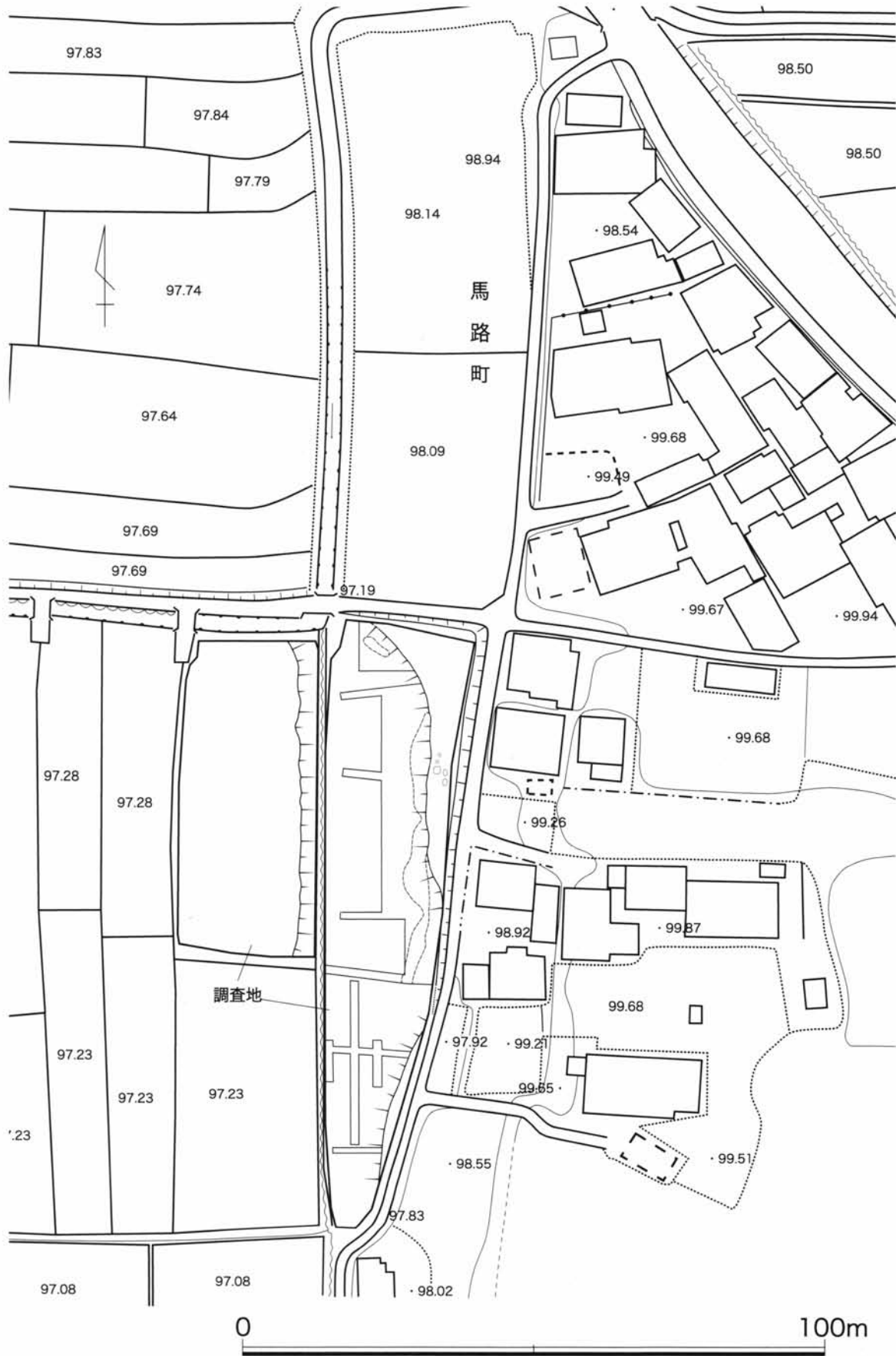
層位は、基本的層序の項で述べるが、基本的に流路埋土を上層・中層・下層の3分割として取り上げ作業を行った。

瓦の取り上げは、遺跡の保存が決定したため、原位置を留めている最下部のものについては、部分的にサンプリングを実施したに過ぎず、統計的処理を行うための全量採取を行うことはかなわなかった。また、出土瓦は総数遺物箱約300箱を数え、現在全ての出土瓦の分類作業を継続して実施している途中であり、統計的な処理を行っていない。そのため、本概要報告では代表的な瓦を提示するに留め、統計的な処理を終了した後、期を改めて報告を行いたい。

3. 調査概要

a. 基本的層序

調査地の基本的な層位は、耕作土・床土・遺構面である。表土から遺構面までの深さは約30cmと浅い。遺構面は東側では淡黄褐色砂礫層がベースを形成し、流路の西側では暗灰色粘質土がベースを形成する。西側の暗灰色粘質土内には縄文晩期・弥生中期に属する遺物が少量ながら包含され、浅い流路状の痕跡を部分的に確認しているが、遺跡保存のため掘削作業を実施していない。



第83図 調査地位置図 (S = 1/1,000)

また、この下層は暗青灰色粘質土が堆積しているが、部分的に断ち割りを実施した結果、無遺物層であるものと判断した。

b. 検出遺構

三日市遺跡で検出した遺構には流路・焼土面・ピット・土坑などがある。ただし、遺跡保存が決定したため、各遺構の掘削作業自体は実施しておらず、遺構の性格や詳細な時期など不明瞭な部分を残している。以下、各遺構ごとに概要をのべる。

1) 流路 トレンチ中央部分で確認した最大幅約25m、検出長115m、検出面からの最大深さ1m以上を測る自然流路である。トレンチ北側では幅約12mと幅を減じている。流路底面は北から南に向け深くなっていることから水流は北から南にむけ流れていたものと考えられる。

流路内における基本的な層序は第86・87図に示すとおりである。掘削作業および遺物取り上げに関しては、概念的に、上層(第1・2層)・中層(第3層)・下層(第4層)として取り上げを実施した。

1層は暗灰褐色粘質土であり、瓦器を包含する。中世以降の堆積層と判断される。

2層は灰褐色粘質土を主体とし、黄灰色系の地山粒や礫を多量に含む層である。地山粒や礫は自然堆積によるものとは考えにくく、段丘裾部を崩すことによって生じた土層、すなわち人為的な整地土層であると考えられる。この層には多くの瓦・須恵器が包含されているが、2次的な移動を受けているものと判断される。

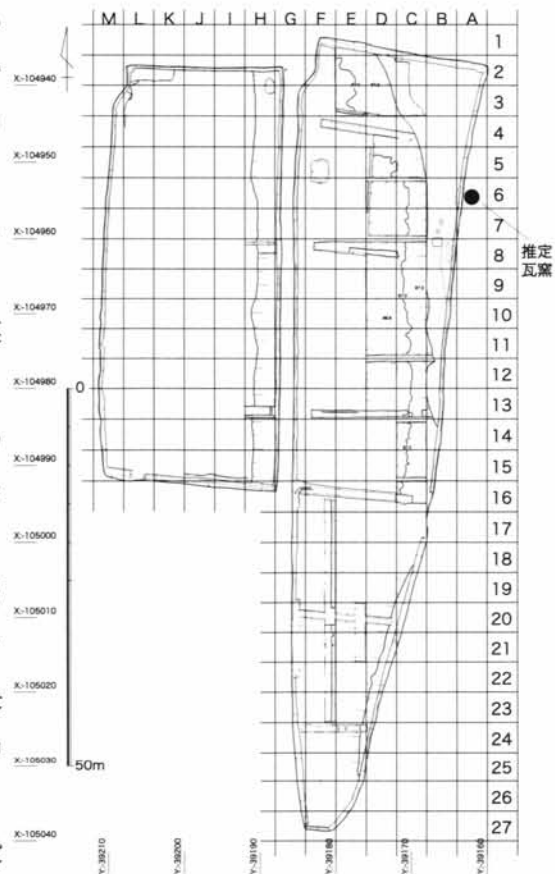
3層は暗灰色粘質土を主体とする堆積層である。瓦を多量に包含する。均質な粘質土で構成されている。基本的に3層最下層の瓦は原位置を留めているものと判断される。

4層は黄褐色砂層である。この層まで瓦が包含されていることから、瓦窯操業時の遺構面は、5～6層上面であると判断される。この砂層は、掘削を実施した全ての地区でみられるものではない。

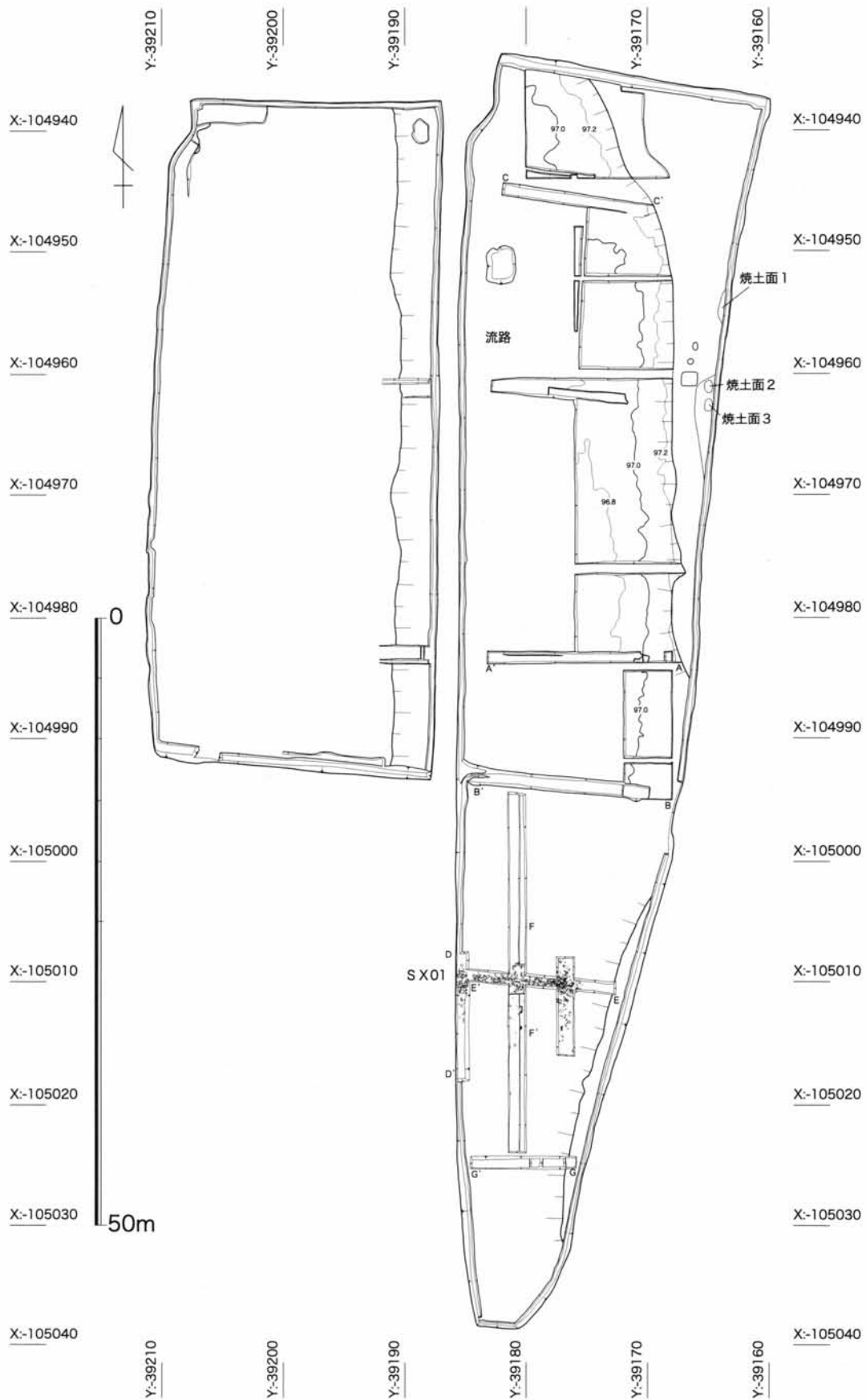
6層は黄灰色シルトを主体とする自然体積層である。わずかではあるが、TK217並行期の須恵器などが出土している。

7層は暗灰褐色粘質土を主体とする植物腐蝕土層である。自然木を多数包含する。同様の層はトレンチ西側でも確認されているが、詳細な堆積時期を決定するには到らなかった。なお、この層で掘削を中止しているため、本来の流路の深さは不明である。

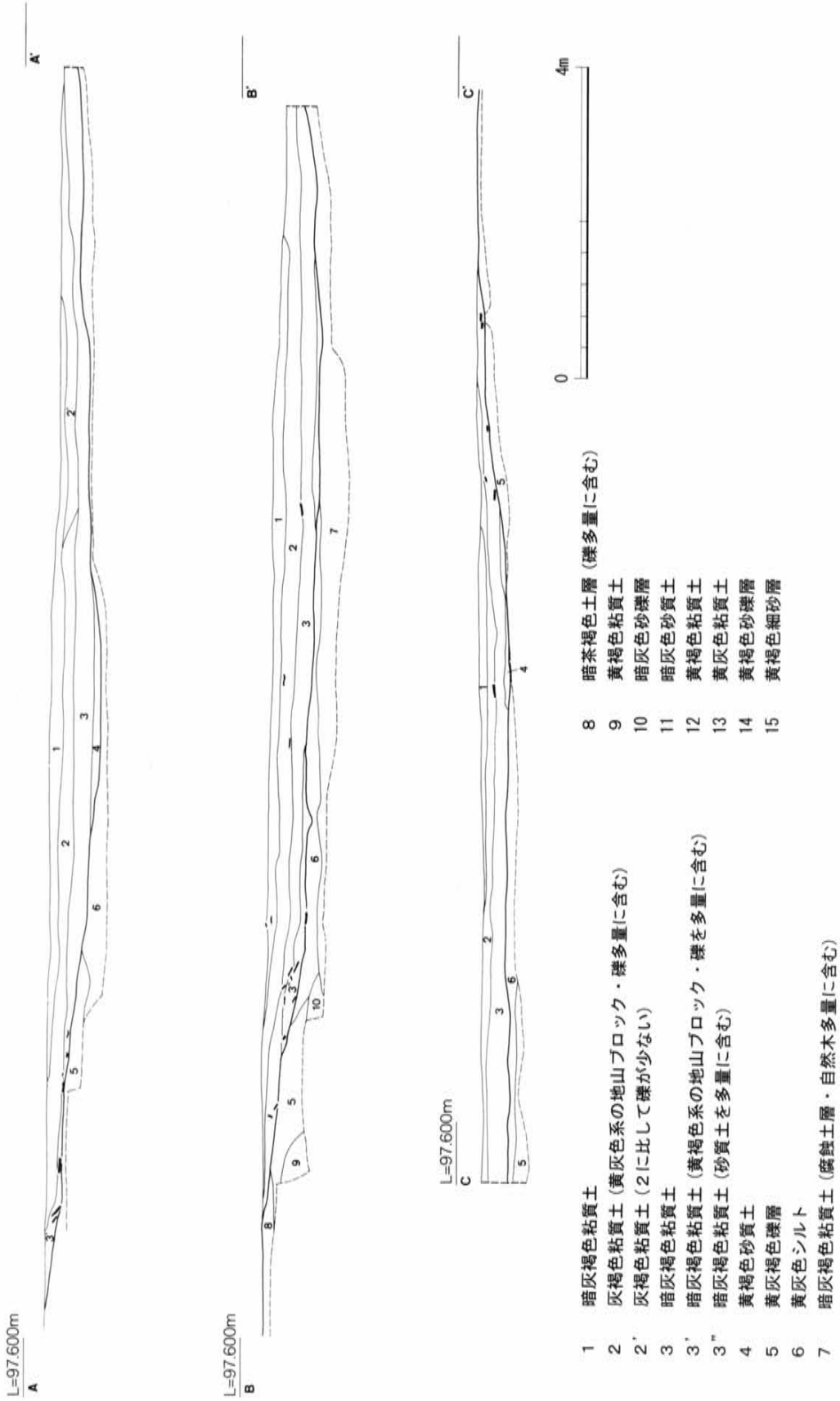
以上のような状況から、自然流路が一定程度埋没した段階で、瓦窯が操業され、東斜面から流路内へ



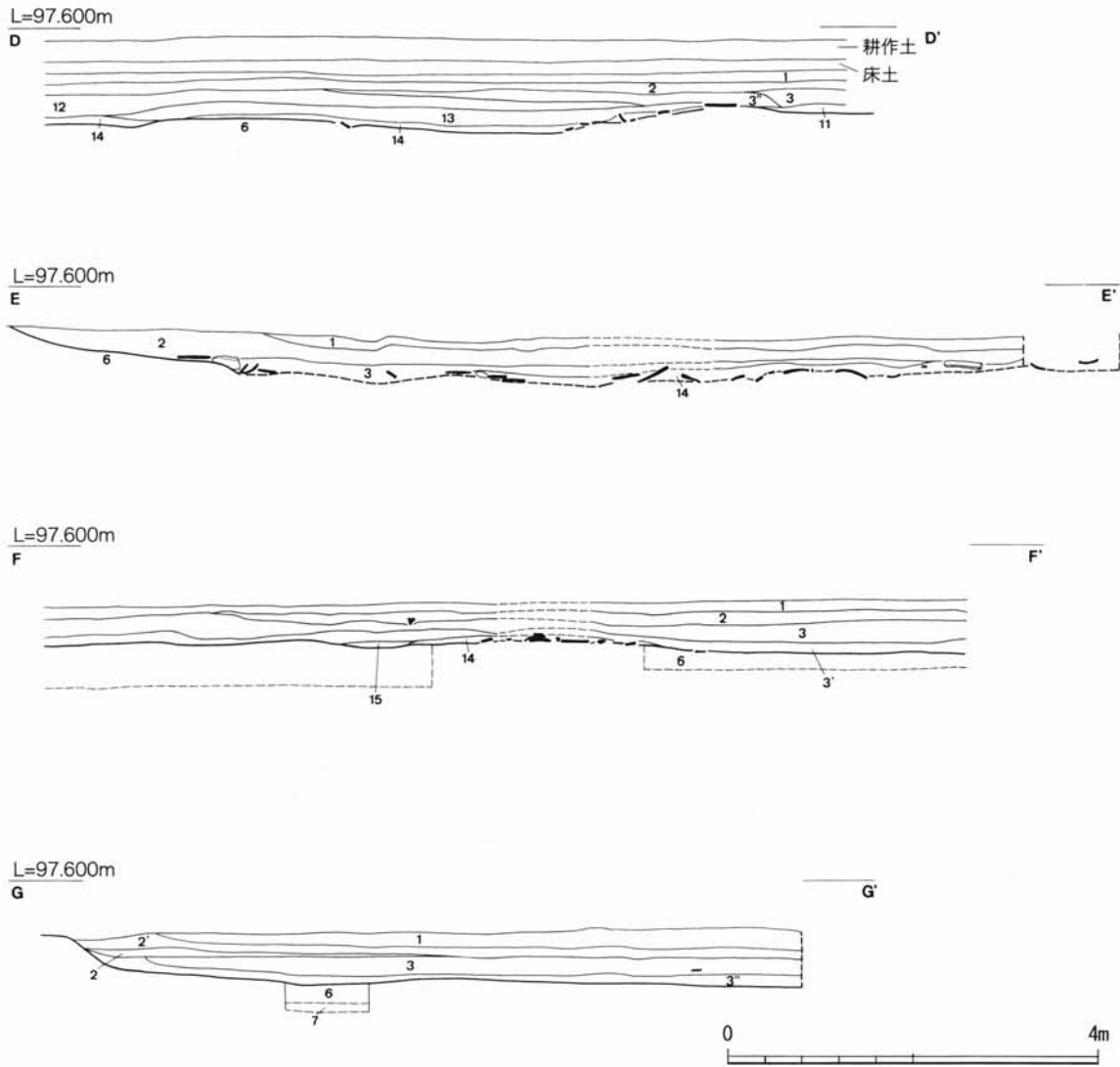
第84図 グリッド図



第85図 調査区平面図

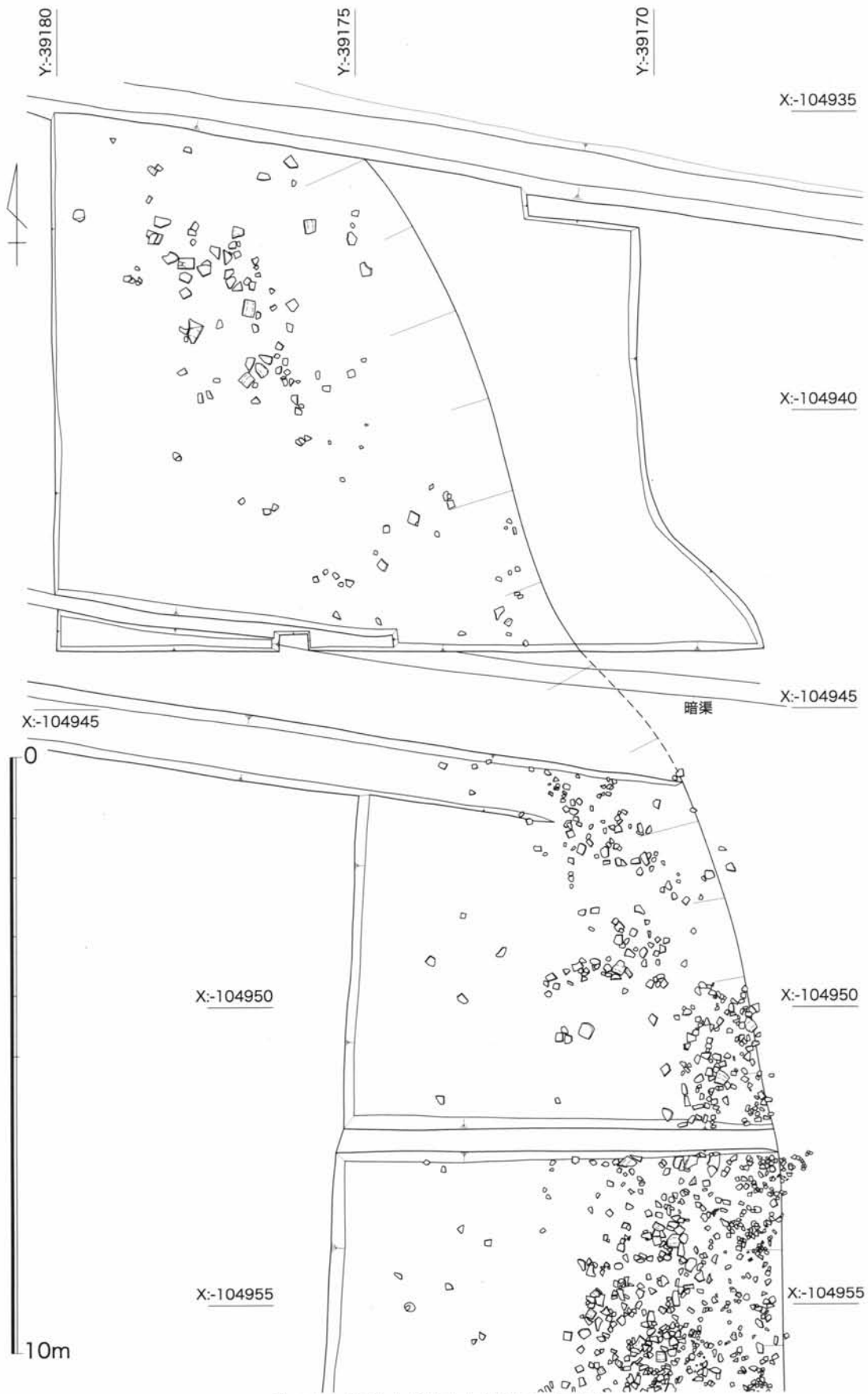


第86図 土層断面図(1)

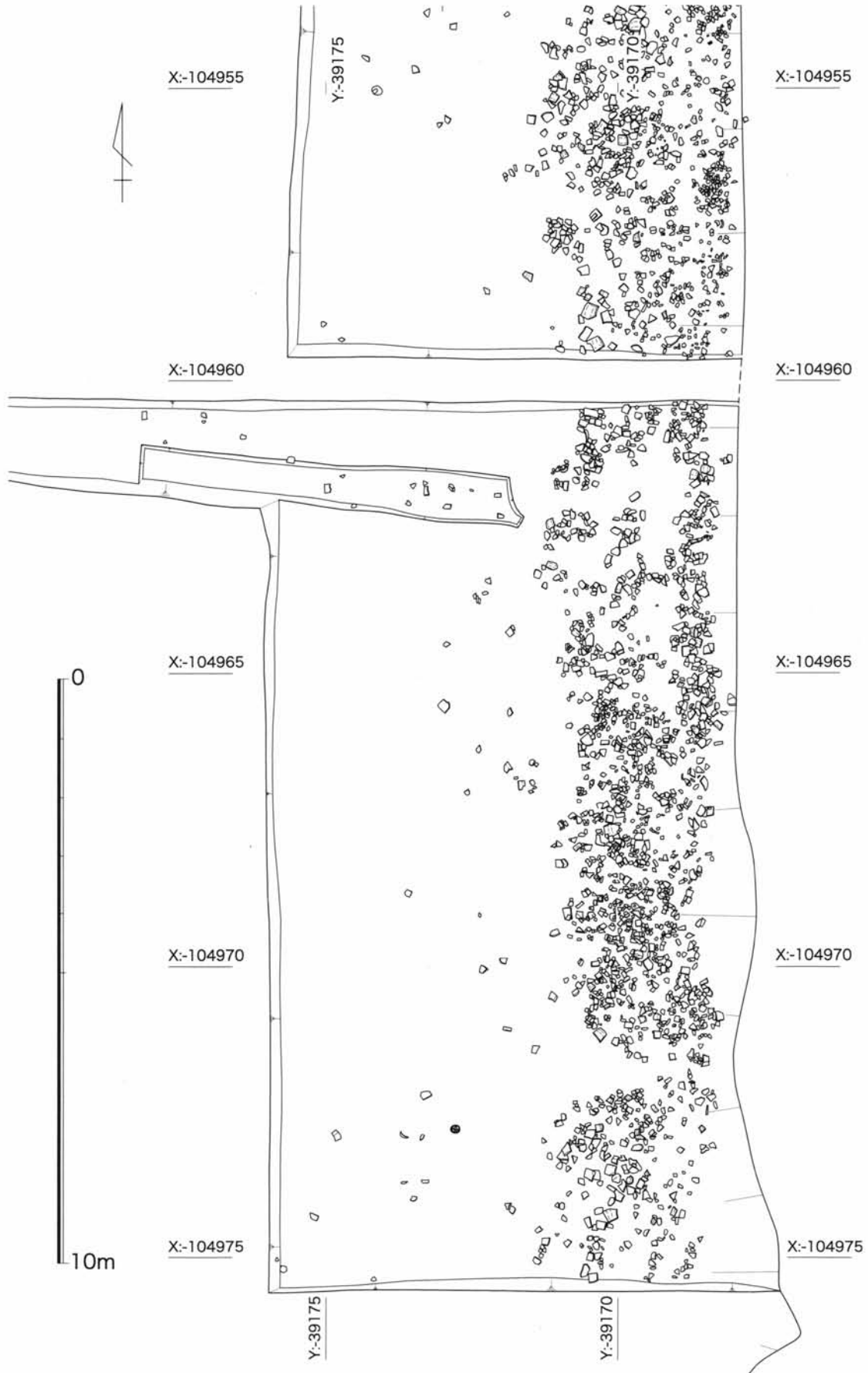


- 1 暗灰褐色粘質土
- 2 灰褐色粘質土 (黄灰色系の地山ブロック・礫多量に含む)
- 2' 灰褐色粘質土 (2に比して礫が少ない)
- 3 暗灰褐色粘質土
- 3' 暗灰褐色粘質土 (黄褐色系の地山ブロック・礫を多量に含む)
- 3'' 暗灰褐色粘質土 (砂質土を多量に含む)
- 4 黄褐色砂質土
- 5 黄灰褐色礫層
- 6 黄灰色シルト
- 7 暗灰褐色粘質土 (腐蝕土層・自然木多量に含む)
- 8 暗茶褐色土層 (礫多量に含む)
- 9 黄褐色粘質土
- 10 暗灰色砂礫層
- 11 暗灰色砂質土
- 12 黄褐色粘質土
- 13 黄灰色粘質土
- 14 黄褐色砂礫層
- 15 黄褐色細砂層

第87図 土層断面図(2)



第88図 流路内遺物出土状況平面図(1)



第89図 流路遺物出土状況平面図(2)



第90図 流路遺物出土状況平面図(3)

瓦は投棄されたものと判断される。

また、これらの埋土は全体的に粘質土系の土壌であることから流路の流速はさして速くなかったものと推測する。むしろワンド状の溜まりを呈していた可能性が高い。また、調査終了後に実施した流路埋土の花粉分析調査の結果から、中層を中心に、オモダカ属・ミズアオイ属など水生植物の花粉化石が検出されており、当時、滞水していた環境にあったと判断される。

流路内からは多量の瓦が出土した(第88～90図)。流路東肩部よりおおむね4 m程度の範囲で瓦は密に出土し、西肩よりでは出土量が少ない。また、上層・中層から瓦の出土をみたが、上層部分は二次的な堆積層と思われ、原位置を保っているものではない。

流路底面における瓦の出土状況を見てみると、E・D 2～3区流路底面では部分的に瓦が集中して出土した。他の地区に比して出土量は少ないが、大型の破片が多い傾向がある。また、C 4・5区では瓦の分布密度が低い、これは、亀岡市教育委員会が実施した磁気探査による窯体確認調査の結果、A 6区に瓦窯があると推測された点との関連を窺うことができる。すなわち、瓦窯本体はA 6区以南の東斜面に造営されている可能性が高く、瓦の分布密度は瓦窯の分布に対応しているものと考えたい。C 6区以南の瓦の出土量は概ね均等でありC 17区までは密に瓦が出土した。

それぞれの地区からの出土瓦などの傾向については統計的な分析を実施した後に検討したいが、出土瓦の大半は平瓦であり、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦は量的に少ない。また、瓦と共に須恵器・土師器が出土しているが、土師器の出土量は極めて少ない。出土状況から判断すると瓦と共に投棄されたものと判断される。また、瓦と共に少量ではあるが、炭・焼土塊などが出土している。このほか、窯壁・塼なども出土している。

以上のような出土状況や、亀岡市教育委員会の実施した電磁探査調査の成果と考え併せると、この多量の瓦は瓦窯の灰原であるものと判断される。

2) S X 01(第91図) 流路内に設定したサブトレンチNo. 4で検出した。当初は面的に瓦が分布するものと推定されたが、南北方向に断ち割りを実施したところ、瓦は面では広がらず帯状に展開することが明かとなった。また、瓦は整然と積まれているのではなく、比較的乱雑に積み上げられ、薄いところでは1枚、厚いところで6枚以上が積み上げられている。瓦とともに40cm程度の石材を用いている部位もある。使用されている瓦は平瓦が主体であるが、軒平瓦・軒丸瓦・鬩斗瓦も使用されている。変形、もしくは破損しているものが大部分であり、いわば廃物利用されたものとみられる。また、瓦を杭で固定している部分が数か所みられ、乱雑に積み上げながらも一定の固定を意図したことが推測される。

流路中心部では、このS X 01を境に南側で流路底面が深くなる状況を確認した(第87図土層)。サブトレンチでの調査に留めたため全容は不明であるが、検出した全長は長さ東西方向で10.5m、幅2.5m、流路底面からの高さ0.2～0.3mを測る。また、S X 01の南側では独立して打ち込まれた杭を2点確認している。

このように、S X 01は流路に直交する形で瓦を突堤状に積み上げた構造物であるといえる。こ



第91図 SX01平面図

の遺構の性格については、使用材や時期は異なるものの佐賀県壱岐原ノ辻遺跡や京都府舞鶴市志高遺跡で確認された港湾遺構に類似する構造物であることに注目したい。以上のような状況からこの遺構は、流水の調整施設であるとともに、簡易な舟着き場としての機能をもっていたものと考えたい。想像を逞しくすればS X 01の東で確認された杭は舟を固定するためのものとも考えることもできる。そうした視点から国土交通省の公表している空中写真を見てみると、当調査から丹波国分尼寺の西側まで自然流路が復原できると思われる。

3) 焼土面1 トレンチ北東部で検出した東西0.7m、南北2.5mにおよぶ焼土面である。磁気探査による瓦窯推定地の西に相当するため、瓦窯に関する焼土面である可能性が高い。

焼土面2・3 トレンチ東部で検出した小規模な焼土面である。周辺部分には土坑状の落込みと考えられる南北約8m、東西約2mの範囲で土色の変化が認められた。未調査のため詳細は不明である。

以上のほかにピット・土坑と考えられる土色変化を少数確認しているが、未掘削のため詳細は不明である。

また、近接して存在するであろう瓦窯の構造については、窯本体の調査を実施したわけではないため、詳細については不明である。しかしながら、流路内から出土している窯壁片の中に、平瓦を積み、間をスサ入り粘土で充填した窯壁もしくは分煙柱の破片と思われる個体が多数存在することから、東斜面に存在するであろう瓦窯の構造は、瓦積みの壁体をもつ平窯であると判断される。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱307箱を数える。その大部分は瓦であるが、須恵器・土師器・弥生土器・縄文土器・瓦器・銭貨・鉄製品・石器などが存在する。

今回は統計的な分析が実施できていないため、完形に近い個体の特徴を概観し、三日市遺跡で生産された瓦の概要を記したい。

a. S X 01出土瓦(第92～99図)

S X 01から出土した瓦には軒丸瓦(第92図1)・軒平瓦(2～4)・丸瓦(6)・平瓦(7～14)・鬩斗瓦(15)・特殊瓦(5・16)がある。遺跡保存のため、トレンチ西壁部分の瓦と、露呈していた軒平瓦・軒丸瓦のみを取り上げている。なお、瓦の名称については『新修亀岡市史』(資料編第一巻)に準拠した。

軒丸瓦(1)は丹波国分寺創建瓦とされる範傷のない忍冬文軒丸瓦である。瓦の製作技法は一本作りとされている。S X 01の西端から出土した。瓦当面の文様はシャープで、線刻状のモチーフもしっかり出ている。瓦当部の厚さは約5cm、丸瓦部の厚さは約5cmと極めて厚い。また、瓦当周縁部外面には細かい布目圧痕が観察される。焼成は軟質で色調は淡黄褐色を呈する。

軒平瓦(2～5)は4点を図示した。瓦当文様はいずれも均正唐草文である。瓦当中心部には柄鏡状の意匠を施しその左右に唐草文を施すが唐草文の長さは左右対称ではない。基本的な形態的特

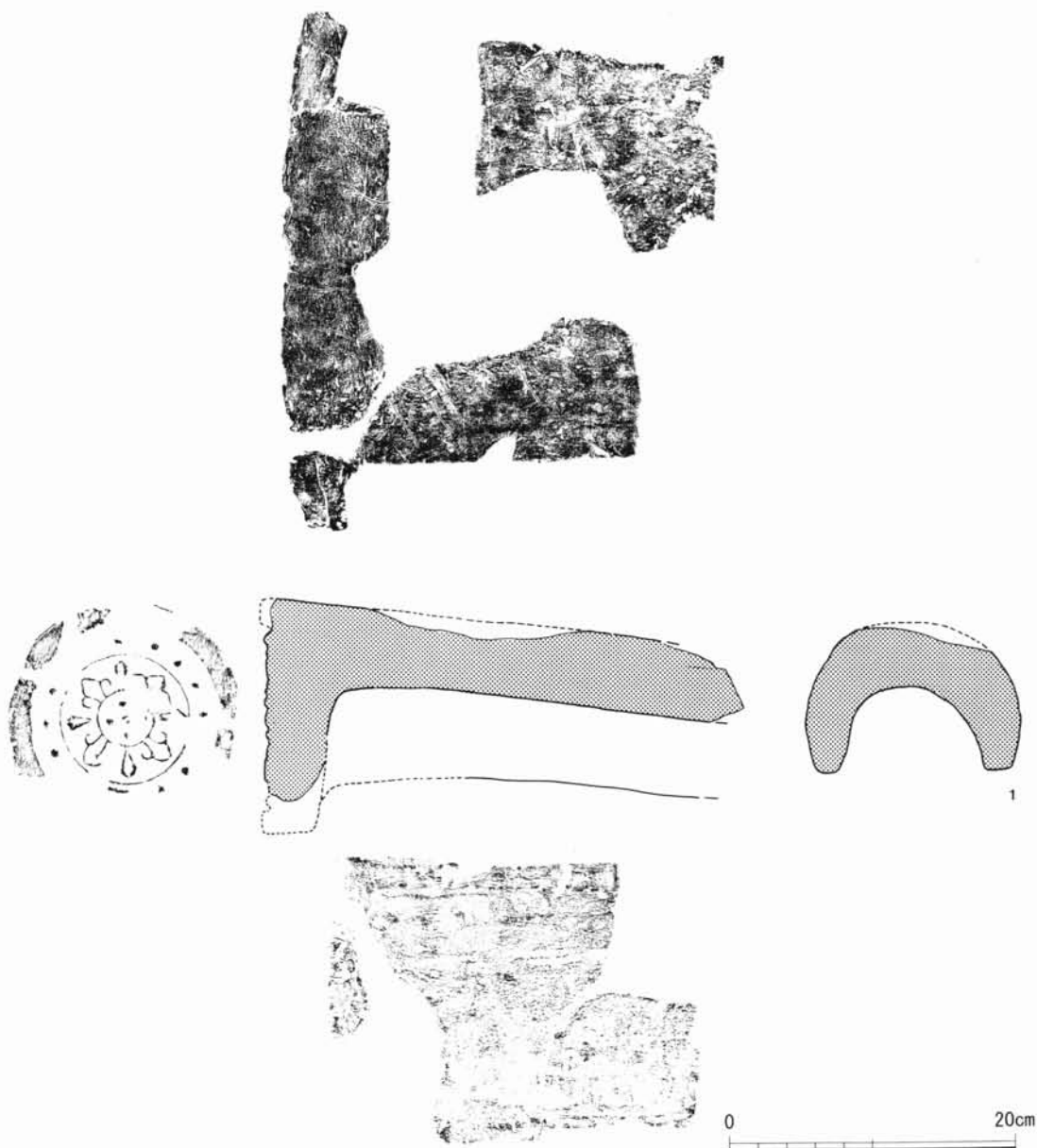
徴として無類である。

2は硬質の須恵質に焼き上がっている。凹面部両側端はヘラ状の工具により面取りがなされている。凹面部の調整は粗い布目がよく残り、瓦当面側のみヘラケズリにより調整を行っている。凸面側は全体に粗いヘラケズリが長軸方向に施されている。色調は青灰色を呈する。

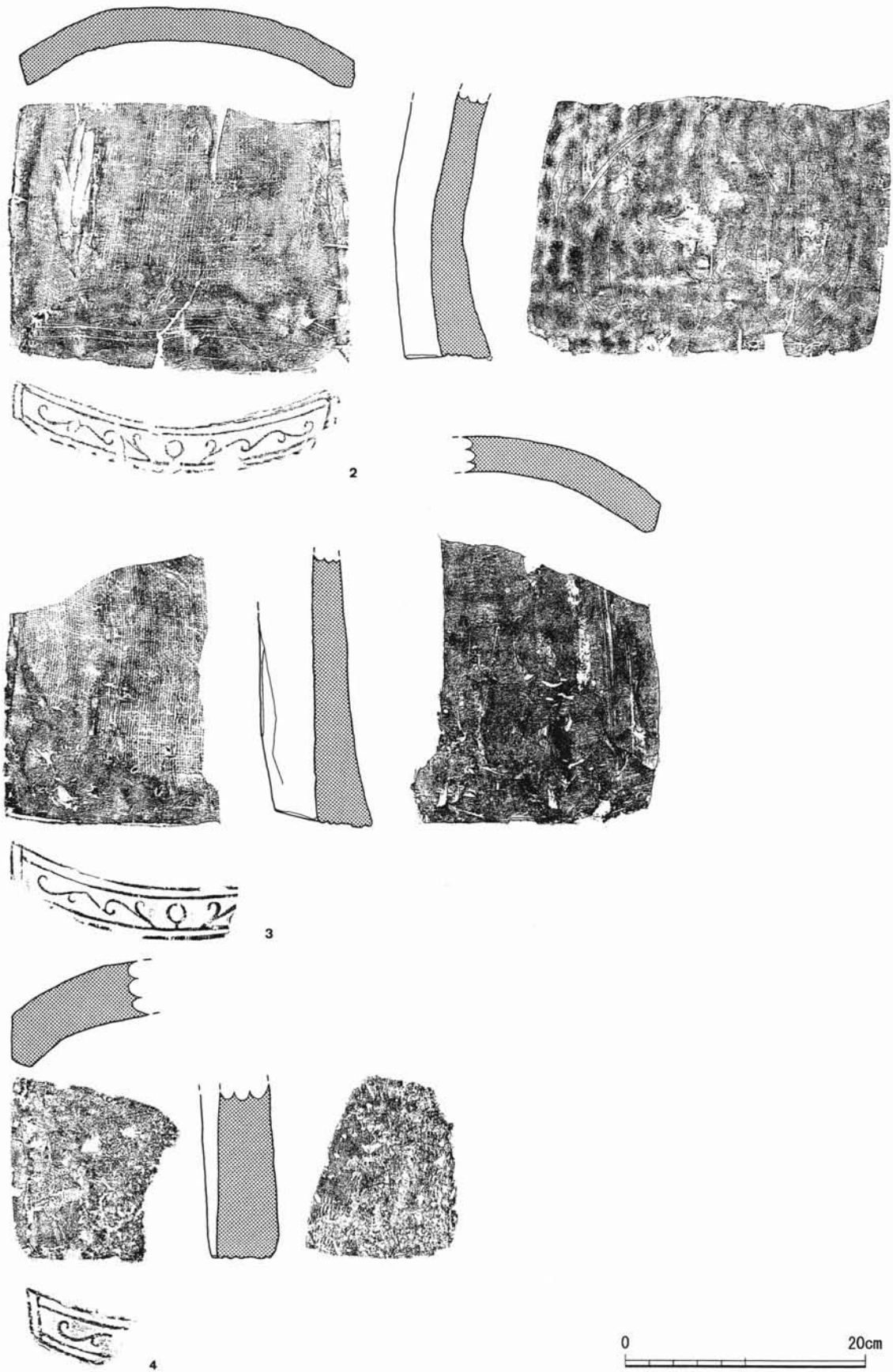
3は調整・焼成とも2と同様である。

4は軟質の焼き上がりであり、表面は黒褐色を、断面は黄灰色を呈する。瓦当文様は2・3と同じであるが、瓦当面から平瓦部に至る境界がなく、ほぼ均質の厚さを呈している。そのため、2・3に比して非常に厚い印象を受ける。

5はその特殊な調整技法から軒平瓦の平瓦部の可能性があるが、断定できない。硬質な須恵質



第92図 S X01出土瓦実測図(1)



第93図 S X01出土瓦実測図(2)

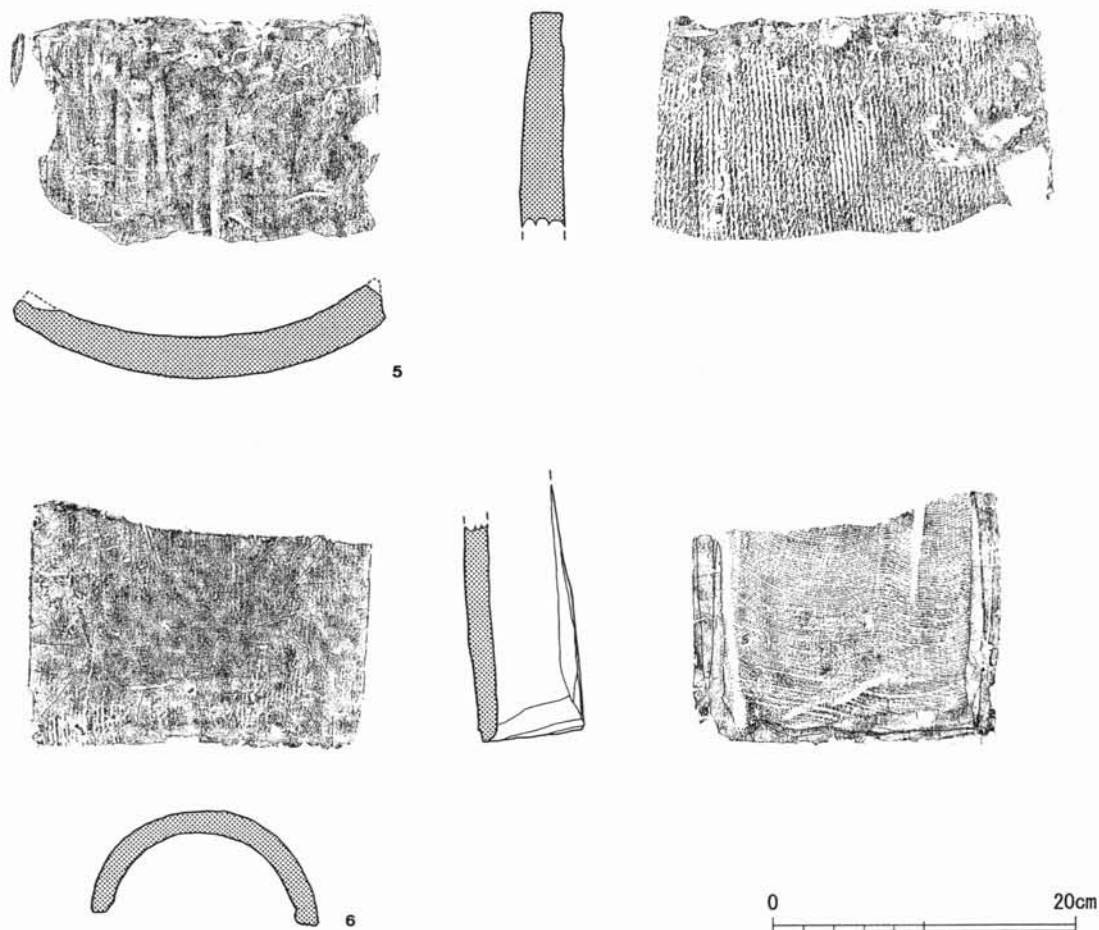
に焼き上がる。凹面側は粗い布目痕跡をナデによりすり消しており、凸面側は粗い縄タタキの痕跡をそのまま留めている。

丸瓦(6)は1点のみ確認した。行基式なのか玉縁式なのか不明である。焼成は硬質な須恵質を呈し、色調は青灰色を呈する。両側端面および小口部分の内端面をヘラケズリにより調整を行う。縄タタキののちナデ、内面には布目痕跡が認められる。

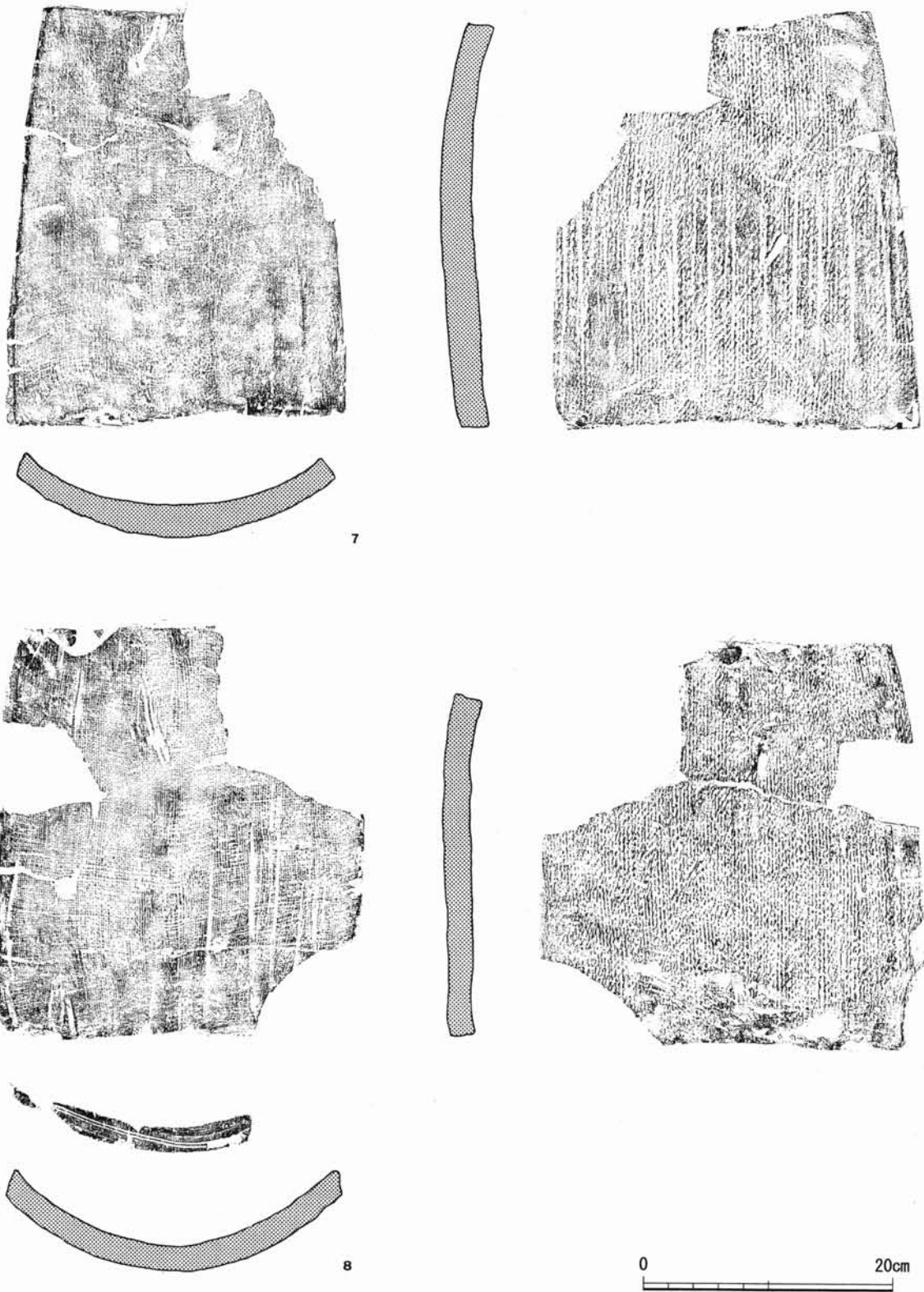
平瓦(7~14)は8点を図示した。いずれの個体も一枚作りと考えられ、桶巻作りと思われるものは存在しない。凹面側両側端の調整はケズリもしくはナデにより面をなすものとなさないものがあるが、同一個体でも一方の側端のみ面を作り出すものも存在する。凸面側は基本的に粗い縄タタキが施され、狭端側に雑なナデを施すものが存在する。凹面側は狭端面側の布痕跡をナデ消すもの、全面を粗くナデ消すもの、布目痕跡をそのまま留めるもの等があるが、基本的に布痕跡を留めるものが多い。

鬩斗瓦(15)は1点のみ確認された。分割線の痕跡が認められることから焼成後に半裁したものと考えられる。焼成は硬質な須恵質に焼き上がっている。

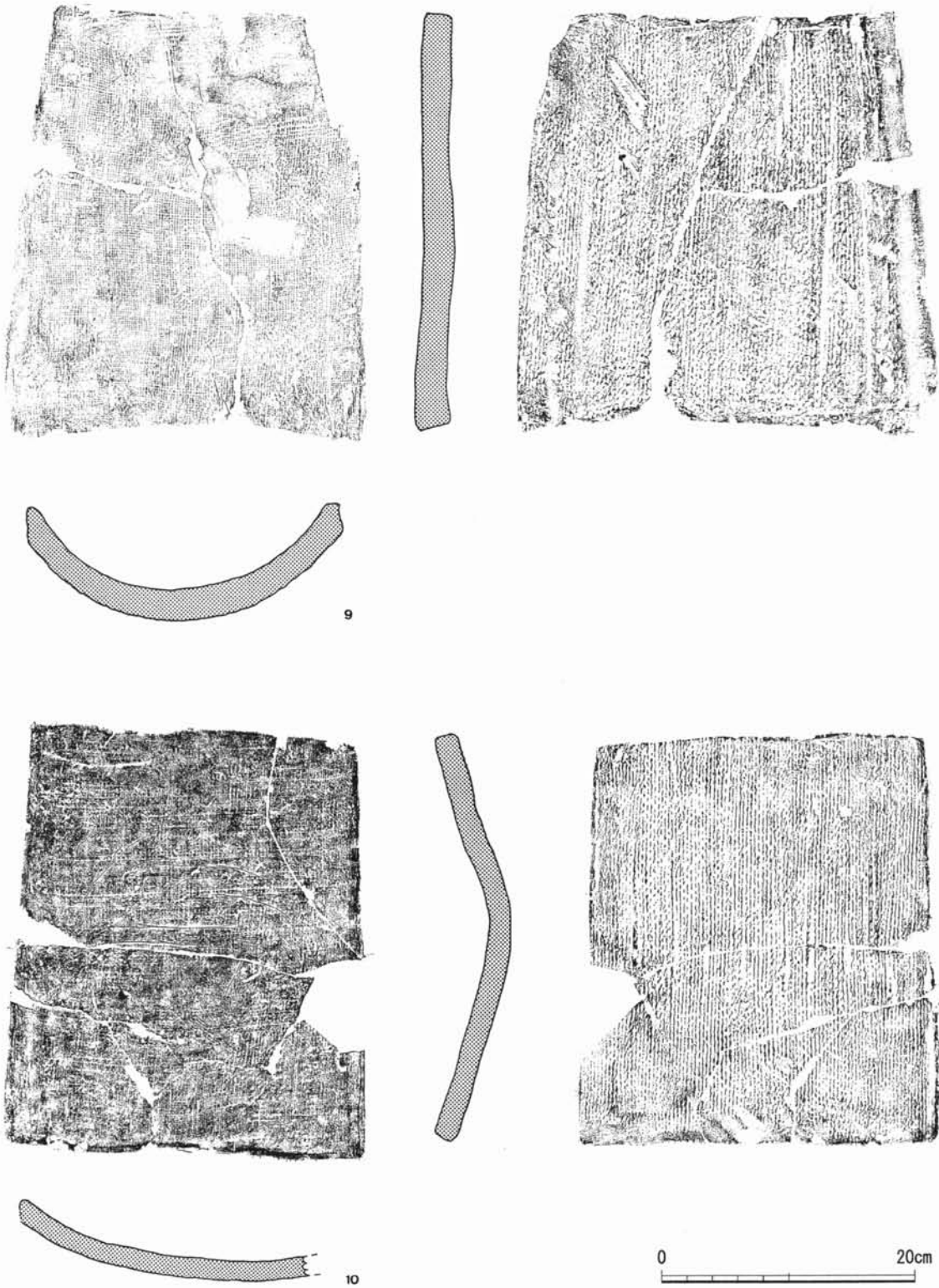
用途不明瓦(16)はほかの平瓦に比して厚さ約1.2cmと非常に薄く、また、ほとんど湾曲しない。凹面側は布痕跡をとどめ、凸面側は細かい縄タタキが施されている。焼成はやや軟質である。



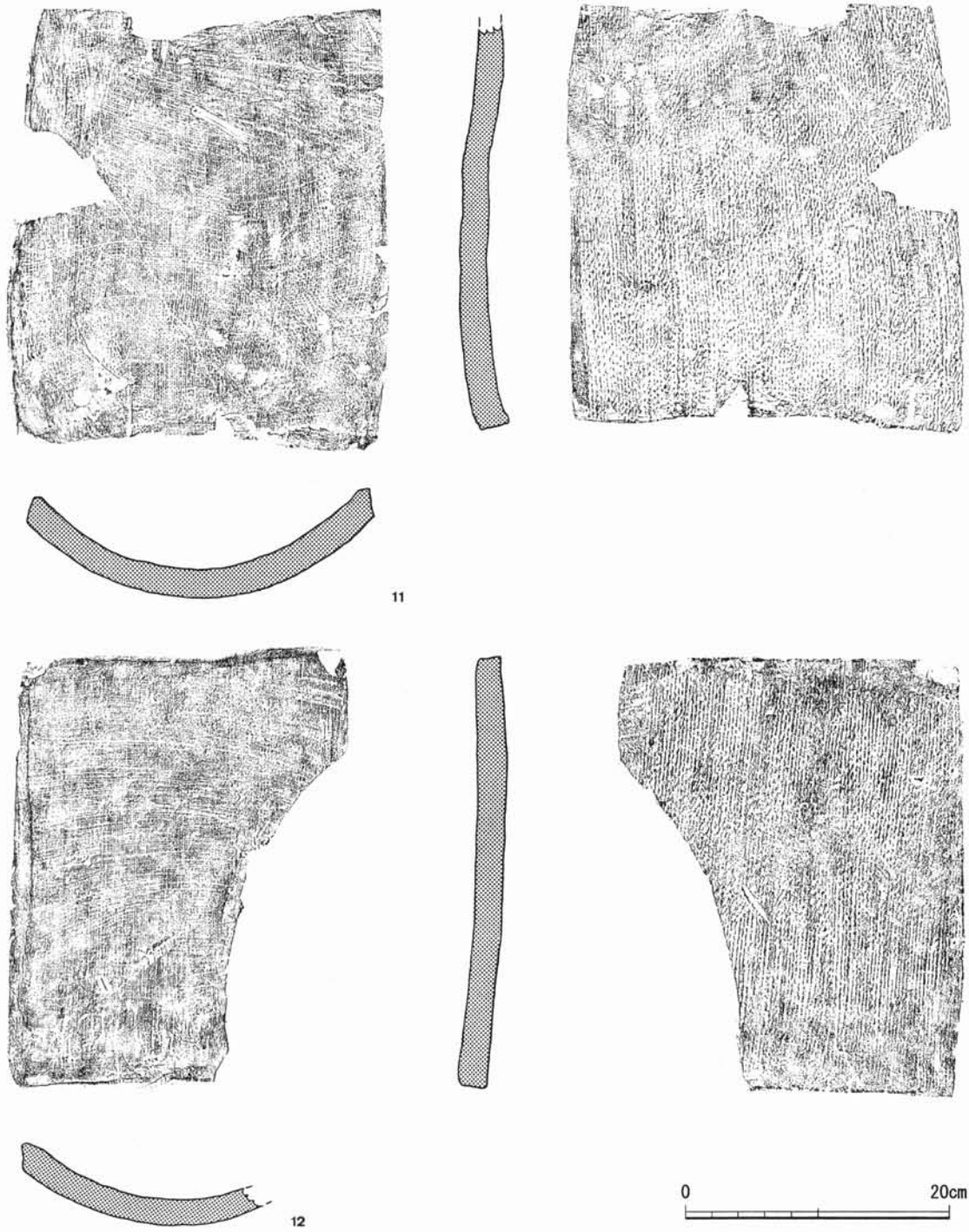
第94図 S X01出土瓦実測図(3)



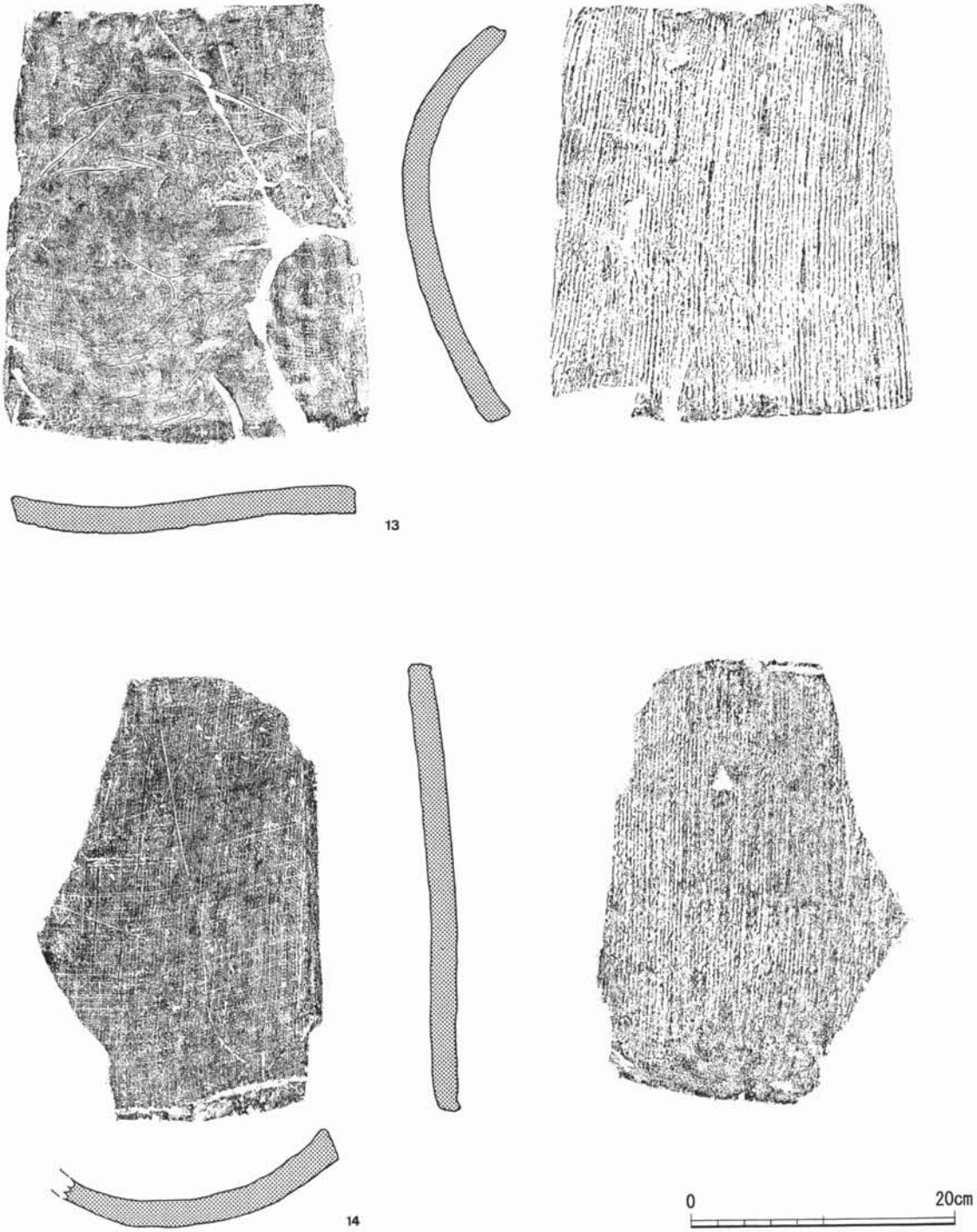
第95図 S X01出土瓦実測図(4)



第96図 S X01出土瓦実測図(5)



第97図 S X01出土瓦実測図(6)



第98図 S X01出土瓦実測図(7)

b. 流路内出土瓦(第100~107図)

流路内から出土した瓦には軒丸瓦(17~22)・軒平瓦(23~31)・丸瓦(32・33)・平瓦(34~37)・
 鬨斗瓦(38)・特殊瓦(39~45)がある。また、塼(46)も図示した。

軒丸瓦(17~22)は6点を図示した。範傷の有無を確認できるものは全て瓦当面上半に横方向の
 範傷をもつ。また、いずれも製作技法が瓦当結合式であり、一本作りであるS X 01出土軒丸瓦
 (1)とは対照的である。瓦当・丸瓦部も薄く作られている。瓦当文様はシャープな印象をうける
 もの(19・20)とやや鈍いもの(17・18・21・22)が見受けられる。

軒平瓦(23~31)は9点を図示した。瓦当文様はS X 01出土瓦と比較しても差異は認められない。
 また、調整技法についてもS X 01出土軒平瓦(1・2)と大きな差異はない。軒平瓦の平瓦部と考え
 られる個体(31)は凹面側は布目痕跡をとどめ、両長側端をヘラケズリにより面取りする。凸面側
 は縄タタキを長軸方向のヘラケズリにより擦り消している。

丸瓦(32・33)は2点を図示した。流路内出土の丸瓦のうち確認できるものは全て玉縁式であり
 行基式のものは認められない。小口部内面および長側辺内面をヘラケズリにより調整する。内面
 は布目痕跡をとどめ、外面は縄タタキを長軸方向のナデにより擦り消している。

平瓦(34~37)は4点を図示した。調整技法はS X 01のものと差異はない。

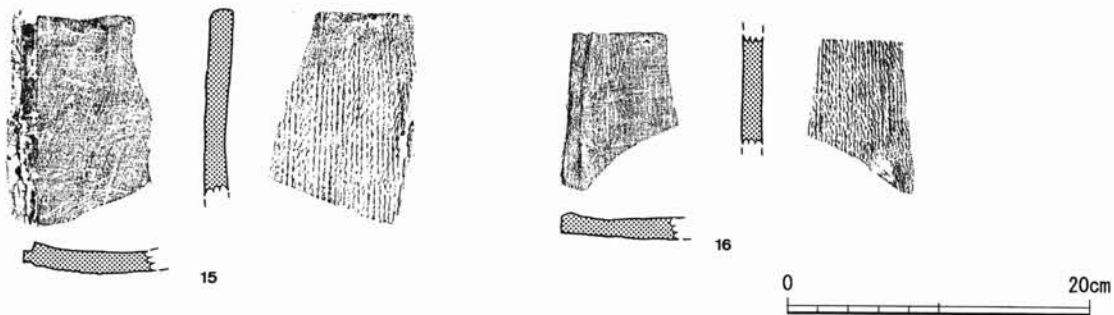
鬨斗瓦(38)は1点を図示した。焼成前に平瓦を分割し、焼成したものである。また、今回図示
 していないが、流路内出土鬨斗瓦には焼成後分割を行っているS X 01と同様のものも存在する。

線刻瓦(39~41)はヘラ状工具により線刻を施す瓦である。39は平瓦凸面側に線刻を施す。40・
 41は凸面・凹面の両面に線刻を施している。また、今回図示していないが丸瓦の外面に同様の線
 刻を施す個体も確認している。

隅平瓦(42~45)は4点を図示した。隅の角度の判明するものでは42で約115°、43で約130°を
 各々測る。調整技法上の差は通常の軒平瓦と比べても差異はない。

塼(46)と思われる個体は1点のみ図示した。粘土塊を方形に整形し、側面をハケ状の工具で平
 滑に仕上げている。もう一方の面は基本的に調整痕が認められないため、木杵などの平坦な面
 押し付け調整した可能性が考えられる。また、瓦とは考え難い大形の粘土塊も塼である可能性が
 高い。

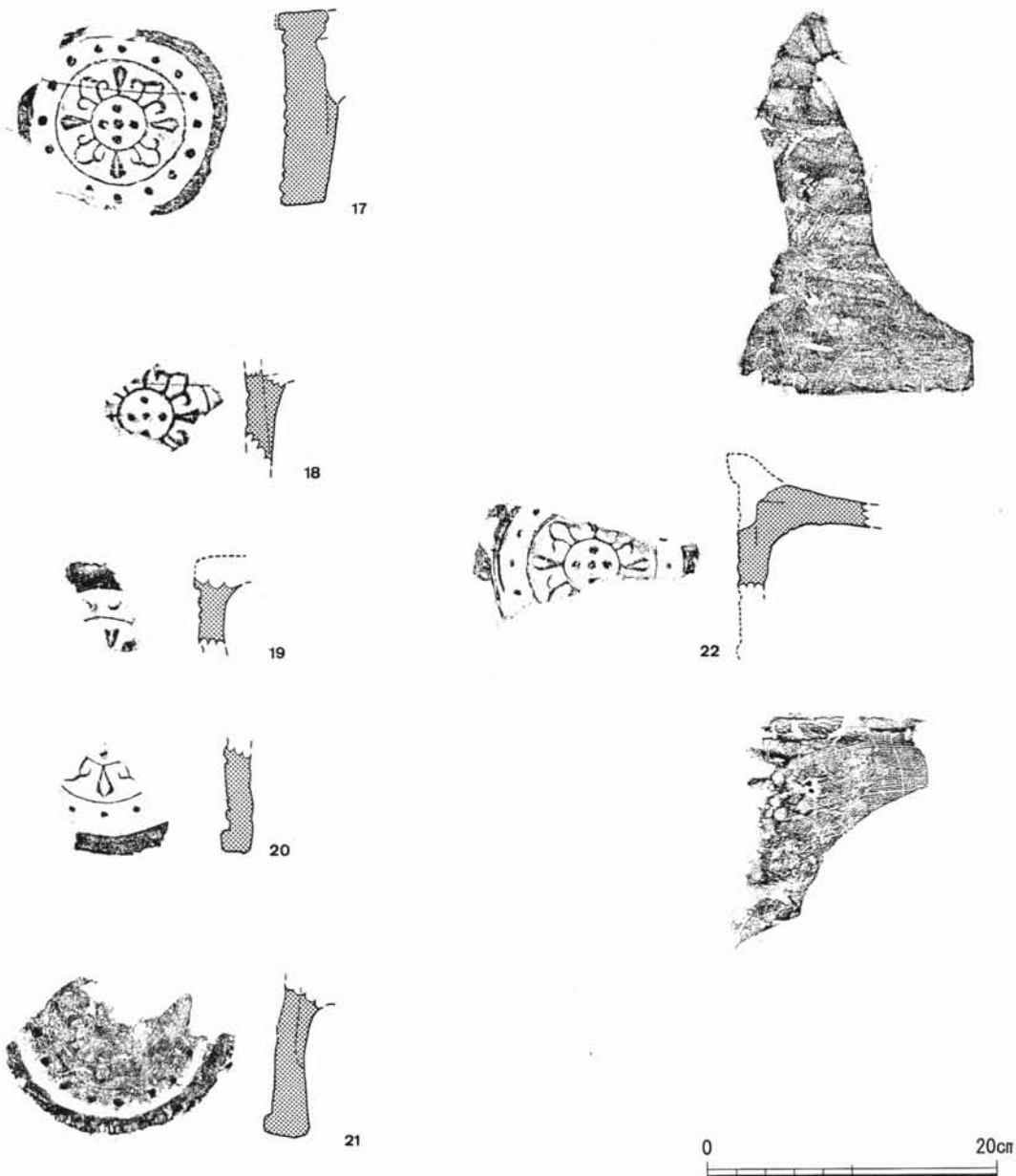
以上、S X 01・流路出土の瓦について概観した。



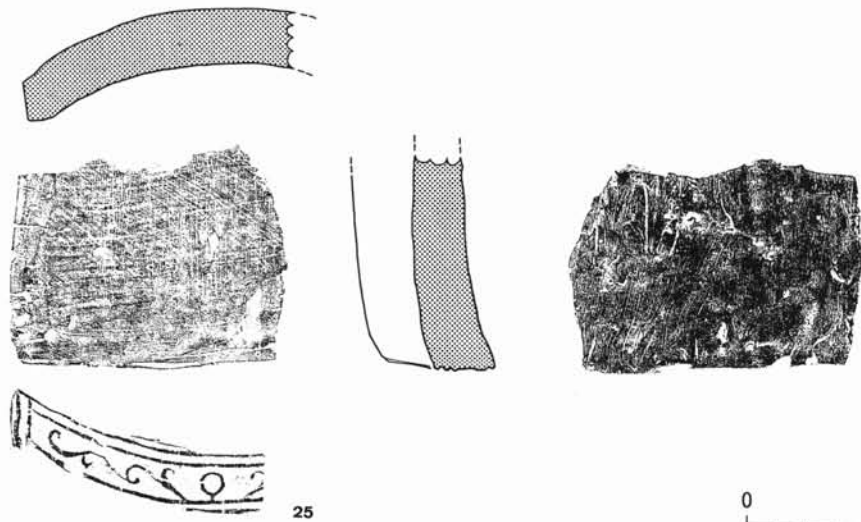
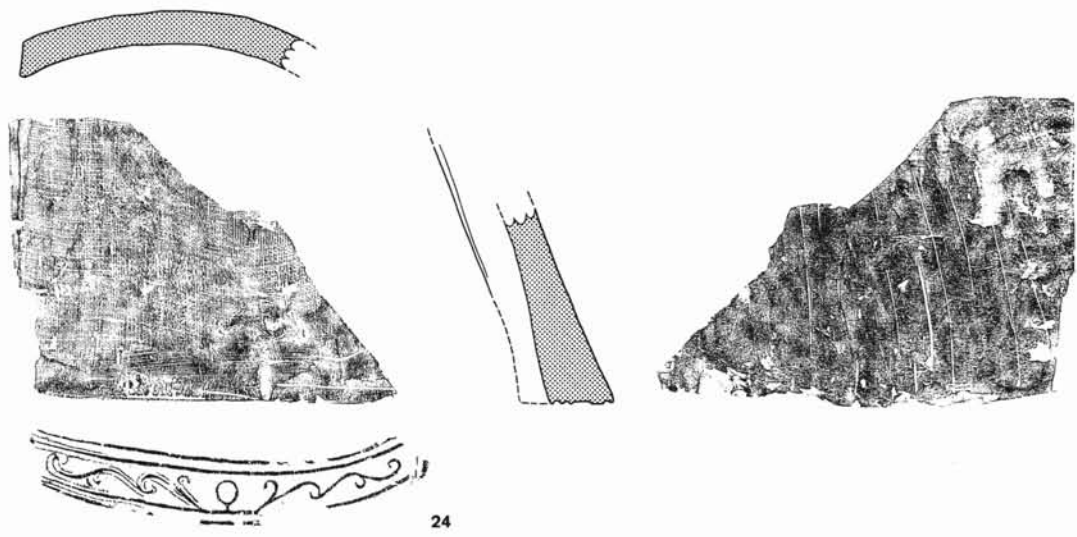
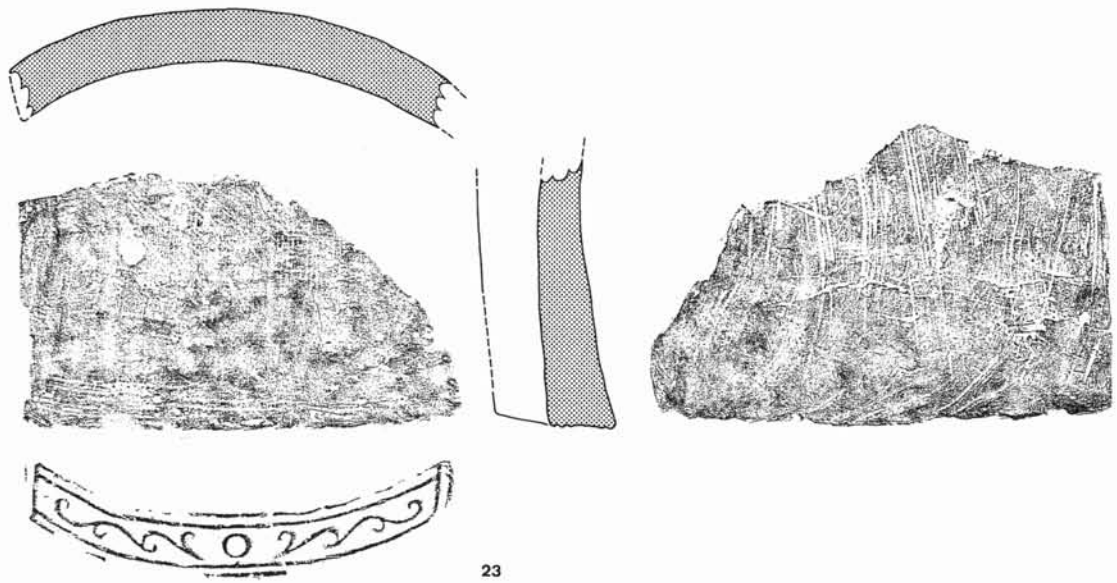
第99図 S X 01出土瓦実測図(8)

基本的に軒丸瓦にのみ、製作技法上の差異が認められ、そのほかの瓦については大きな差が認められないが、軒平瓦では、焼成からみてS X01出土の第93図4がやや古くなる可能性がある。

三日市遺跡出土の平瓦製作技法は以下のように復原できると考える。出土平瓦は確実に桶巻と考えられる粘土紐巻き上げ技法、桶からの四分割技法、布の合わせ目を示す個体はなく、全て一枚作りの技法によるものと判断される。少数の個体には凹面に板状の圧痕を残すものが認められるが、これは凸型台木枠の痕跡と考える。また、木挽き痕を残す個体も認められることから、大きな粘土塊から粘土板を切り出したことが窺われる。瓦は一枚作りにより製作される。凸型台上に粘土板を置き縄タタキを施す。凹面側を調整しないものはこの段階で乾燥・焼成されるものと判断されるが、側縁部には、ほとんどの個体でナデあるいはケズリによると思われる面取りが認められるため、実際には凹型台により湾曲度や側縁部の微調整が行われたものと考えられる。

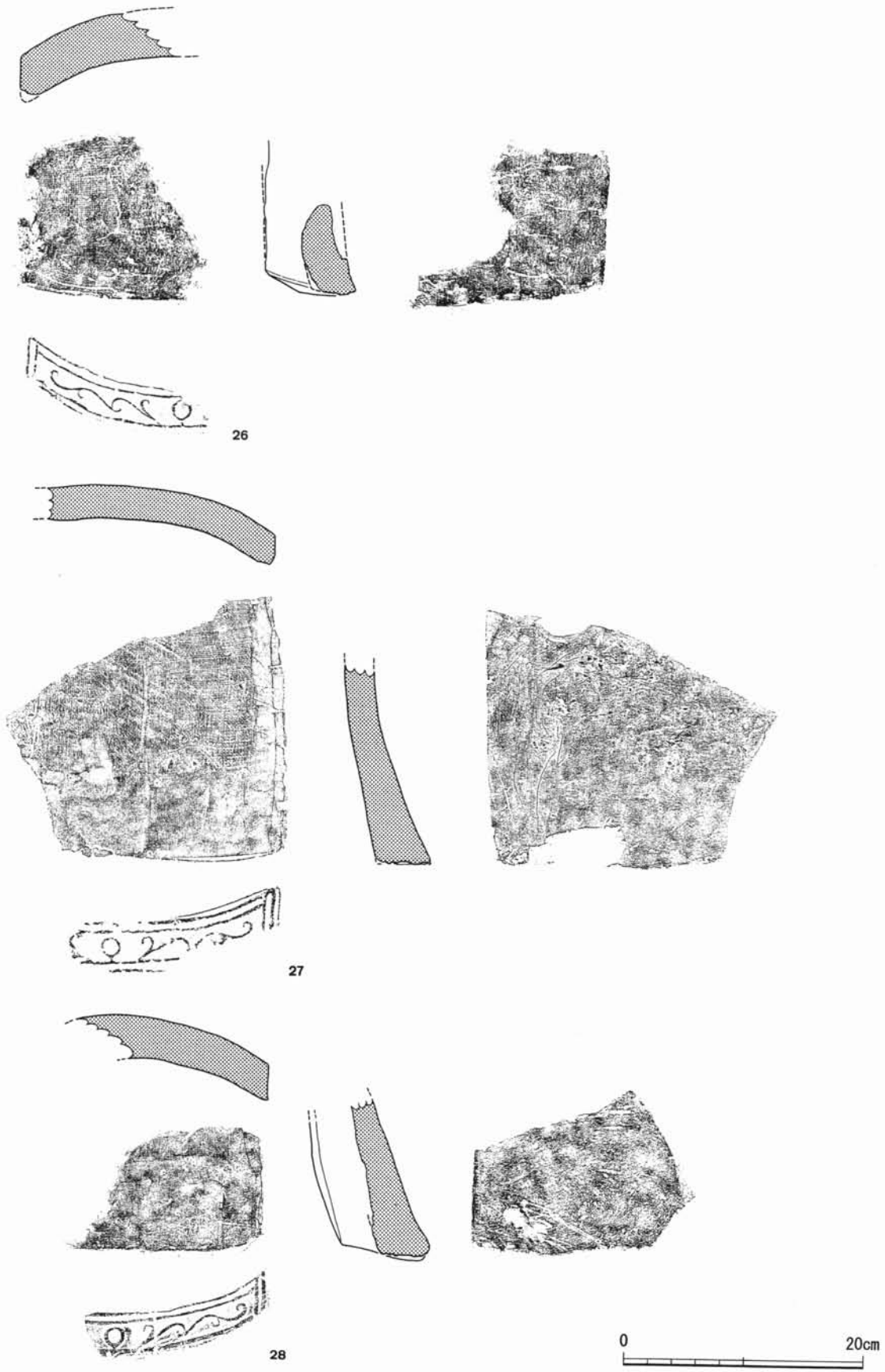


第100図 流路出土瓦実測図(1)

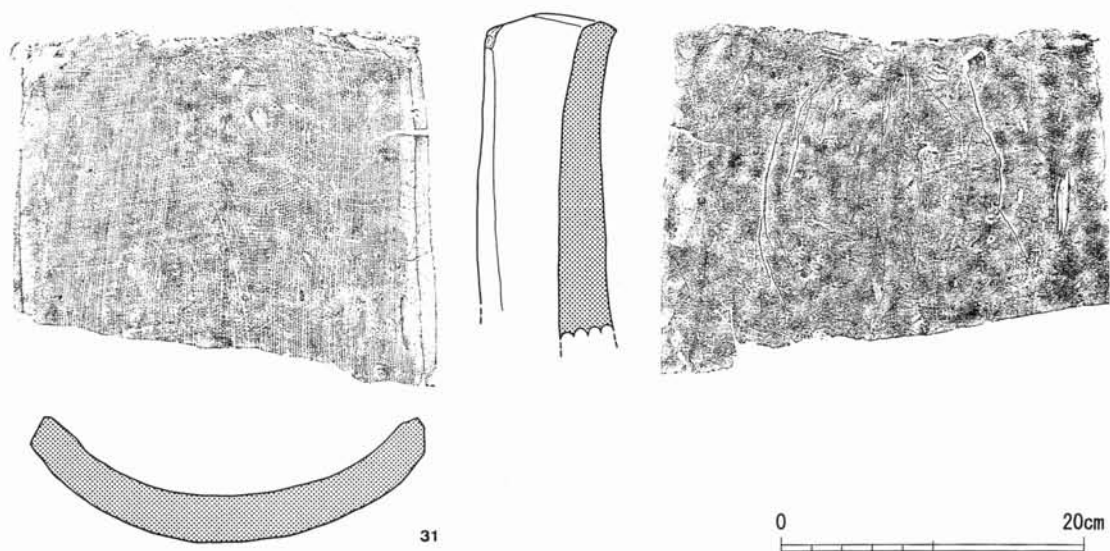
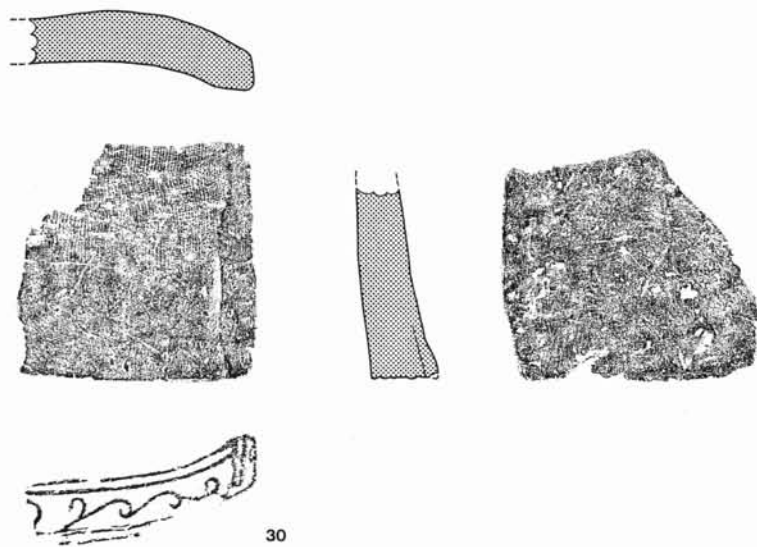
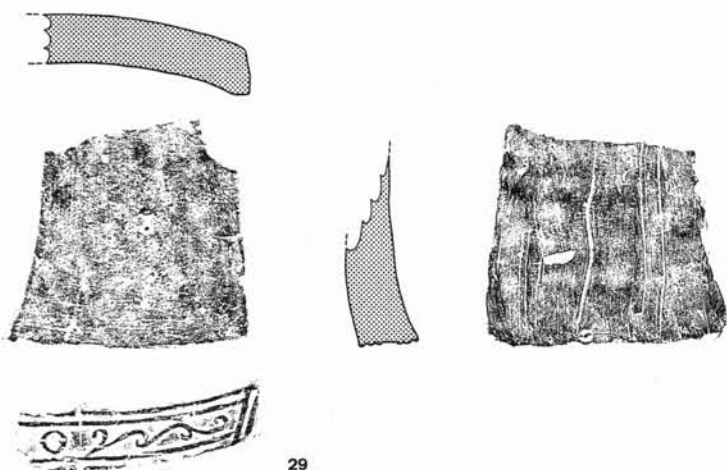


0 20cm

第101図 流路出土瓦実測図(2)



第102図 流路出土瓦実測図(3)



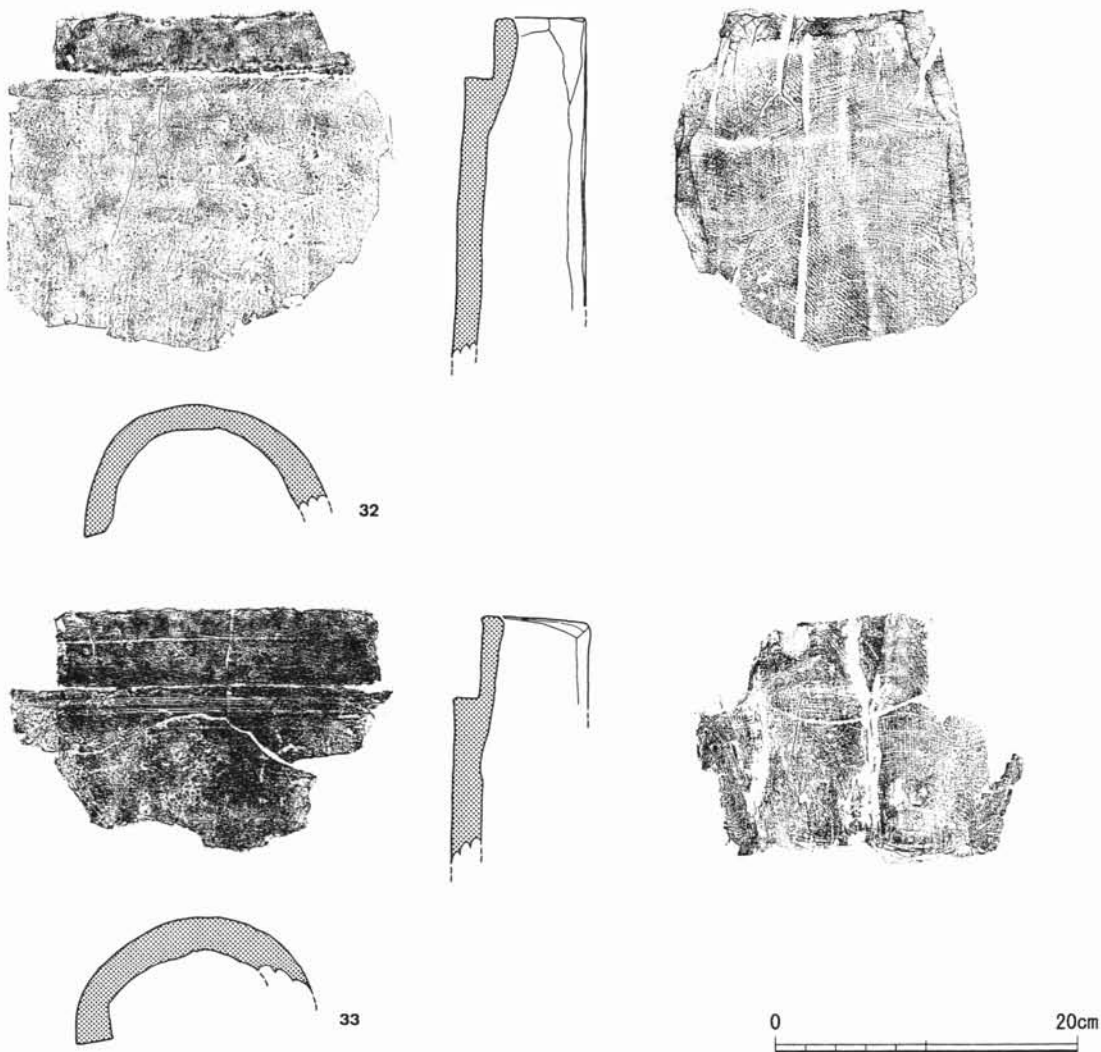
第103図 流路出土瓦実測図(4)

その後、凹型台に移動し、凹面の布目をケズリ、もしくはナデにより擦り消す。擦り消す部位により、更に小形式に分類される。凹面側端部のケズリによる面取りはこの段階で実施されたとみられるため、側端部を削る個体は凹型台の使用が考えられる。

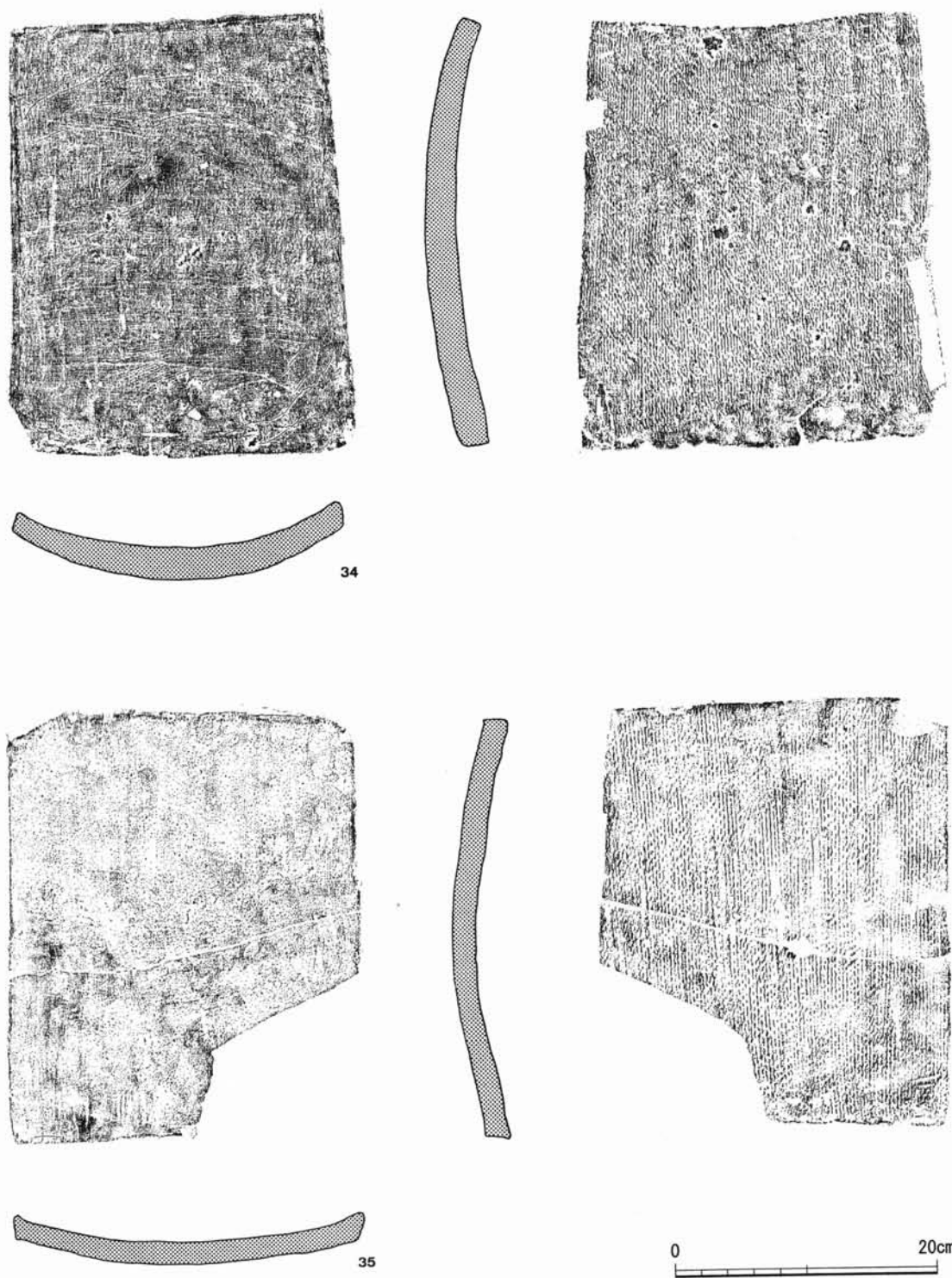
また、多くの個体で凸面の縄目タタキの上に付着した砂が確認される。凹面側に付着するものは確認されないため、これらの砂は意図的に使用されたものとする。これは凹型台の上で調整される際に付着したものと考えられる。いわゆる離れ砂の技法とは、凹面側に布の替わりに砂を用い、凸型台から離れ易くし、作業の工程を簡略化したものとされるが、当遺跡出土のものは凸面側に砂が付着する個体ばかりであり、仮に離れ砂のように使用したとすれば、凹型台に砂を撒き調整後の分離のし易さを狙ったものとする。

c. 流路出土土器(第108図47～第111図122)

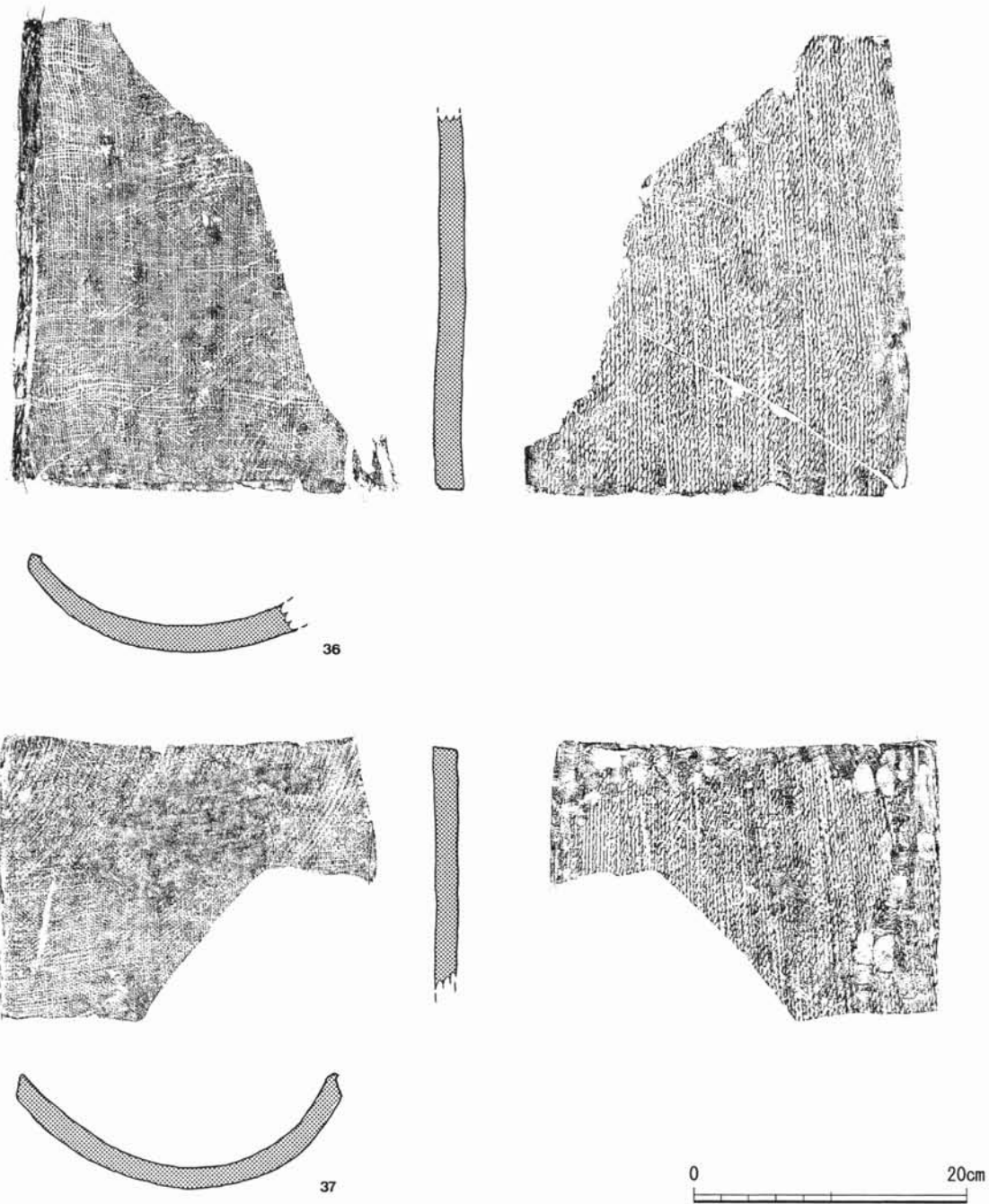
流路内からは比較的少数ではあるが須恵器・土師器などが出土している。須恵器には融着・変形したものが認められないことから、瓦窯で焼成されたものはなく、使用・廃棄されたものとする。以上の点から瓦陶兼業窯の可能性は否定しておきたい。



第104図 流路出土瓦実測図(5)



第105図 流路出土瓦実測図(6)



第106図 流路出土瓦実測図(7)

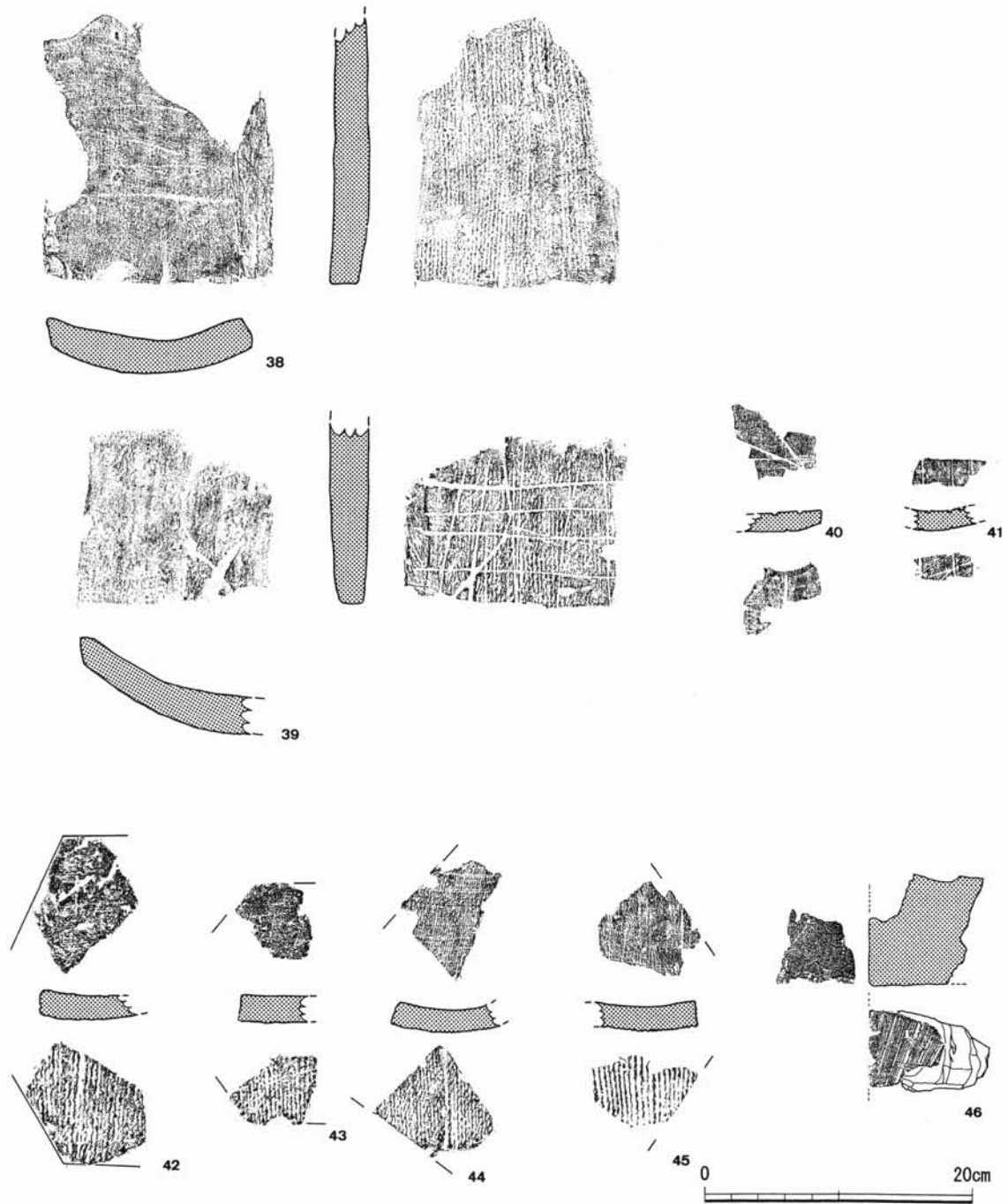
47～65は遺構精査作業中に確認された遺物群であり、暗渠などに含まれていたものも混在するが、流路埋土第1層に該当するものとする。

47・48は青磁である。47は碗・48は合子の蓋である。49は中国製染付である。底部内面の盛り上がるいわゆる饅頭心と呼ばれる形態を呈する。16世紀後半のものである。50～53は瓦器碗である。小片が多いが、51は外面にもわずかにミガキが認められる。そのほかのものは内面のみミガキを確認することができる。50・51は口縁端面をナデにより内湾気味に調整する。54～58は土師器碗である。57は強いヨコナデにより外反する口縁を作り出す。59は須恵器杯蓋である。高い天

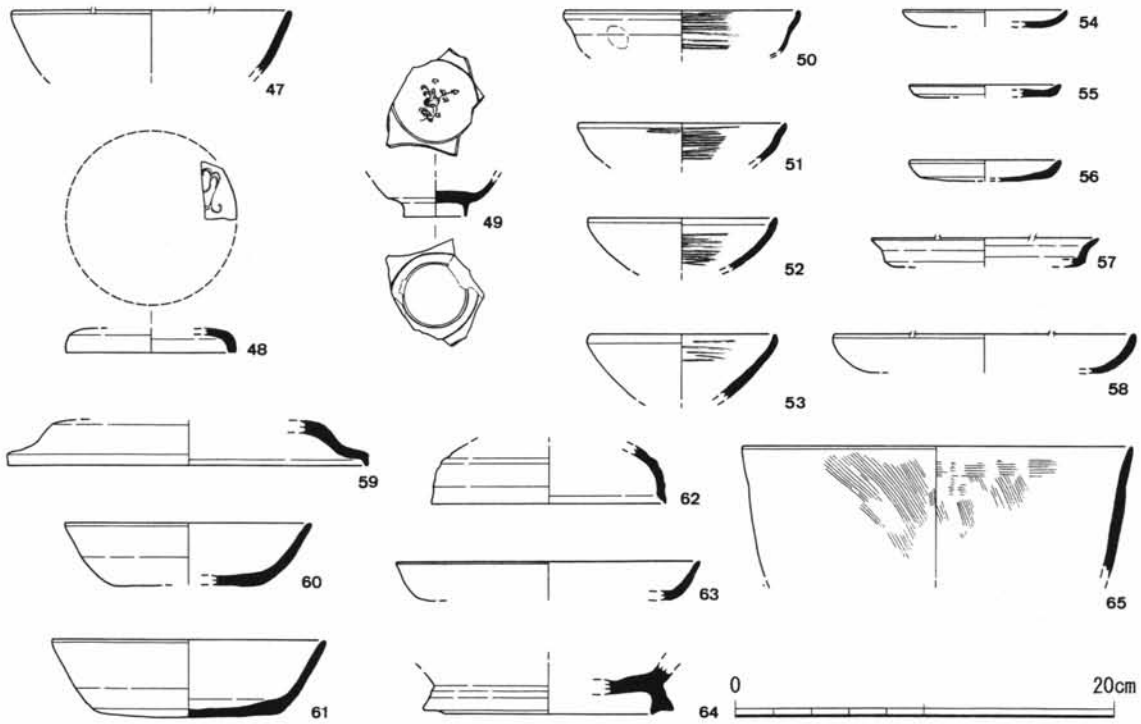
井部から屈曲し、わずかに平坦な面を作り出した後、口縁部を垂下させる。60・61は高台をもたない須恵器杯身である。62は古墳時代後期の須恵器杯蓋。63は須恵器須恵器皿である。64は壺底部と考えられる。65は土師器甑もしくは鉢と考えられ、内外面ともハケにより調整する。

66～83は上層として把握した埋土からの出土土器である。そのうち66～70は1層とした土層内に含まれていたものであり、71～84は二次的に移動した瓦と共伴した土器群である。瓦窯廃絶後の年代観を得ることのできる資料群である。

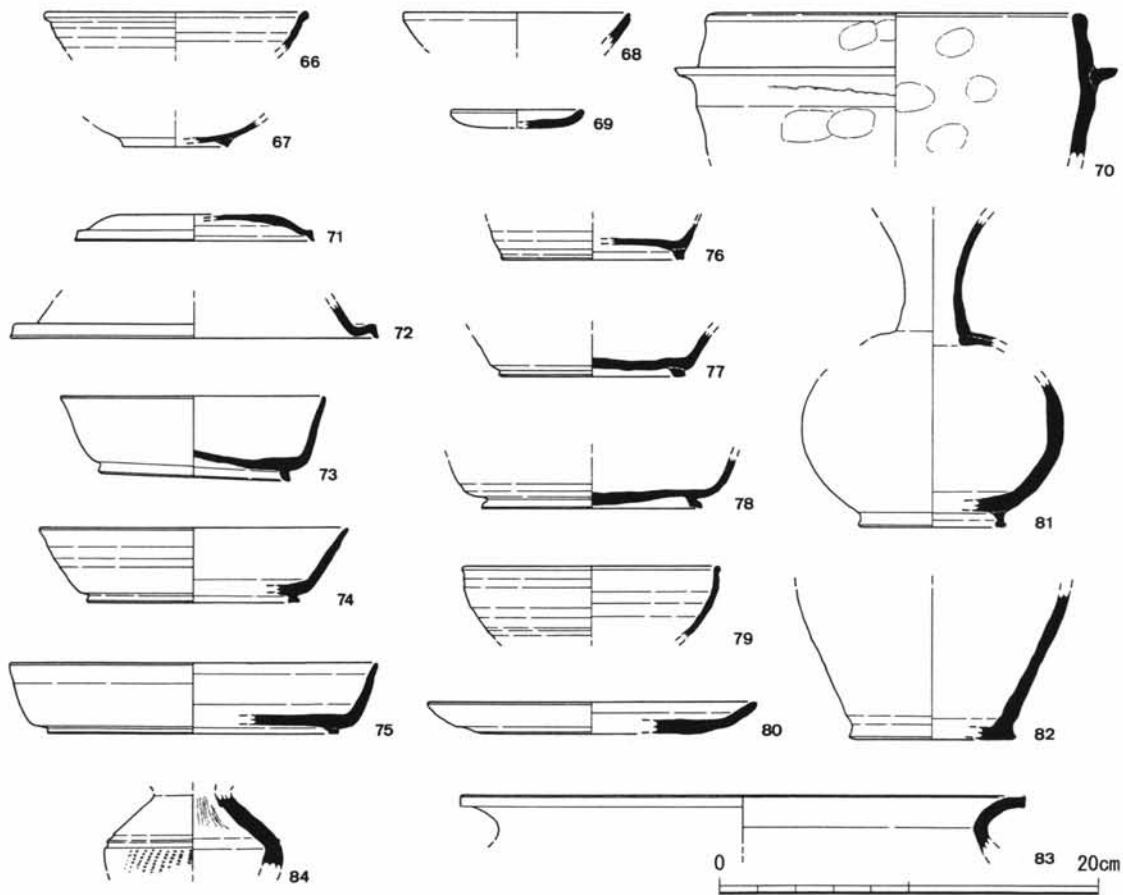
66は須恵器杯である。椀状の形態を呈し、外面に顕著な回転ナデの痕跡が残る。67は瓦器椀底



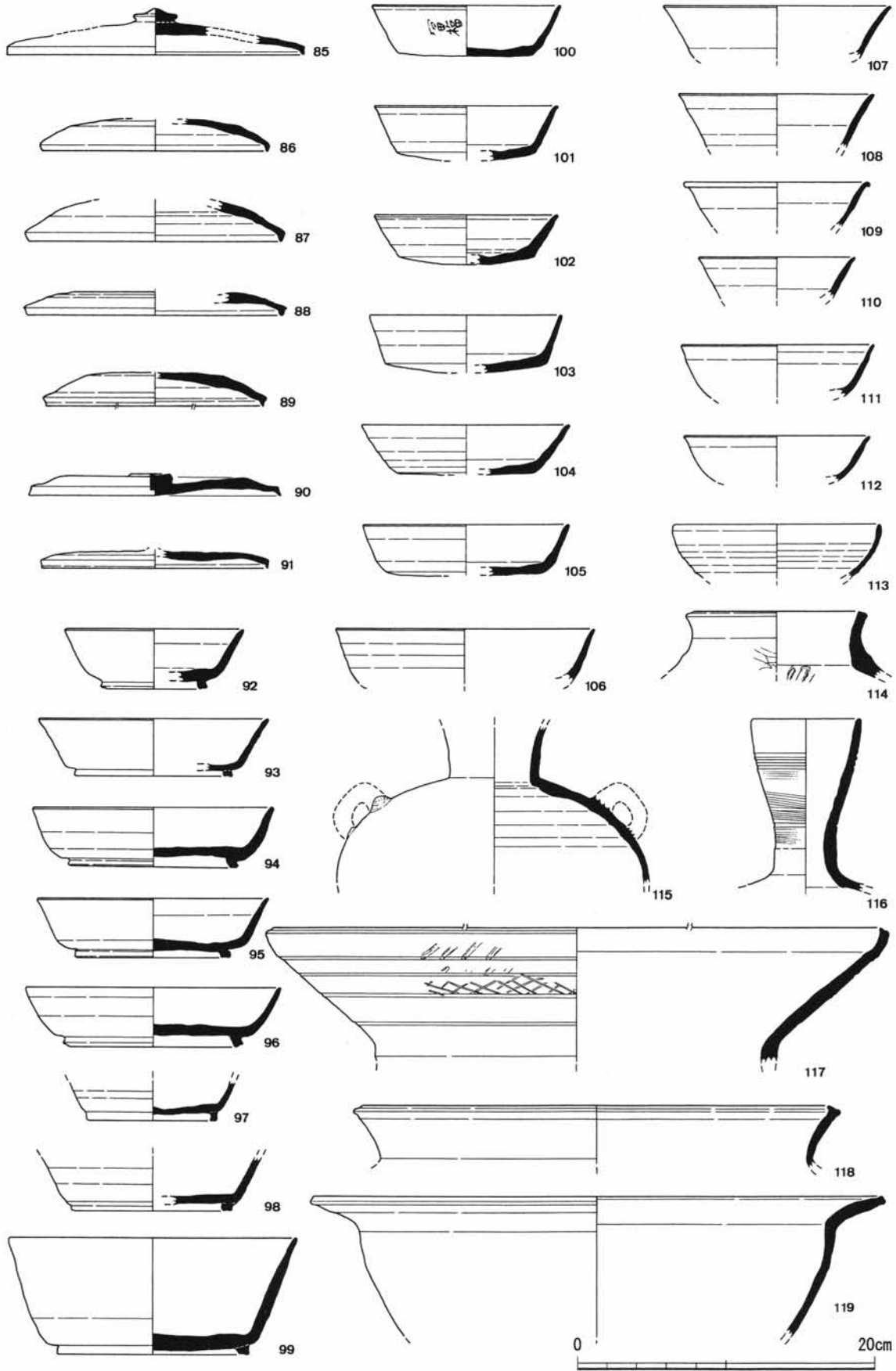
第107図 流路出土瓦実測図(8)



第108図 出土土器実測図(1)



第109図 出土土器実測図(2)

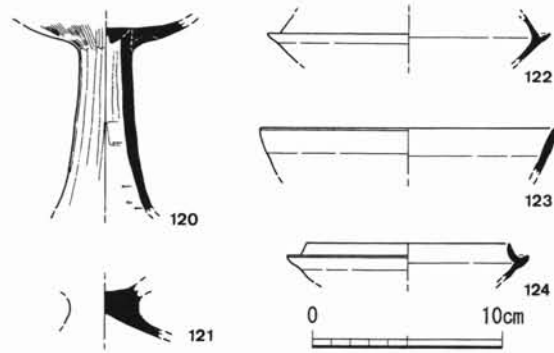


第110図 出土土器実測図(3)

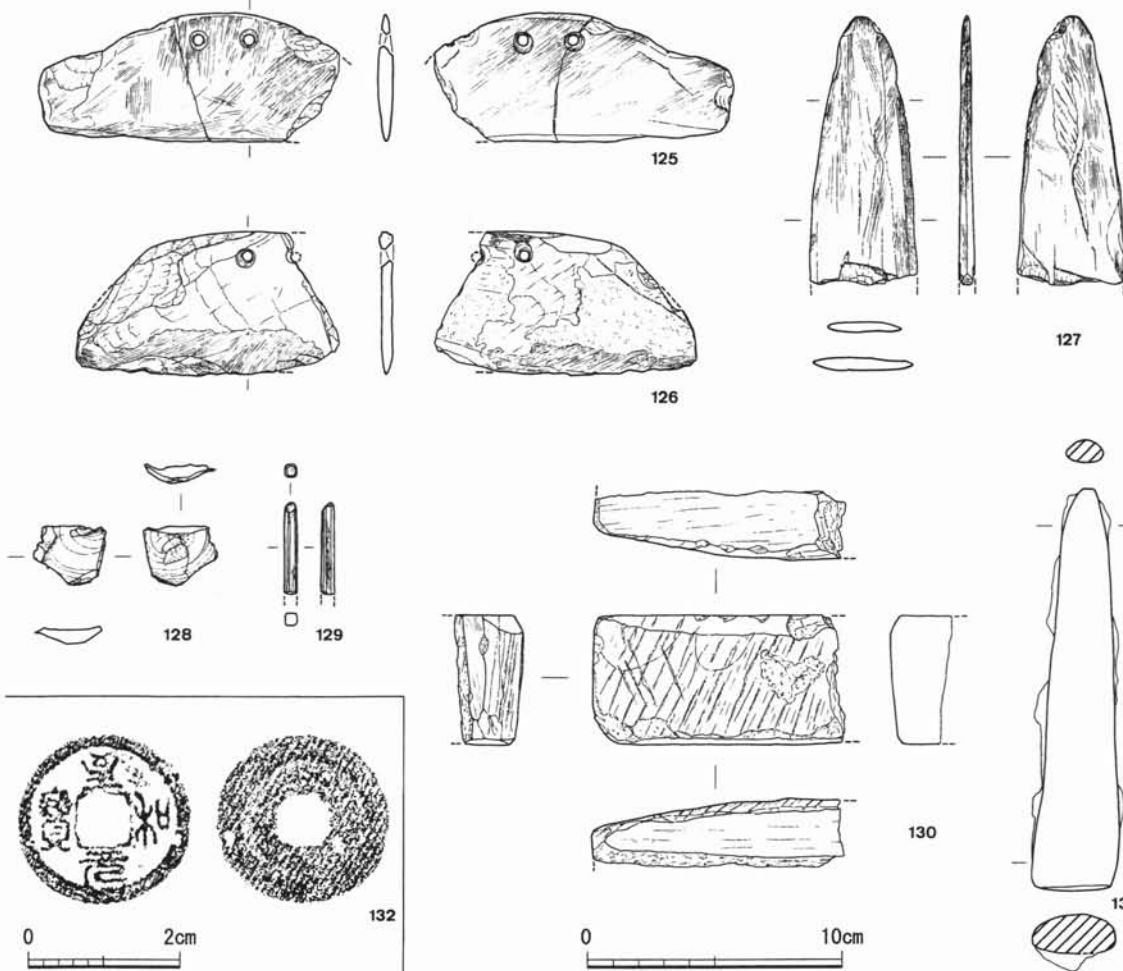
部である。断面三角形の矮小化した輪高台を付す。68も瓦器椀である。磨耗のため調整が不明瞭である。69は土師器皿である。70は瓦器羽釜である。

71~72は須恵器杯蓋である。71は低く扁平な天井部に水平方向にわずかに面を形成する口縁に至り端部を垂下させる。72は非常に高い天井部から水平方向に面を形成する口縁に至り端部を垂下させる。73~79は須恵器杯である。76・77は輪高台を底部外端面付近にもつ。79は椀状の体部をもち、口縁部を外方に肥厚させる。80は須恵器皿である。81は須恵器長頸壺である。球形の体部に緩やかに外反する頸部を付す。82は平底の須恵器壺底部である。83は須恵器甕である。体部から短く外反する口縁をもつ。口縁端部は面を形成する。84は須恵器甕とみられる小片である。古墳時代後期に属する。

85~122は中層出土の一群であり、瓦窯操業時に瓦と共に投棄されたものであり瓦窯操業時を知りうる資料である。



第111図 出土土器実測図(4)



第112図 石製品・鉄製品・銭貨実測図

85～91は須恵器杯蓋である。85～89は笠型の天井部から短く垂下する口縁端部が作られる。90・91は平天井であり、90は口縁に水平方向の面を作り出す。91は天井部から直接垂下する口縁端部へといたる。92～99は高台をもつ須恵器杯身である。100～106は高台をもたない須恵器杯身である。100の外側面にはやや判別しにくいものの「富福」とみられる墨書が記されている。107～113は椀状の体部をもつ須恵器杯身である。113は回転ナデの痕跡が顕著に残る。114～116は須恵器壺である。117・118は須恵器甕である。119は土師器鉢であり横方向にのびる口縁をもつ。120は古墳時代の土師器高杯の脚柱部、121は弥生土器蓋とみられる。122は古墳時代後期の須恵器杯身である。

以上、中層出土須恵器の年代観は、概ね奈良時代中葉～後半にかけてものが主体であり、瓦窯の操業時期をこの時期に求めて良いものとする。

d. S X01出土土器(第111図123・124)

S X01に共伴する土器は須恵器杯(123)である。小片のため詳細は不明。124はS X01の南、流路埋土から出土している。古墳時代後期の須恵器杯身である。

e. 石製品・鉄製品・銭貨(第112図)

125・126は粘板岩製の石庖丁である。125は調査地西側の床土直下から、126は遺構検出作業中に出土している。127は粘板岩製の磨製石剣である。流路埋土中層から出土した。128はチャートの剥片、129は鑿状の石製品である。いずれも遺構検出作業中に出土している。130は砥石である。砂岩系の石材を使用しており両面に使用痕が認められる。第1層に属する。131は床土直下から出土したタガネ状の鉄製品である。断面は楕円形を呈し、先端を細く整形する。132は「至和元寶」である。流路西埋土第1層中より出土している。

4. まとめ

三日市遺跡第3次の調査により、丹波国分寺・国分尼寺創建瓦を焼成した瓦窯の一端を明らかにすることができた。また、京都府教育委員会の実施した試掘調査により、瓦窯関係の遺構の広がりにはさらに南側にも及ぶことが明かとなり、現在、三日市古墳群の所在する段丘上に工房や管理棟などの施設が存在する可能性が考えられ、今後の調査に期待される場所である。

瓦窯の操業時期は奈良時代後半が主体となるものと考えられ、聖武天皇の発した国分寺建立の詔(741年)と大きく離れることはないと思われる。今回の調査地では近接する瓦窯で瓦当面に範傷のある軒丸瓦を焼成しているものと考えることができ、S X01出土の範傷のない軒丸瓦は今回の調査地の南側で焼成されている可能性がある。この範傷の有無により分類される軒丸瓦の所属時期は、今回の調査により、大きく年代がかけ離れるものではなく極めて近接した時期であることが明かとなった。国分寺造営のために操業を開始した三日市遺跡では、当初、一本作りの忍冬文軒丸瓦、均正唐草文軒平瓦、一枚作りの平瓦が生産されていたとみられる。短期間のうちに軒丸瓦のみ、一本作りの技法から、結合式に変化している点は興味深い。在地の工人層を含めた生産体制の変革があったのか、地方寺院出土の瓦との比較検討を行っていく必要がある。

丹波国分寺からは複数型式の軒丸瓦・軒平瓦が確認されているが、今後、国分寺のどの施設にどのような瓦が使用されているのかを検討することにより、瓦の供給のあり方を明確にできるものと思われる。特に、量的に多い平瓦についても分類作業を進めることにより、三日市遺跡で生産されたものとその他の瓦窯で生産されたものに分離できるものと思われる。今後、こうした視点から国分寺造営のプロセスを検討していくことが必要と思われる。

(石崎善久)

注1 調査参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)。

調査補助員 青石達哉・浅田育裕・麻田智也・天池佐栄子・飯田悠司・石井健太・石川宗男・石本裕喜・伊豆田淳一・市原誠・井上亮・今井智之・今川裕加・上野慶・大井勇亮・奥浩和・尾上勝紀・川勝脩平・川上優・河原祐輔・岸俊之・草彌大蔵・国府直樹・小村智洋・小森牧人・酒井健・杉原実・杉森業平・鈴木達也・大道真由美・田中洸太郎・谷敷裕也・寺阪亮・中川英樹・中島ゆき・中島理恵・中西治・西田大樹・畑和樹・畑和弘・坂内裕志・平井耕平・廣瀬佑美・藤松裕子・藤本浩志・藤原滋生・前川敬子・前川聡・松本圭央・松本景太・南依里・山口由希子・山本大輔・山本忠幸・吉田篤史・吉田将史・和家潤二

整理員 有澤明子・荒川仁佳子・稲垣あや子・荻野富佐子・柿谷悦子・春日満子・川村真由美・木村悟・陸田初代・久米政代・小柴美仁・近藤奈央・坂口美智代・清水友佳子・鈴木浩子・関口睦美・高田真由美・田中美恵子・堤百合美・寺尾貴美子・内藤チエ・長尾美恵子・中川香世子・中川由美子・中島恵美子・西村香代子・西村敏子・長谷川マチ子・兵頭真千・藤井矢壽子・牧澤敏子・俣野明子・松下道子・松元順代・丸谷はま子・村上優美子・森川敦子・安田裕貴子・山中道代・山本弥生

作業員 安藤美智子・飯田久美子・石本和江・石本昇・石本正男・伊豆田進・井手俊子・井手麻依・茨木節子・茨木吉光・井本かよ・岩田守・岩本滝雄・上田伊佐男・大倉弘・大西和子・大西勝治・大西啓之・大西道德・岡本ユカ・小川益次郎・奥田宏・小幡一幸・面屋龍憲・鹿島恵・桂邦雄・桂孝子・桂文子・亀谷憲二・河島信晴・河原博・河原正次・河原泰哲・川村勇・川本みち子・河原こしげ・岸敬子・岸妙子・岸谷一平・岸谷修・岸昇・岸モトエ・北村博・草彌和美・楠本小夜子・黒田武夫・小泉正男・近藤正裕・才津鈴美・酒井勝美・澤井礼子・澤田秀子・島田文一・島津イト子・島津伴一・清水満里子・杉崎和雄・杉崎清彦・杉崎早苗・杉崎寿美子・杉崎勉・杉崎征夫・杉崎貢・関あさ江・関口澄子・関口トシ子・関徹・関正夫・竹田晴美・田中千代子・田村公一・堤明裕・堤和代・堤清子・堤純子・堤達也・堤務・堤翼・堤富男・堤富子・堤真史・堤正人・堤操・堤洋一・寺町為三・中川郁夫・中川和子・中川広一・中川しづゑ・中川正之・中川八千代・中川慶弘・中澤一雄・中澤一義・中澤佳代子・中澤耕一・中澤多美・中澤次雄・中沢春美・中澤まゆみ・中澤義己・中島千恵子・中西秋江・中野美代子・中村勝治・中村幸二・名倉艶子・名倉美智代・西田千代和・西史嗣・沼田みさを・野々村紘・橋本幸夫・橋本幸子・畑君代・畑きく恵・畑弥生・畑信弘・林節子・林田祥子・林雄太・人見正毅・平井武夫・平岩敬子・平野寿美枝・広瀬宗吾・広瀬秀夫・福島智香・藤木建直・古谷すが・平野かすみ・牧澤文夫・松田義兼・松橋健太・松本栄子・水谷敏夫・椋本好美・村上福治・森江津子・森川久男・森山兼夫・森山きよ子・八木浩二・八木まゆみ・谷尻小ちゑ・山口アキヨ・山田光・山田優・山本君代・脇上妙子

注2 亀岡市教育委員会「馬路遺跡発掘調査報告書—府営宮前千歳線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘

調査一」（『亀岡市文化財調査報告書』第44集） 1997

注3 京都府教育委員会「国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』） 2004

注4 森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」（『大宰府陶磁器研究』） 1995

注5 亀岡市教育委員会「三日市遺跡 丹波国分寺瓦窯跡の磁気探査概要報告」（『亀岡市文化財調査報告書』第68集） 2004

圖 版

図版第1 河原尻遺跡

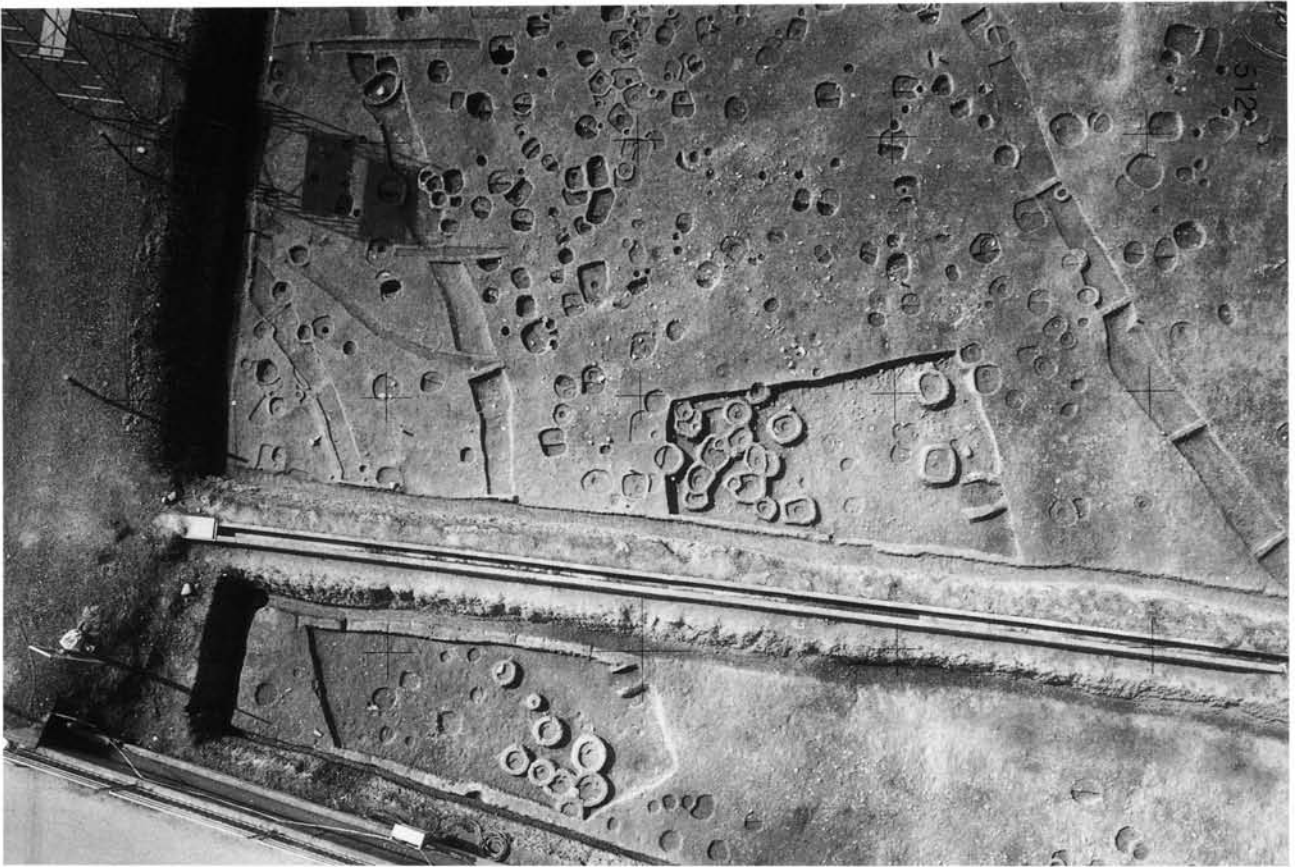


(1)調査地全景(南から)



(2)第1トレンチ全景(上が西)

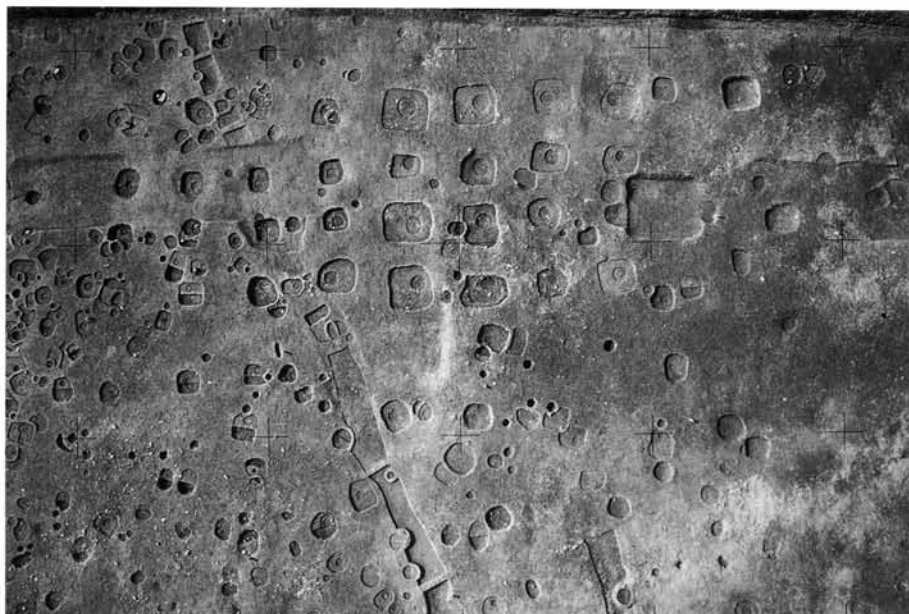
図版第2 河原尻遺跡



(1)第1・2トレンチ南部(上が西)



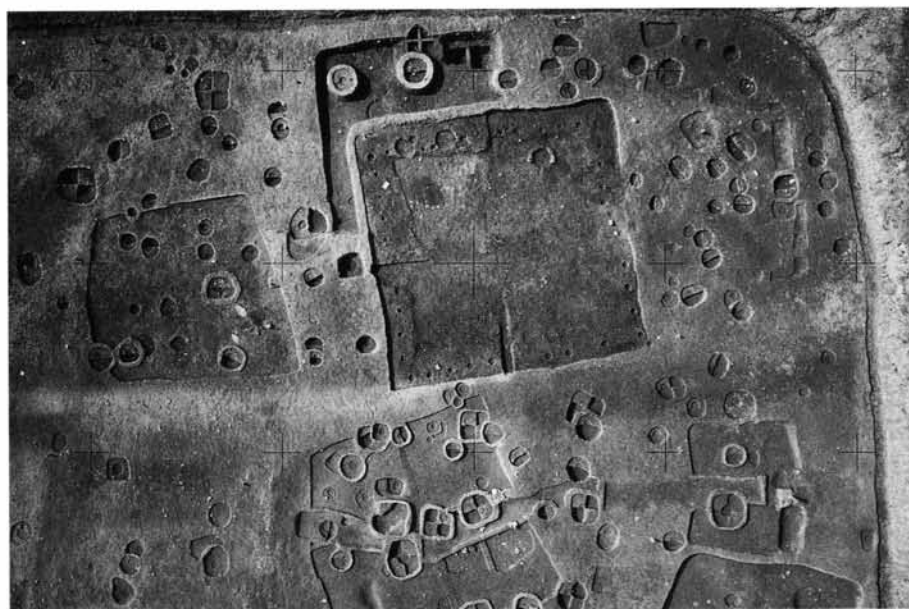
(2)第2トレンチ南部(上が西)



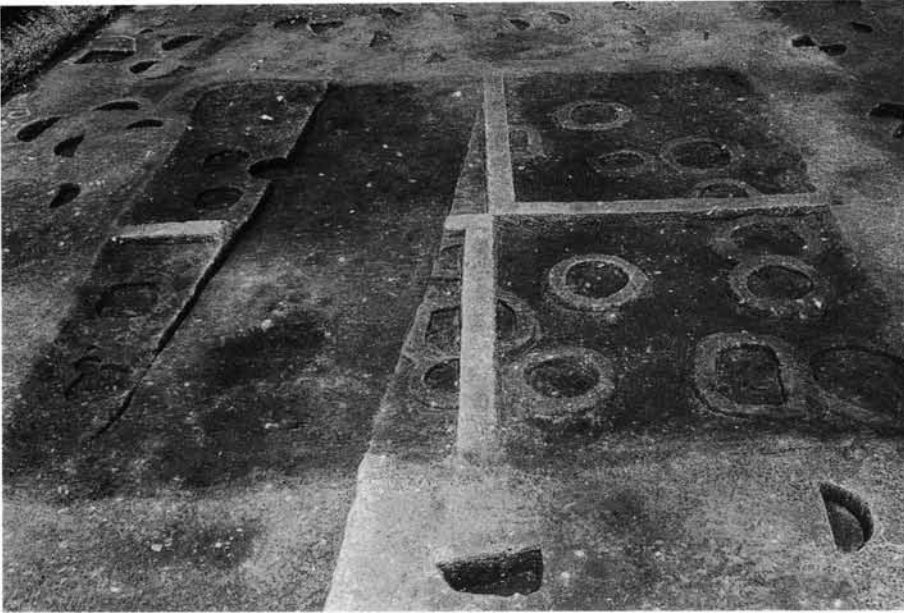
(1)第2トレンチ中部(上が西)



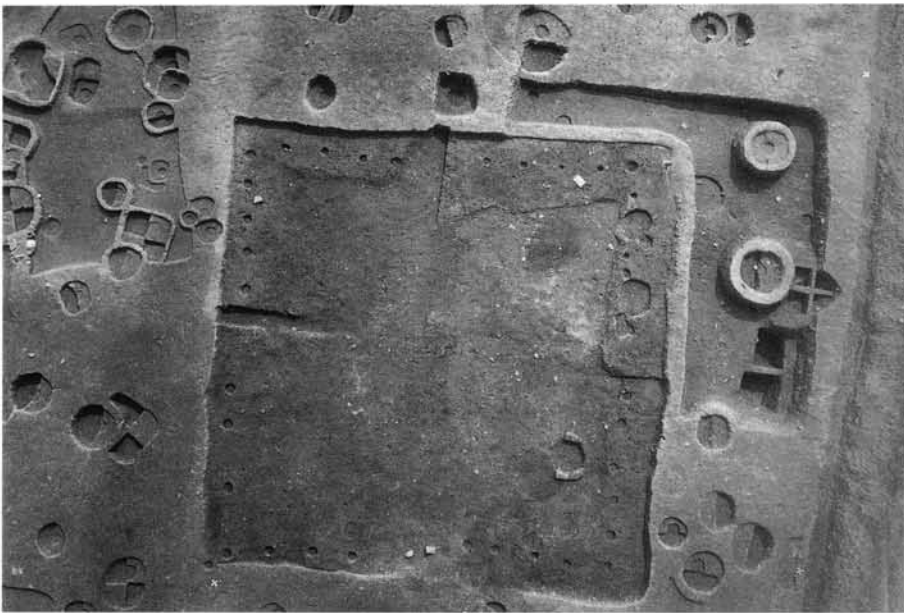
(2)第2トレンチ北東部(上が西)



(3)第2トレンチ北西部(上が西)



(1)第2トレンチ
竪穴式住居跡SH1検出状況
(南から)



(2)第2トレンチ
竪穴式住居跡SH1・40全景
(上が南)



(3)第2トレンチ
竪穴式住居跡SH1
小ピット列と断面(南から)



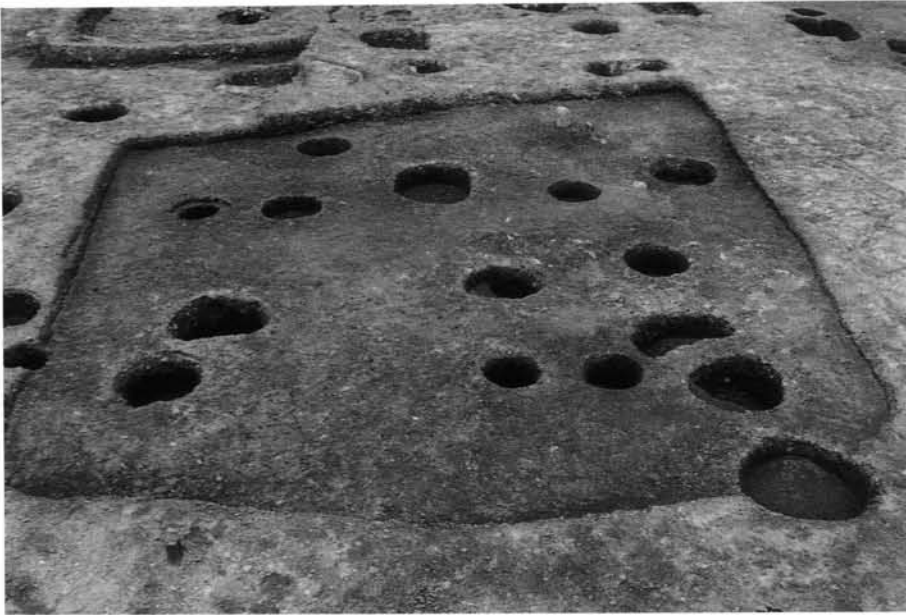
(1)第2トレンチ
竪穴式住居跡SH1全景
(南から)



(2)第1トレンチ
竪穴式住居跡SH2竈全景
(南東から)



(3)第2トレンチ
竪穴式住居跡SH40竈全景
(北から)



(1)第2トレンチ
竪穴式住居跡S H49全景
(南から)



(2)第2トレンチ
竪穴式住居跡S H157断面
(西から)



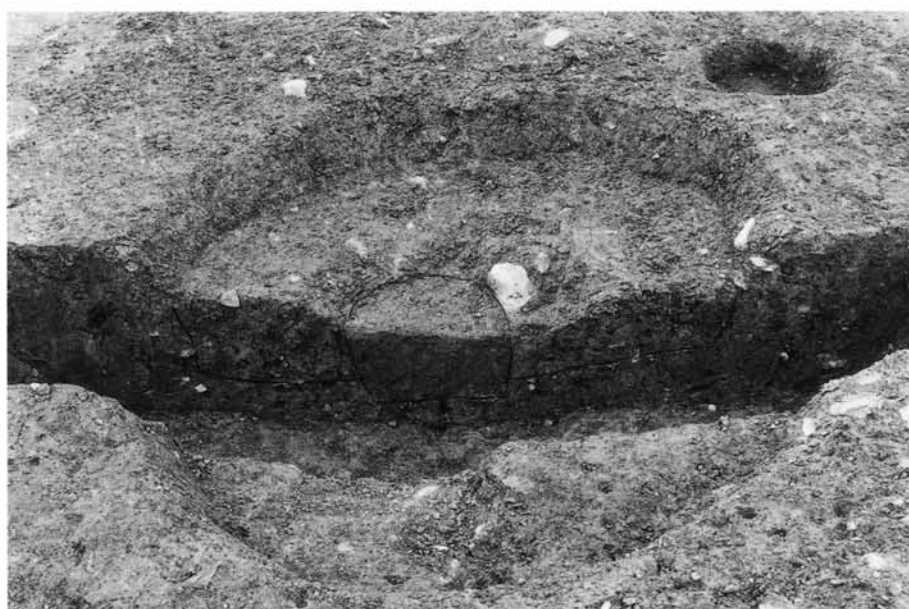
(3)第2トレンチ
竪穴式住居跡S H179全景
(南から)



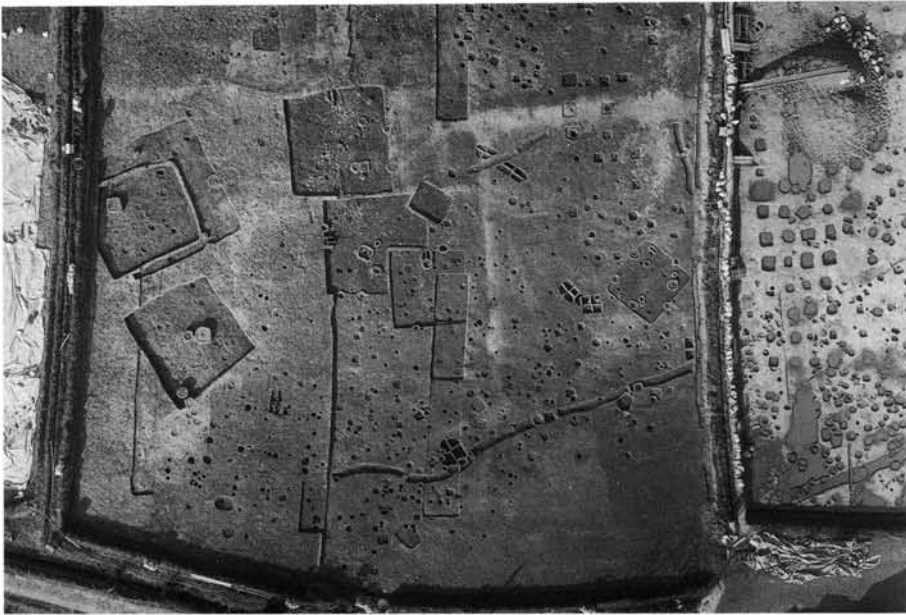
(1)第2トレンチ
竪穴式住居跡SH192全景
(南から)



(2)第2トレンチ
掘立柱建物跡SB1全景
(西南西から)



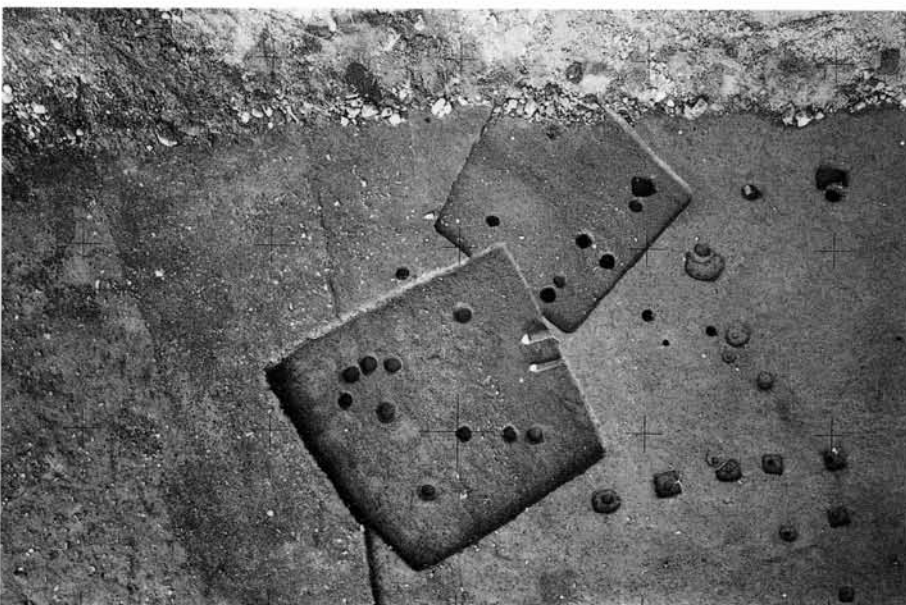
(3)第2トレンチ
掘立柱建物跡SB1
柱穴断ち割り断面(南から)



(1)第3トレンチ南部(上が北)



(2)第4トレンチ北部(上が北)



(3)第3トレンチ
竪穴式住居跡 S H 205・207
(上が北)



(1)第3トレンチ
竪穴式住居跡 S H205全景
(南東から)



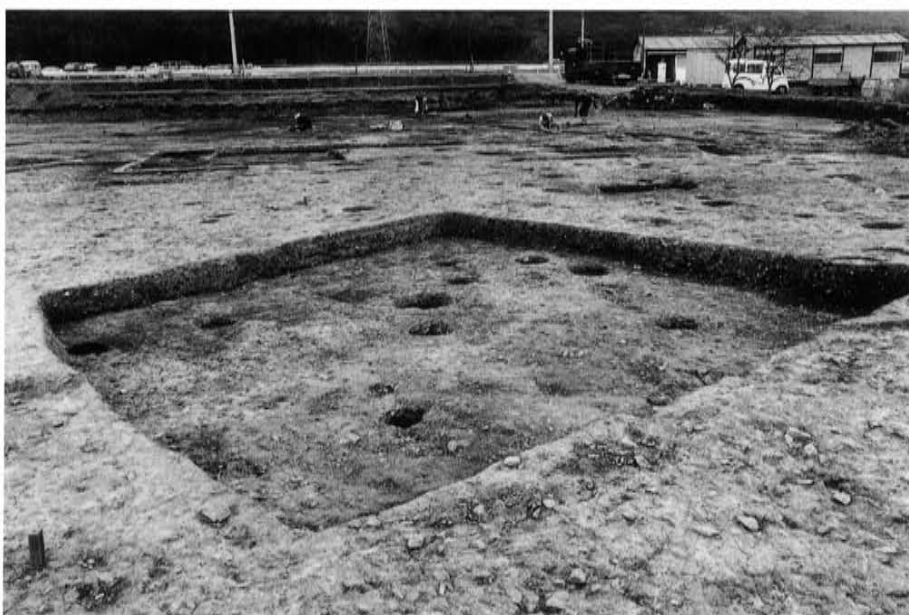
(2)第3トレンチ
竪穴式住居跡 S H207竈全景
(南西から)



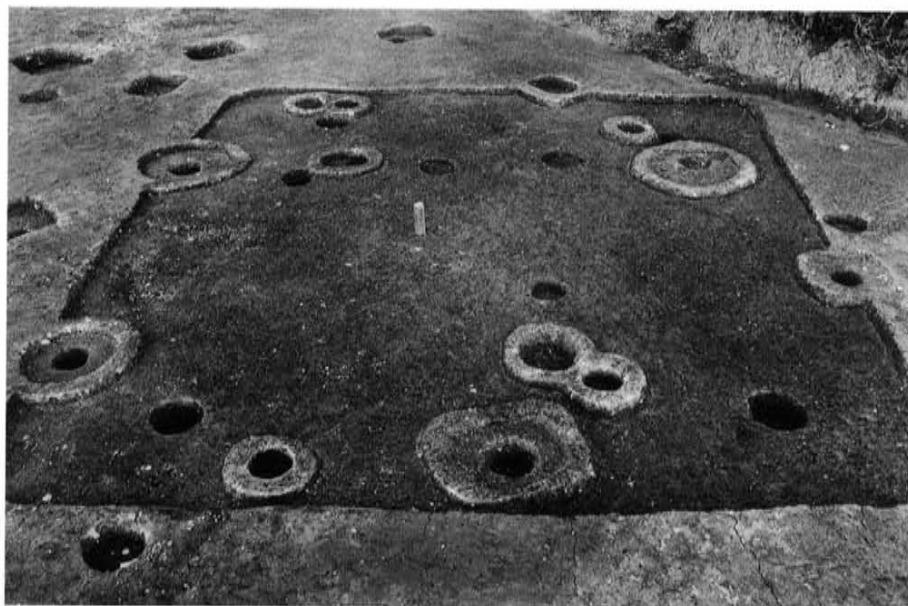
(3)第3トレンチ
竪穴式住居跡 S H208全景
(南西から)



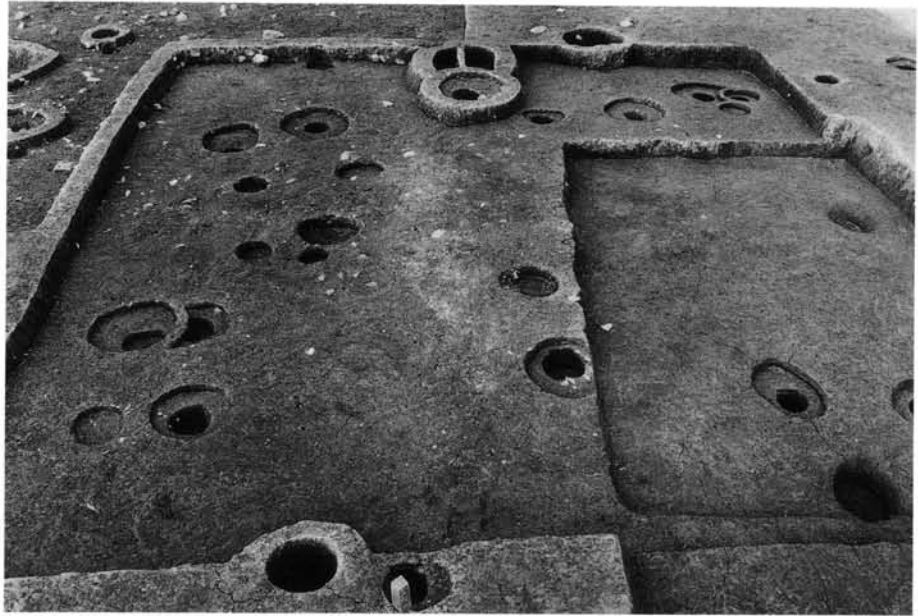
(1) 第3 トレンチ
竪穴式住居跡 S H212・213全景
(南西から)



(2) 第3 トレンチ
竪穴式住居跡 S H215全景
(西から)



(3) 第3 トレンチ
竪穴式住居跡 S H216全景
(南西から)



(1)第3トレンチ
竪穴式住居跡 S H218全景
(南から)



(2)第3トレンチ
竪穴式住居跡 S H218内
土坑 S K582全景(東から)



(3)第3トレンチ
竪穴式住居跡 S H219全景
(南東から)

図版第12 河原尻遺跡



(1)第3トレンチ
掘立柱建物跡 S B 551全景
(東から)



(2)第3トレンチ
掘立柱建物跡 S B 615全景
(西から)

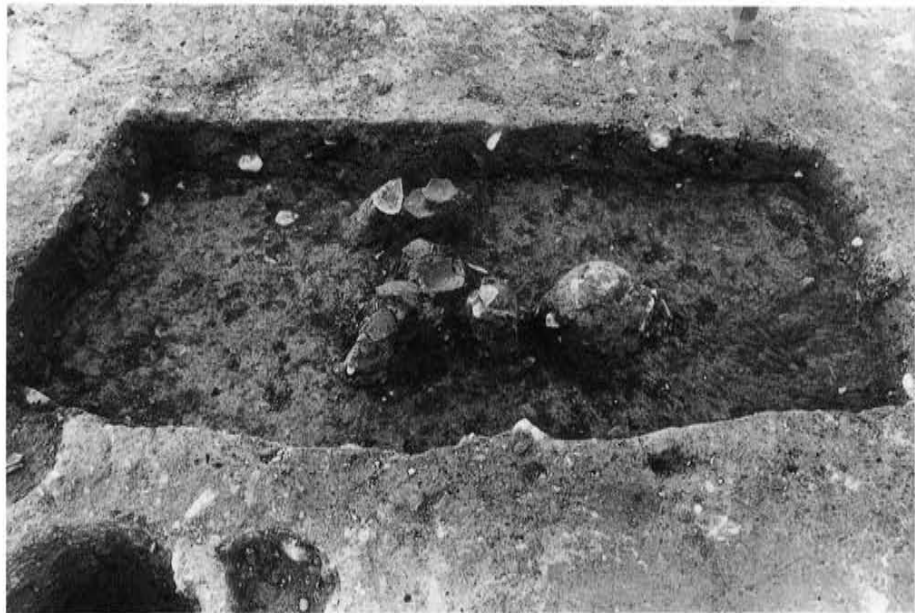


(3)第3トレンチ
掘立柱建物跡 S B 708全景
(東から)

図版第13 河原尻遺跡



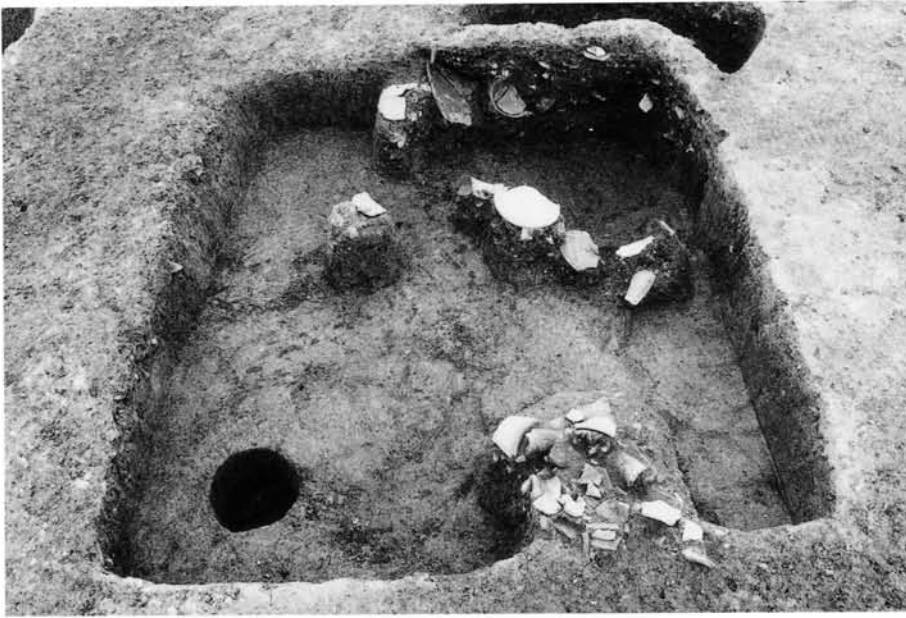
(1)第3トレンチ
土坑S K214・630・707全景
(南東から)



(2)第3トレンチ
土坑S K526全景(東から)



(3)第3トレンチ
土坑S K566・567・568
(南西から)



(1)第3トレンチ
土坑S K566全景(東から)



(2)第3トレンチ
土坑S K568全景(南西から)



(3)第4トレンチ近景(南から)



(1)第6トレンチ全景(上が北)



(2)第6トレンチ北西部(上が北)



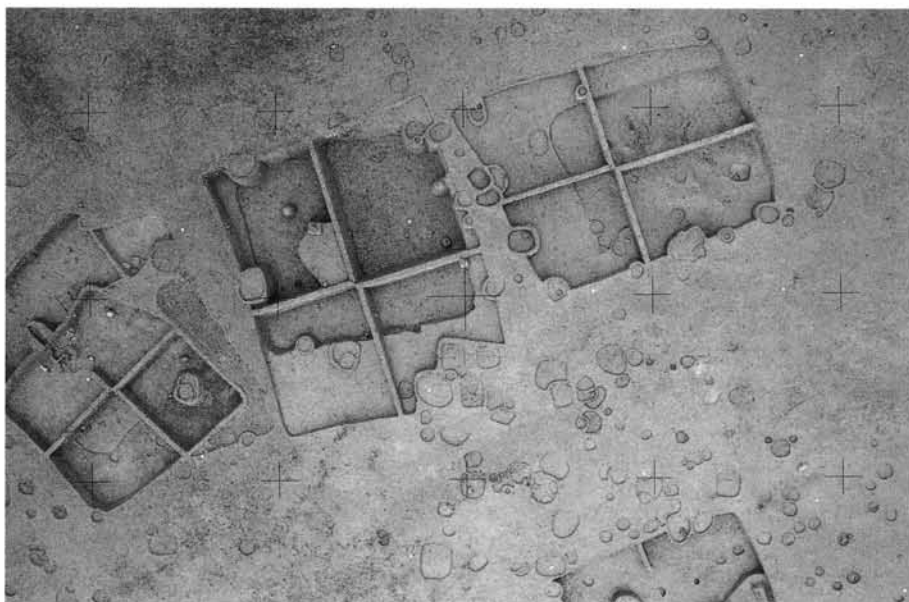
(3)第6トレンチ中西部(上が北)



(1)第6トレンチ南西部(上が西)

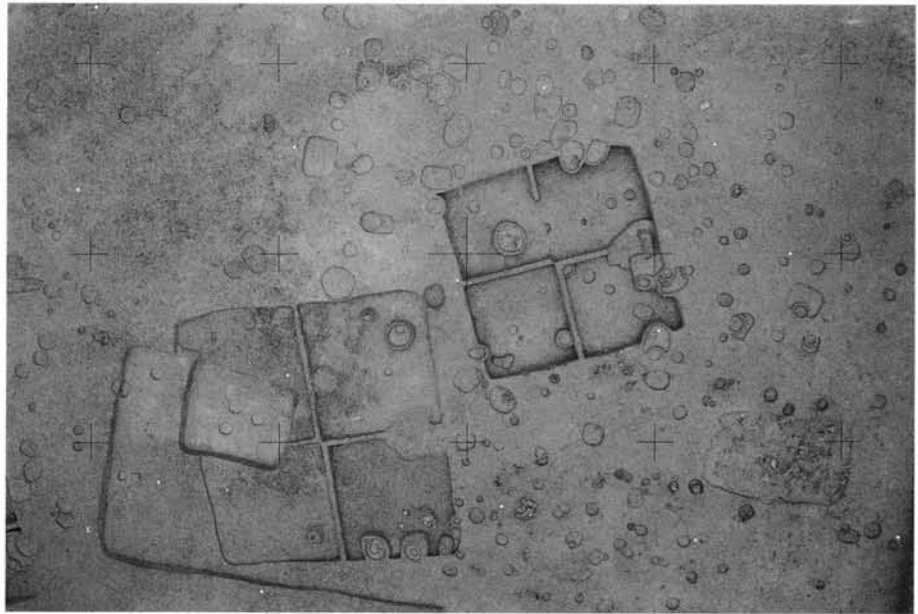


(2)第6トレンチ北東部(上が北)



(3)第6トレンチ中東部1(上が北)

図版第17 河原尻遺跡



(1)第6トレンチ中東部2(上が北)



(2)第6トレンチ南東部(上が北)



(3)第6トレンチ
竪穴式住居跡S H194・195全景
(南東から)



(1)第6トレンチ
竪穴式住居跡SH194竈
(南東から)



(2)第6トレンチ
竪穴式住居跡SH196竈
(南西から)



(3)第6トレンチ
竪穴式住居跡SH197・671全景
(南東から)

図版第19 河原尻遺跡



(1)第6トレンチ
竈穴式住居跡 S H197竈
(南東から)



(2)第6トレンチ
竈穴式住居跡 S H198ほか
(西南西から)



(3)第6トレンチ
竈穴式住居跡 S H222竈
(南東から)



(1)第6トレンチ
竪穴式住居跡 S H224全景
(南南東から)



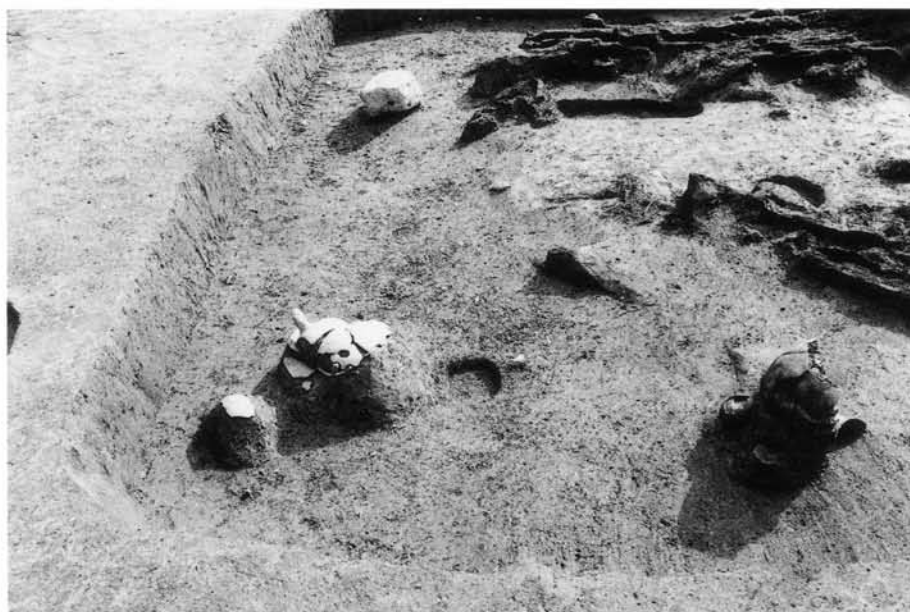
(2)第6トレンチ
竪穴式住居跡 S H224竈
(南東から)



(3)第6トレンチ
竪穴式住居跡 S H224
遺物出土状況(南西から)



(1)第6トレンチ
竪穴式住居跡 S H630全景
(北東から)



(2)第6トレンチ
竪穴式住居跡 S H630
遺物出土状況(北西から)



(3)第6トレンチ
土坑 S K637全景(西から)

図版第22 河原尻遺跡



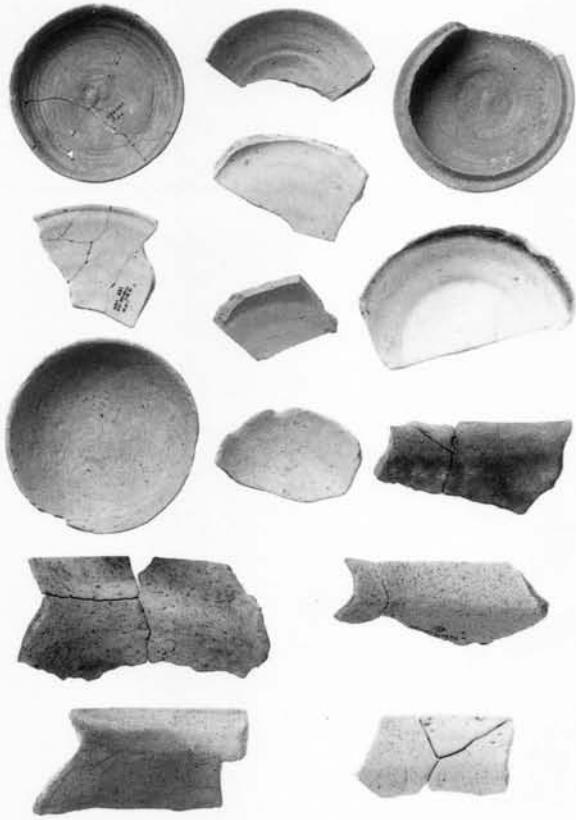
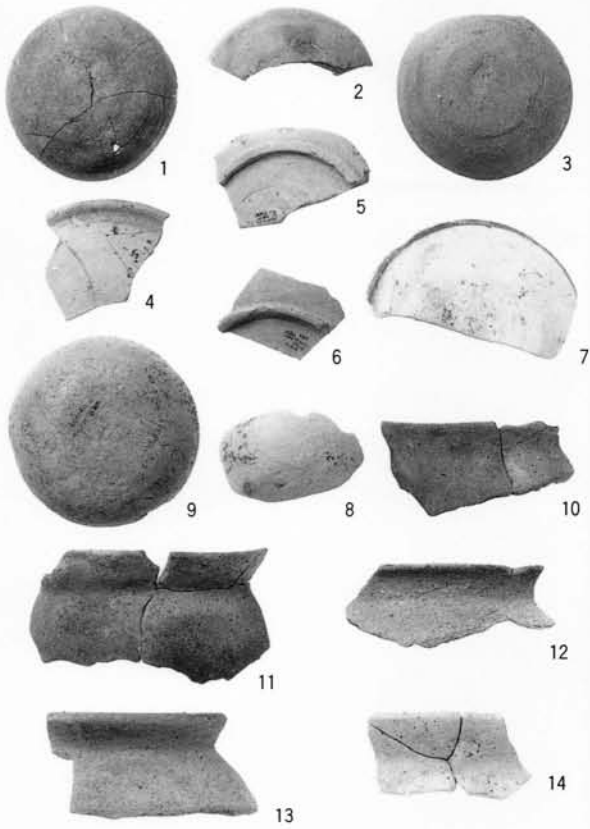
(1)第7トレンチ全景(東から)



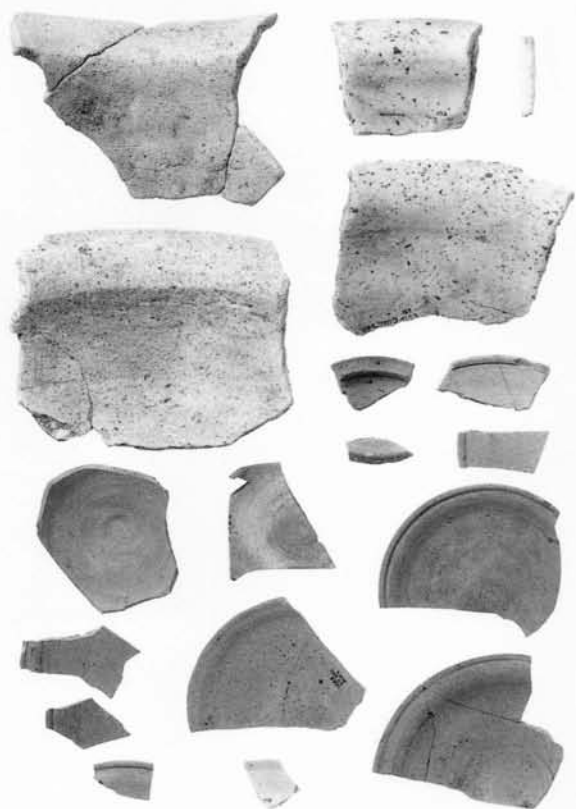
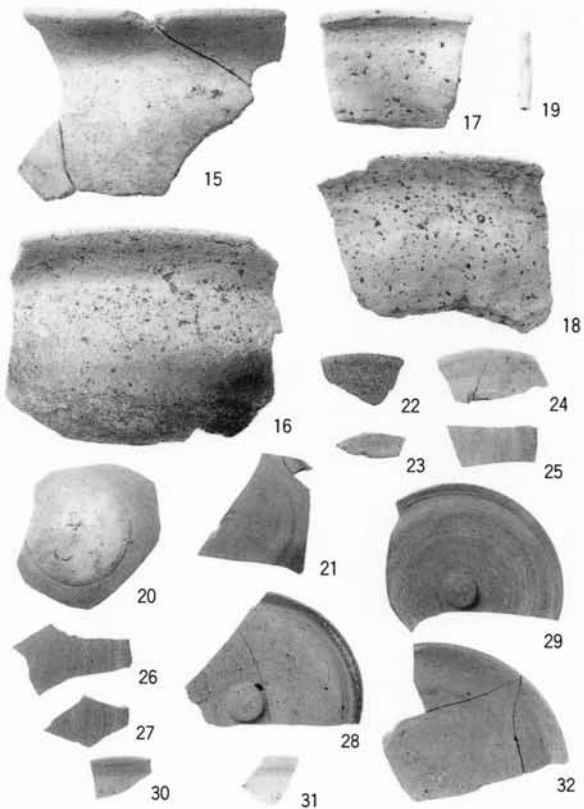
(2)第8トレンチ全景(南から)



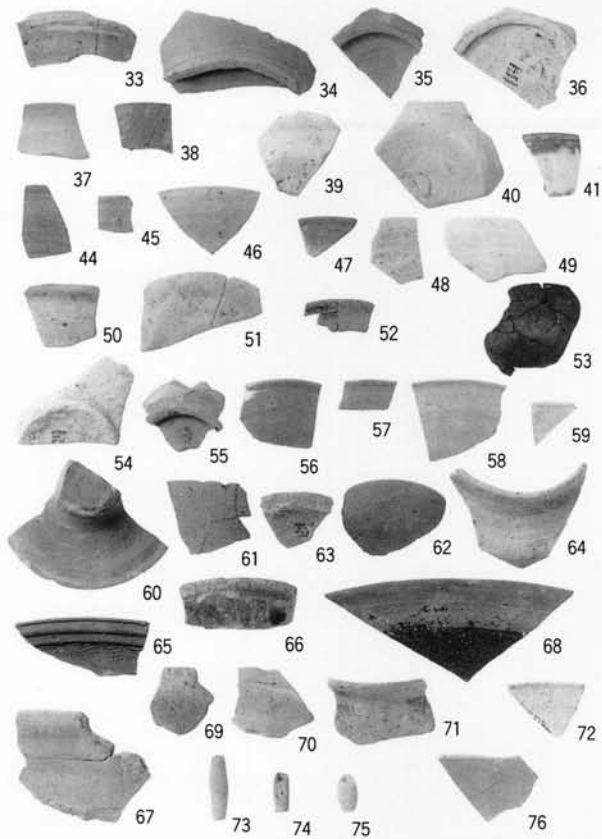
(3)第9トレンチ全景(東から)



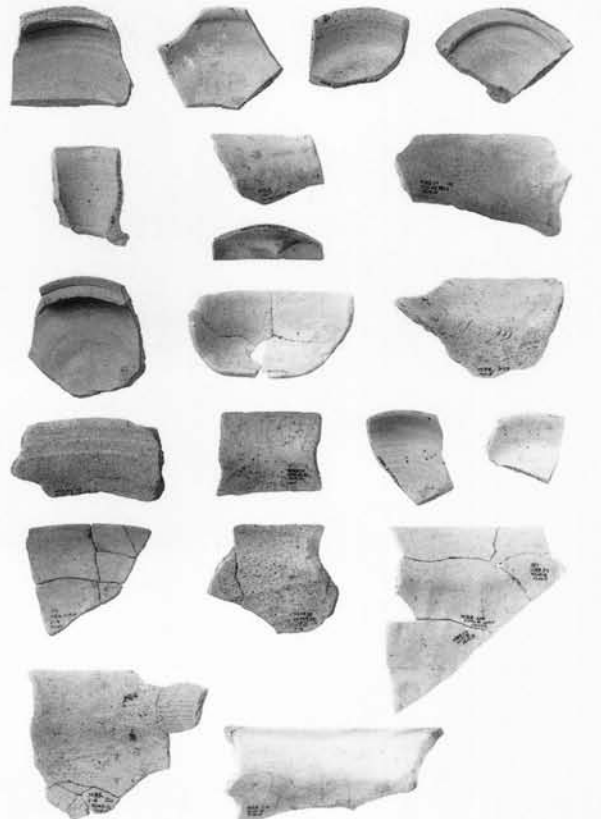
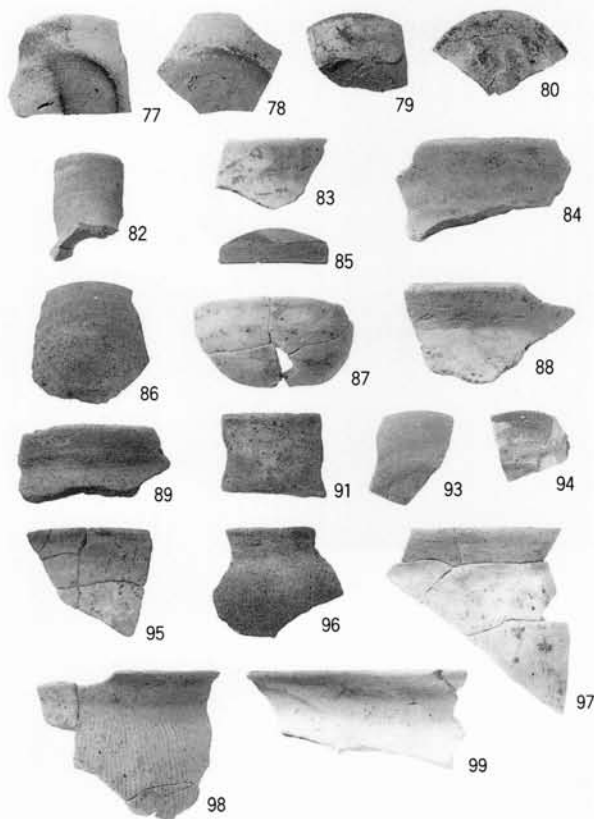
(1)第1トレンチ竪穴式住居跡SH2出土遺物(1)



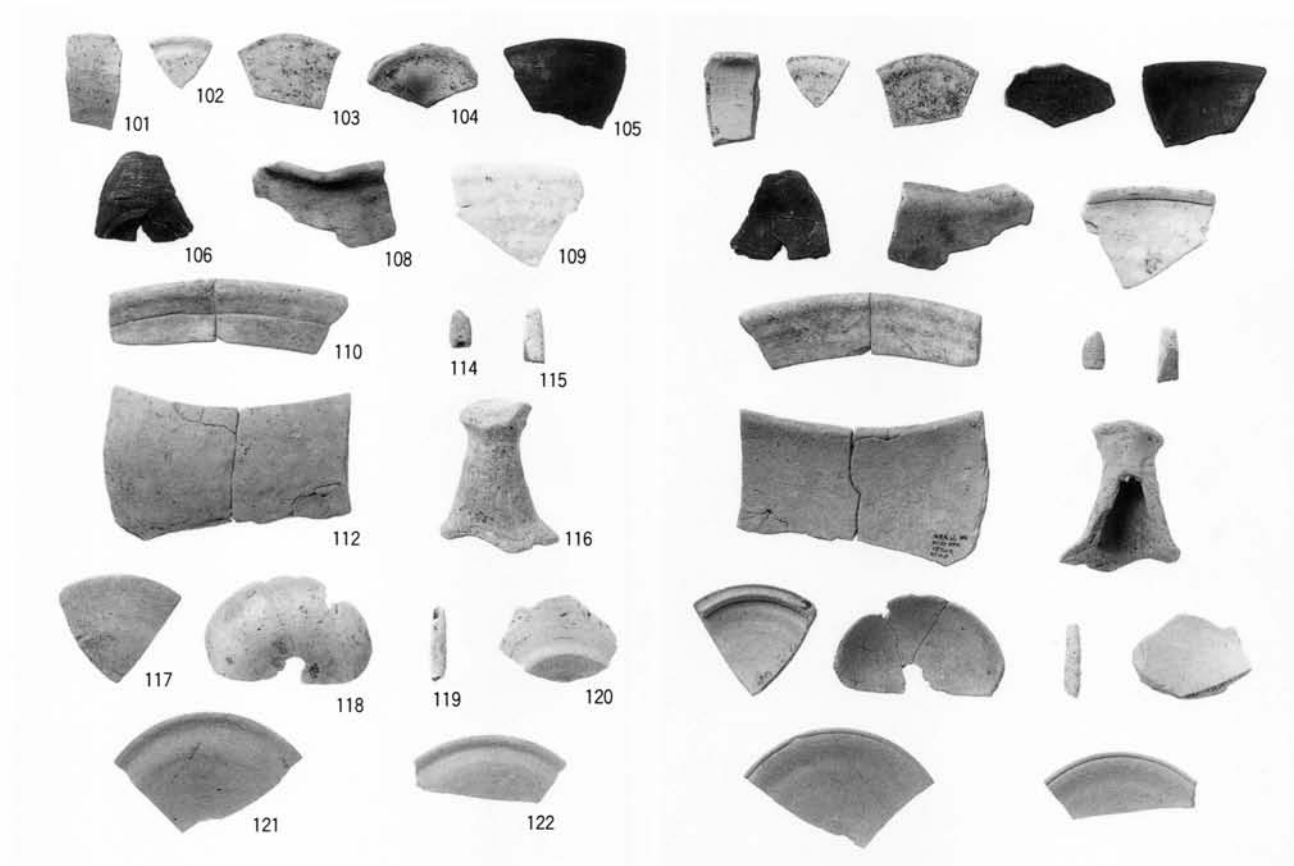
(2)第1トレンチ竪穴式住居跡SH2出土遺物(2)、第2トレンチピット出土遺物(1)



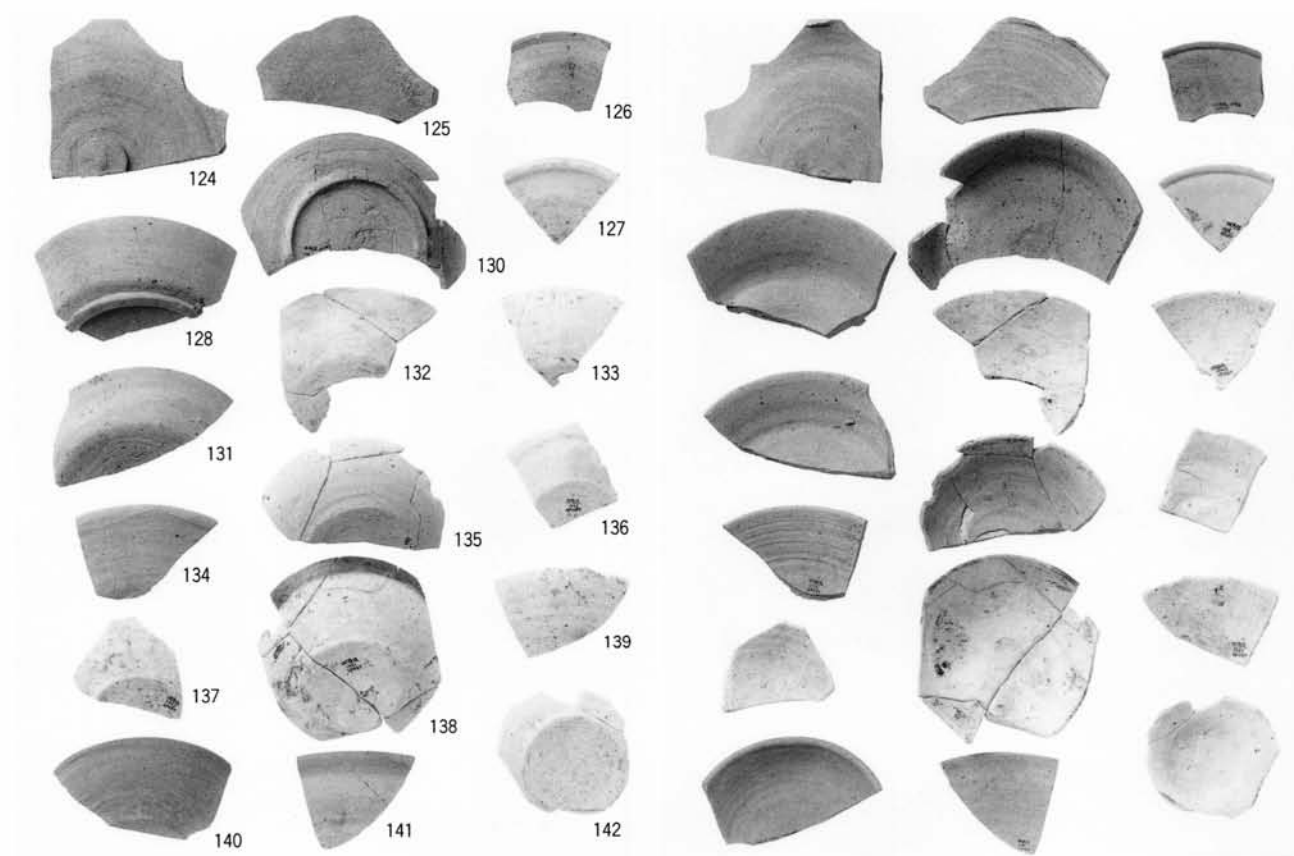
(1)第2トレンチピット出土遺物(2)



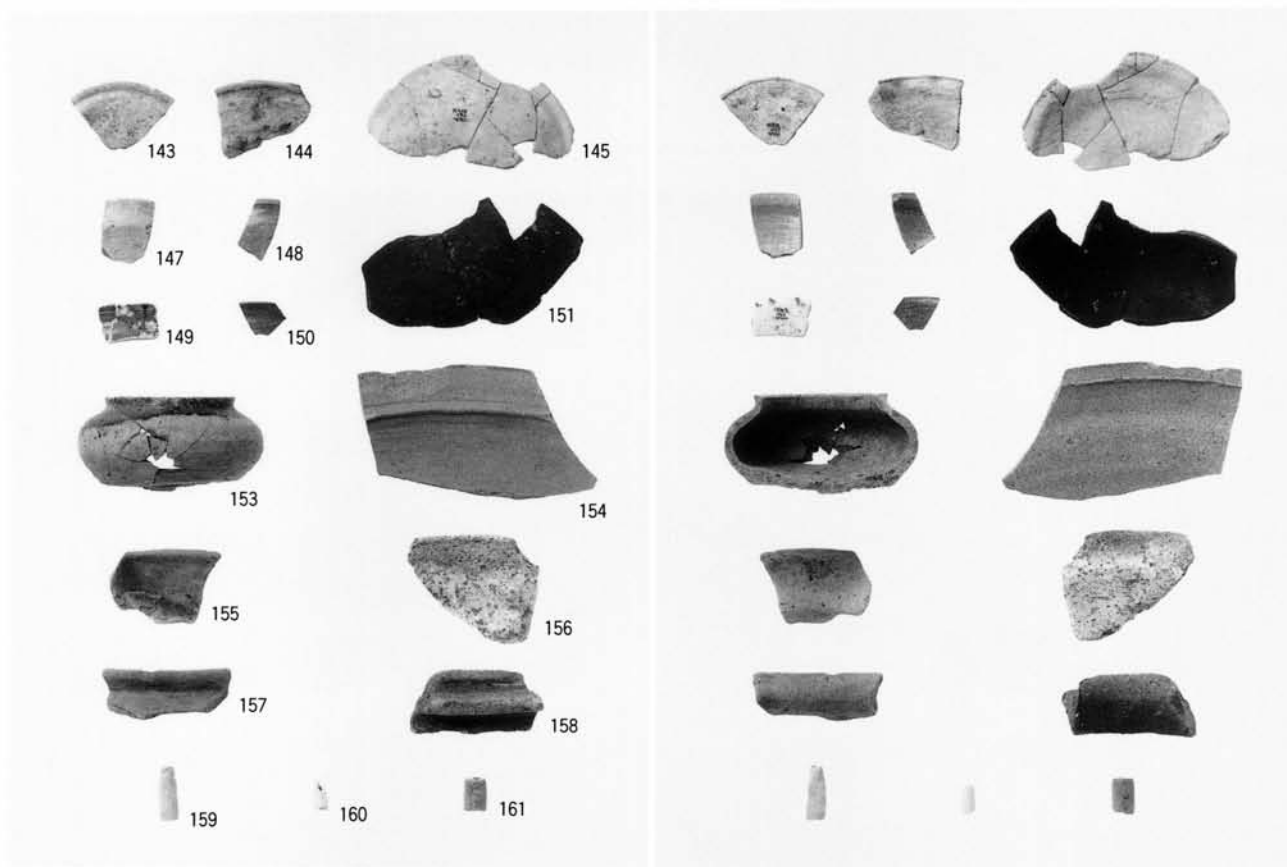
(2)第2トレンチ竪穴式住居跡SH1・4・46・49・147出土遺物(2)



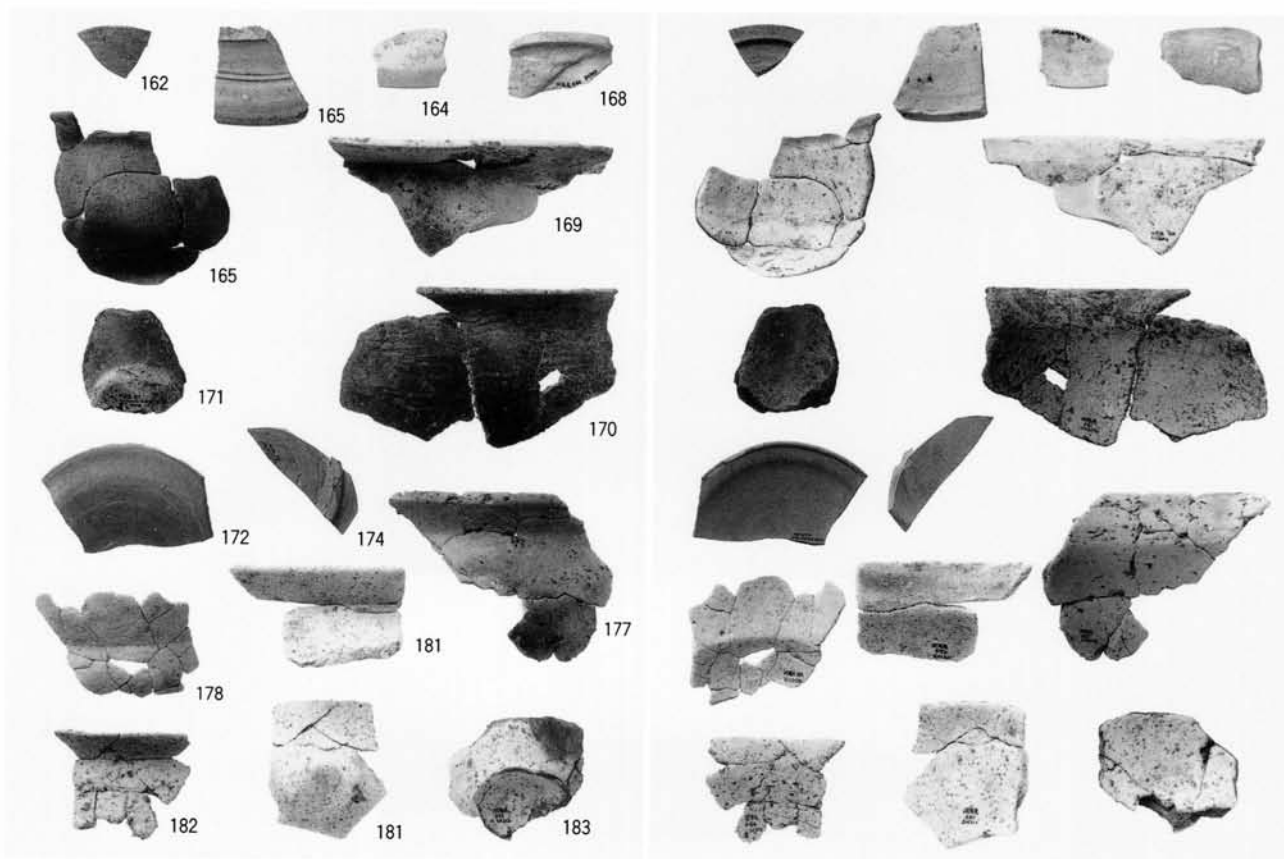
(1)第2トレンチ縦穴式住居跡S H157・179、溝S D 9・27・167出土遺物



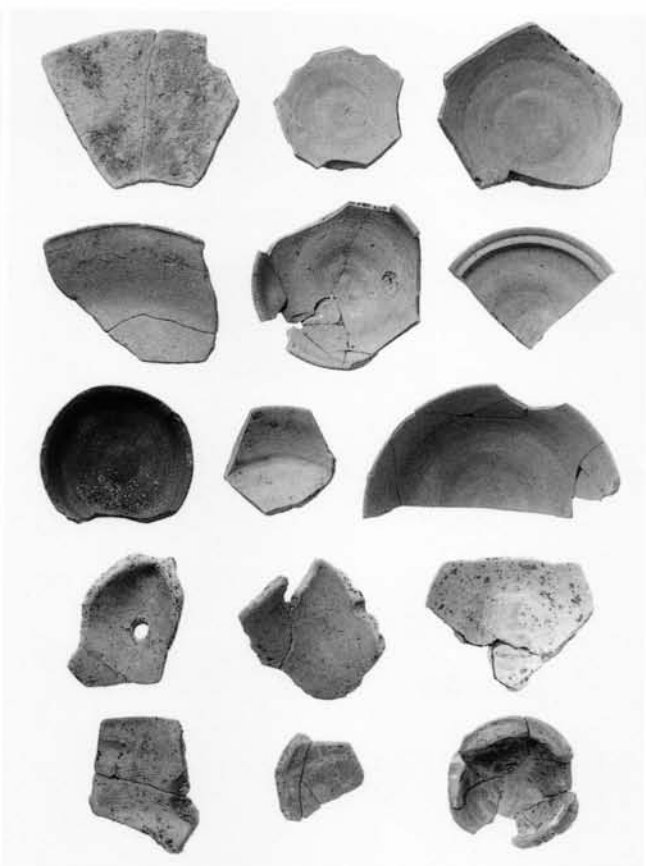
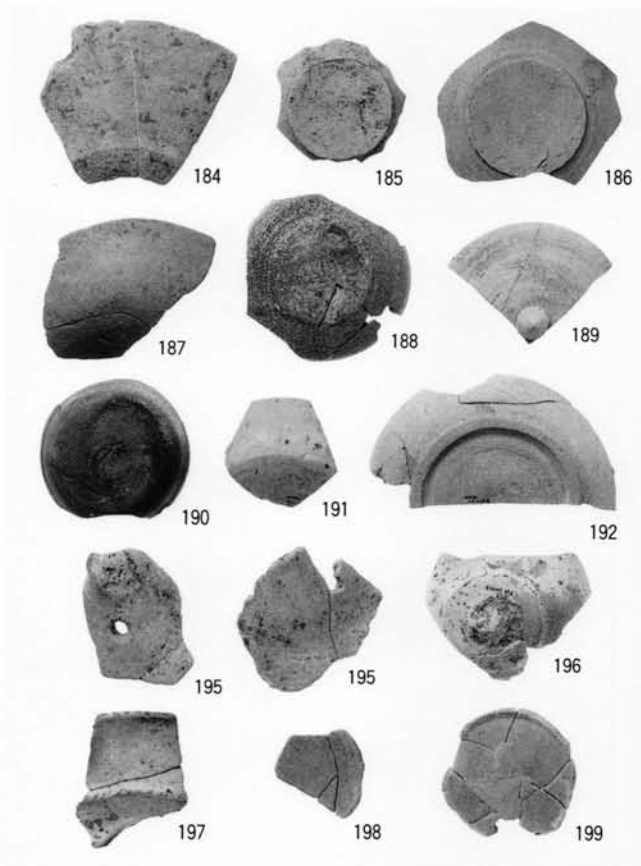
(2)第3トレンチピット出土遺物(1)



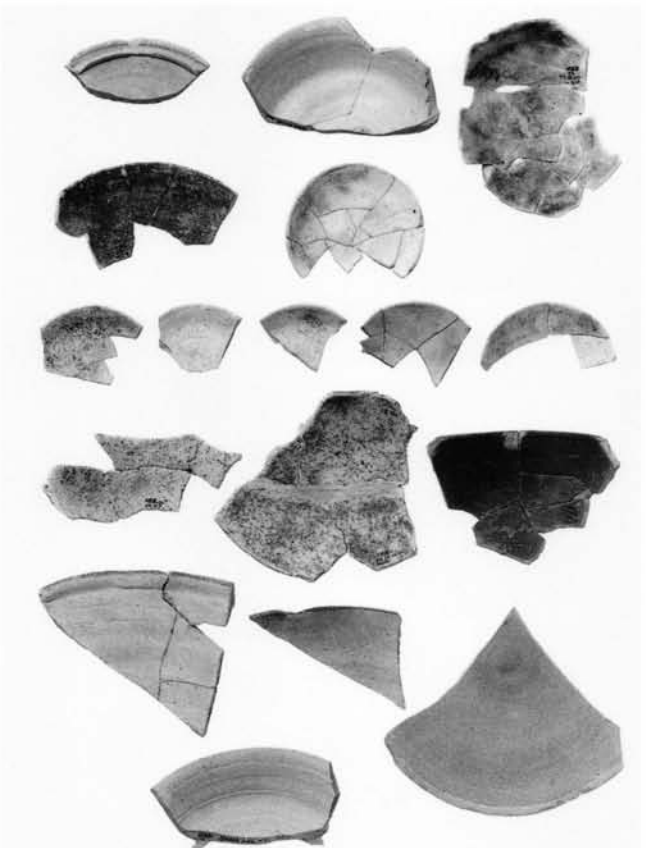
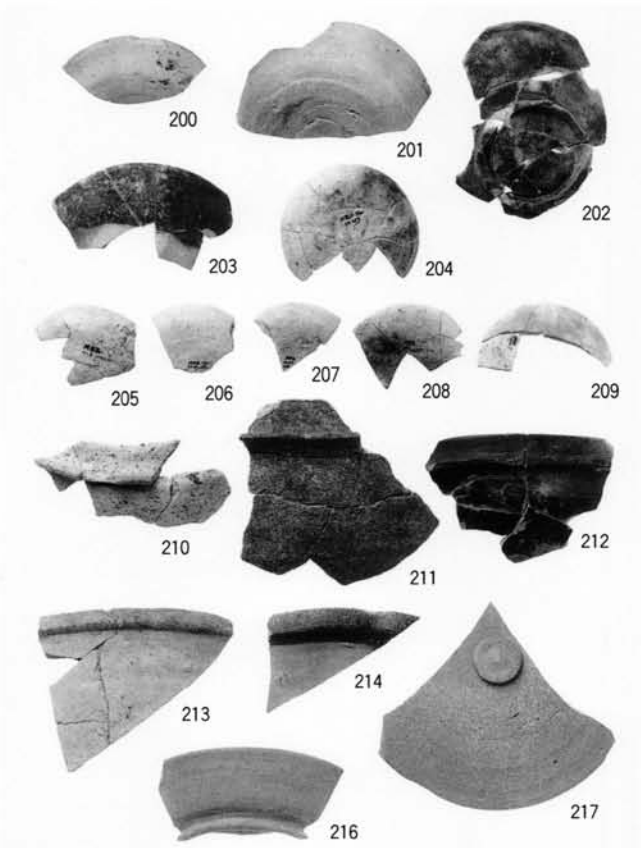
(1)第3トレンチピット出土遺物(2)



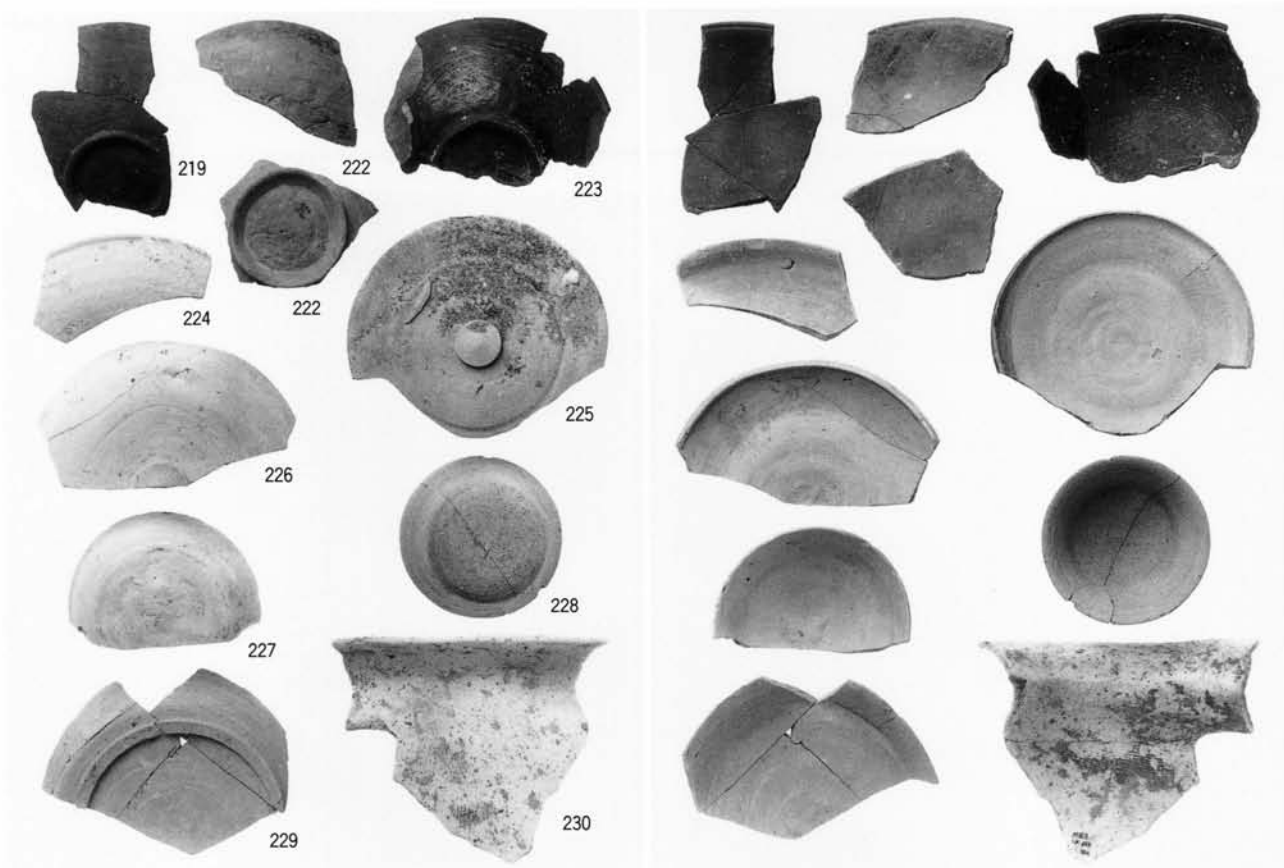
(2)第3トレンチ竪穴式住居跡S H 205・207~212出土遺物



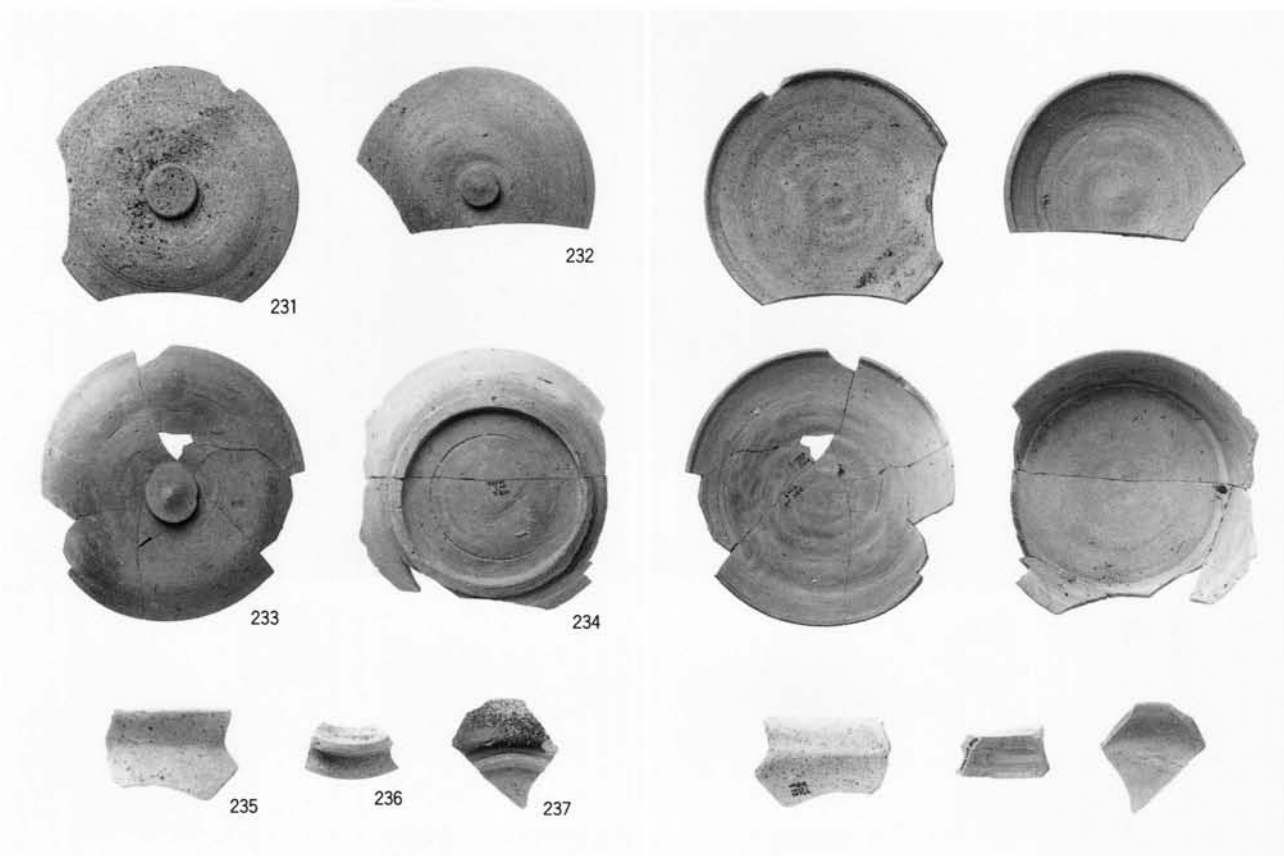
(1)第3トレンチ竪穴式住居跡S H215・218・626出土遺物



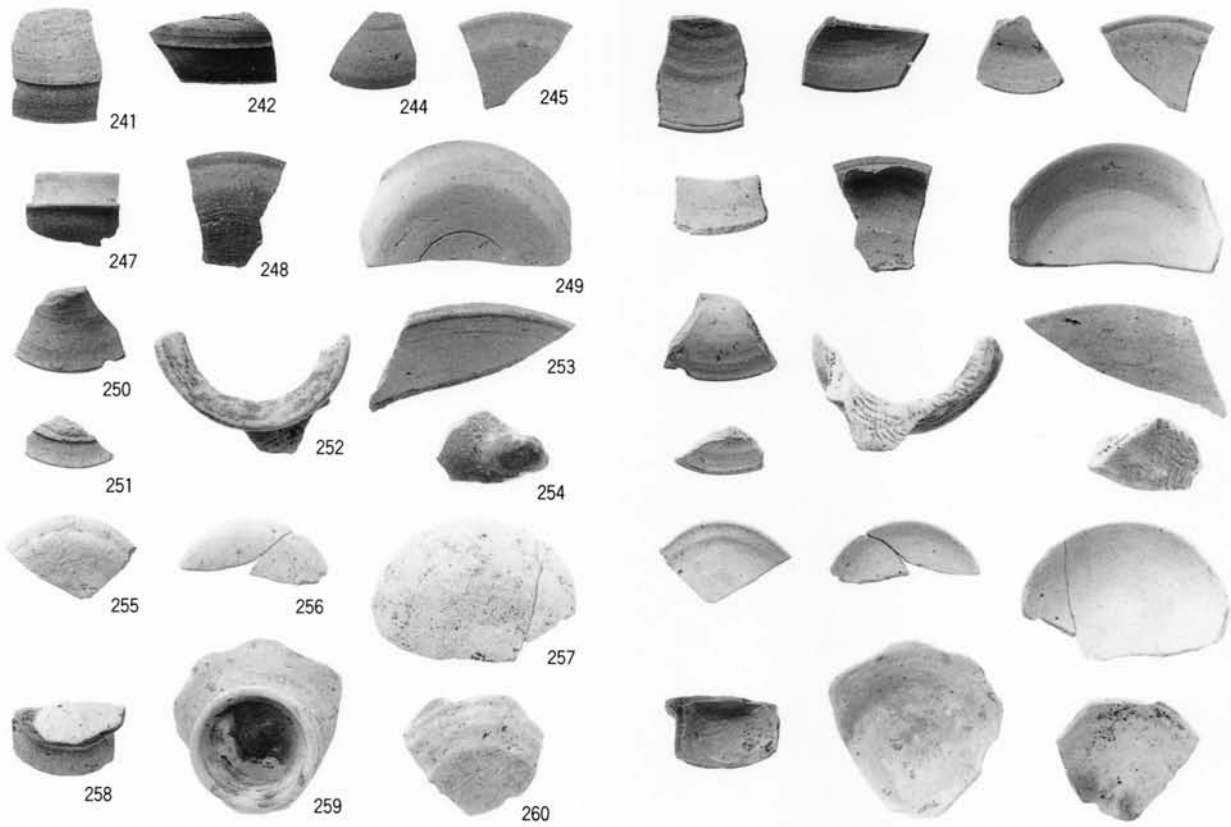
(2)第3トレンチ土坑S K214・217・508・557・707出土遺物



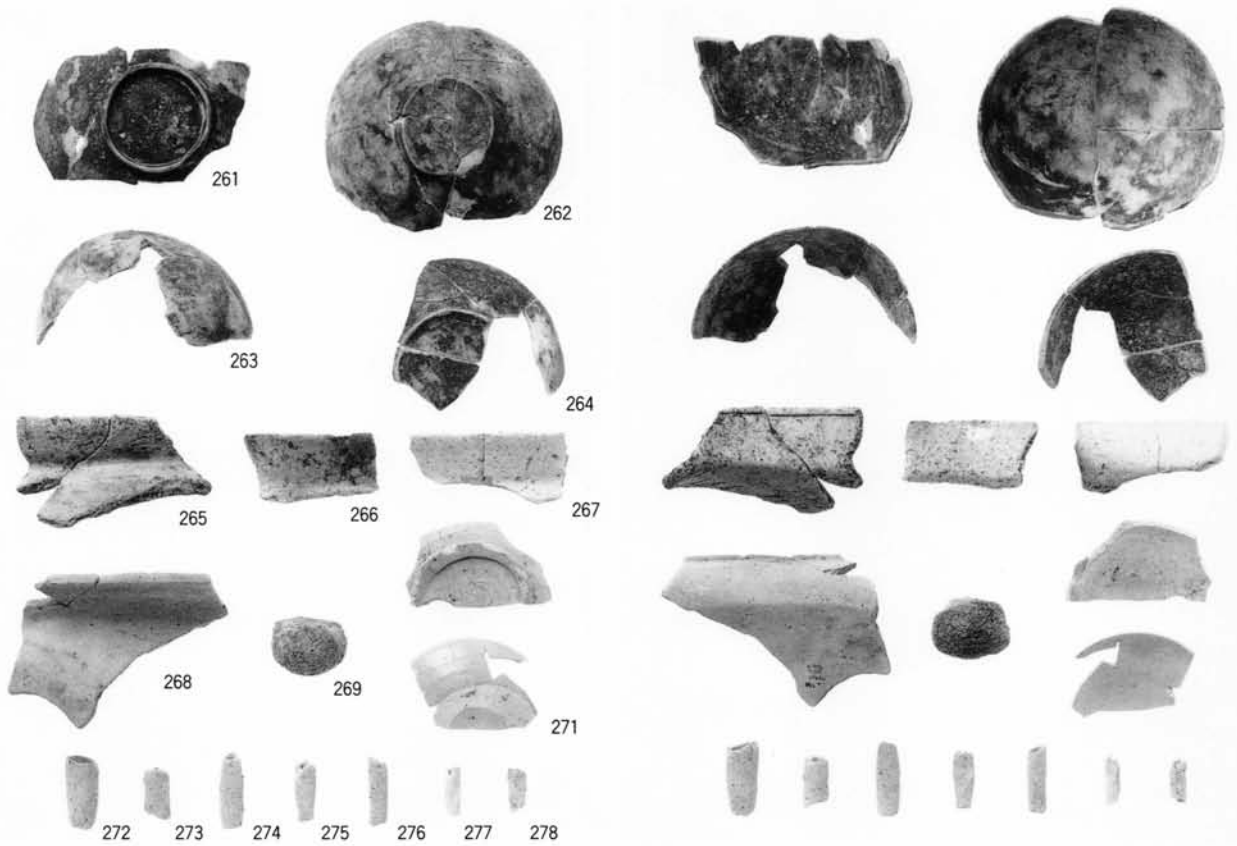
(1)第3 トレンチ S X 526・S X 566出土遺物



(2)第3 トレンチ S X 568・溝 S D 604出土遺物

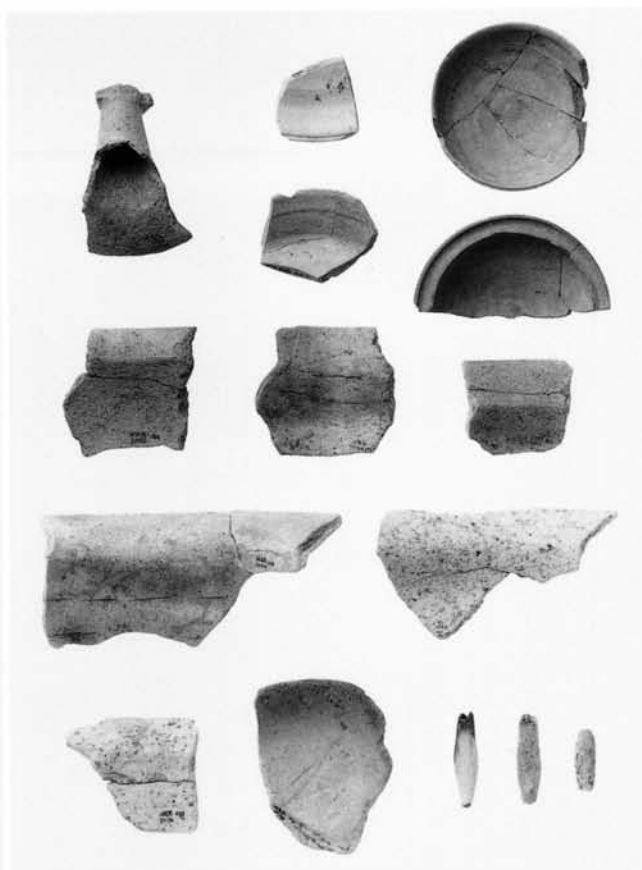
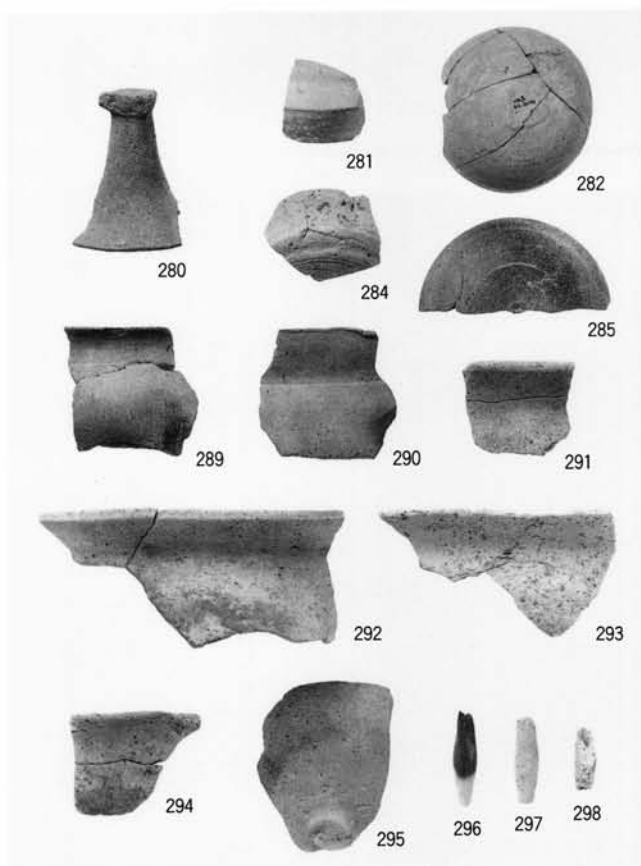


(1)第6トレンチピット出土遺物(1)

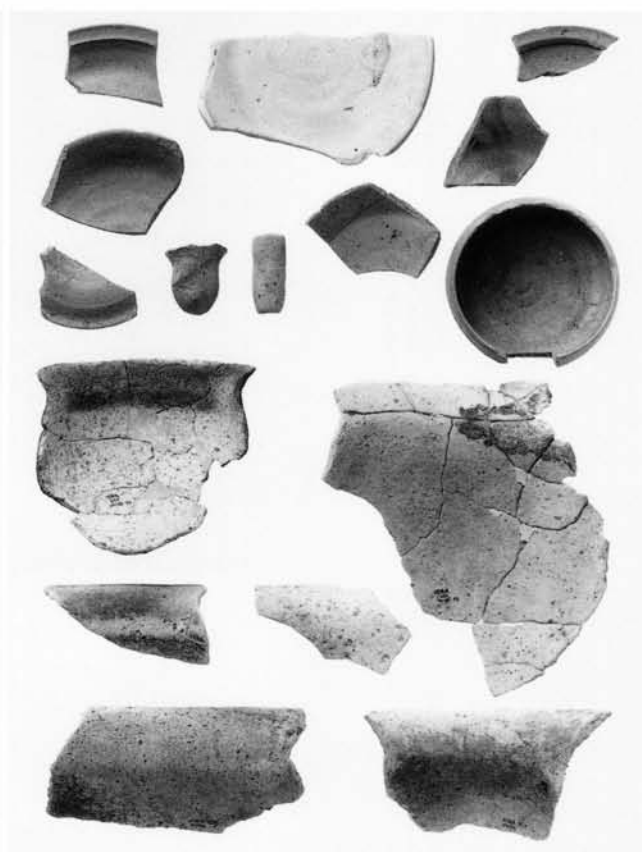
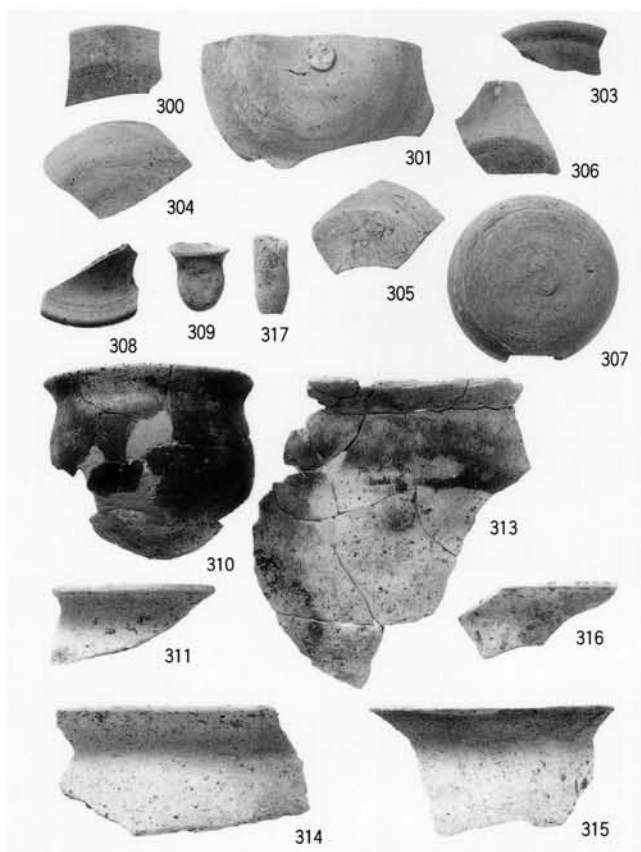


(2)第6トレンチピット出土遺物(2)

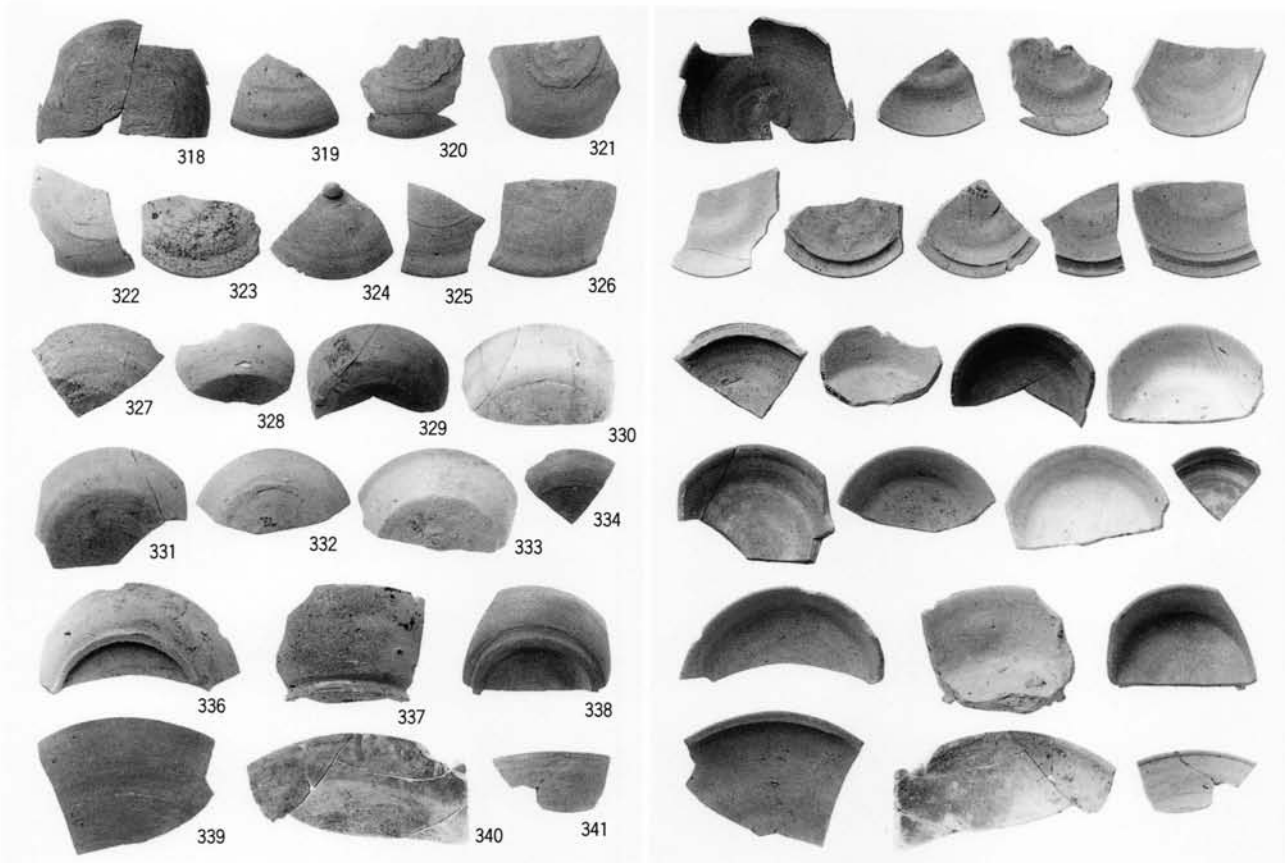
図版第30 河原尻遺跡



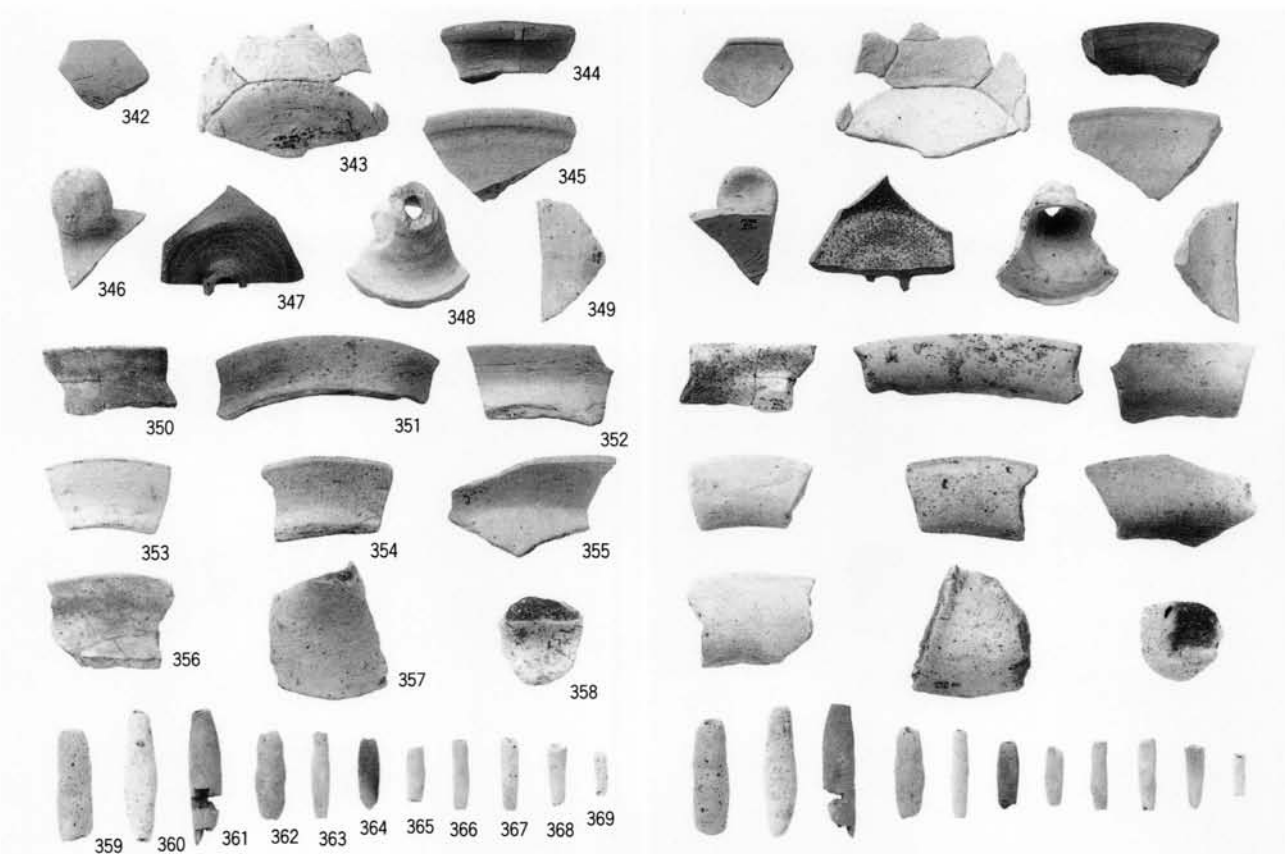
(1)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H193~195出土遺物



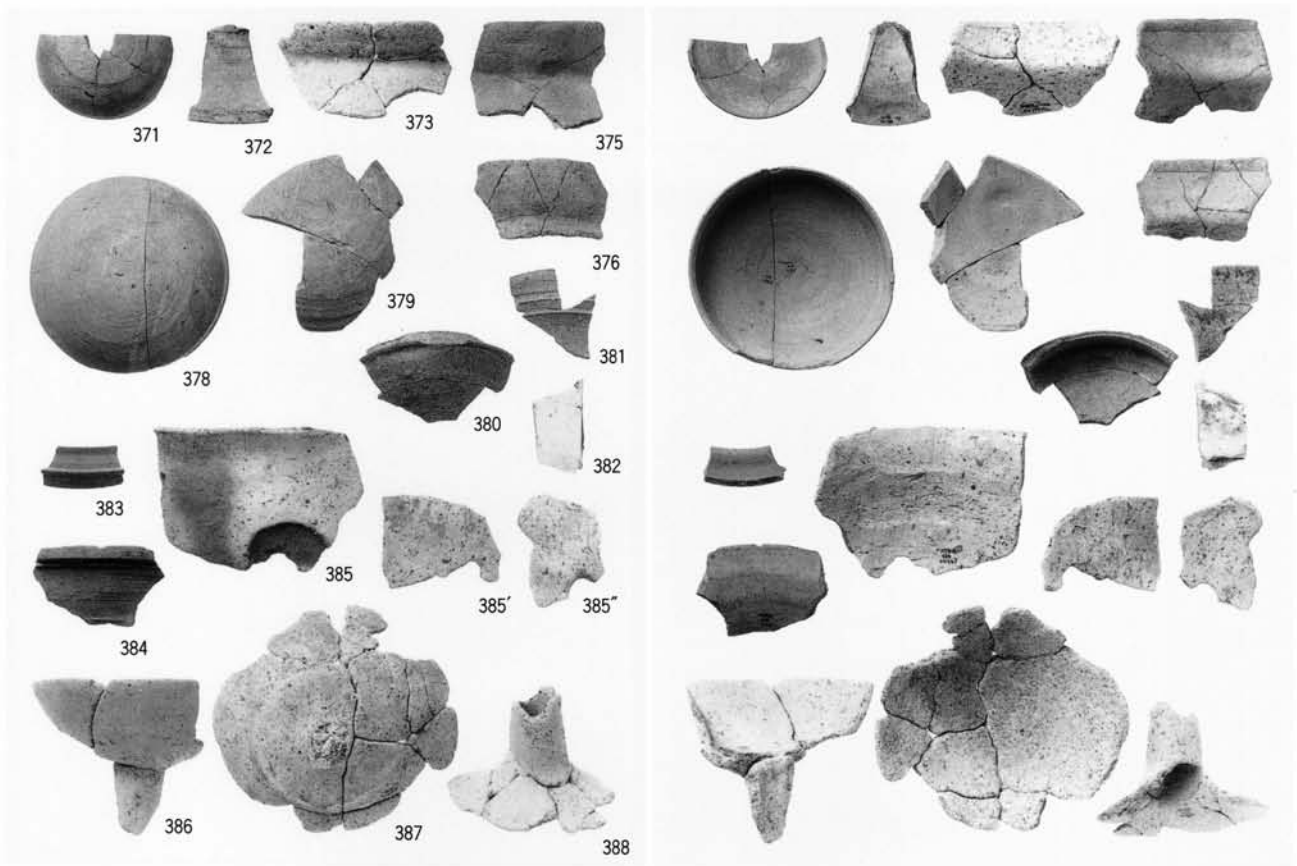
(2)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H196出土遺物



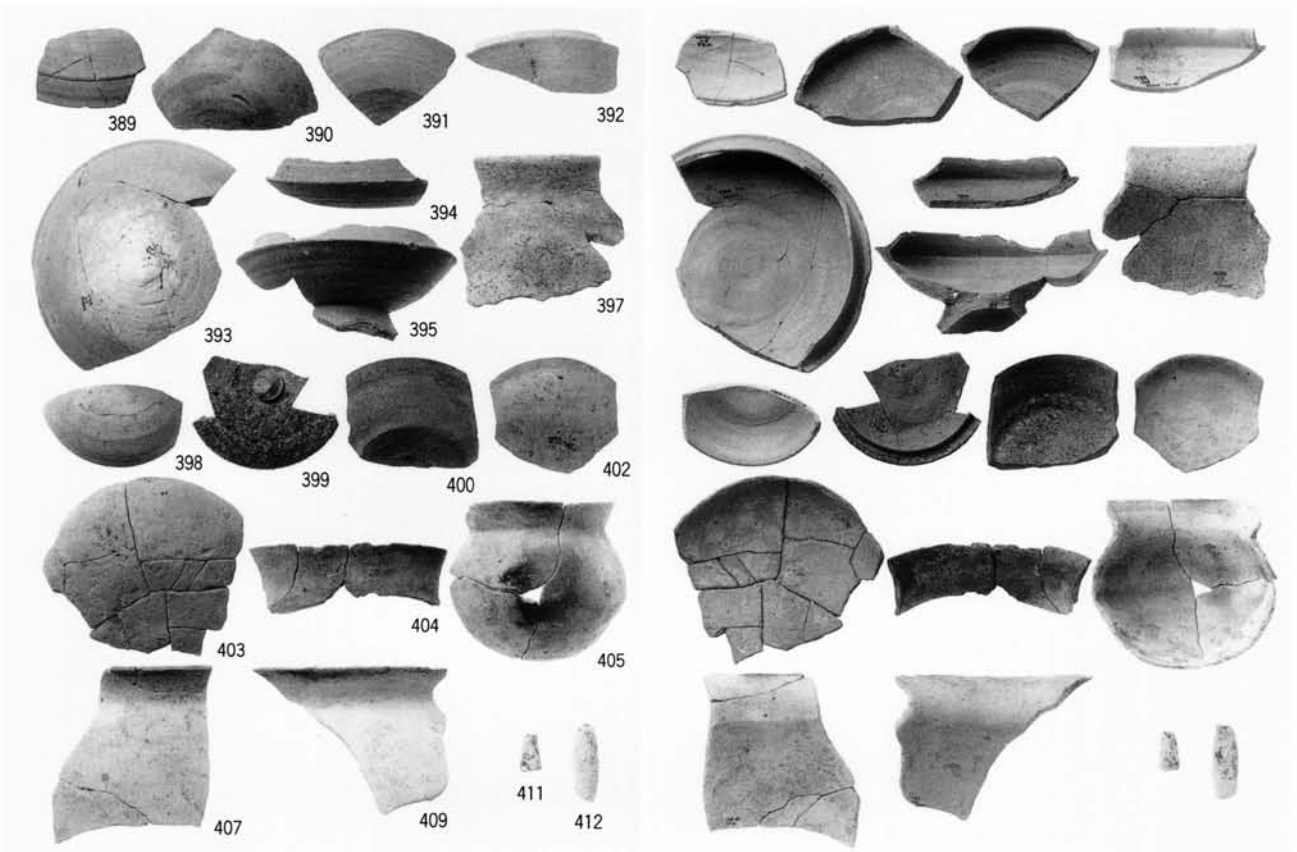
(1)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H197出土遺物(1)



(2)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H197出土遺物(2)

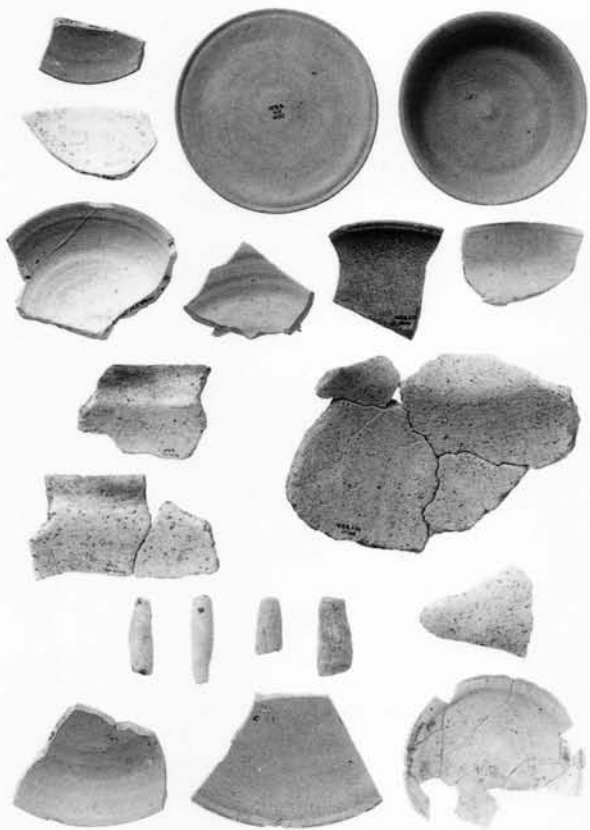
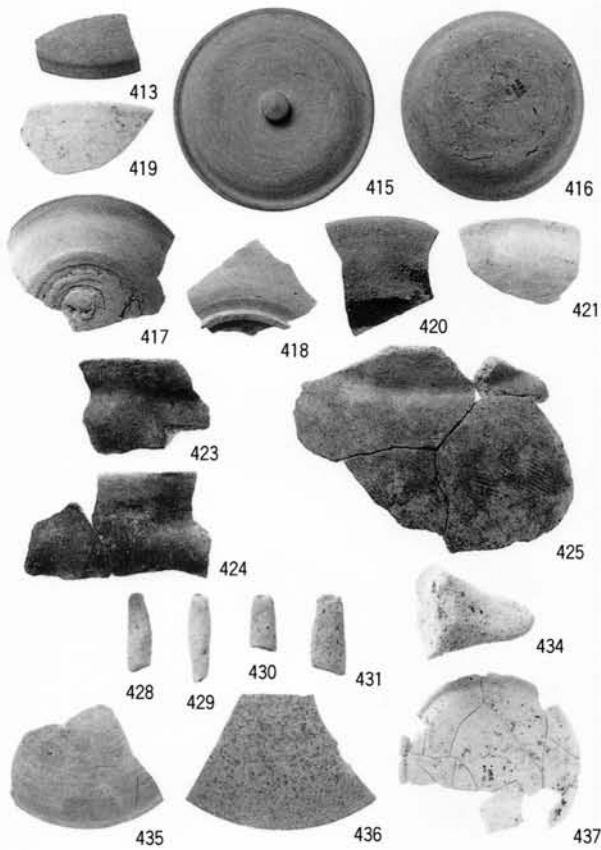


(1)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H198・200・220・221出土遺物

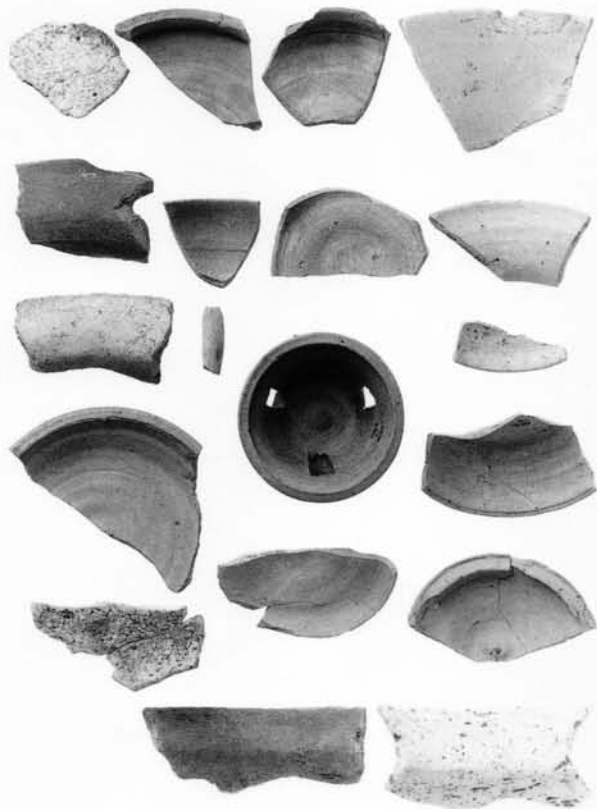
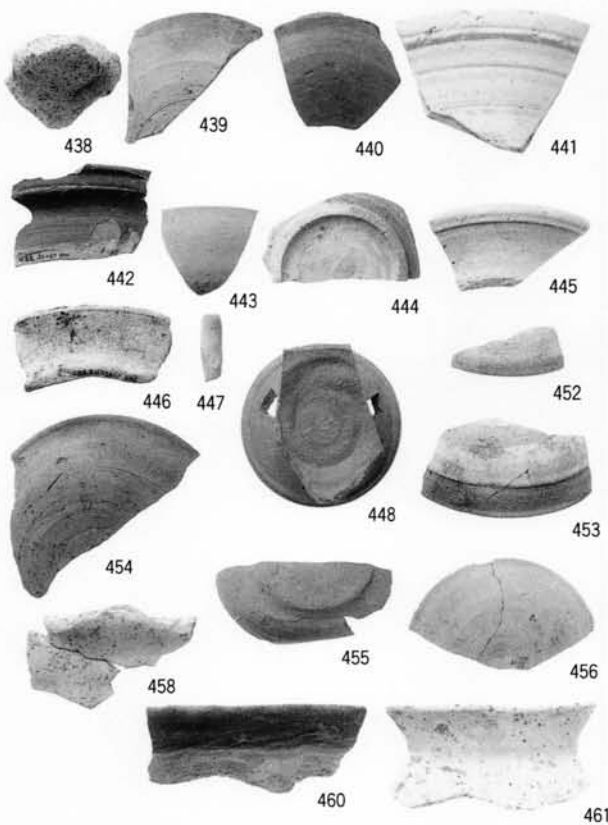


(2)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H222・224出土遺物

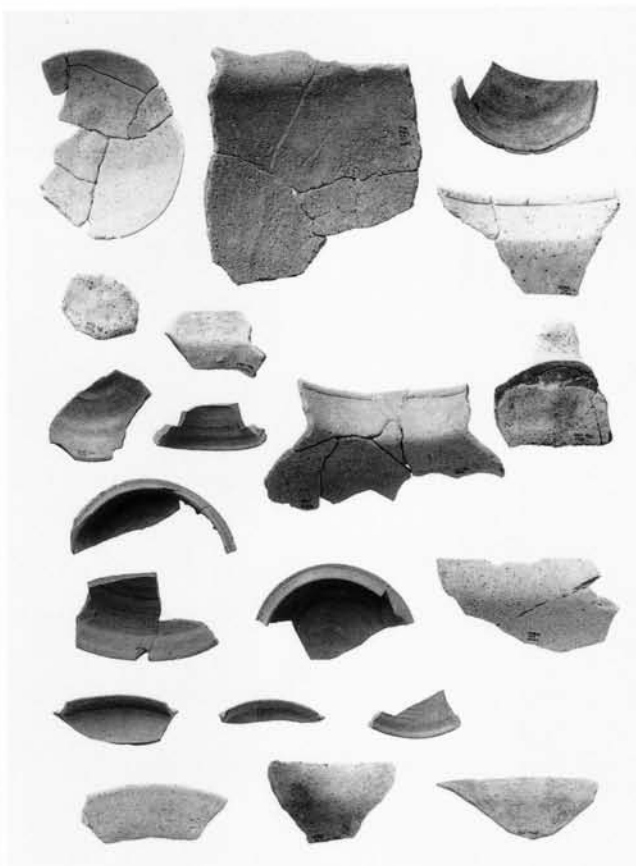
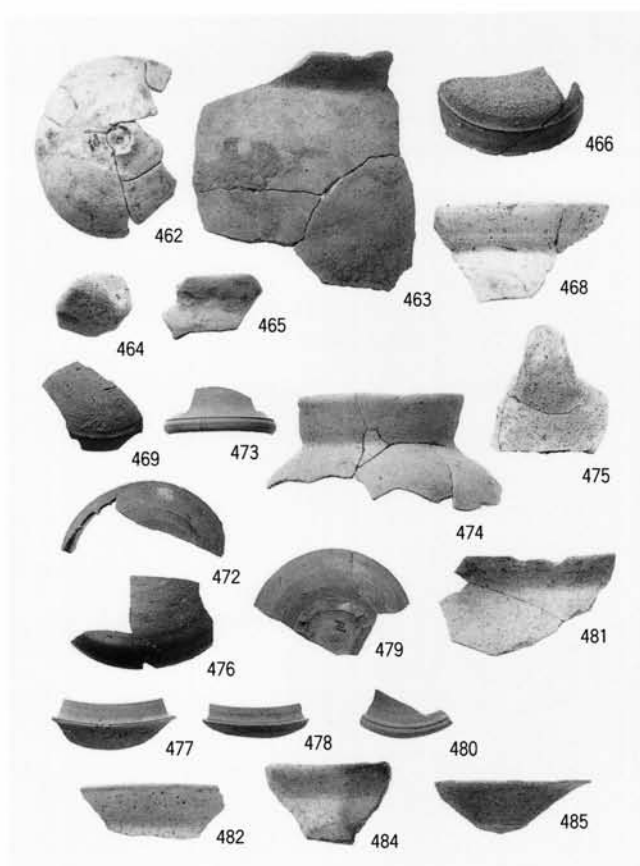
図版第33 河原尻遺跡



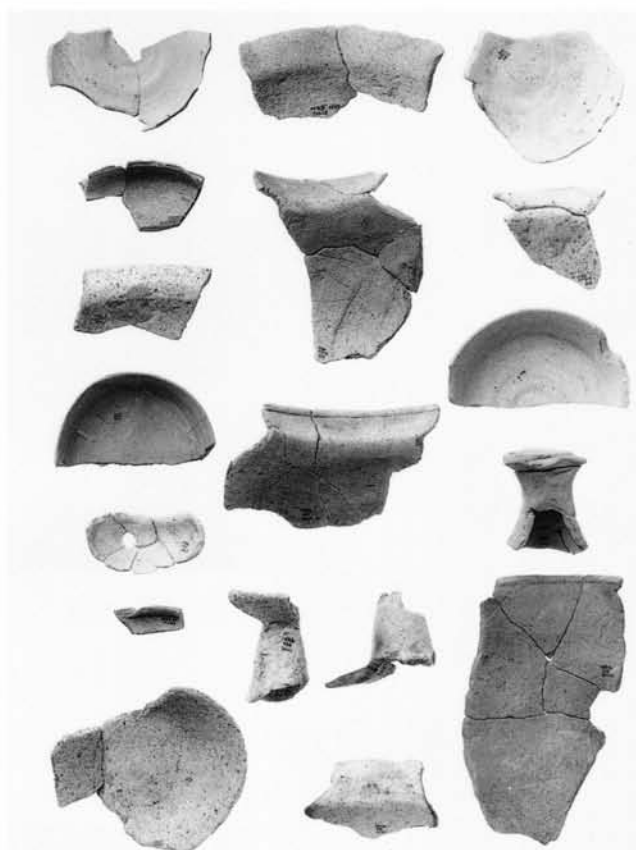
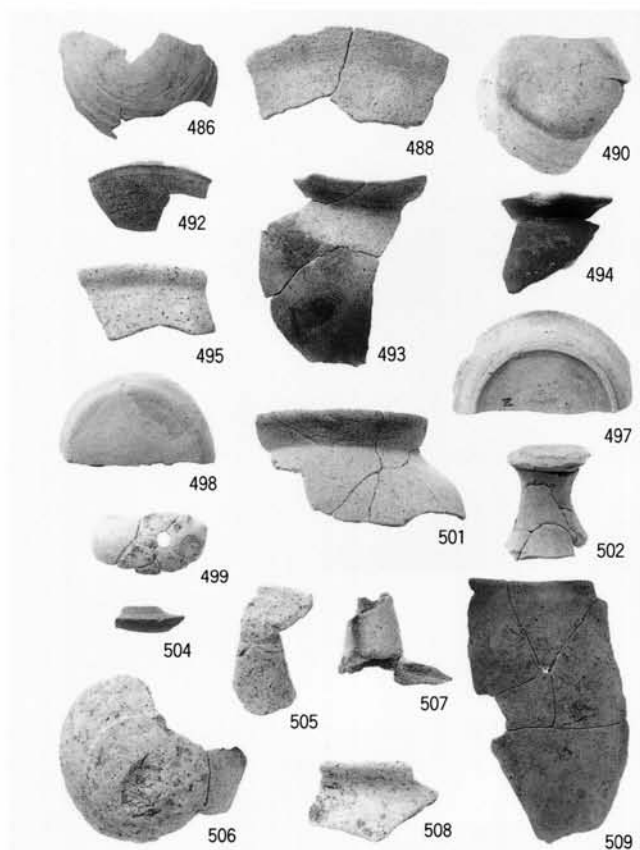
(1)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H223・247・281出土遺物



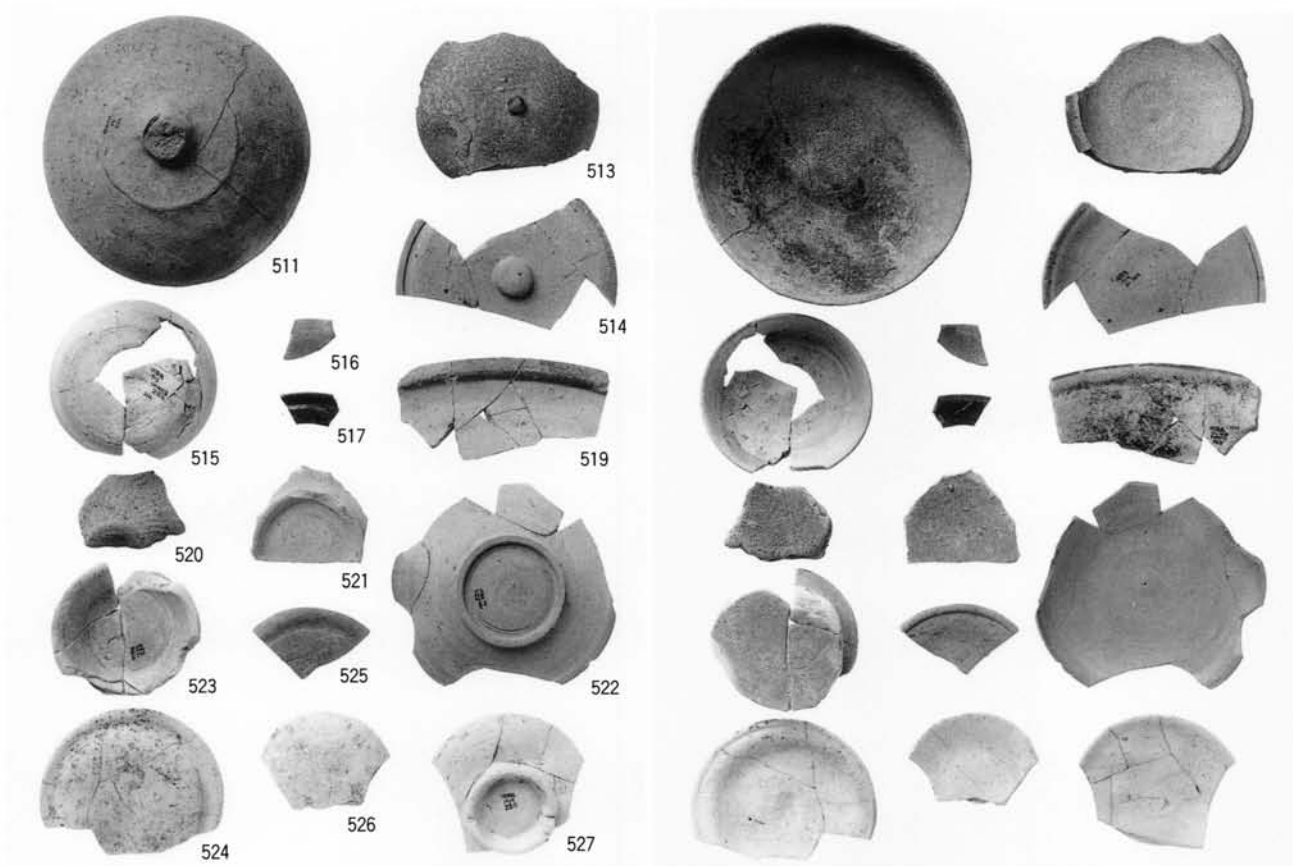
(2)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H281・283・284・302・310・350・352出土遺物



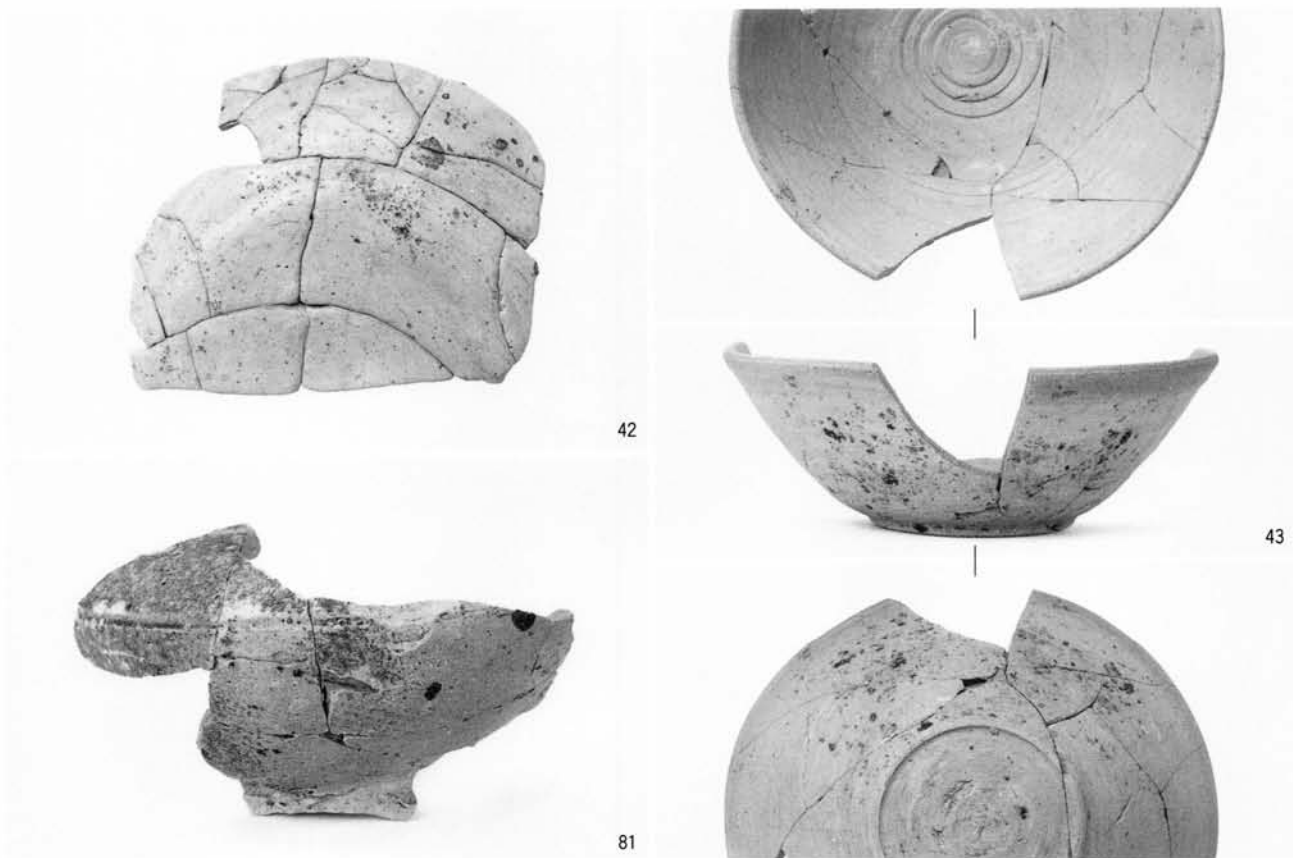
(1)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H353・359・376・393・394・402・443・625出土遺物



(2)第6 トレンチ 竪穴式住居跡 S H628~630・663・671・703、第3 トレンチ 土坑 S K630707出土遺物



(1)第1～3・5・6トレンチ包含層出土遺物



(2)第2トレンチピット・竪穴式住居跡SH1出土遺物



92



111



100



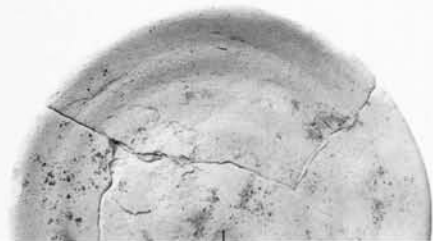
113



107



123

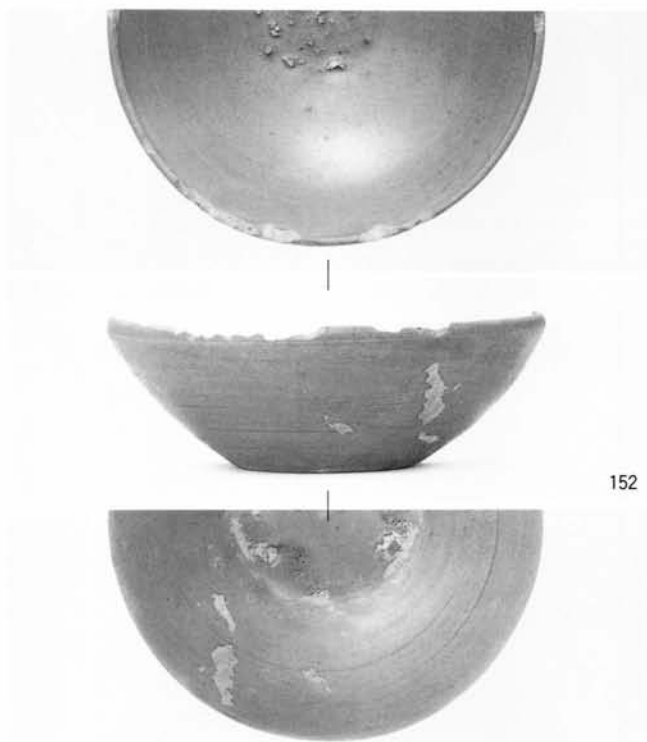


146



129





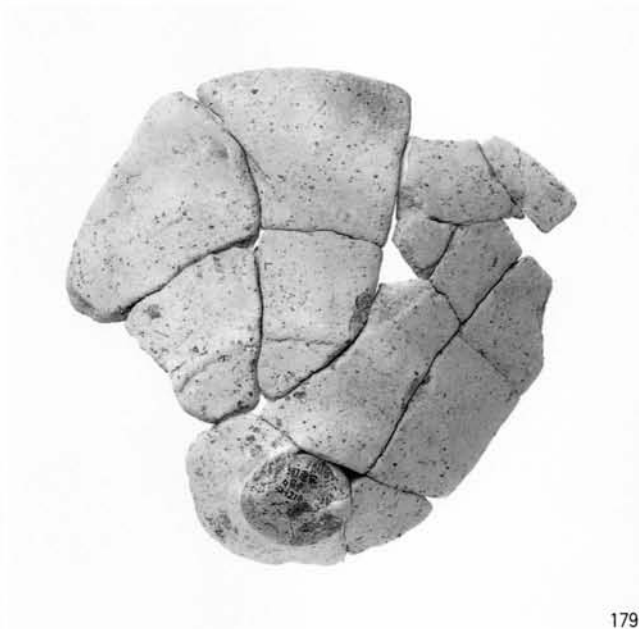
152



173



166



179



167



175



180



176



193



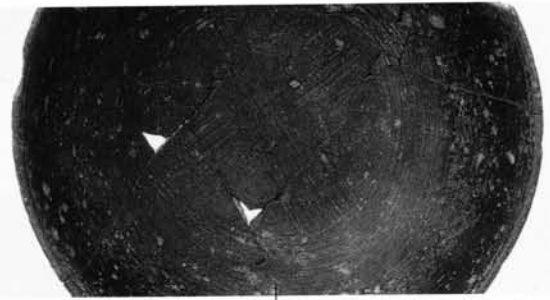
194



215



218



219



221





238



239



240



243



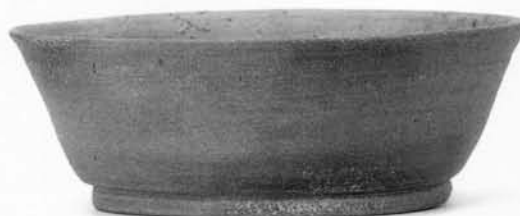
246



279



283



286



287



288



302



299



312



335





374



401



396



406



370



377



408



410



414



422



426



432



427



433



449



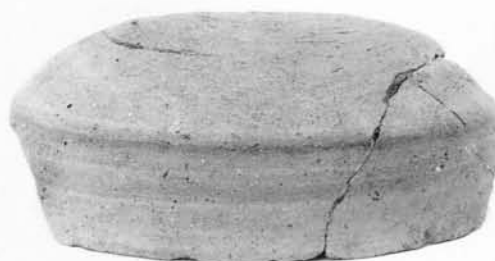
450



467



451



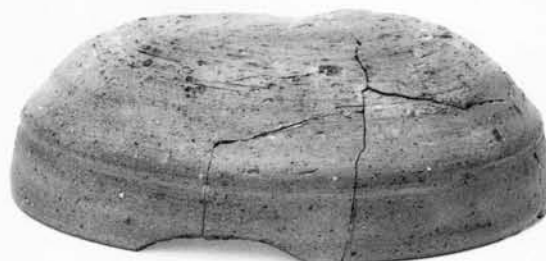
470



471



457



483



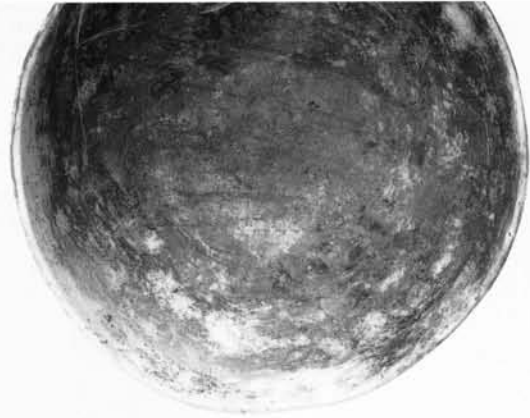
459



487



489



491



510



496



500



503



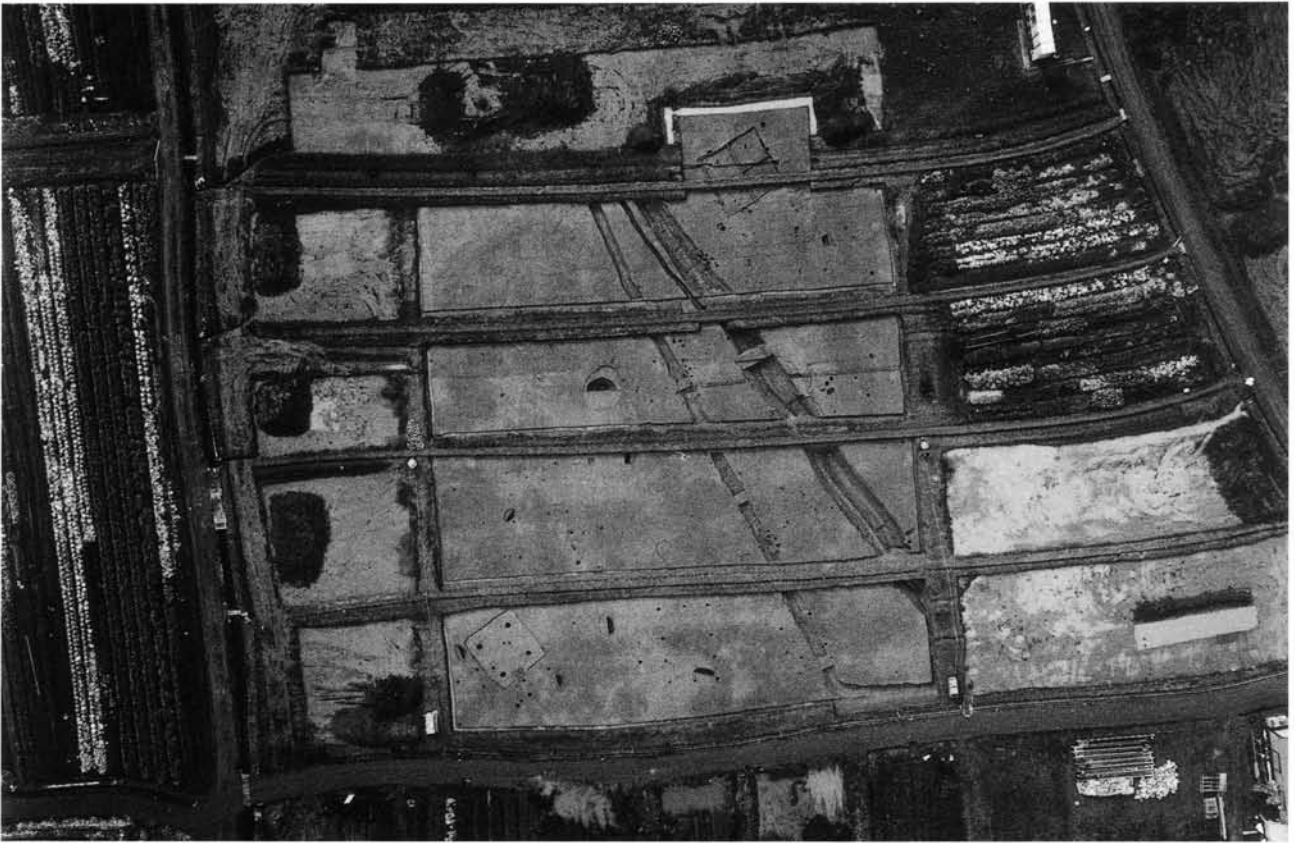
512



(1) A・B地区全景(北西から)



(2) A・B地区全景(右が北)



(1) C地区全景(下が北)



(2) C・D地区全景(西から)

図版第47 馬路遺跡第3次



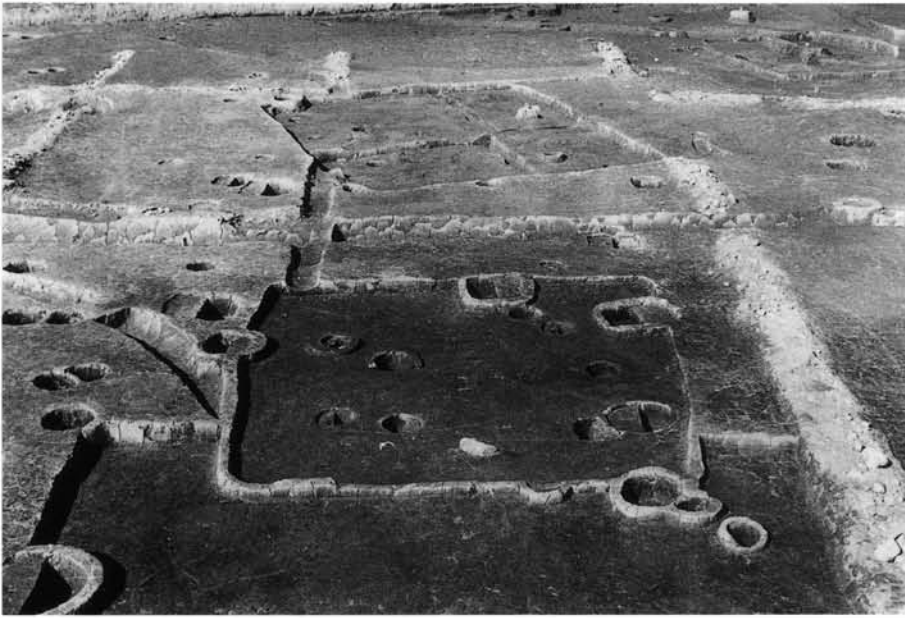
(1) A地区竪穴式住居跡 S H508
近景(北東から)



(2) A地区竪穴式住居跡 S H508
近景(南から)



(3) A地区竪穴式住居跡 S H518・
519近景(南から)



(1) A地区竪穴式住居跡 S H508・509近景(南から)



(2) A地区竪穴式住居跡 S H509・510近景(南から)



(3) A地区竪穴式住居跡 S H511
近景(南から)



(1) A地区竪穴式住居跡 S H 509
近景(北東から)



(2) A地区竪穴式住居跡 S H 518竈
近景(北西から)



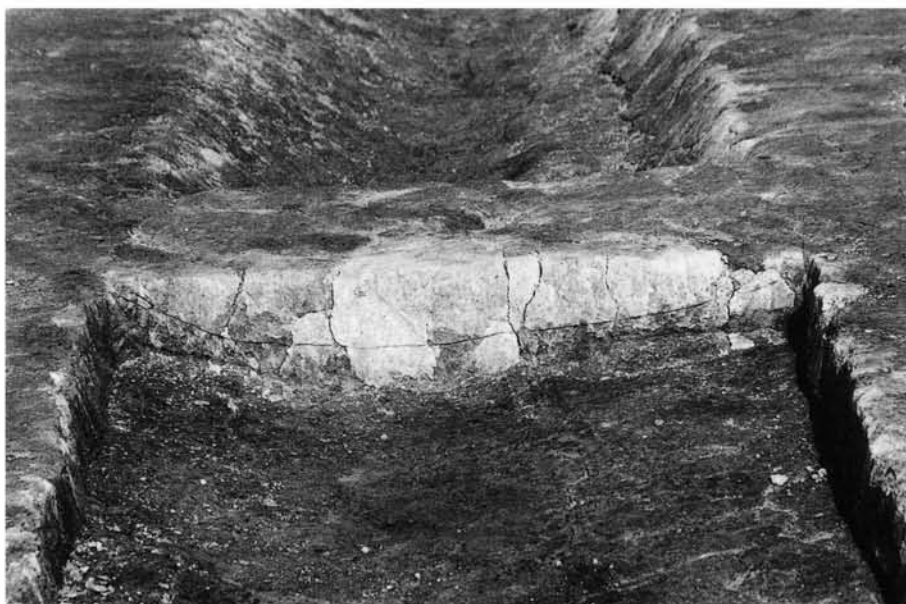
(3) A地区 S X 517近景(北西から)



(1) A地区溝 S D 501・502近景
(南から)



(2) A地区溝 S D 501・502堆積状況
(南から)



(3) A地区溝 S D 502堆積状況
(南から)



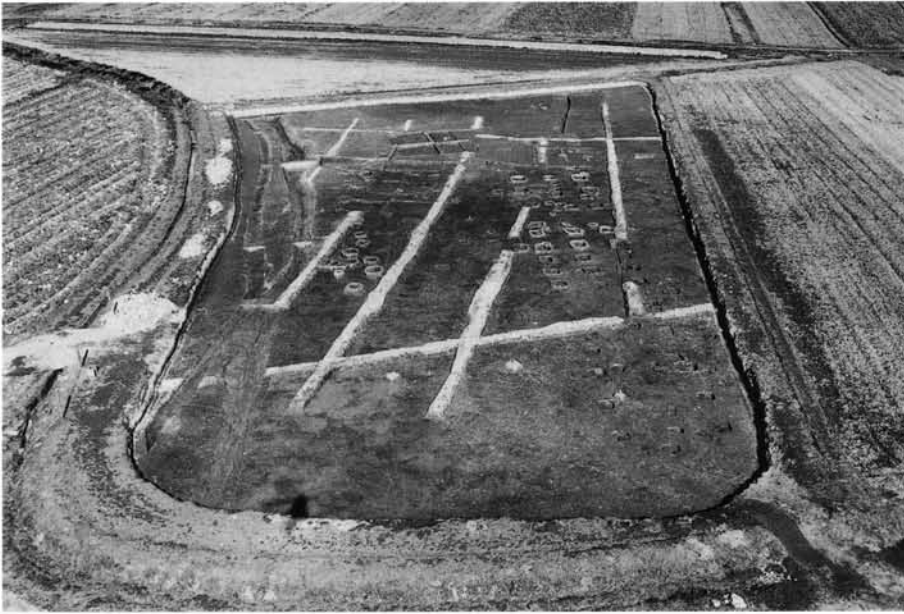
(1) A地区竪穴式住居跡S H519
遺物出土状況(北西から)



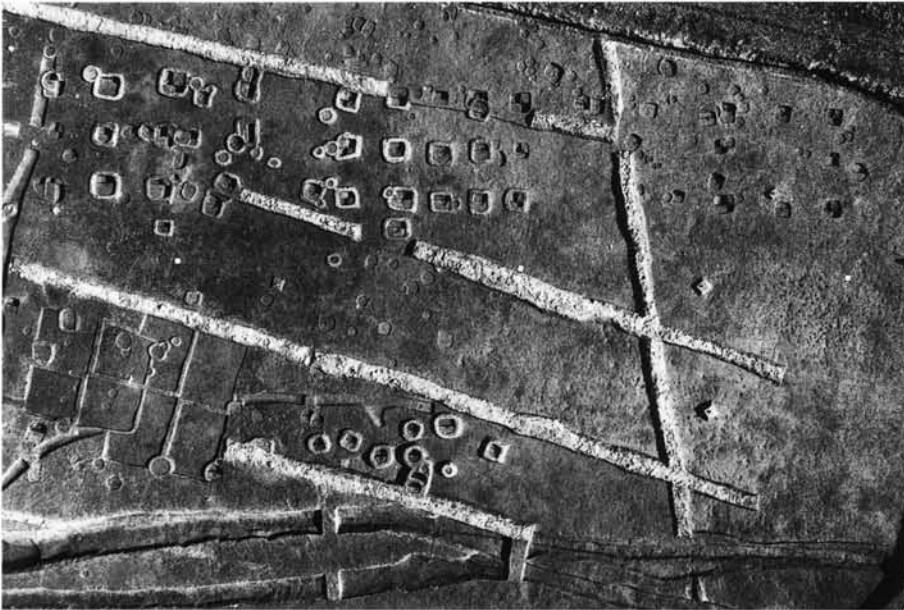
(2) A地区掘立柱建物跡柱穴近景
(北西から)



(3) A地区柱穴P 73近景(南西から)



(1) A 地区全景(南から)



(2) A 地区掘立柱建物跡 S B 512・513・520 全景(左が北)



(3) A 地区掘立柱建物跡 S B 512・513・520 近景(南から)



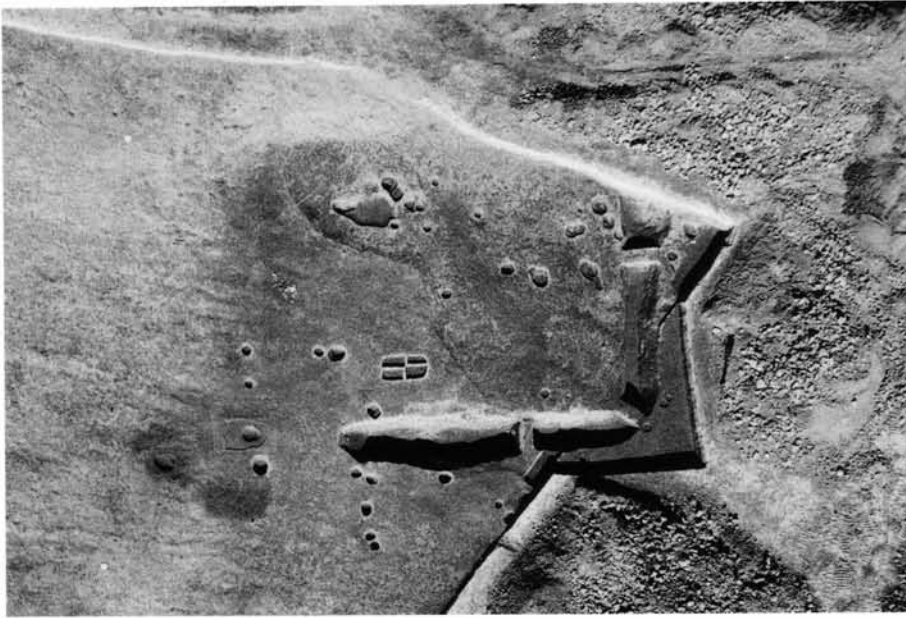
(1) A地区掘立柱建物跡S B512・513近景(南から)



(2) A地区全景(南東から)



(3) A地区作業風景(南西から)



(1) B地区遺構検出状況(上が北)

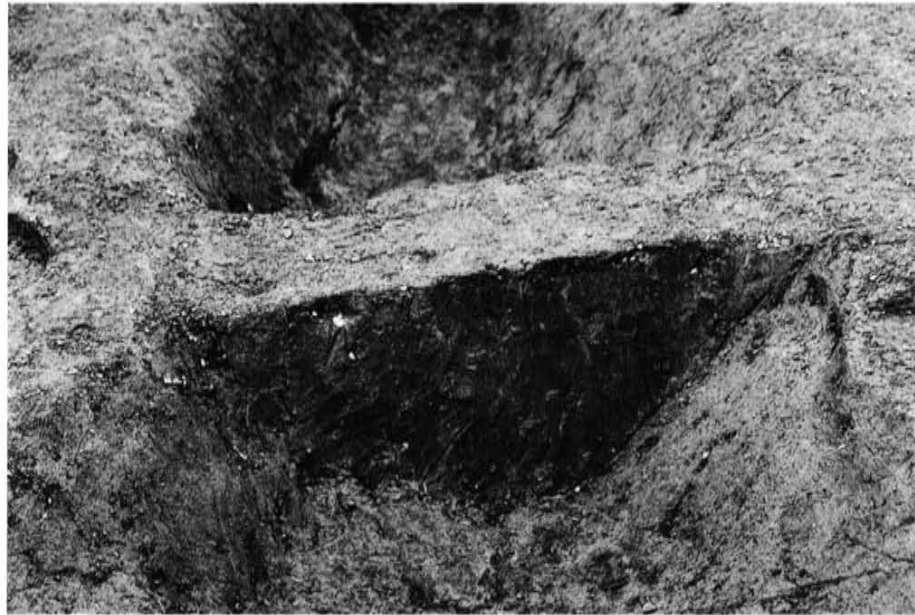


(2) B地区遺構検出状況(西から)



(3) B地区拡張区溝 S D02・03
検出状況(西から)

(1) B地区溝 S D02堆積状況
(南から)



(2) B地区溝 S D03堆積状況
(西から)

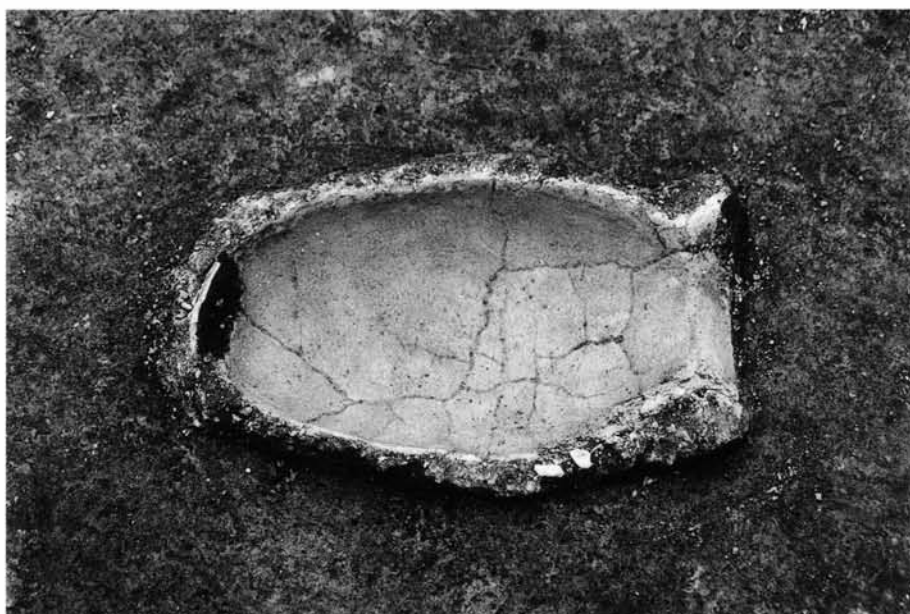


(3) B地区溝 S D03内遺物出土状況
(西から)





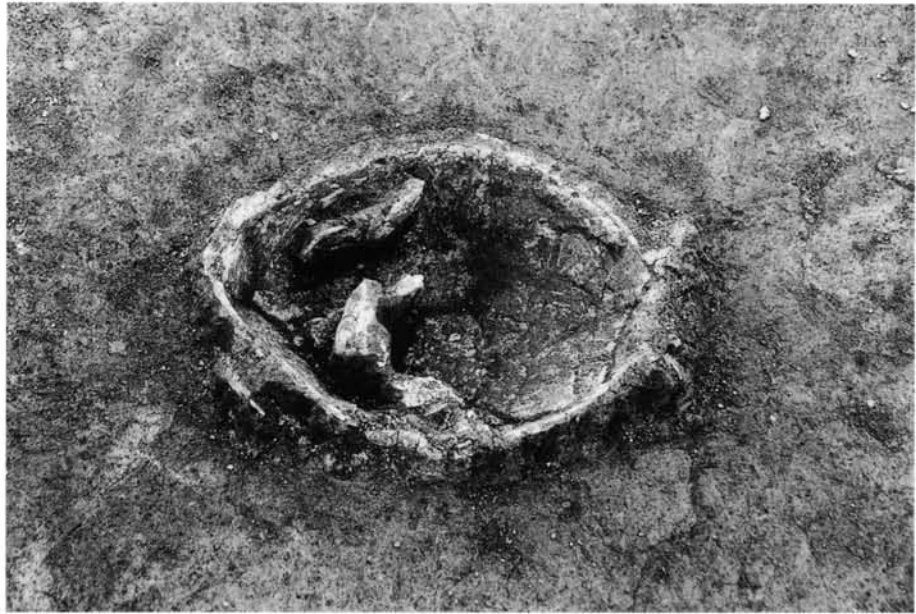
(1) B地区溝 S D03内遺物出土状況
(北から)



(2) B地区土坑 S K04遺物出土状況
(南から)



(3) B地区土坑 S K05検出状況
(南から)



(1) B地区土坑 S K05遺物出土状況
(南から)



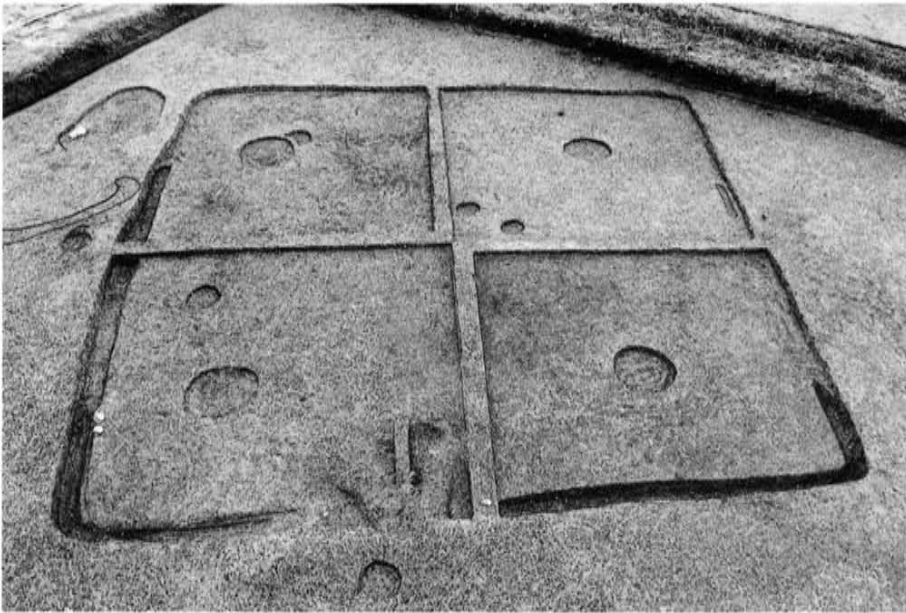
(2) B地区土坑 S K06検出状況
(南から)



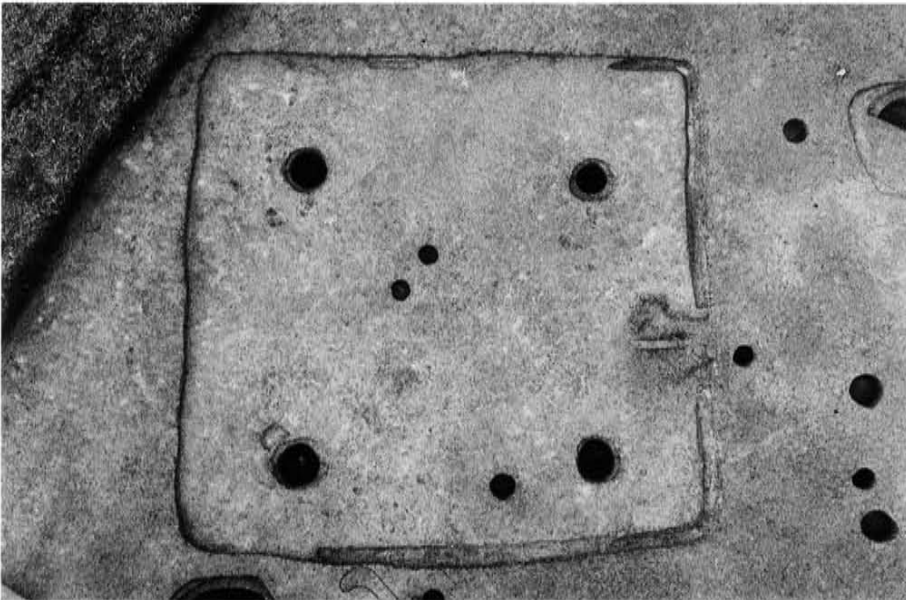
(3) B地区土坑 S K07近景(北から)



(1) C地区溝 S D01・02・04近景
(北から)



(2) C地区竪穴式住居跡 S H03
検出状況(北西から)



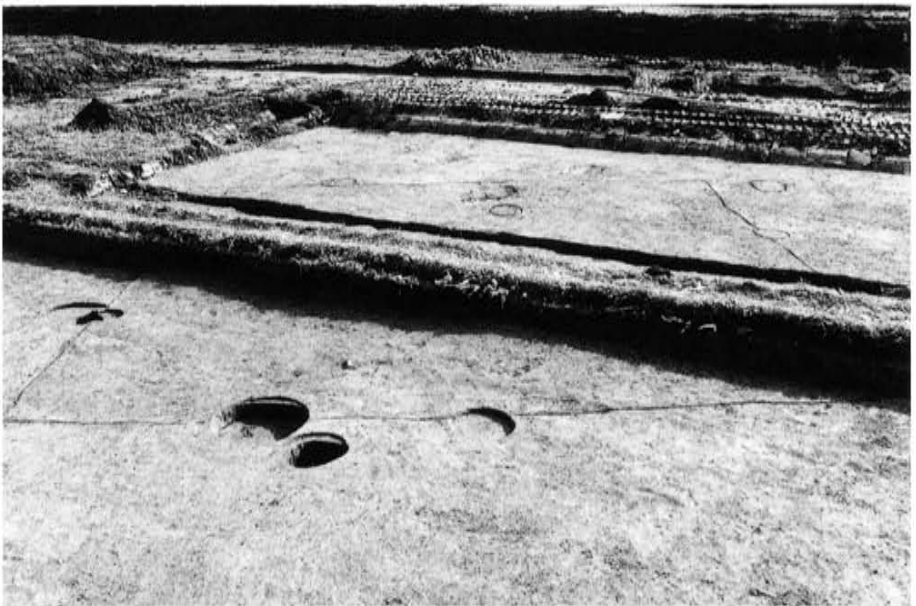
(3) C地区竪穴式住居跡 S H03
全景(右下が北)



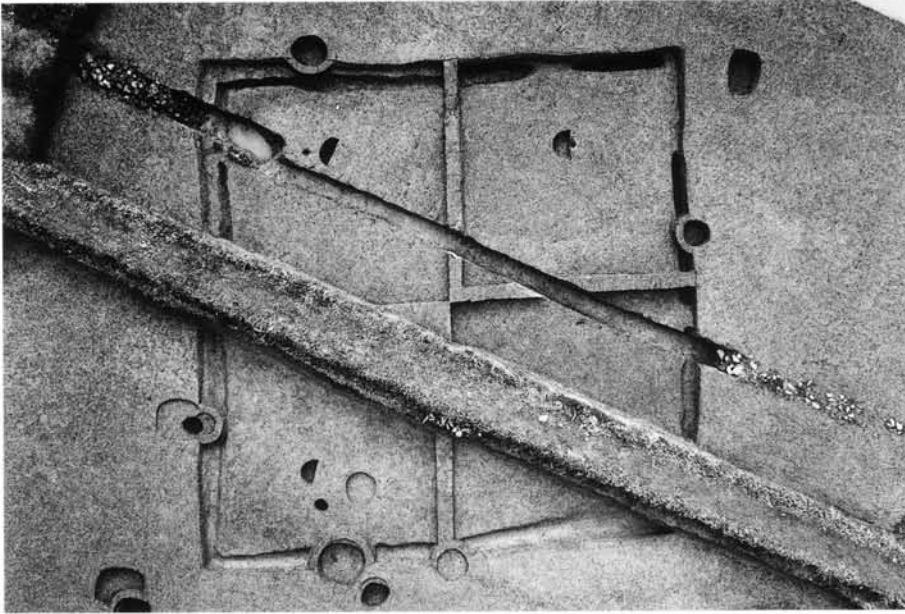
(1) C 地区 竪穴式住居跡 S H03 竈
近景(北東から)



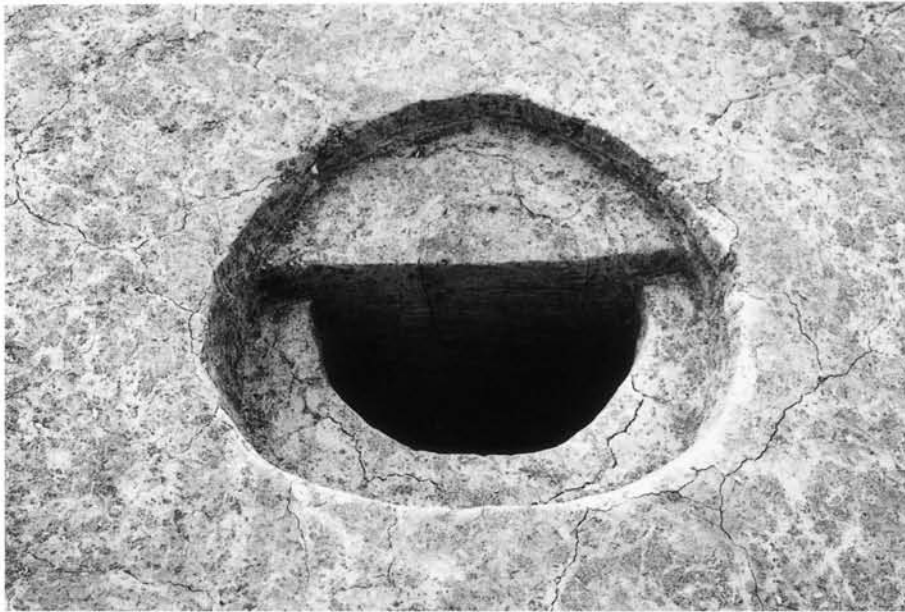
(2) C 地区 竪穴式住居跡 S H03 竈
近景(東から)



(3) C 地区 竪穴式住居跡 S H05
検出状況(北西から)



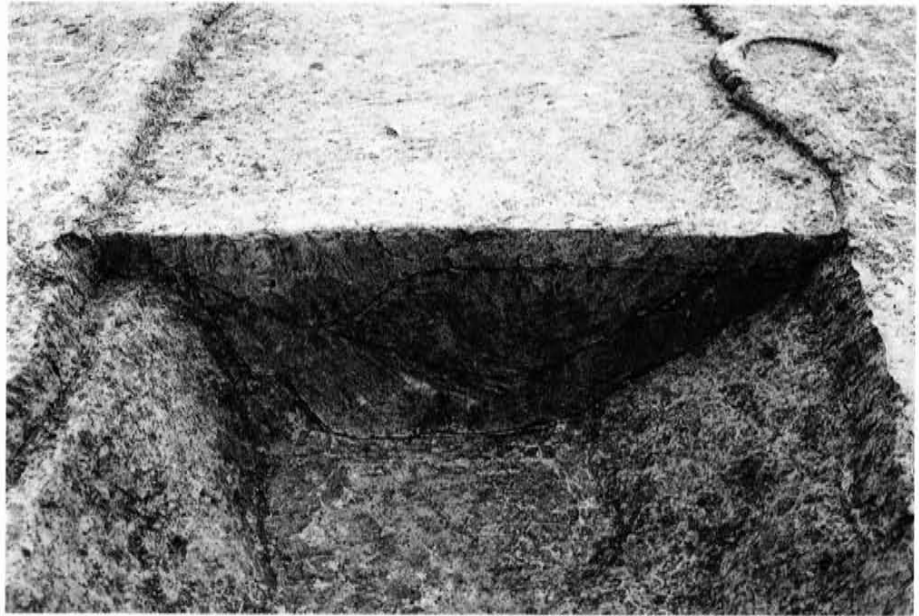
(1) C地区竪穴式住居跡 S H05
全景(左下が西)



(2) C地区竪穴式住居跡 S H05
支柱穴近景(東から)



(3) C地区掘立柱建物跡 S B19
近景(南から)



(1) C地区溝S D01堆積状況
(F-F') (北西から)



(2) C地区溝S D01堆積状況
(H-H') (南東から)



(3) C地区溝S D01堆積状況
(J-J') (北西から)



(1) C地区溝S D02・04堆積状況
(A-A') (東南から)



(2) C地区溝S D02遺物出土状況



(3) C地区溝S D04遺物出土状況



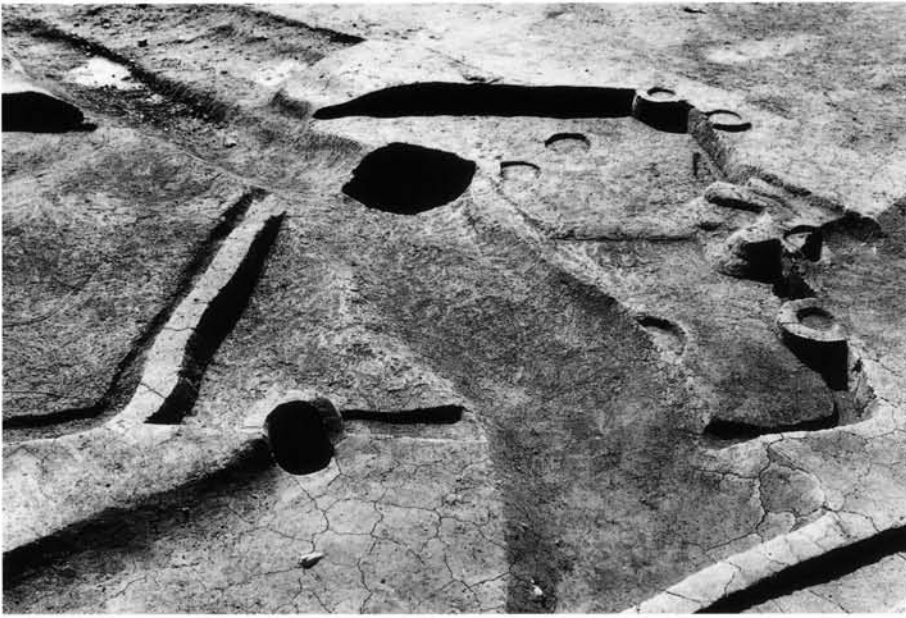
(1) D地区竪穴式住居跡 S H03
検出状況(南から)



(2) D地区竪穴式住居跡 S H03
遺物出土状況(西から)



(3) D地区竪穴式住居跡 S H24・
25近景(南から)



(1) D地区竪穴式住居跡 S H24近景
(北東から)



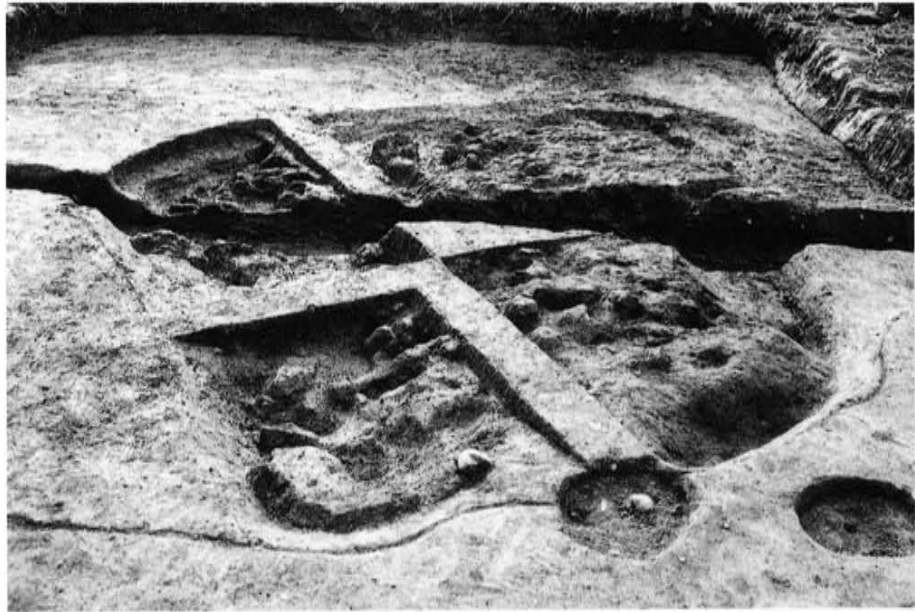
(2) D地区竪穴式住居跡 S H24竈
近景(南から)



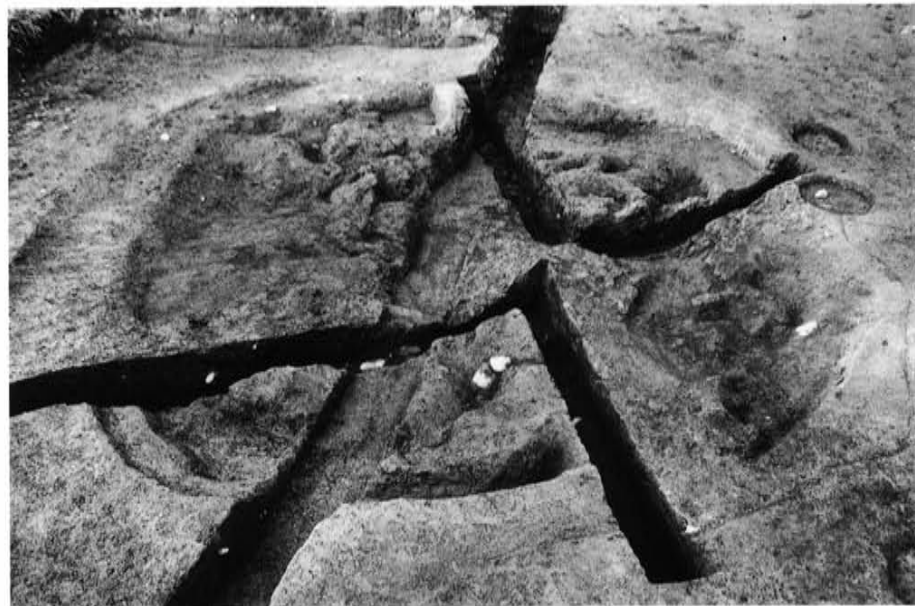
(3) D地区竪穴式住居跡 S H25近景
(西から)



(1) D地区竪穴式住居跡 S H25竈
近景(南から)



(2) D地区焼土坑 S X06検出状況
(東から)



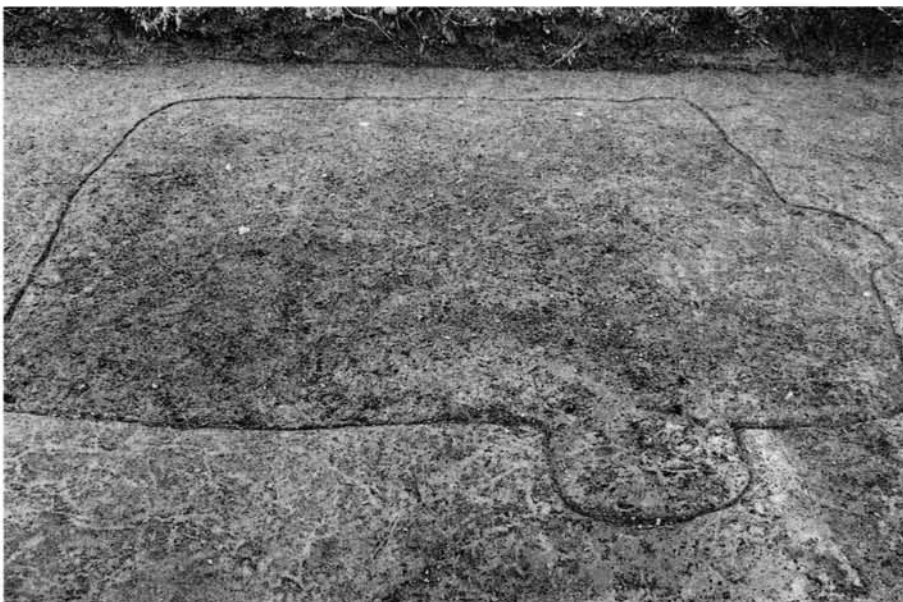
(3) D地区焼土坑 S X06近景
(南から)



(1) D地区焼土坑 S X07検出状況
(西から)



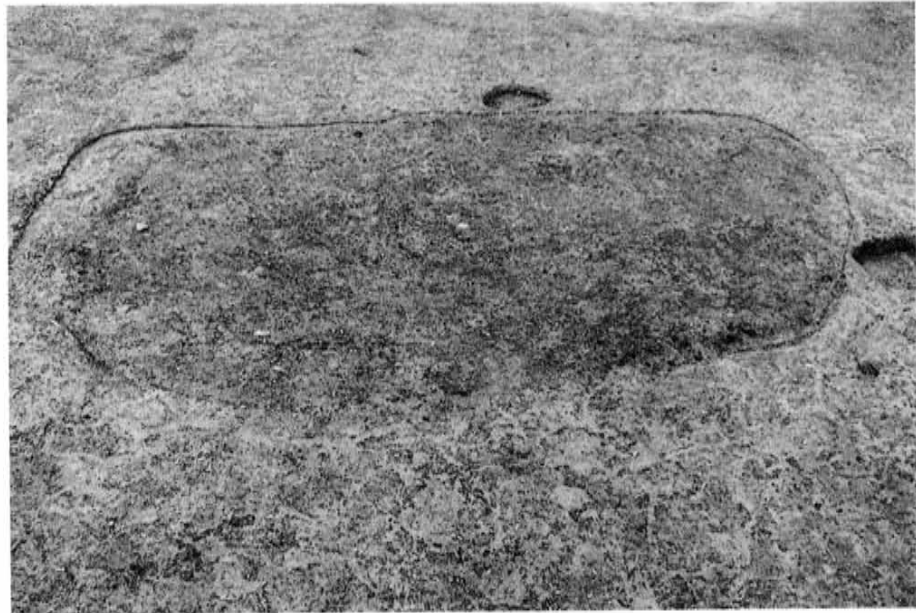
(2) D地区焼土坑 S X07近景
(西から)



(3) D地区焼土坑 S X09検出状況
(西から)



(1)D地区焼土坑S X09近景
(西から)



(2)D地区焼土坑S X11検出状況
(西から)



(3)D地区焼土坑S X11近景
(東から)



(1) D地区不明土坑 S X15
遺物出土状況(西から)



(2) D地区不明土坑 S X16近景
(西から)



(3) D地区不明土坑 S X23掘削状況
(南から)



(1)D地区溝 S D01・02検出状況
(北から)



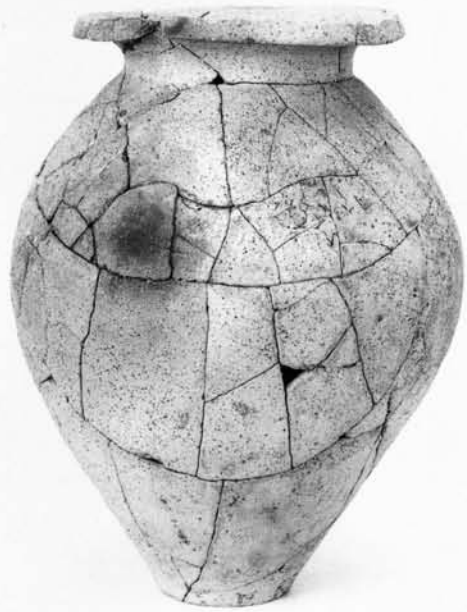
(2)D地区溝 S D01堆積状況
(南から)



(3)D地区溝 S D01遺物出土状況
(北から)



83



80



16



151



19



142



17



116



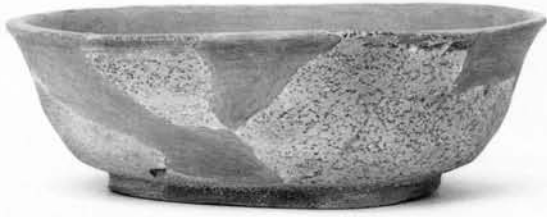
153



145



118



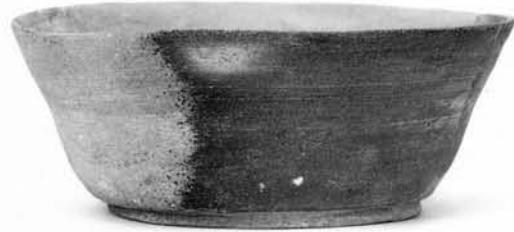
155



125



24



154



158



124



92



176



147



93



68



103



100



178



186



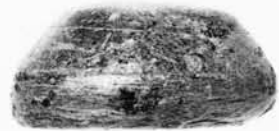
187



188



1



78



189



88



98



136



167



166



165



137



163



164



32



168



169



(1)調査地全景(西上空から)



(2)調査前近景(北西から)



(1)調査地全景(上が東)



(2)調査地全景(北から)



(1)流路全景(北西から)



(2)流路全景(北から)



(1) C・D 8・D 9区瓦検出状況(南から)



(2) C・D 6区瓦検出状況(南東から)



(1) C・D12・D13区瓦検出状況(北東から)



(2) C 8～11区瓦検出状況(北から)



(1) C・D 8～11区瓦検出状況(南西から)



(2) C 14～16区瓦検出状況(南東から)



(1) C 6 区軒平瓦検出状況(西から)



(2) D 3 区軒平瓦検出状況(西から)



(1) C 8 区軒丸瓦検出状況(南東から)



(2) C 11 区軒丸瓦検出状況(東から)



(1) C 16区須恵器検出状況(西から)



(2) E 2区須恵器検出状況(東から)



(1) S X01全景(東から)



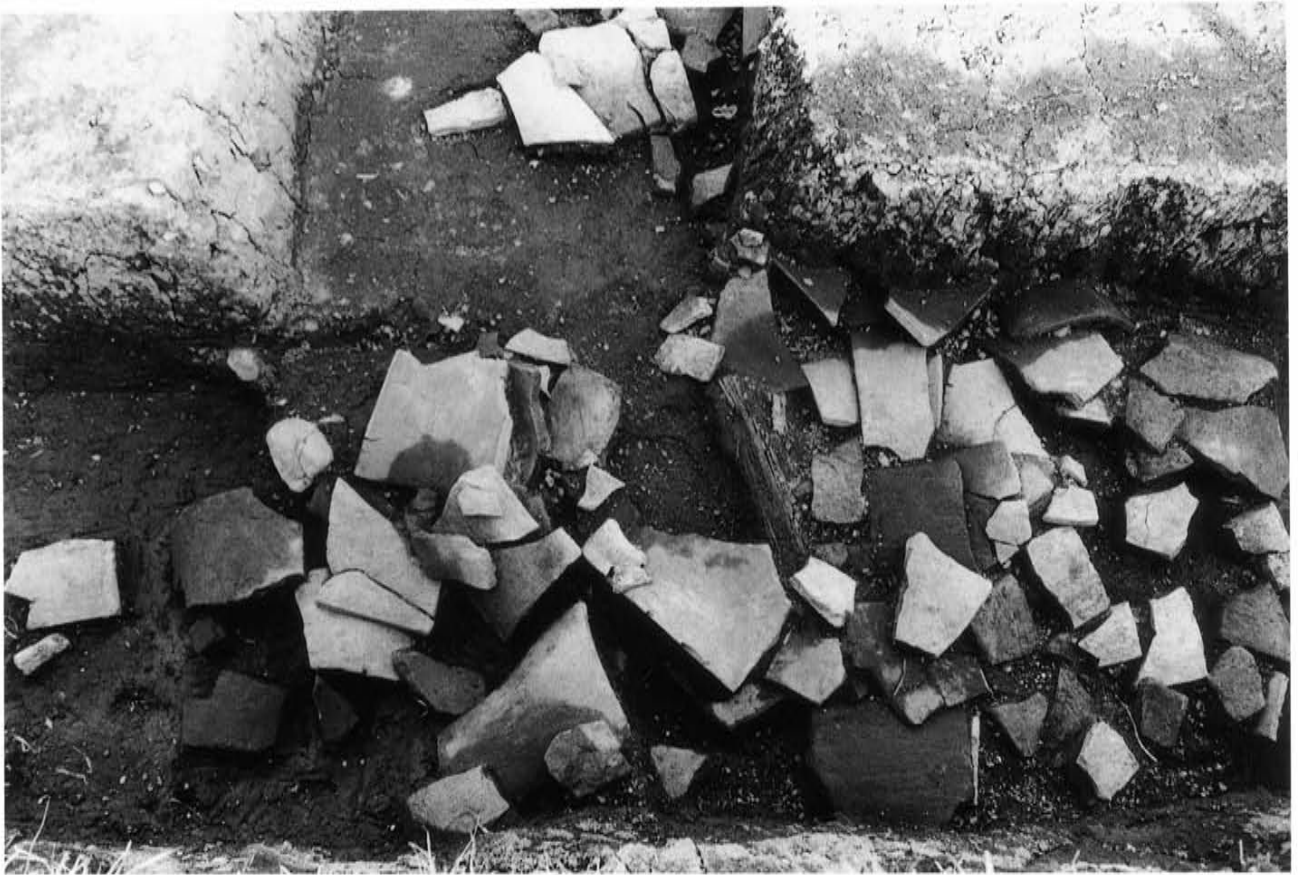
(2) S X01全景(上が南)



(2) S X01近景(西から)



(1) S X01近景(東から)



(1) S X01西端部(西から)



(2) S X01西端部(北東から)



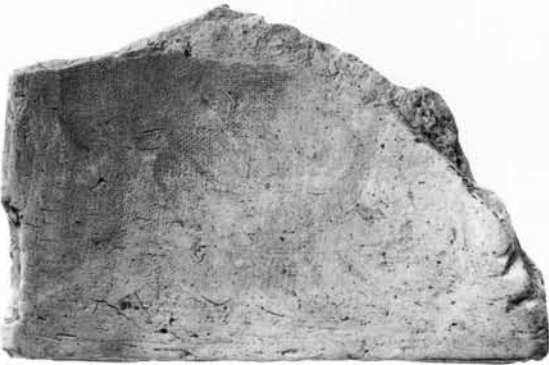
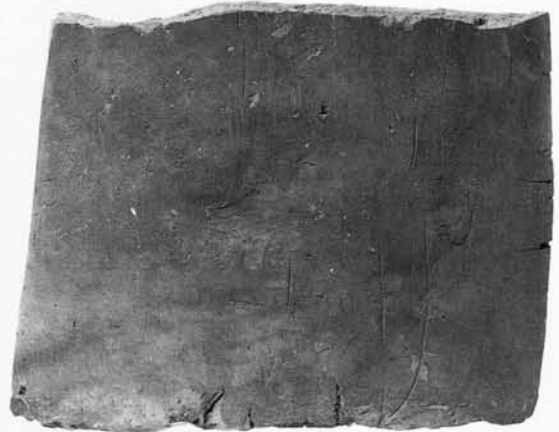
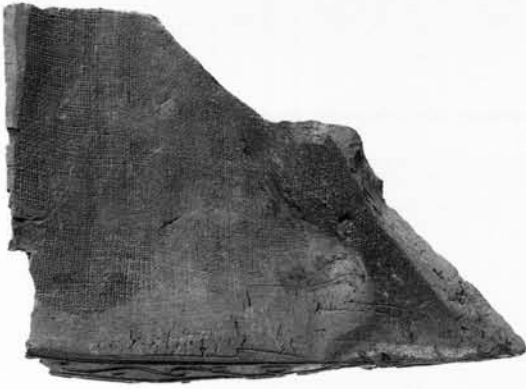
1



22



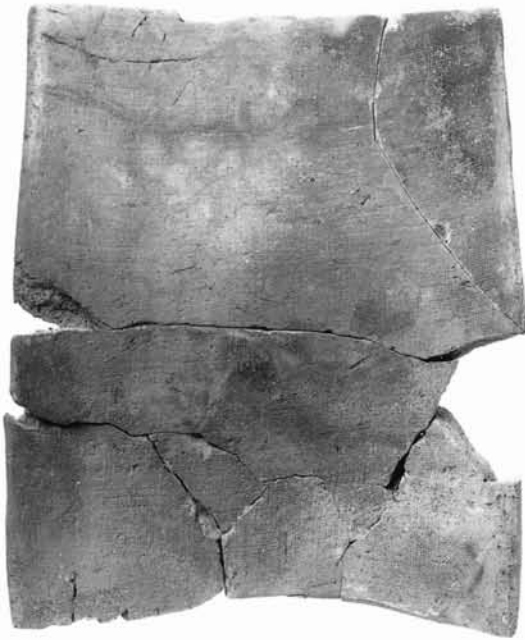
17



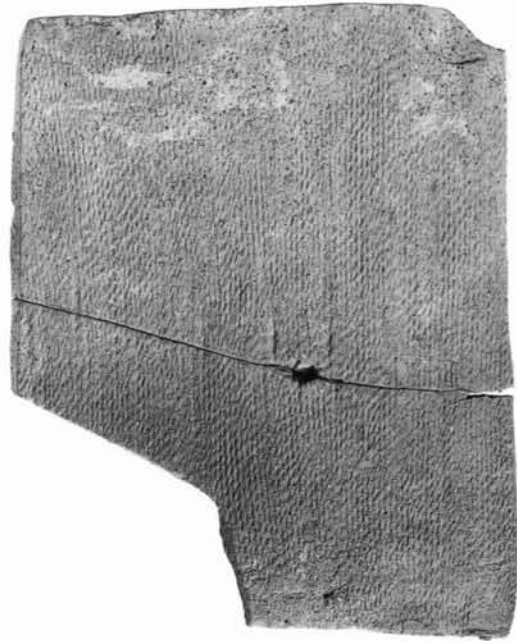
24

2

23



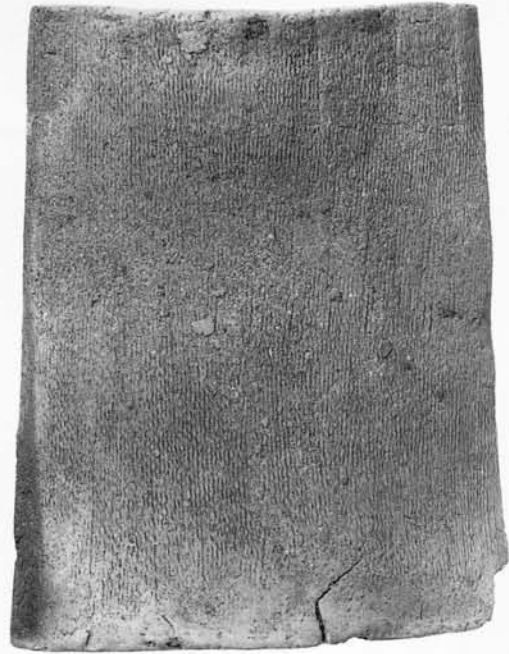
10



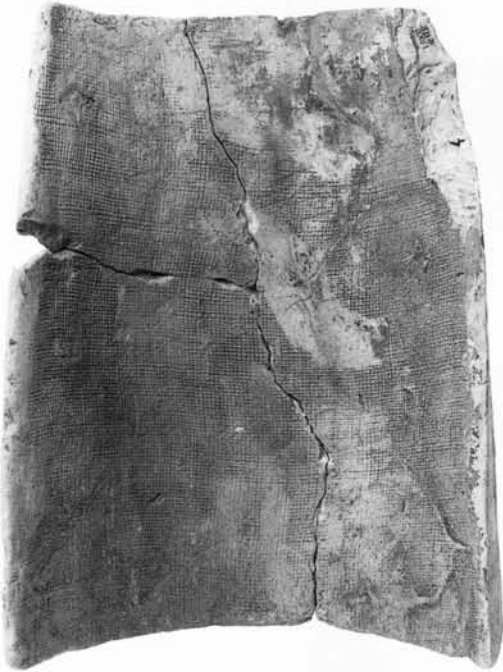
35



32



34



9



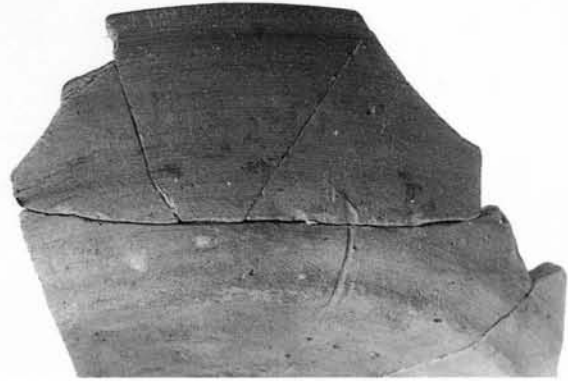
38



46



100



102



90



73



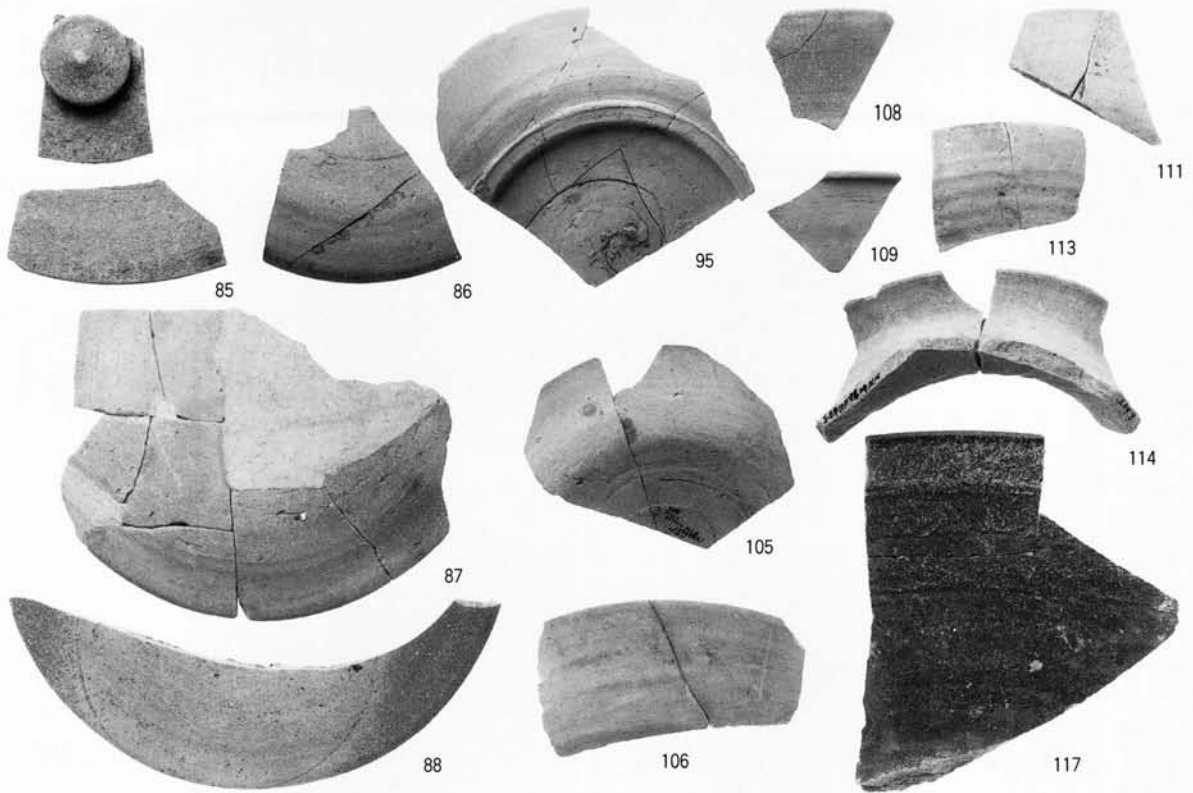
96



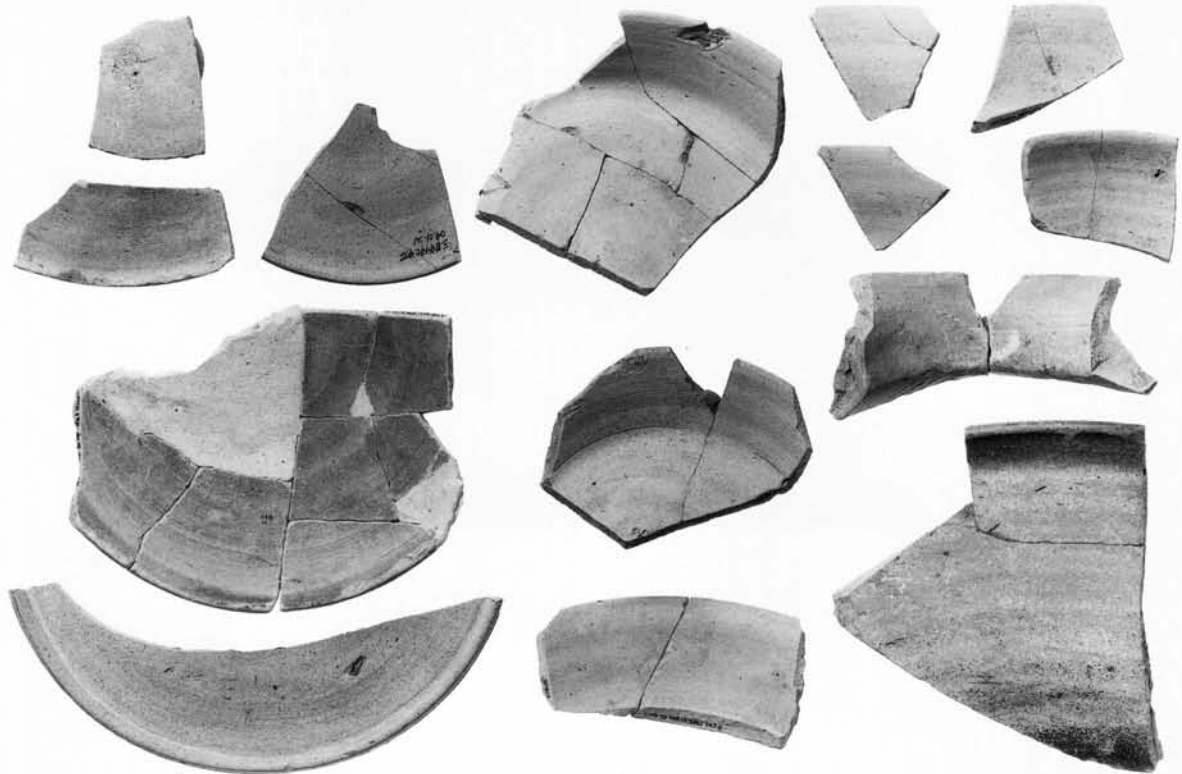
99



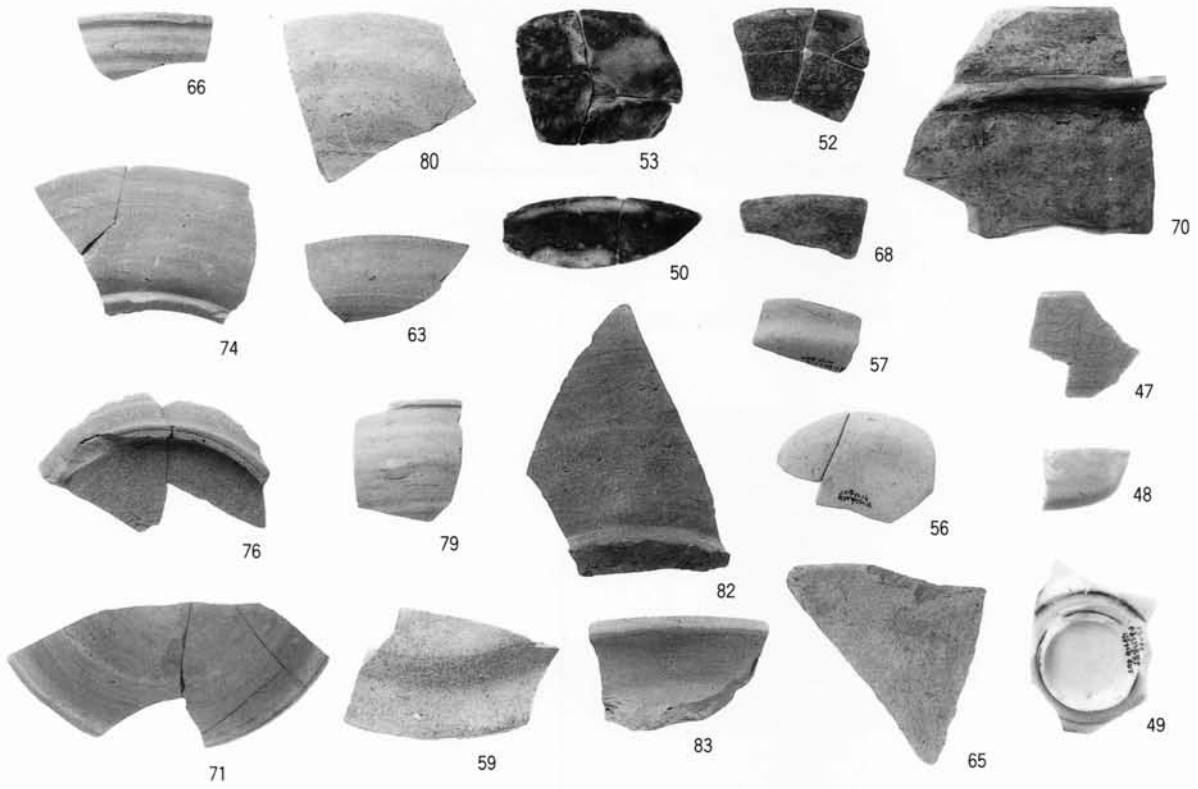
132



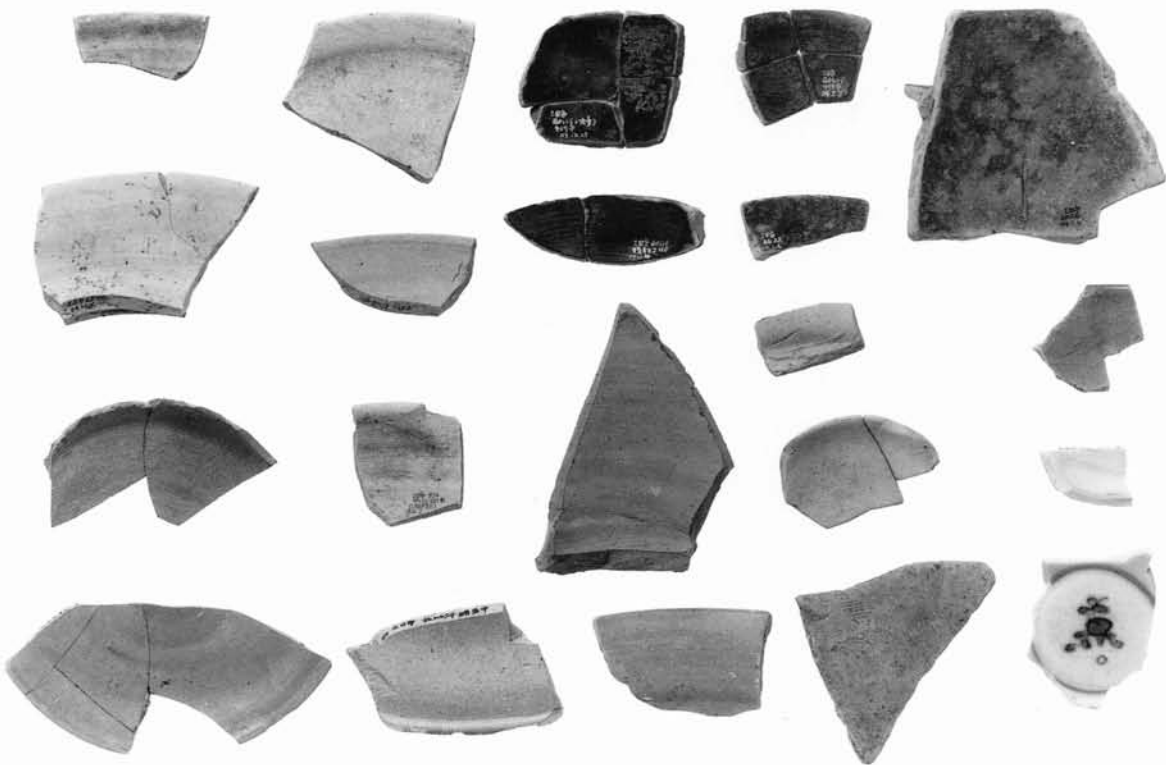
(1)出土遺物(6-1)



(2)出土遺物(6-2)



(1)出土遺物(7-1)



(2)出土遺物(7-2)



125



127



126

(1)出土遺物(8)



(2)作業風景(南から)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第114冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Tel		075(933)3877		
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
かわらじり いせき	きょうとふかめお かしかわらばやし ちようかわらじり いじり・たかまち							
河原尻遺跡	京都府亀岡市河原 林町河原尻井尻・ 高町	26206	39	35° 02' 21"	135° 34' 27"	20030703 ~ 20040129	7,000	ほ場整備
うまじいせ きだいさん じ	きょうとふかめお かしうまじちよう かべき・うめはら							
馬路遺跡第 3次	京都府亀岡市馬路 町壁木・梅原	26206	170	35° 03' 33"	135° 33' 42"	20031029 ~ 20040220	4,430	ほ場整備
みっかいち いせきだい さんじ	きょうとふかめお かしうまじちよう もろやま							
三日市遺跡 第3次	京都府亀岡市馬路 町諸山	26206	12	35° 03' 15"	135° 34' 13"	20031110 ~ 20040220	3,150	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
河原尻遺跡	集落	弥生 古墳 飛鳥 奈良 平安	竪穴式住居跡 竪穴式住居跡 竪穴式住居跡/土坑 竪穴式住居跡/掘立柱建物跡 掘立柱建物跡/土坑	弥生土器 土師器/須恵器 土師器/須恵器 土師器/須恵器 土師器/須恵器/黒色 土器/灰釉陶器/緑釉 陶器	「蔵」墨書 土器 越州窯系青 磁椀
馬路遺跡第 3次	集落/墓 集落	弥生 古墳 飛鳥 平安 中世	方形周溝墓/溝/土坑 溝 竪穴式住居跡/溝/焼土 掘立柱建物跡/溝 溝/焼土坑	弥生土器/石器 須恵器/土師器 須恵器/土師器 須恵器/土師器/墨書 土器/黒色土器/緑釉 陶器 白磁	「田中」墨 書土器
三日市遺跡 第3次	瓦窯(灰原)	奈良	流路/焼土面/瓦積遺構	軒平瓦/軒丸瓦/平瓦 /丸瓦/鬘斗瓦/塼/須 恵器/土師器	丹波国分 寺・国分尼 寺創建時の 所用瓦を焼 成した瓦窯 の灰原の一 端を確認。

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第114冊

平成17年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141